

# 桑原地区の遺跡II

樽味高木 2・3次

樽味四反地 2・3・4次

桑原田中 2次

—— 本文編 ——

1994

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

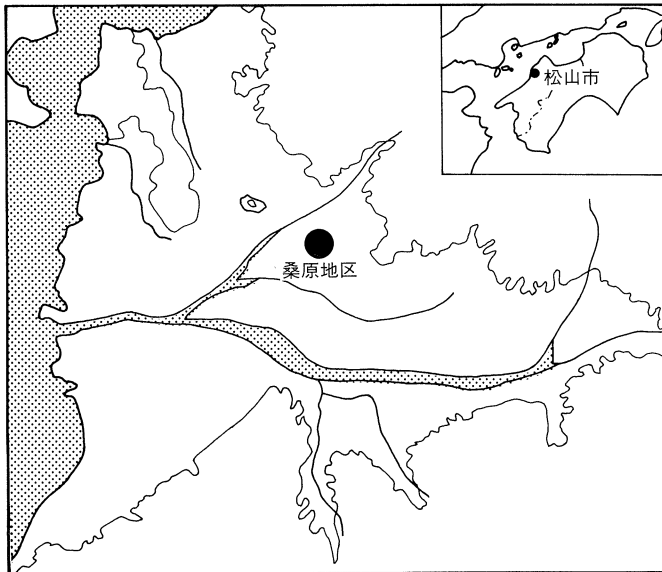
# 桑原地区の遺跡II

樽味高木 2・3次

樽味四反地 2・3・4次

桑原田中 2次

—— 本文編 ——



1994

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭図版1 樽味高木遺跡3次調査地出土の線刻画土器

# 序

本書は、平成3年度から5年度にかけて松山市教育委員会文化教育課と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが桑原地区において緊急発掘調査した6遺跡についての調査報告書です。

松山平野の中央を西流する石手川の南岸に位置する本遺跡群は、近年急増する宅地開発に伴う調査によって、古代における当地域の特性が次第に明らかになってきました。

今回報告します樽味高木遺跡2次調査では、弥生時代から近世にわたる集落関連遺構の中から甕、高坏や出土例の数少ない弥生時代の磨製石鏃を検出し、3次調査では弥生時代後期の壺に「船」の絵が描かれた絵画土器が出土しました。また、樽味四反地遺跡2・3・4次調査、桑原田中遺跡2次調査からは、弥生時代から中近世にかけての集落関連遺構と土壙墓群、それに溝状遺構等を確認しています。

特に、古墳時代後期の竪穴式住居址が数多く検出されたことで、桑原地区の集落構造が明確なものとなってきたこと、全国でも稀少な資料である「船」を描いた絵画土器が出土したことで、当時の船の構造や流通手段を具体的に把握できたこと等、貴重な成果を得ることができました。

こうした成果をあげることができたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のお陰と感謝申し上げますとともに、今後ともなお一層のご指導、ご助言をお願い申し上げます次第であります。

また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、延いては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願っております。

平成6年11月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団  
理事長 田中誠一



# 例 言

1. 本書は、松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成3年6月～平成5年9月の間に松山市樽味4丁目234、237、239、樽味4丁目178-3、樽味4丁目216、桑原6丁目520、521、522他で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺構の実測は、担当調査員の責任のもと、愛媛大学・松山大学学生他の援助を受けた。遺構の撮影は担当調査員と大西朋子が行った。
3. 遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居：S B、溝：S D、土壇：S K、自然流路：S R、棚列：S A、柱穴：S P、掘立柱建物：掘立、性格不明遺構：S Xである。
4. 本書にかかる図面の作成は、栗田正芳、梅木謙一、宮内慎一、山本健一、河野史知の責任のもと、水口あをいを中心に、森田利恵、上西真弓、生鷹千代、山下満佐子、大西陽子、松山桂子、三木和代、渡部芙美、兵頭千恵、好光明日香、他愛媛大学生の援助をえた。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
6. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
8. 調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、宮本一夫（現、九州大学）、田崎博之の諸先生方には御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
9. 本書の執筆は、栗田正芳、梅木謙一、宮内慎一、山本健一、河野史知、武正良浩、加島次郎が分担執筆した。執筆者名は本文目次に記し、必要に応じ文末にも記載した。関連資料の調査は宮内慎一、高橋 恒が行った。浄書は、梅木謙一の指導のもと高橋 恒、生鷹千代、平岡直美が担当した。
10. 写真図版は、担当調査員の指示のもと、遺物の撮影及び図版作成は大西朋子が行った。
11. 本書の編集は梅木謙一、宮内慎一が行った。

# 本文目次

第1章	はじめに	〔梅木・宮内〕	
	1 調査に至る経緯		1
	2 調査・刊行組織		2
	3 環境		3
第2章	樽味高木遺跡2次調査地	〔栗田・河野〕	
	1 調査の経過		11
	2 層位		13
	3 調査の概要		19
	4 小結		43
第3章	樽味高木遺跡3次調査地	〔梅木・宮内・武正〕	
	1 調査の経過		57
	2 層位		60
	3 調査の概要		66
	4 小結		83
第4章	樽味四反地遺跡2・3・4次調査地	〔梅木・宮内・武正・加島〕	
	1 調査の経過		97
	2 層位		100
	3 調査の概要		108
	4 小結		146
第5章	桑原田中遺跡2次調査地	〔梅木・山本〕	
	1 調査の経過		165
	2 層位		167
	3 調査の概要		170
	4 小結		196
第6章	自然科学分析	〔(株)古環境研究所〕	
	1 樹種同定		207
	2 植物珪酸体分析		209
第7章	調査の成果と課題	〔梅木〕	221

# 挿 図 目 次

## 第 1 章 はじめに

第 1 図	桑原地区の地質図	3
第 2 図	松山平野の主要遺跡分布図 (縮尺1/100,000)	5
第 3 図	桑原地区の主要遺跡分布図 (縮尺1/25,000)	7

## 第 2 章 樽味高木遺跡 2 次調査地

第 4 図	調査地位置図 (縮尺1/600)	12
第 5 図	土層図 (1/10)	13
第 6 図	調査地区割図 (縮尺1/150)	14
第 7 図	A 区遺構配置図 (縮尺1/50)	15
第 8 図	B 区遺構配置図 (縮尺1/50)	17
第 9 図	A 区 S B 1 測量図 (縮尺1/40)	19
第10図	A 区 S B 1 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4)	20
第11図	A 区 S B 1 出土遺物実測図 (2) (縮尺1/2)	21
第12図	A 区 S B 2 測量図 (縮尺1/50)	22
第13図	A 区 S B 2 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/3)	
第14図	A 区 S B 2 出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4,1/2)	23
第15図	A 区 S B 3 測量図 (縮尺1/40)	24
第16図	A 区 S B 3 出土遺物実測図 (縮尺1/3)	
第17図	A 区第Ⅳ層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/1,1/2)	25
第18図	A 区第Ⅳ層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4)	26
第19図	A 区第Ⅳ層出土遺物実測図 (3) (縮尺1/4)	27
第20図	A 区第Ⅳ層出土遺物実測図 (4) (縮尺1/3)	28
第21図	A 区 1 号塚測量図 (縮尺1/40)	29
第22図	A 区 1 号塚遺物出土状況 (縮尺1/10)	
第23図	A 区 1 号塚出土遺物拓本 (縮尺1/1)	30
第24図	A 区 1 号塚出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4)	
第25図	A 区 1 号塚出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4)	31
第26図	A 区 1 号塚出土遺物実測図 (3) (縮尺1/6)	
第27図	A 区 2 号塚測量図 (縮尺1/40)	32
第28図	A 区 2 号塚出土遺物実測図 (1) (縮尺1/3)	33
第29図	A 区 2 号塚出土遺物実測図 (2) (縮尺1/1,1/4)	

第30図	B区S B 1 測量図 (縮尺1/50) .....	34
第31図	B区S B 1 カマド測量図 (縮尺1/20) .....	35
第32図	B区S B 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	36
第33図	B区S B 2 出土遺物実測図 (縮尺1/4,1/2)	
第34図	B区S B 3 出土遺物実測図 (縮尺1/4)	
第35図	B区S B 3 測量図 (縮尺1/50) .....	37
第36図	B区S P 119出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	38
第37図	B区第IV層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/2)	
第38図	B区第IV層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/2,1/4) .....	39

### 第3章 樽味高木遺跡3次調査地

第39図	調査地位置図 (縮尺1/2,500) .....	58
第40図	調査地測量図 (縮尺1/800) .....	59
第41図	北壁土層図 (縮尺1/30) .....	60
第42図	南壁土層図 (縮尺1/30) .....	61
第43図	遺構配置図 (縮尺1/100) .....	63
第44図	調査地区割図 (縮尺1/200) .....	65
第45図	S B 1 測量図 (縮尺1/60) .....	66
第46図	S B 1 埋土上層出土遺物実測図 (縮尺1/4,1/3,1/2) .....	68
第47図	S B 1 埋土下層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4) .....	70
第48図	S B 1 埋土下層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4) .....	71
第49図	S B 2 測量図 (縮尺1/60) .....	72
第50図	S B 2 出土遺物実測図 (縮尺1/3) .....	73
第51図	1号掘立柱建物測量図 (縮尺1/60) .....	74
第52図	S D 1・S D 2 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	75
第53図	S X 1 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	78
第54図	第IV層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/3) .....	79
第55図	第IV層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4,1/1) .....	80
第56図	第IV層出土遺物実測図 (3) (縮尺1/2) .....	81
第57図	線刻画土器実測図 (縮尺1/3,1/2) .....	82

### 第4章 樽味四反地遺跡2・3・4次調査地

第58図	調査地位置図 (縮尺1/2,500) .....	98
第59図	調査地測量図 (縮尺1/500) .....	99
第60図	西壁土層図 (縮尺1/40) .....	101
第61図	南壁土層図 (縮尺1/40) .....	103



第62図	遺構配置図	(縮尺1/150)	.....	105
第63図	調査地区割図	(縮尺1/300)	.....	107
第64図	S B 1 測量図	(縮尺1/60)	.....	108
第65図	S B 1 内 S K 24 測量図	(縮尺1/20)	.....	109
第66図	S B 1 出土遺物実測図	(縮尺1/4, 1/2)	.....	110
第67図	S B 8 測量図	(縮尺1/60)	.....	111
第68図	S B 8 出土遺物実測図	(縮尺1/4)	.....	112
第69図	S B 6 測量図	(縮尺1/60)	.....	113
第70図	S B 6 出土遺物実測図	(縮尺1/4)	.....	114
第71図	S B 3 測量図	(縮尺1/60)	.....	115
第72図	S B 3 出土遺物実測図	(縮尺1/4)	.....	116
第73図	S B 4 測量図	(縮尺1/60)	.....	117
第74図	S B 4 出土遺物実測図	(縮尺1/4, 2/3)	.....	118
第75図	S B 5 測量図	(縮尺1/60)	.....	119
第76図	S B 5 出土遺物実測図	(縮尺1/4)	.....	120
第77図	S B 7 測量図	(縮尺1/60)	.....	
第78図	S B 7 出土遺物実測図	(縮尺1/4)	.....	121
第79図	S B 2 測量図	(縮尺1/60)	.....	123
第80図	S B 2 出土遺物実測図 (1)	(縮尺1/4, 1/3)	.....	124
第81図	S B 2 出土遺物実測図 (2)	(縮尺2/3)	.....	125
第82図	掘立 1 測量図	(縮尺1/80)	.....	126
第83図	掘立 2 [上] 掘立 3 [左下] 掘立 4 [右下] 測量図	(縮尺1/80)	.....	127
第84図	掘立 5 [上] 掘立 6 [下] 測量図	(縮尺1/80)	.....	128
第85図	掘立 7 [上] 掘立 8 [下] 測量図	(縮尺1/80)	.....	
第86図	S D 出土遺物実測図	(縮尺1/4, 1/3)	.....	130
第87図	S K 1 測量図	(縮尺1/20)	.....	132
第88図	S K 1 出土遺物実測図	(縮尺1/3, 1/1)	.....	133
第89図	S K 5 測量図・出土遺物実測図	(縮尺1/20, 1/3)	.....	134
第90図	S K 出土遺物実測図	(縮尺1/4, 1/3, 1/2)	.....	135
第91図	S X 2 測量図	(縮尺1/20)	.....	136
第92図	S X 2 出土遺物実測図	(縮尺1/3)	.....	137
第93図	S P 出土遺物実測図 (1)	(縮尺1/4, 1/3, 1/2)	.....	139
第94図	S P 出土遺物実測図 (2)	(縮尺2/3)	.....	140
第95図	第Ⅲ層出土遺物実測図	(縮尺1/4, 1/3)	.....	142

第96図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4,1/3) .....	143
第97図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/3,1/4) .....	144
第98図	第Ⅳ層出土遺物実測図 (3) (縮尺1/2,2/3) .....	145

## 第5章 桑原田中遺跡2次調査地

第99図	調査地位置図 (縮尺1/2,000) .....	166
第100図	東壁土層図 (縮尺1/50) .....	168
第101図	南壁土層図 (縮尺1/50) .....	169
第102図	第Ⅲ層上面(近現代)遺構配置図 (縮尺1/200) .....	171
第103図	掘立1測量図 (縮尺1/80) .....	172
第104図	S D 4 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	173
第105図	第Ⅵ層上面(中近世)遺構配置図 (縮尺1/200) .....	174
第106図	第Ⅵ層上面(古墳時代)遺構配置図 (縮尺1/200) .....	176
第107図	S D 5 測量図・遺物出土状況 (縮尺1/100) .....	177
第108図	S D 5 上層・下層出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	178
第109図	S D 6 測量図・遺物出土状況 (縮尺1/100) .....	179
第110図	S D 6 上層・下層出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	180
第111図	S D 7 測量図・遺物出土状況 (縮尺1/150) .....	181
第112図	S D 7 下層出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4) .....	182
第113図	S D 7 下層出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4) .....	183
第114図	S D 7 下層出土遺物実測図 (3) (縮尺1/4) .....	184
第115図	S D 7 上層出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	185
第116図	S D 7 (弥生) 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4) .....	187
第117図	S D 7 (弥生) 出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4) .....	188
第118図	S D 5 ないし S D 7 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	189
第119図	第Ⅵ層上面(弥生時代)遺構配置図 (縮尺1/200) .....	191
第120図	S D・S K・S P 出土遺物実測図 (縮尺1/4) .....	192
第121図	包含層他出土遺物実測図 (縮尺1/4)	
第122図	出土遺物実測図(石製品)(1) (縮尺2/3,1/2) .....	194
第123図	出土遺物実測図(石製品)(2) (縮尺1/2) .....	195

## 第6章 自然科学分析

第124図	樽味高木遺跡2次調査A区S B 1 出土炭化材の電子顕微鏡写真 .....	208
第125図	樽味高木遺跡3次調査S K 2 における試料採取箇所 (縮尺1/30) .....	210
第126図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (1) .....	215
第127図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (2) .....	216

第128図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (3)	217
第129図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (4)	218
第130図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (5)	219
第131図	植物珪酸体の顕微鏡写真 (6)	220

## 表 目 次

### 第 1 章 はじめに

表 1	調査地一覧	1
-----	-------	---

### 第 2 章 樽味高木遺跡 2 次調査地

表 2	竪穴住居址一覧 (A区)	45
表 3	竪穴住居址一覧 (B区)	
表 4	土壙一覧 (A区)	
表 5	土壙一覧 (B区)	
表 6	溝一覧 (A区)	46
表 7	溝一覧 (B区)	
表 8	S B 1 出土遺物観察表 土製品 (A区)	
表 9	S B 1 出土遺物観察表 石製品 (A区)	
表10	S B 2 出土遺物観察表 土製品 (A区)	
表11	S B 3 出土遺物観察表 石製品 (A区)	47
表12	S B 3 出土遺物観察表 土製品 (A区)	
表13	第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品 (A区)	
表14	第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品 (A区)	48
表15	1号塚出土遺物観察表 土製品 (A区)	49
表16	1号塚出土遺物観察表 石製品 (A区)	50
表17	2号塚出土遺物観察表 石製品 (A区)	51
表18	2号塚出土遺物観察表 土製品 (A区)	
表19	S B 1 出土遺物観察表 土製品 (B区)	
表20	S B 2 出土遺物観察表 土製品 (B区)	
表21	S B 2 出土遺物観察表 石製品 (B区)	52
表22	S B 3 出土遺物観察表 土製品 (B区)	
表23	S P 119出土遺物観察表 土製品 (B区)	
表24	第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品 (B区)	

表25	第Ⅳ層出土遺物觀察表 土製品 (B区) .....	53
-----	---------------------------	----

### 第3章 樽味高木遺跡3次調査地

表26	竪穴式住居址一覽 .....	86
表27	掘立柱建物址一覽	
表28	溝一覽	
表29	土壙一覽	
表30	S B 1 埋土上層出土遺物觀察表 (土製品) .....	87
表31	S B 1 埋土上層出土遺物觀察表 (石製品)	
表32	S B 1 埋土下層出土遺物觀察表 (土製品)	
表33	S B 2 出土遺物觀察表 (土製品) .....	89
表34	S D 1・S D 2 出土遺物觀察表 (土製品) .....	90
表35	S D 1 出土遺物觀察表 (石製品)	
表36	S X 1 出土遺物觀察表 (土製品)	
表37	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (土製品) .....	91
表38	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (石製品) .....	93

### 第4章 樽味四反地遺跡2・3・4次調査地

表39	竪穴式住居址一覽 .....	148
表40	掘立柱建物址一覽	
表41	溝一覽	
表42	土壙一覽 .....	149
表43	性格不明遺構一覽	
表44	S B 1 出土遺物觀察表 (土製品) .....	150
表45	S B 1 出土遺物觀察表 (石製品)	
表46	S B 8 出土遺物觀察表 (土製品)	
表47	S B 6 出土遺物觀察表 (土製品) .....	151
表48	S B 3 出土遺物觀察表 (土製品)	
表49	S B 4 出土遺物觀察表 (土製品) .....	152
表50	S B 4 出土遺物觀察表 (石製品)	
表51	S B 5 出土遺物觀察表 (土製品)	
表52	S B 7 出土遺物觀察表 (土製品) .....	153
表53	S B 2 出土遺物觀察表 (土製品) .....	154
表54	S B 2 出土遺物觀察表 (石製品) .....	155
表55	S D 出土遺物觀察表 (土製品)	
表56	S K 1 出土遺物觀察表 (土製品)	



表57	S K 1 出土遺物観察表 (石製品)	156
表58	S K 5 出土遺物観察表 (土製品)	
表59	S K 出土遺物観察表 (土製品)	
表60	S X 2 出土遺物観察表 (土製品)	157
表61	S P 出土遺物観察表 (土製品)	
表62	S P 出土遺物観察表 (石製品)	158
表63	第Ⅲ層出土遺物観察表 (土製品)	159
表64	第Ⅳ層出土遺物観察表 (土製品)	160
表65	第Ⅳ層出土遺物観察表 (石製品)	162

## 第5章 桑原田中遺跡2次調査地

表66	掘立柱建物址一覧	197
表67	溝一覧	
表68	土壌一覧	
表69	S D 4 出土遺物観察表 (土製品)	198
表70	S D 5 上層出土遺物観察表 (土製品)	
表71	S D 5 下層出土遺物観察表 (土製品)	
表72	S D 6 上層出土遺物観察表 (土製品)	199
表73	S D 6 下層出土遺物観察表 (土製品)	
表74	S D 7 下層出土遺物観察表 (土製品)	
表75	S D 7 上層出土遺物観察表 (土製品)	200
表76	S D 7 (弥生) 出土遺物観察表 (土製品)	202
表77	S D 5 ないし S D 7 出土遺物観察表 (土製品)	204
表78	S D・S K・S P 出土遺物観察表 (土製品)	
表79	包含層出土遺物観察表 (土製品)	205
表80	出土遺物観察表 (石製品)	206

## 第6章 自然科学分析

表81	樽味高木遺跡2次調査出土炭化材とその樹種	207
表82	樽味高木遺跡3次調査S K 2の植物珪酸体分析結果	212
表83	樽味高木遺跡3次調査S K 2における主な分類群の推定量	
表84	樽味高木遺跡3次調査S K 2における植物珪酸体分析結果	213
表85	植物珪酸体の顕微鏡写真	214

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成2～3年度、松山市樽味4丁目、桑原6丁目の宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが開発事業者より、松山市教育委員会文化教育課に提出された(表1)。

申請された樽味4丁目は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81 樽味遺物包含地』内にあり、桑原6丁目は『83 枝松遺物包含地』内にある。

『81 樽味遺物包含地』内では、既に樽味立添遺跡、樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡において埋蔵文化財の発掘調査が実施され、同地域は弥生時代から中世の集落地帯であったことが明らかになっている。(梅木謙一 1992)。

また、『83 枝松遺物包含地』内においても、東本遺跡(森光晴 1980)、桑原稲葉遺跡(岡田敏彦 1990)などの調査事例があり、同地域も弥生時代から中世の集落地帯であったことが知られている。

よって、松山市教育委員会文化教育課では、確認願いが申請された地点について、同地点の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、順次事前調査(試掘調査)を実施した。試掘調査の結果、各地で古墳時代から中世の遺構と遺物、包含層を確認した。

試掘調査の結果を受け、松山市教育委員会文化教育課と申請者及び関係者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、当該地域における弥生時代から中世にわたる集落構造解明を主目的とした緊急調査を実施するものとした。調査は松山市教育委員会文化教育課の指導のもと、(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、平成3年度から5年度の間に終わった。

なお、野外調査終了後は、松山市立埋蔵文化財センターにて室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在	面積(m <sup>2</sup> )	期間
樽味高木遺跡(2次)	松山市樽味4丁目239他3筆	1,900	平成3年6月1日～同年7月20日
樽味高木遺跡(3次)	松山市樽味4丁目178-3	479	平成4年3月10日～同年5月22日
樽味四反地遺跡(2次)	松山市樽味4丁目216	300	平成4年9月1日～同年10月31日
樽味四反地遺跡(3次)	松山市樽味4丁目216	407.36	平成4年10月1日～同年10月31日 平成5年8月1日～同年9月30日
樽味四反地遺跡(4次)	松山市樽味4丁目216	229.43	平成5年8月1日～同年9月30日
桑原田中遺跡(2次)	松山市桑原6丁目520,521,522	421	平成5年3月4日～同年5月31日

## はじめに

### 〔文献〕

- 梅木謙一 1992 『桑原地区の遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター  
森 光晴 1990 『浮穴・西石井荒神堂、束本Ⅱ・Ⅲ、桑原高井遺跡』松山市教育委員会  
岡田敏彦 1990 『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書―桑原稲葉遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

## 2. 調査・刊行組織〔平成6年11月1日現在〕

松山市教育委員会	教 育 長	池田 尚郷
生涯教育部	部 長	渡部 和彦
	次 長	三好 俊彦
文化教育課	課 長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理 事 長	田中 誠一
	事務局長	渡部 和彦
	事務次長	一色 正士
埋蔵文化財センター	所 長	河口 雄三
	次 長	田所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳 (文化教育課職員)
	調 査 員	梅木 謙一
		宮内 慎一
		山本 健一
		河野 史知
		武正 良浩
		加島 次郎

### 3. 環 境

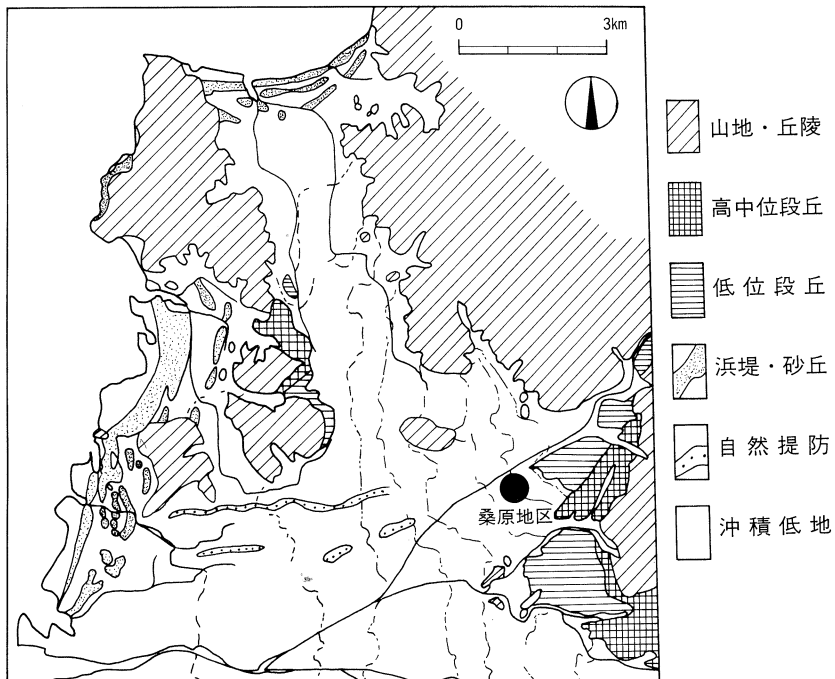
#### (1) 遺跡の立地

松山平野は、西部瀬戸内海の伊予灘と中部瀬戸内海の燧灘とを二分するように北に突き出した高縄半島のつけね部分に位置する。高縄半島中央部には半島最高峰の東三方ヶ森をはじめ、伊之子山、北三ヶ森、高縄山からなる高縄山地が形成されている。松山平野は、この高縄山地に源を発した河川が伊予灘に流れ出て形成された沖積平野である。

松山市桑原地区は、松山平野のやや東より標高約40m前後に位置しており、樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）をはじめ、弥生～中世に至る時期の遺跡が数多く存在している。

周辺地域には当地区の西方に小坂・釜ノ口遺跡群が、さらに北西には弥生時代における松山平野の拠点集落として知られる道後城北地区が、また南方には久米高畑遺跡群や来住廃寺を含む久米・来住地区といった松山平野の中でも有数の遺跡地帯が広がっている。

地質学的には桑原地区一帯は、高縄山に源を発する石手川によって運搬・堆積された扇状地堆積物で成り立っている。その石手川は石手寺付近を扇頂として北東から南西方向に流れ、途中、支流の小野川を合わせて下流では重信川に合流する。以前は、流路を幾度となく変遷



第1図 桑原地区の地質図



## はじめに

したものと考えられており、開折活動を繰り返しながら扇状地を形成していった。こうしてできた石手川扇状地は、その両岸で異なった様相を呈している。右岸は現世における扇状地面であるのに対し、左岸では現世の扇状地面と洪積世の段丘化した扇状地面とが存在する。

すなわち、左岸については石手川上流域では現世の扇状地面が洪積世扇状地面を開折し、下流域では、それを覆うように広がっているのである。本遺跡は、この石手川左岸の洪積世扇状地面上に立地している。

## (2)歴史的環境 (第3図)

本遺跡周辺には、樽味遺跡(1)をはじめとして数多くの遺跡が存在する。その中で、近年発掘調査された遺跡を中心に時代別に述べていくことにする。なお( )内の数字は第3図に対応するものである。

### 旧石器時代

桑原地区に限らず松山平野全体においても、これまでに明確な旧石器時代の遺構は発見されていない。ただし、樽味遺跡、樽味四反地遺跡(2)〔梅木謙一 1989〕においてポケット状に堆積したA T火山灰を確認している。

### 縄文時代

縄文時代から弥生時代にかけての遺構は、樽味遺跡において弥生時代前期前半の溝S D 4と、それに続く時期の貯蔵穴と考えられる土壌S K 5が確認されている。それによると、出土資料は道後城北遺跡等で確認されている縄文時代晩期からの系譜を追うことができるものである〔宮本一夫 1989 a〕。

### 弥生時代

弥生時代は、桑原高井遺跡(3)、東本遺跡(4)をはじめとして、桑原田中遺跡(5)、桑原稲葉遺跡(6)、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡(7)樽味高木遺跡(8)など、近年精力的に確認調査・発掘調査が実施され、当時の集落構造や集落形態などが解明されつつある。桑原高井遺跡では竪穴式住居址5棟のほか、集落関連遺構と遺物が検出されている。住居址については円形と方形の二種類があり、壁体に沿って周溝が巡る。特に2号住居址は、平面形が六角形を思わせるような円形で、柱穴は中心部に1本と壁体に沿って6本の計7本からなり、ベット状施設を付設している〔森光晴 1980〕。

次に東本遺跡では、2次調査において竪穴式住居址2棟と掘立柱建物址や土壌等が検出されている〔森光晴 1980〕。また桑原田中遺跡のS K 1からは弥生時代後期後半の遺物が多量に出土している〔松村淳 1989〕。桑原稲葉遺跡では円形と方形の竪穴式住居址が1棟ずつ検



- ①大湫遺跡      ②古照遺跡      ③祝谷六丁場遺跡      ④文京遺跡(愛媛大学)  
⑤道後湯月遺跡      ⑥三島神社古墳      ⑦福音寺遺跡      ⑧来住廃寺遺跡

第 2 図 松山平野の主要遺跡分布図

## はじめに

出され、方形の住居址からは弥生時代後期末の遺物が出土している〔岡田敏彦他 1990〕  
他に、樽味立添遺跡では包含層中より『貨泉』の出土がある〔梅木謙一 1989〕。

### 古墳時代

古墳時代では、前述の樽味立添遺跡から十数棟の竪穴式住居址と掘立柱建物址（古墳後期以降）が検出されており、樽味高木遺跡の5号竪穴式住居址並びに土壙SK5より5世紀代の甕形土器・壺形土器・高坏形土器などが出土している。また桑原本郷遺跡（9）では、5世紀後半の方形竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、それと共に滑石製の白玉100点余りが須恵器と共に出土している〔栗田茂敏 1987〕。

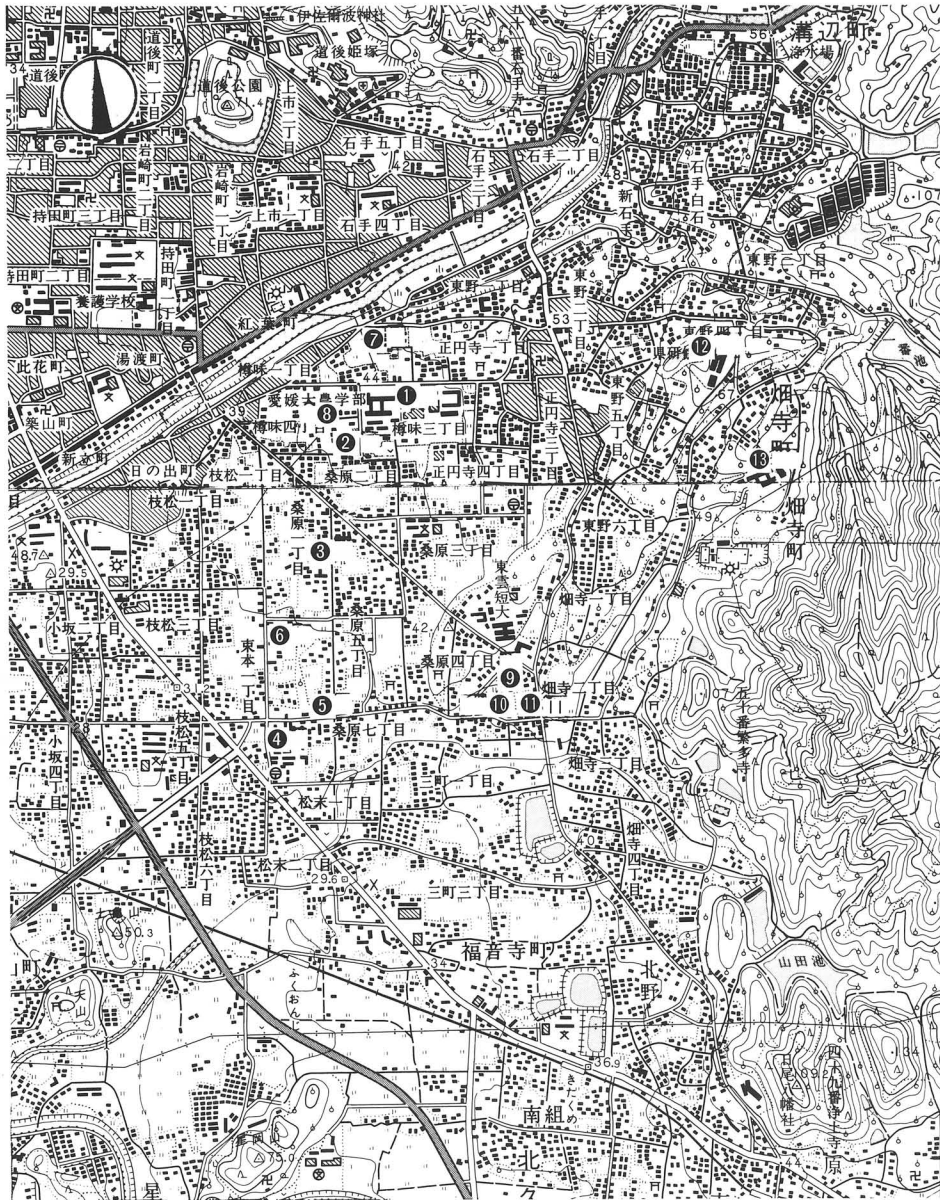
集落関連遺構だけでなく、桑原地区では2基の古墳の存在が古くから知られている。経石山古墳（10）は、全長48.5mの前方後円墳で5世紀末を年代にあてている〔森光晴 1986〕。また、三島神社古墳（11）は経石山古墳の東約300mの地点に存在していたが、発掘調査の後、削平されている。全長約45m、初期畿内型の横穴式石室を内部主体にもつ前方後円墳であると報告されており、出土遺物から6世紀初頭に比定されている〔森光晴 1986〕。

また、桑原地区の東側の丘陵部には東野お茶屋台古墳群（12）と、畑寺竹ヶ谷古墳群（13）が存在する。東野お茶屋台古墳群では、3基の周溝から5世紀後半の須恵器が出土し、畑寺竹ヶ谷古墳群においても周溝内から須恵器や直刀が出土している。

### 古代・中世

樽味四反地遺跡では10世紀代に比定される溝SD1、SD3が検出されている。また、樽味遺跡のSD1、SD2からは14世紀後半、SD3、SK5からは15世紀代の土師器が出土している。特に樽味遺跡SD1は集落の境界の溝として位置づけられている〔宮本一夫 1989b〕。

文献によると、真言宗宗賢寺は河野通清に養育された出雲宗賢の館跡（土居構）に建立された寺と言われることから、中世においては、河野氏は桑原地区一帯を支配していたものと考えられる。



- |            |           |             |
|------------|-----------|-------------|
| 1 樽味遺跡     | 2 樽味四反地遺跡 | 3 桑原高井遺跡    |
| 4 束本遺跡     | 5 桑原田中遺跡  | 6 桑原稲葉遺跡    |
| 7 樽味立添遺跡   | 8 樽味高木遺跡  | 9 桑原本郷遺跡    |
| 10 経石山古墳   | 11 三島神社古墳 | 12 東野お茶屋台古墳 |
| 13 畑寺竹ヶ谷古墳 |           |             |

第3図 桑原地区の主要遺跡分布図



## はじめに

### 〔文献〕

- 梅木謙一 1989 「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 森 光晴 1980 「東本Ⅱ・Ⅲ、桑原高井遺跡」『松山市文化財調査報告書14』「東野お茶屋台古墳群」「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史 資料編 考古』松山市教育委員会
- 松村 淳 1989 「桑原田中遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
- 岡田敏彦他 1990 「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 栗田茂敏 1987 「桑原本郷遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』松山市教育委員会
- 平井幸弘 1989 「鷹子遺跡及び樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 宮本一夫 1989 a 「道後平野における弥生時代開始時期の動向」  
1989 b 「道後平野の中世土器編年—13～15世紀を中心に—」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室

第2章

タル ミ タカ キ  
樽味高木遺跡

— 2 次調査地 —



## 第2章 樽味高木遺跡2次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1991（平成3）年3月28日、不動産センター株式会社より、松山市樽味4丁目239の宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認申請が提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にある。

また、1991（平成3）年4月16日、同社より、松山市樽味4丁目234・237における宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認申請が提出された。この申請地は、先の申請地の南西側に隣接しており、『樽味遺物包含地』の西端部にあたる。ちょうど包蔵地ラインが申請地を東西に二分している状況にある。

同社から、周辺の水田が田植え準備に入ったため、早急に周縁の擁壁工事を行いたい旨の連絡があったため、松山市教育委員会文化教育課と松山市立埋蔵文化財センターは、その工事段階で立ち合い調査を行い、埋蔵文化財の有無の確認を行うこととなった。

1991（平成3）年4月25日に工事立ち合い調査を行い、旧耕作土下に弥生式土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層を、また、先の申請地に塚が2基あることを確認し、埋蔵文化財の存在が認められた。

これらの結果から、松山市教育委員会と松山市立埋蔵文化財センター、不動産センター株式会社の三者は、遺跡の取扱について協議を行い、開発によって失われる遺構について記録保存のために、発掘調査を実施することとなった。

樽味4丁目239をA区とし、このA区内の方形塚を1号塚、円形塚を2号塚とし、1991（平成3）年6月1日から調査を開始し、樽味4丁目234・237をB区として1991（平成3）年6月3日から発掘調査を開始した（第4図）。

B区の現状は、かなりの造成がなされ、また、包含地内のみを調査対象としているため、まず東西1本のトレンチを設定し掘削を行い、部分的に拡張をして調査を行った。

周辺には、これまで多くの発掘調査が実施され、弥生から中世にわたる遺跡の存在が明らかになってきている。本調査地の東部・北東部には、弥生中期から古墳後期にいたる複合遺跡である樽味高木遺跡（1次）、A T火山灰検出の樽味四反地遺跡、弥生後期から中世にかけての樽味遺跡、「貸泉」出土の樽味立添遺跡等がある。また、東方・東南方には、東野お茶屋台古墳群をはじめ経石山古墳、三島神社古墳がある。南部・南西部には、A T火山灰検出の西稲葉遺跡、弥生後期後半の土器溜まり遺構を検出した桑原田中遺跡、多角形竪穴住居址を検出した桑原高井遺跡、滑石製白玉を多数出土した桑原本郷遺跡、弥生から中世の桑原稲葉遺跡がある。

樽味高木遺跡 2 次調査地

(2) 調査組織

遺跡名 樽味高木遺跡 2 次調査地

調査地 A区 松山市樽味 4 丁目 239

B区 松山市樽味 4 丁目 234、237

調査面積 対象面積 1900.45m<sup>2</sup> (A区774.17m<sup>2</sup>・B区1126.28m<sup>2</sup>)

実施面積 224m<sup>2</sup> (A区114m<sup>2</sup>・B区110m<sup>2</sup>)

調査期間 A区 1991 (平成 3) 年 6 月 1 日～同年 7 月 20 日

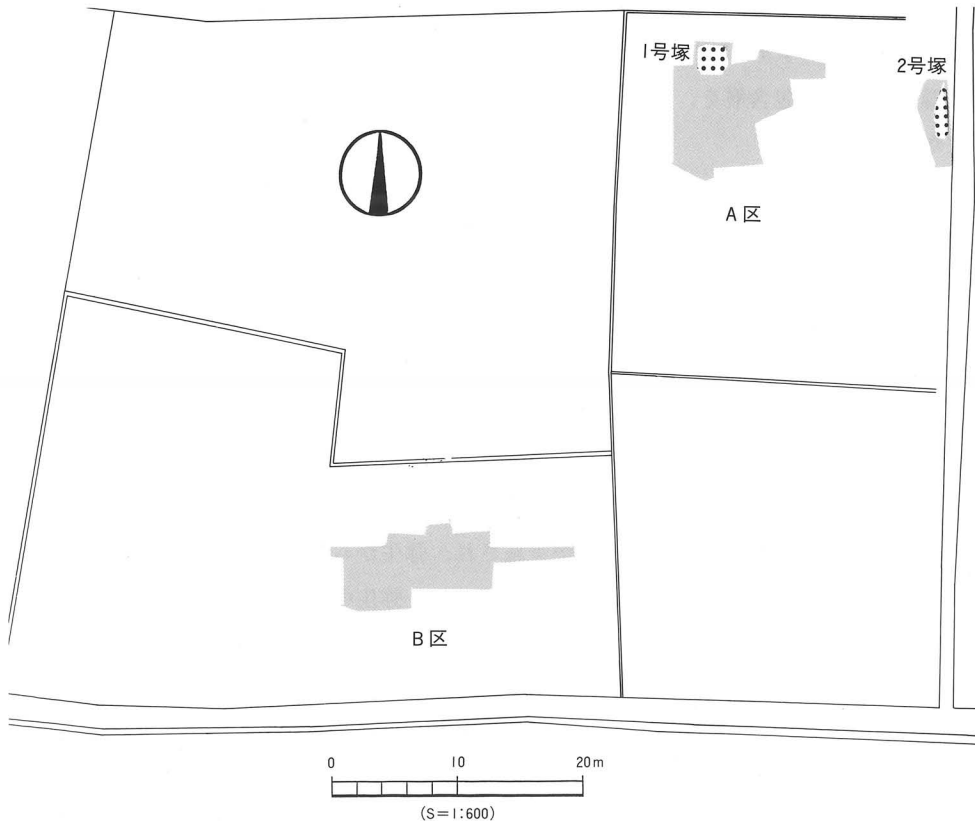
B区 1991 (平成 3) 年 6 月 3 日～同年 6 月 30 日

調査委託 不動産センター

調査担当 調査主任 栗田正芳

調査員 河野史知

調査作業員 宮脇和人、波多野恭久、政本和人、越智隆、服部和広、面平健一、鎌田讓二、  
是澤嘉昭、三江元則



第 4 図 調査地位置図



## 2. 層 位 (第5図)

本遺跡は、石手川左岸の沖積扇状地（東野面）上の西端部に位置しており、標高39.6m前後に立地する。

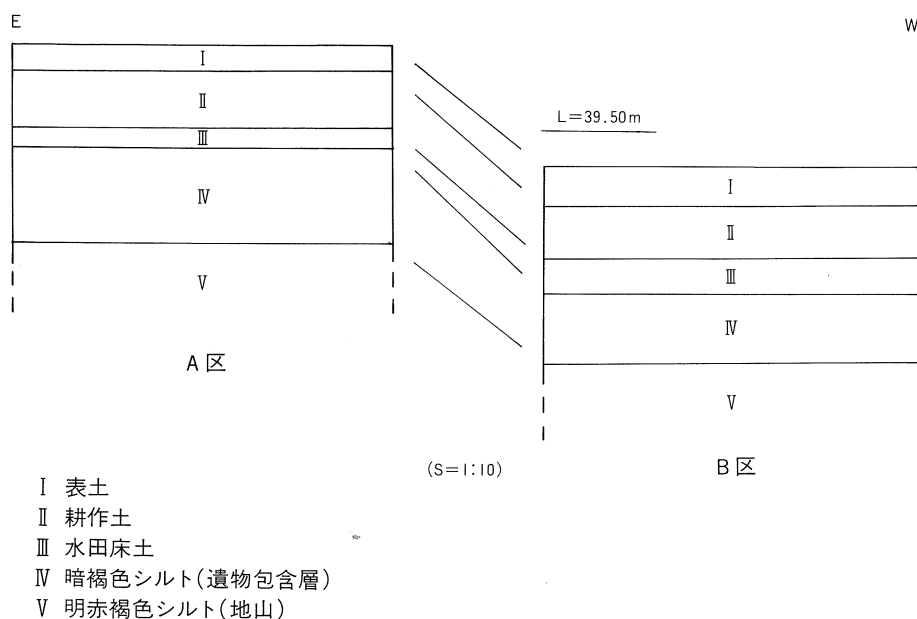
基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層耕作土、第Ⅲ層水田床土、第Ⅳ層暗褐色シルト、第Ⅴ層は明赤褐色シルトの無遺物層で地山と呼ばれているものである。第Ⅰ層は10~20cm、第Ⅱ層は30~40cm、第Ⅲ層は5~10cmの厚さを測る。第Ⅳ層は40~50cmの堆積であり、弥生時代前期~古代にかけての遺物包含層である。第Ⅴ層はA・B区の地形を測量すると、旧地形は東から西へ緩傾斜をなしている。

A区 遺構は第Ⅱ層上より塚2基、第Ⅴ層上面より竪穴式住居址3棟、土壇3基、溝1条、柱穴71基を検出した。

B区 第Ⅴ層上面より竪穴式住居址3棟、土壇10基、溝1条、柱穴138基、性格不明遺構4基を検出した。

遺物は第Ⅳ層及び塚を含む遺構内からの出土であり、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器（石庖丁2点、石斧1点、石鏃6点、チップ423点）、勾玉・白玉・貨幣・紡錘車各1点である。

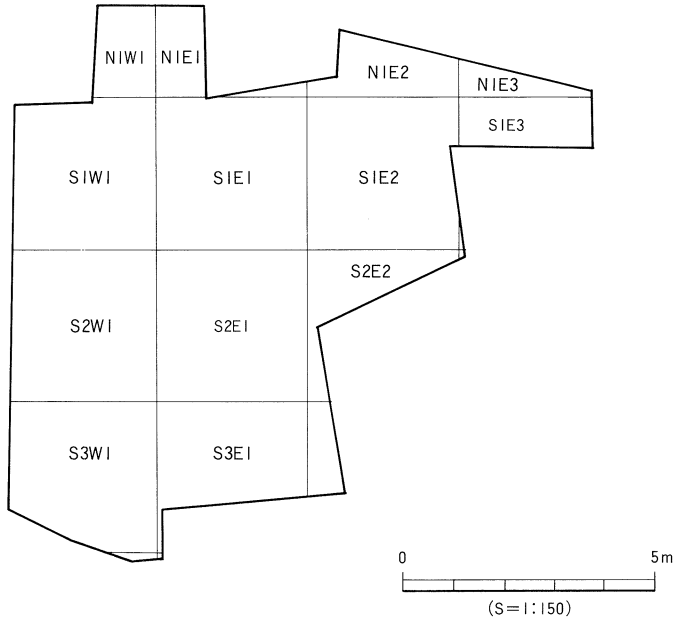
調査にあたり、調査区内を4m四方のグリッドに分けた（第6図）。



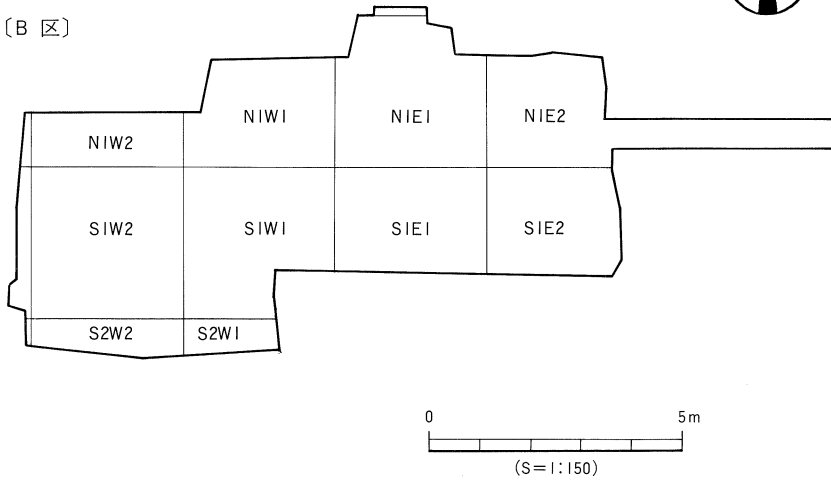
第5図 土層図

樽味高木遺跡 2次調査地

[A 区]



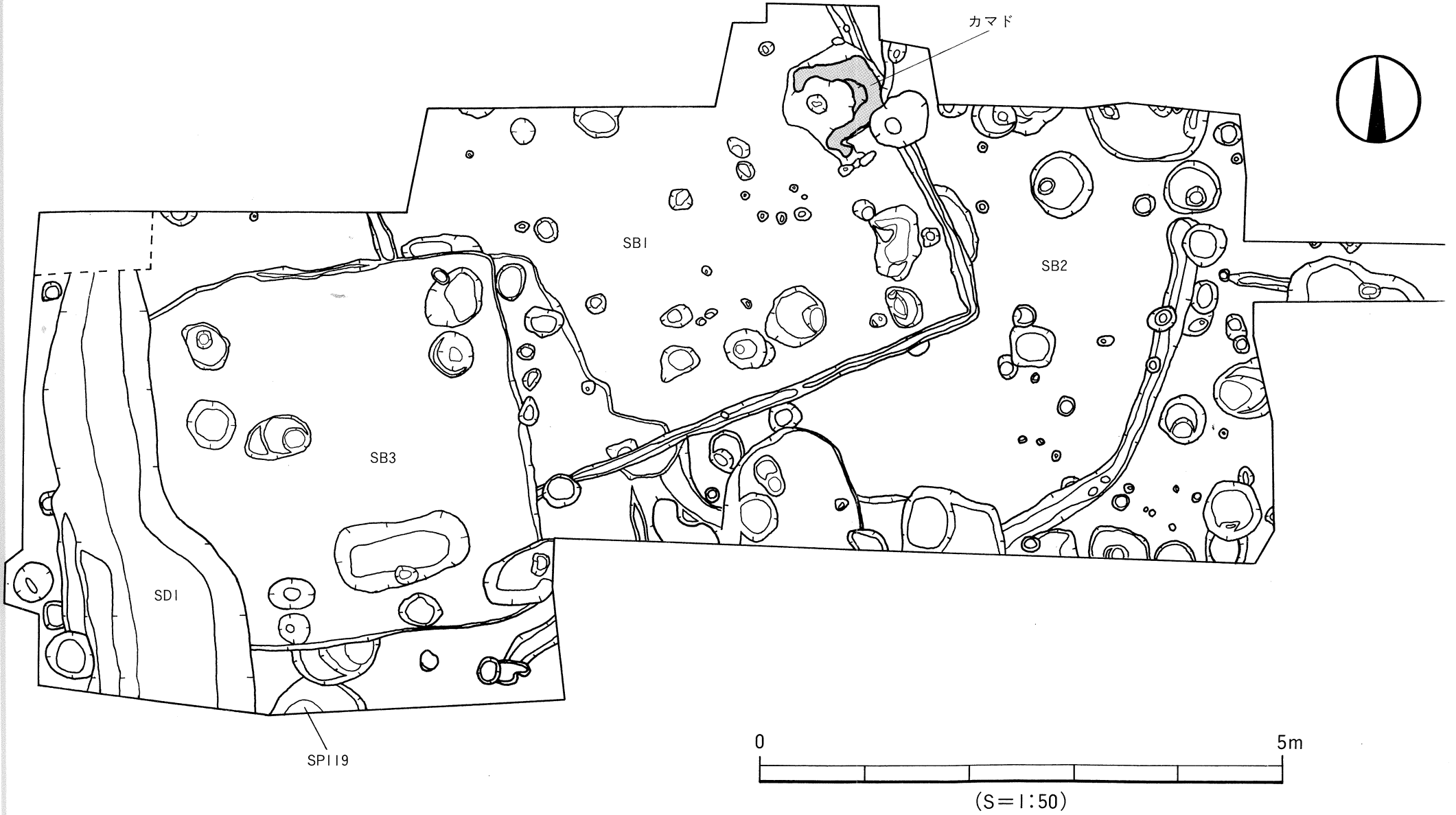
[B 区]



第 6 図 調査地区割図



第7图 A区遺構配置図



第8図 B区遺構配置図

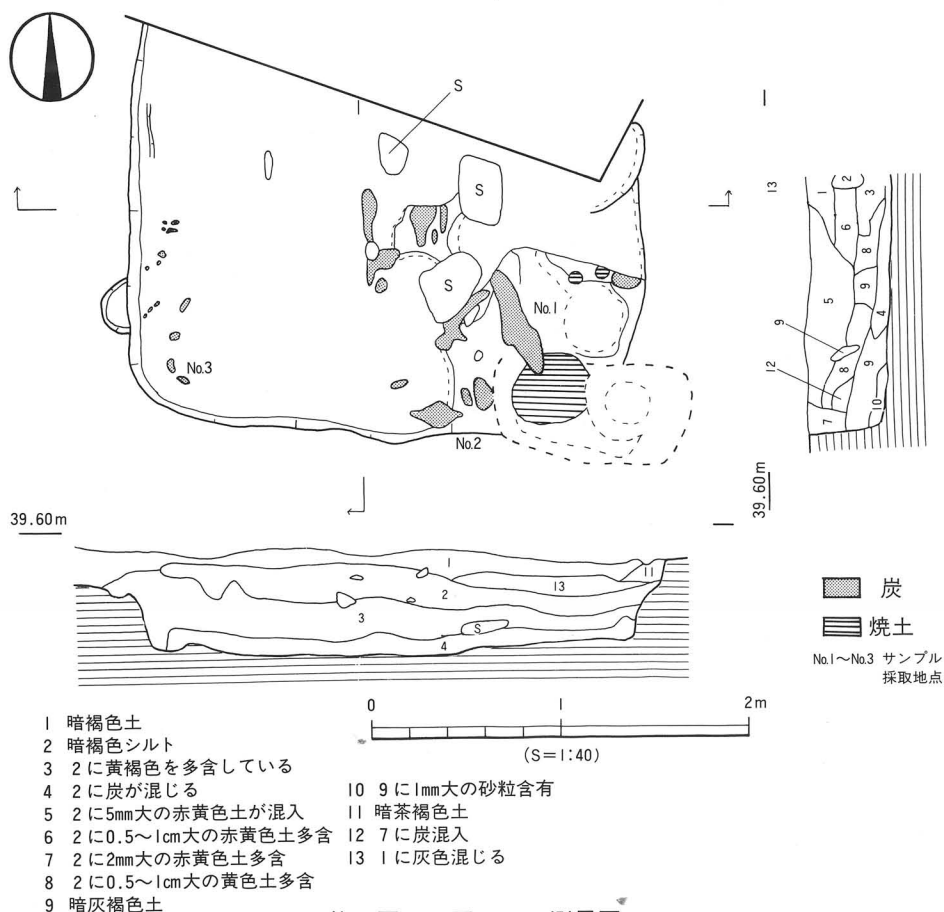
### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) A区

##### SB1 (第9図、図版2・3)

調査区南壁中央部N1W1～N1E1区に位置する。住居址北側は調査区外へ続く。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。規模は現存幅東西2.78m、南北2.1m以上、壁高は0.44mを測り、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり、西壁に薄く壁体溝が残る。

覆土は上層が暗褐色シルト、中層から下層にかけて上層の暗褐色シルト層に1cm大の黄褐色シルト塊を含んでいるものである。中央部より南東にかけては床面に炭化物と焼土が見られ、南東部に炉址を検出した。また中央部より東寄りにおいて30～35cm大の扁平な石2個(花崗岩・細粒砂岩)が並んだ状態で出土した。主柱穴は不明である。住居址覆土上層において石鏃、磨製石庖丁を各1点、中～下層より、弥生時代中期後半の無頸壺、短頸壺、甕の他に赤色頁岩片、サヌカイト片が各1点出土している。

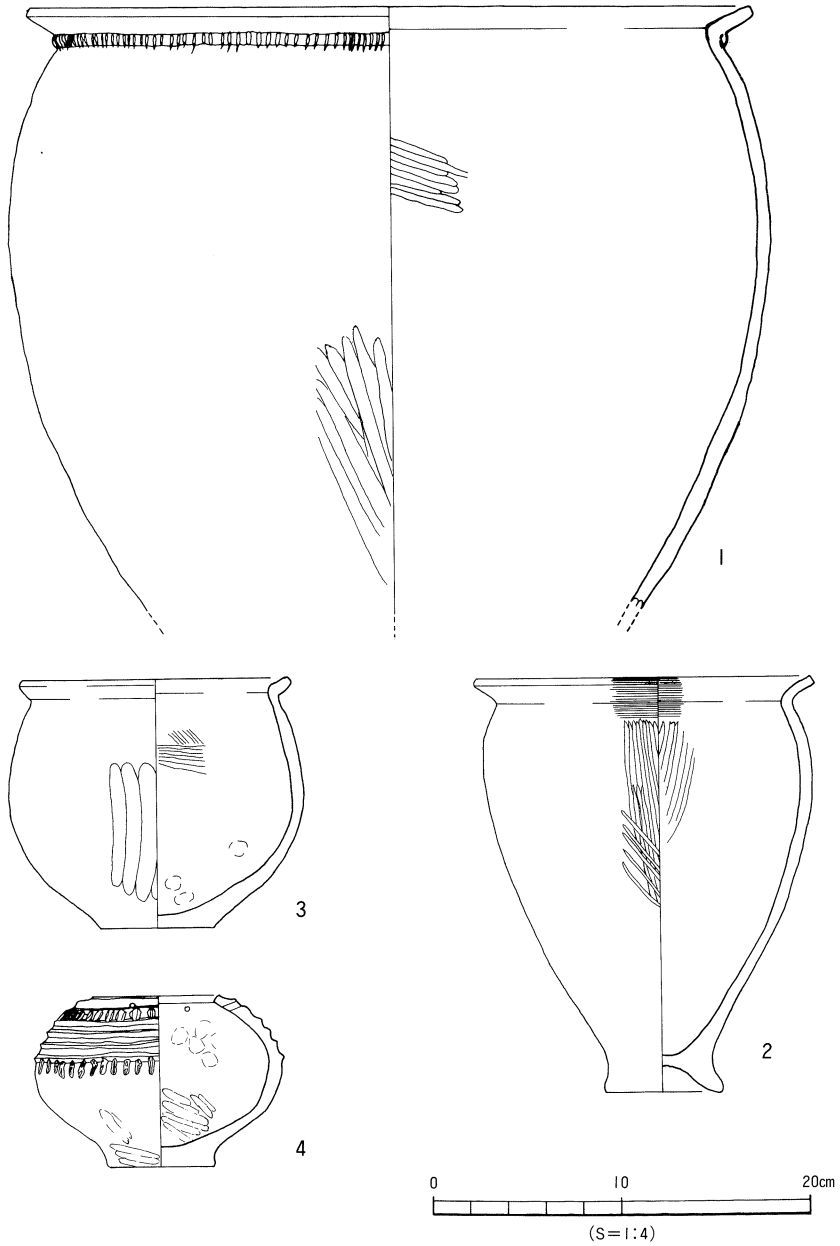


第9図 A区SB1測量図

床面より出土した炭化物 3 点の樹種は、ブナ科シイノキ属（広葉樹）、クスノキ科（広葉樹）、針葉樹である。

出土遺物（第10・11図、図版13）

甕形土器（1・2）1は「く」の字状口縁をもち、頸部に刻み目を有する凸帯が1条貼られ



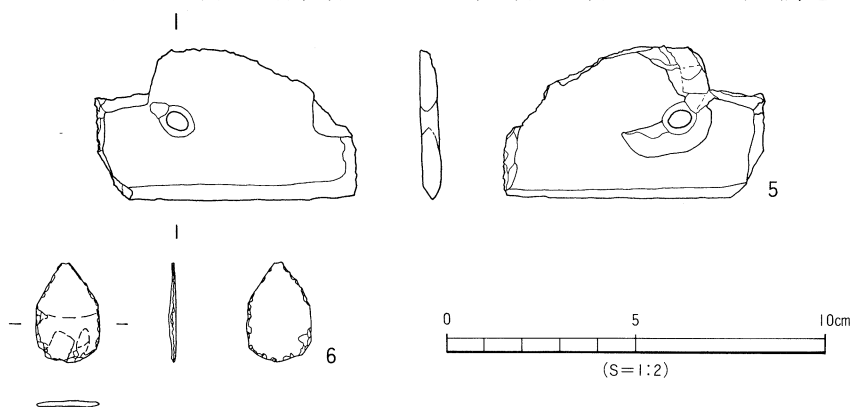
第10図 A区SBI出土遺物実測図(1)

## 調査の概要

ており、口縁端部がやや拡張され端面は凹面をなしている。胴部下半に縦方向の磨きが見られる。2は「く」の字状口縁をもち、端面は平らな面をなしている。底部は上げ底状を呈し、突出部をもつ。胴部上半に縦方向に磨きが見られる。

壺形土器（3・4）3は短頸壺である。「く」の字状口縁をもち、端面は丸くおさまられている。胴部中位が張り、底部は平底である。4は無頸壺である。底部は平底で胴部が強く張り口縁端部は平坦な面をなしている。口縁～胴上部にかけ6条の凸帯を貼り付けており、凸帯の上の口縁付近に相対して2孔ずつ円孔が穿たれている。

石製品（5・6）5は磨製石庖丁で、3分の1の残存である。石材は緑泥片岩で、孔は2孔であり、両面穿孔がなされている。刃部は直線状であり、両面が磨き出されている。6は赤色チャート製の平基式三角形の打製石鏃である。薄い剥片を剥いたのち刃部を調整している。



第11図 A区SB1出土遺物実測図(2)

### SB2（第12図、図版3）

調査区中央部南寄りのS2・3, E1区に位置する。住居址南隅はSK2・3に切られている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は残存幅東西4.0m、南北4.0m、壁高は0.1mを測り、覆土は黒褐色シルトである。北東部に薄く壁体溝が残る。住居址中央部西寄りに大きさ28cm×20cm、厚さ5cmの石とその周りに5～10cmの円礫群を検出している。支柱穴及び炉は未検出である。遺物は上層～下層にかけ須恵器・土師器片が出土している。

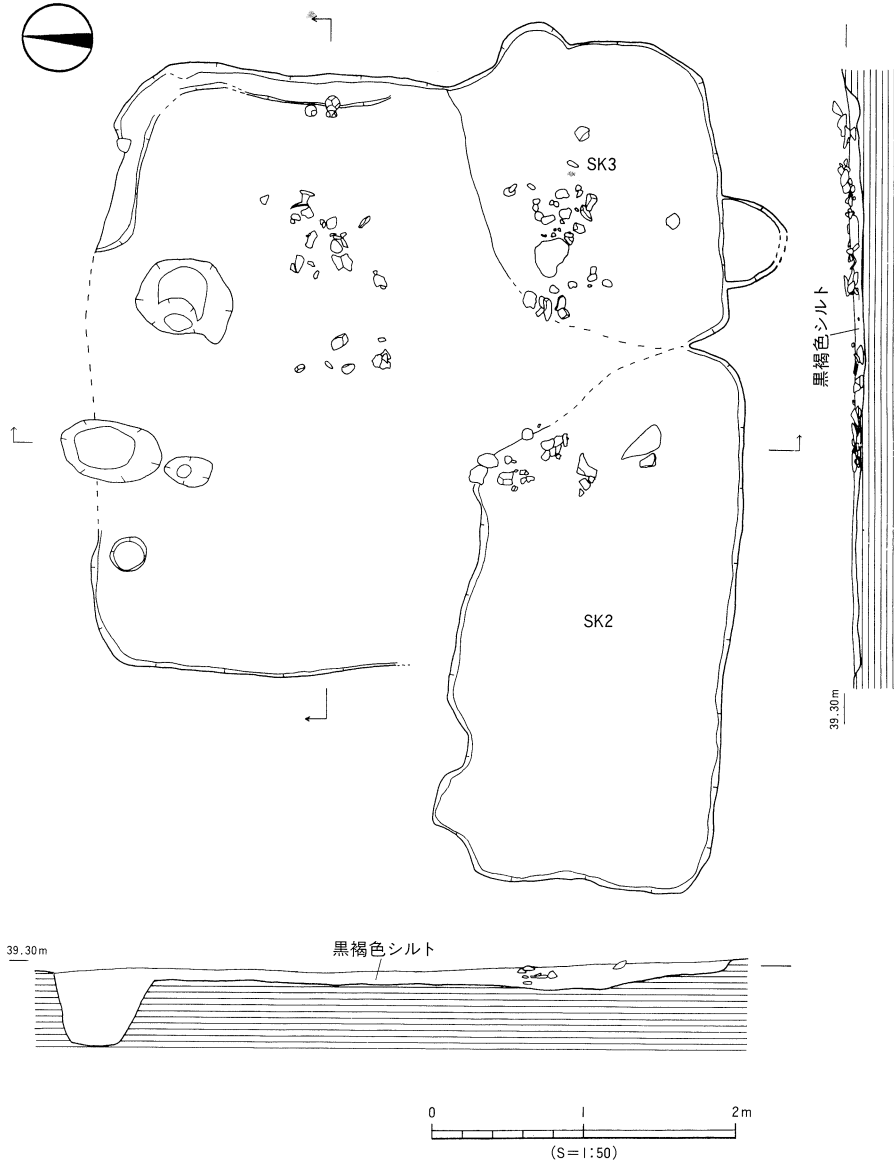
### 出土遺物（第13・14図、図版14）

須恵器7は坏蓋である。口縁部は内傾する明瞭な段を有し、天井と口縁部を界する稜は外方向へ張り出す。

甕形土器（8～10）8・9は口縁部がやや内湾気味で「く」の字状の頸部をしており、端面は水平な面をなしている。10は口縁部が直線気味に外傾させ立ち上がる。

壺形土器（11・12）球状の体部に外傾する口頸部をもち、口縁部が外反気味に立ち上がり、11は端部が丸くおさまられる。12は尖り気味である。体部最大径は口径を凌ぐ。

樽味高木遺跡 2次調査地

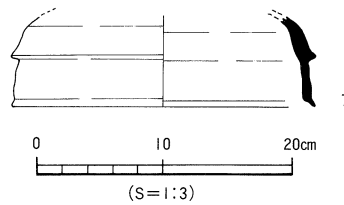


第12図 A区SB2測量図

高坏形土器 (13~15) 13~15は坏部は口縁部が外反している。

13・14は脚部は裾部が大きく開き、内面の柱裾部境に稜をもつ。

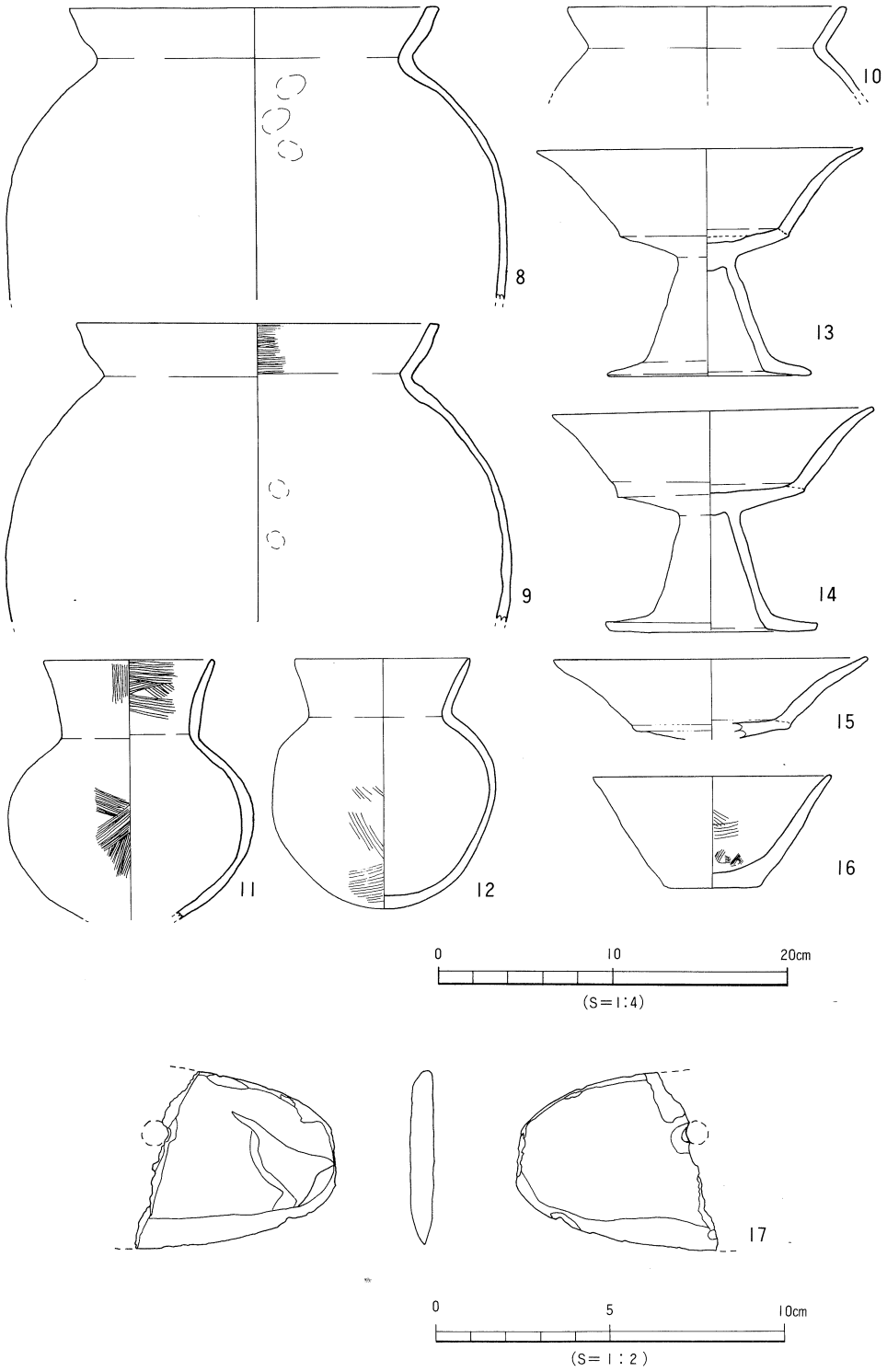
鉢形土器 (16) 16は平底の底部より、口縁部は内湾気味に立ち



第13図 A区SB2出土遺物実測図 (1)



調査の概要



第14図 A区S B 2出土遺物実測図(2)

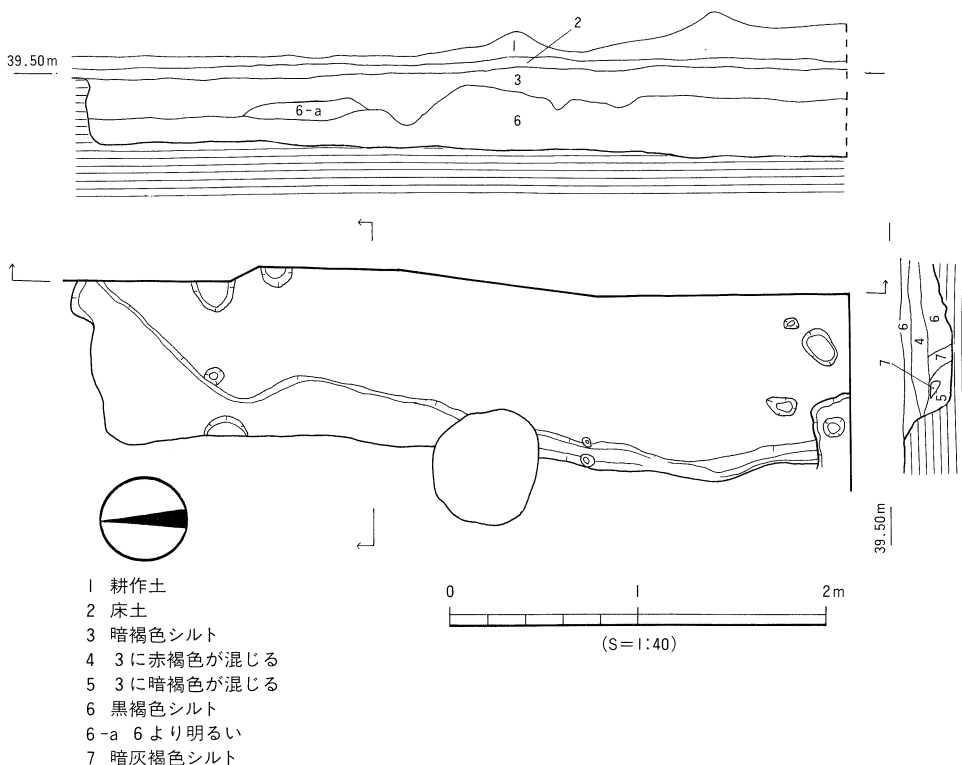
上がり、端部がやや外反する。

石製品 (17)

17は磨製石庖丁で、1/3の残存である。石材は緑泥片岩であり、両面穿孔のされた孔が見られる。背部、刃部共に外湾しており、刃部は両面が磨かれている。

S B 3 (第15図)

調査区西端のS1W1区に位置する。住居址の殆どが調査区外である為、東壁付近のみを検出した。規模は南北幅4m以上で壁高は0.35mを測り、幅0.16m、深さ0.05mの壁体溝を持つ。床面より数基のピットを検出したが主柱穴及び炉は未検出である。本住居址覆土は黒褐

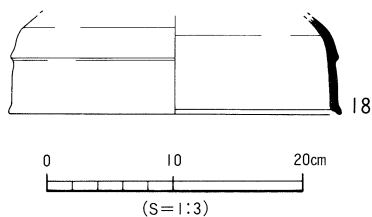


第15図 A区S B 3測量図

色シルトであり、遺物は弥生土器の細片に混じり、須恵器の蓋環、土師器の細片が僅かに出土しているだけである。

出土遺物 (第16図)

環蓋18は垂下する口縁部に、端部は凹面を有し内傾する。



第16図 A区S B 3出土遺物実測図

SD1 (第7図)

調査区北東部N・S1, E2・3区に位置する。幅約1.2m、深さ0.15m、長さ5m分を検出しているが東・西端は調査区外へ続いており、SB1号住居址を切る。断面は「レンズ状」を呈し、東から西へ緩傾斜(比高差8cm)をなす。溝底部に3~16cm大の円礫が表面に露出している。

第IV層出土遺物(第17~20図、図版15~17)

ガラス製品(第17図)19は白玉である。側面の中央部が膨らみ、丸く納まり、上下端面の中央に穿孔がある。色調は半透明の青色である。

壺形土器(20~24)20は木葉紋を施した胴部片である。無軸のもので浅い沈線を施している。21は口縁端部が上下方向に拡張しており拡張部に凹線紋を6条施す。拡張部上端に2条の沈線を巡らせている。凹線紋上に棒状浮文が貼られ、浮文上面に9条の刻みが施されている。22も上下方向に拡張されており、拡張部に3条の凹線紋を施している。23は上方向に較べ下方向の拡張が長く4条の凹線文を施し、その凹線上に刻み目を入れている。24は頸部片で1条の凸帯を貼り巡らせており、押圧紋を2条施してある。

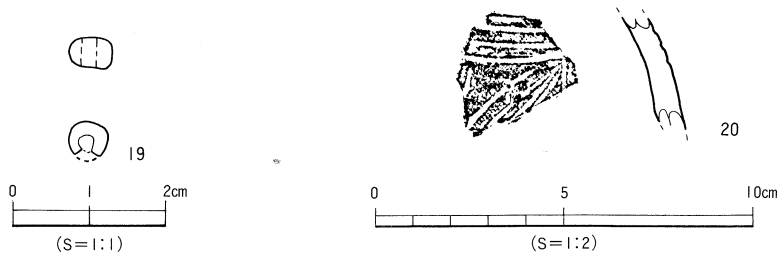
甕形土器(25~29)25は緩やかに外反する頸部より、更に外反する口縁部をもつ。外面に叩き、内面に刷毛目調整がみられる。26は「く」の字状の頸部より、口縁部が外反する。27は「く」の字状の頸部より、口縁上部を直立気味に立ち上がらせている。28は球状の胴部より緩やかな「く」の字状をした頸部より、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。29は上げ底の張り出された底部である。

高坏形土器(30)水平に伸びる坏底部に脚部は裾が大きく開き、内面の柱裾部境に稜をもつ。

椀形土器(31・32)内湾した胴部より口縁端部が外反し丸く納める。底部形状は不明である。32は平底の底部より胴部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸く納められる。

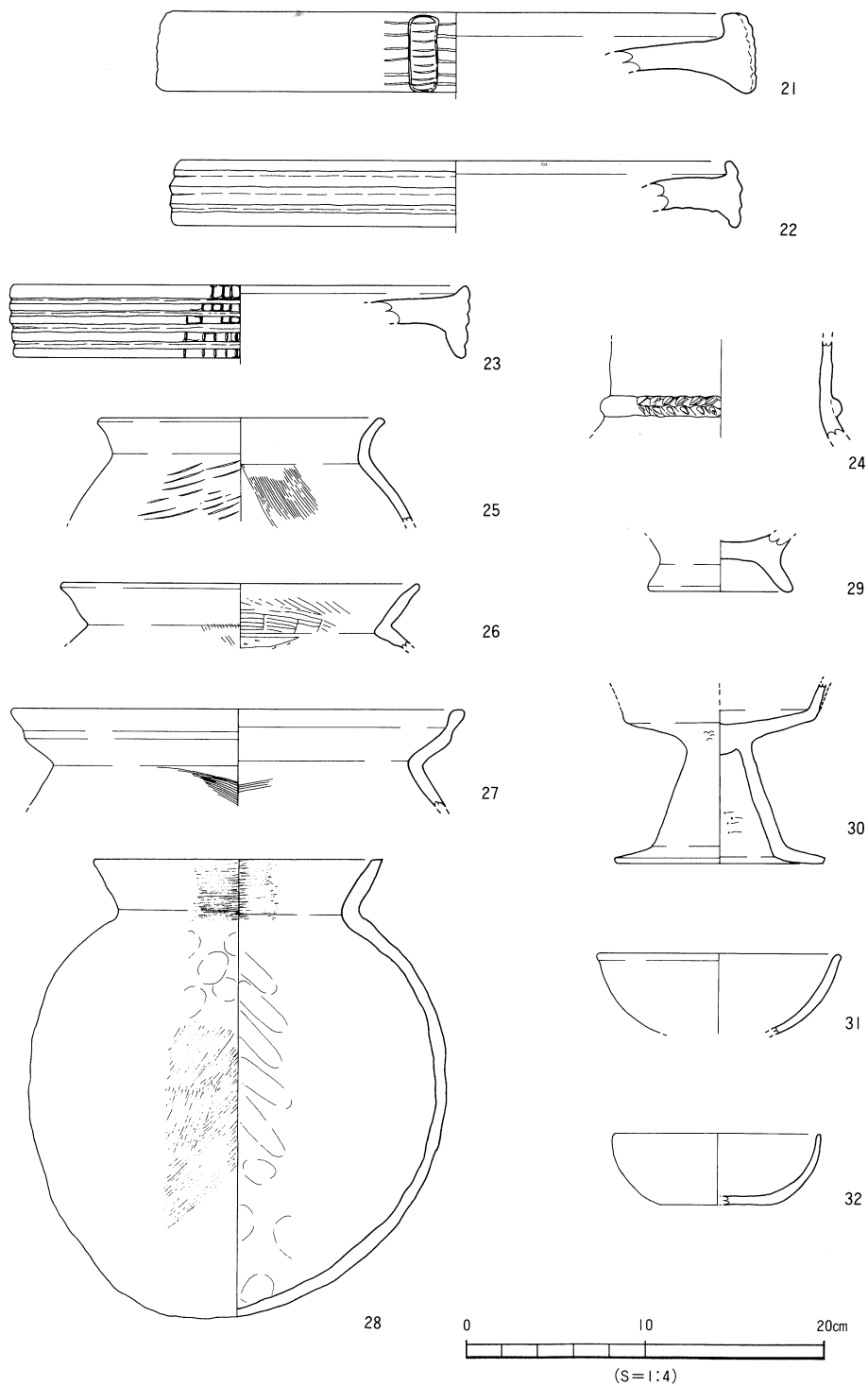
甌(33・34)33は平底の底部より体部が外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。端面は面をなす。底部中央に大振りの円孔、その周りに4孔の楕円孔が窺える。胴部中央に把手がつく。34は33の2/3の器高である。口縁部に把手が付けられる。

須恵器(第20図)甕形土器(35・36)外反する口頸部を有し、端部を上下方向に拡張させている。35は頸部上方に2条の凸線を巡らせており、その上方に波状文を6条施している。



第17図 A区第IV層出土遺物実測図(1)

樽味高木遺跡 2 次調査地



第18図 A区第IV層出土遺物実測図(2)

調査の概要

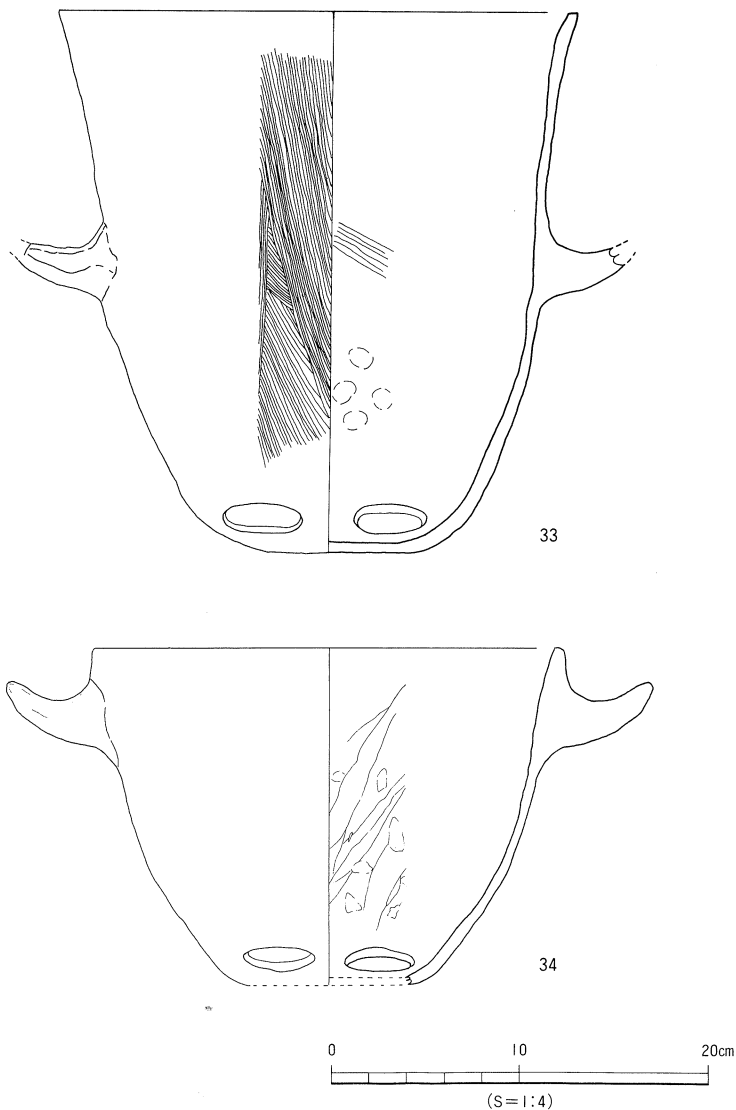
36は口縁上部に凸線を1条巡らせており、その下に9条の波状文を施している。

壺形土器 (37) 外反する口縁部を有し、口縁端部がやや拡張される。口縁外面に1条の凸帯を、その上下に波状文を巡らせている。

高坏形土器 (38) 無蓋の高坏である。口縁部は広く外反しており、端部は尖り気味で口縁部と体部は鋭い稜で界される。坏上部に波状文、下部には回転ヘラ削り調整が施されている。

坏蓋 (39・40) 39は口縁部が内湾気味に垂下し端部が凹面を有する。40は天井部と口縁部の間に緩やかな稜が残り、口縁端部は丸く仕上げられている。

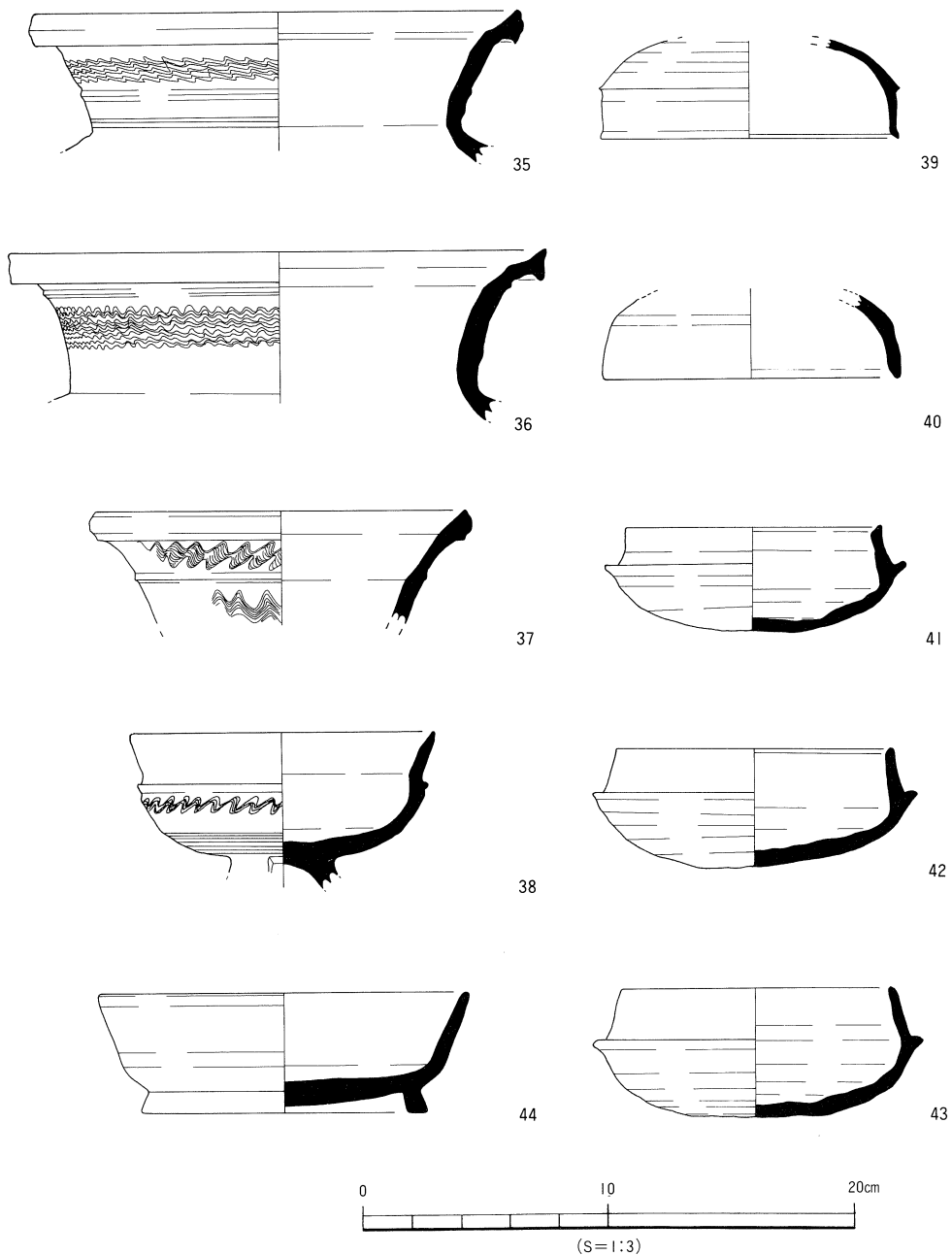
坏身 (41~44) 41は立ちあがりには内傾し内端面に凹線が巡り、体部は受部内面下で強く屈



第19図 A区第IV層出土遺物実測図(3)

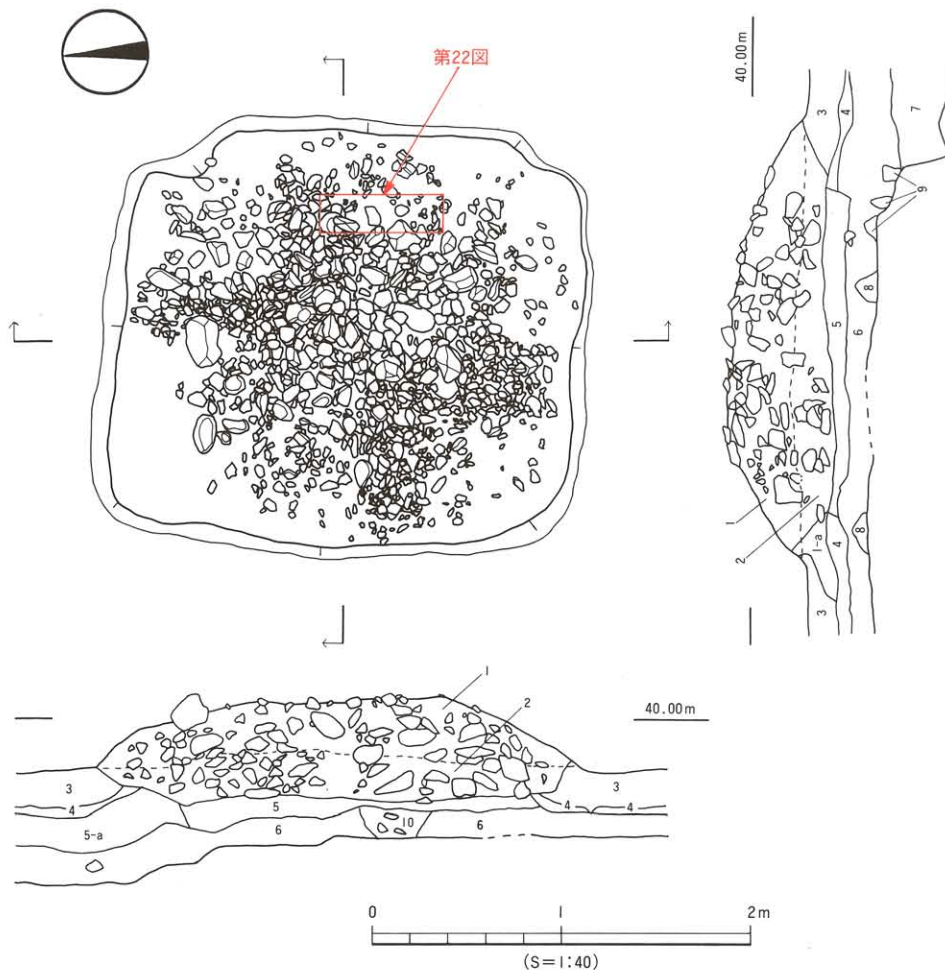
樽味高木遺跡 2次調査地

する。受部は上外方向にのびる。42は立ちあがりは内傾し端部は丸く仕上げられ、体部は受部内面下で強く屈曲し、受部は上外方向にのびる。43は立ちあがり内傾し、受部は外方向に伸び、体部は受部内面で緩やかに屈曲する。44は外踏んばりの高台より口縁部がほぼ直線的に斜め上方向に立ち上がり、端部は丸く納められている。



第20図 A区第IV層出土遺物実測図(4)

調査の概要

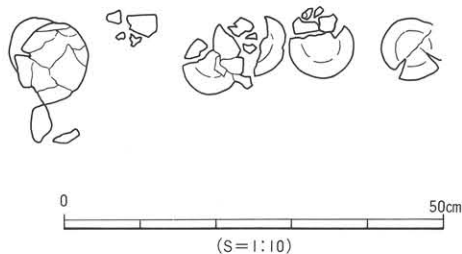


- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| 1 暗灰黄色土       | 5-a 5より灰色が強い    |
| 1-a 1に青灰色が混じる | 6 暗褐色シルト(遺物包含層) |
| 2 明灰黄色土       | 7 6に黄色シルト多含     |
| 3 耕作土         | 8 暗灰褐色土         |
| 4 床土          | 9 明黄褐色土         |
| 5 暗褐色土(灰色混じり) | 10 6よりやや明るい     |

第21図 A区1号塚測量図

1号塚 (第21・22図、図版5～7)

調査区北西部N・S1,W1,E1区に位置する。東西2.3m、南北2.6m、検出面よりの高さ0.3mを測り、軸は方墳形塚である。塚断面は1層暗灰黄色土、2層明灰黄色土の二層に分層できる。二層とも礫を積み上げているが、1層に比べ2層の方が比較的大



第22図 A区1号塚遺物出土状況

きい礫を主体に積み上げられている。土に混じった状態でなく、2層は密に積み上げられた状態である。塚内部および塚の下面において埋納施設の検出はなかった。遺物は1層より角礫製岩の五輪の塔の一部、弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦の破片が出土している。2層東側よりの約7cm～人頭大の礫上に土師皿が南北に17枚積み重なった状態で出土している(第22図)。塚東裾部から寛永通寶が1枚出土している(第23図)。1層段階で祭祀を行い、2層に於いてはその後マウンドしたと考えられる。

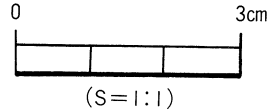
出土遺物(第23～26図、図版18・19)

寛永通寶(第23図)は鉄銭で、直径2.2cmを測る。初鑄年は1774年(安永3年)である。

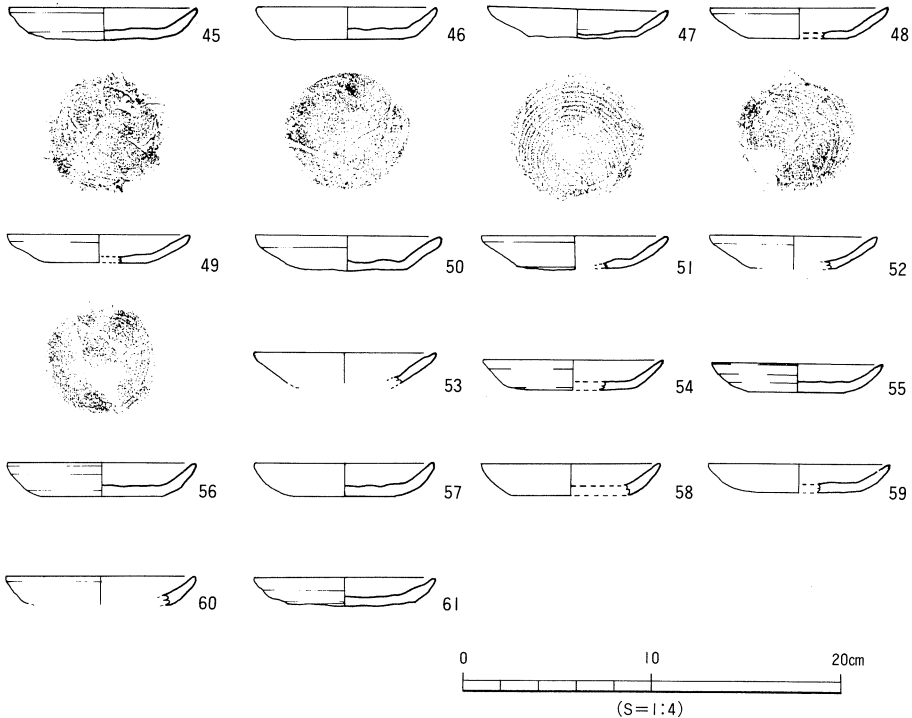
土師皿(45～61)底部はいずれも回転糸切り離し技法である。45・55～60は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が尖り気味である。46・54は直線的に外方向に開き、口縁端部が尖る。47～53は外方向に大きく開き、口縁部が膨らみ気味である。

器台形土器(62)瓦質である。側面がハの字状の脚部より、受部が平らな面をなし、端面にS字状の模様が施されている。

陶器(63)唐津焼の碗である。高台の接地面を除いて内外面



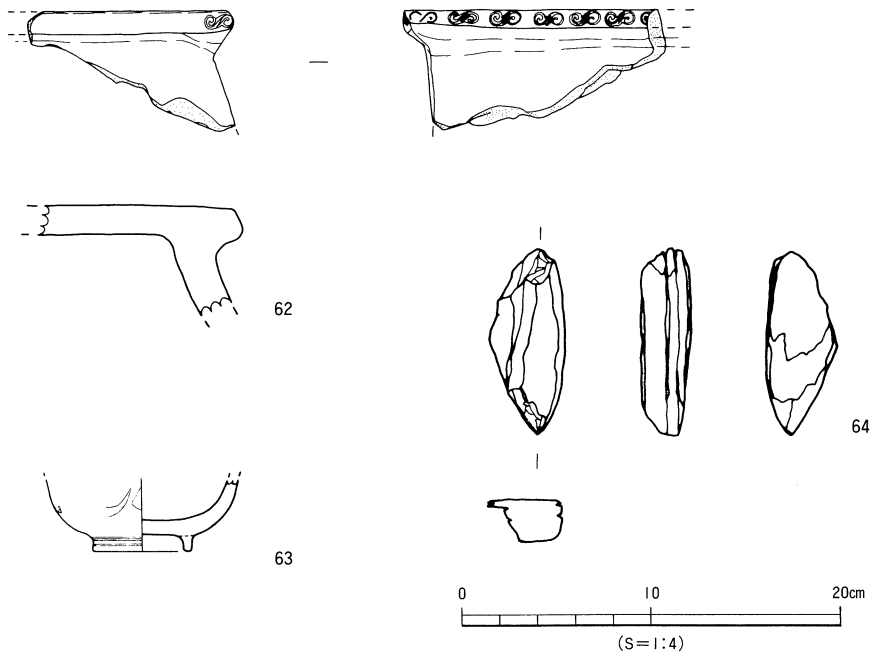
第23図 A区1号塚出土遺物拓本



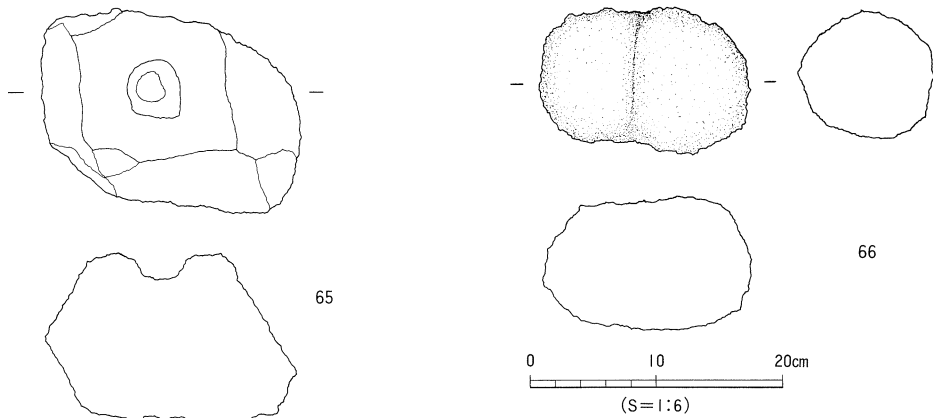
第24図 A区1号塚出土遺物実測図(1)



調査の概要



第25図 A区1号塚出土遺物実測図(2)



第26図 A区1号塚出土遺物実測図(3)

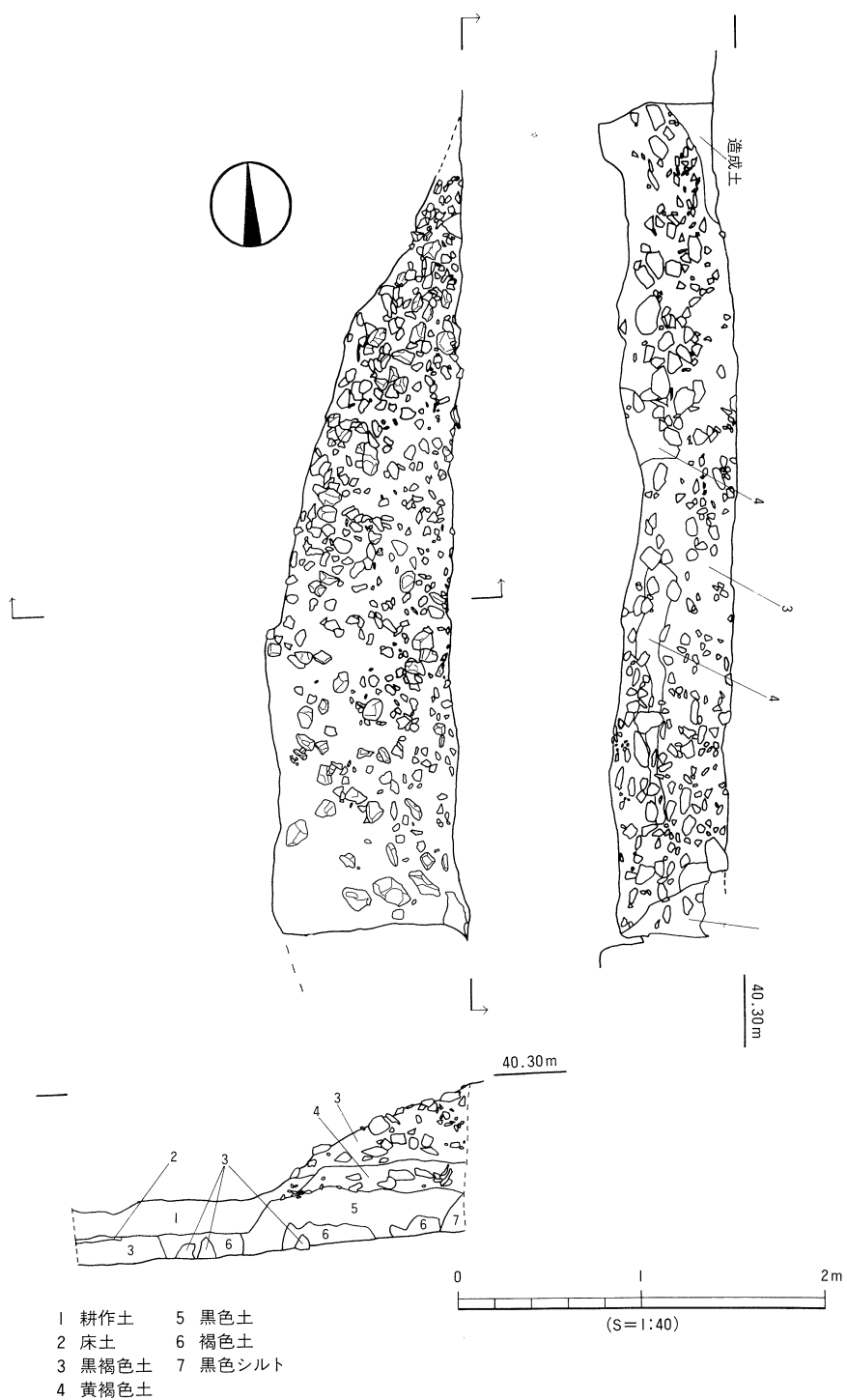
に施釉が見られる。

石64は磨製石斧である。65は火輪部であり、中央部のみの残存である。66は空輪部であり、表面が摩滅している。

2号塚(第27図、図版8・9)

調査区東端に位置する。塚東側を道路、南側をコンクリートにより削平されている。遺存状況より推定直径約5mの円形塚が考えられる。検出面よりの高さ0.55mを測り、1号塚と同様に2層に分層でき約3~17cmの円礫が下層の方が密に積まれている。塚の形状と同様に

樽味高木遺跡 2次調査地



第27図 A区2号塚測量図

調査の概要

高さ0.17mのマウンドが造られている。礫に混じりマウンド内より弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、下層より勾玉、磨製石斧が出土している。

出土遺物（第28・29図、図版20）

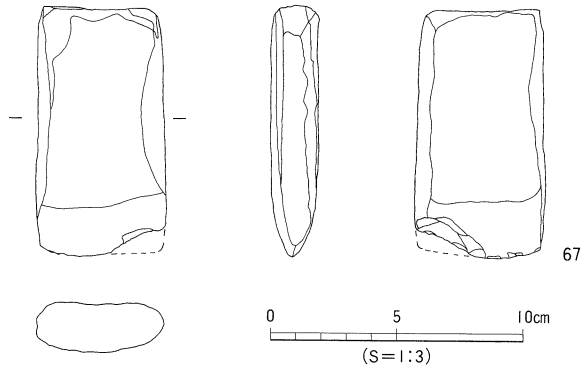
石斧（67）扁平片刃磨製石斧で、長方形を呈し、全体が丁寧な研磨で仕上げられている。

勾玉（68）硬玉製勾玉で、「C」形を呈し、厚手である。穿孔はすべて回転穿孔により1孔が穿たれ、研磨は表裏及び周縁とも施されている。

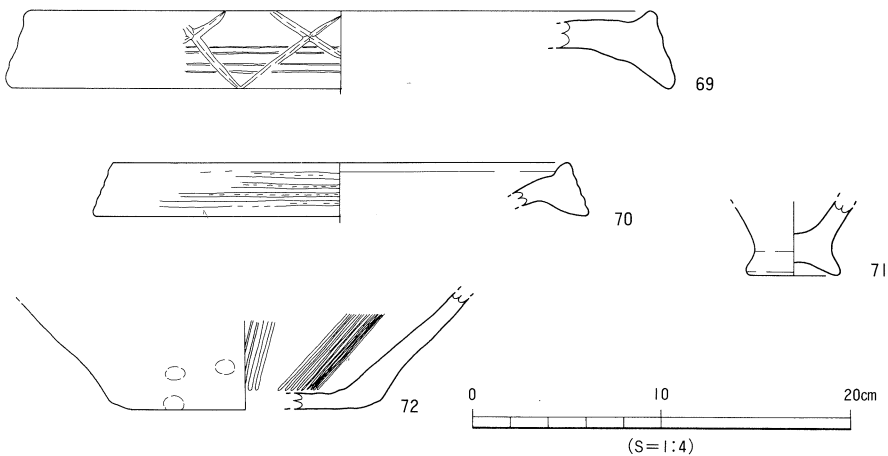
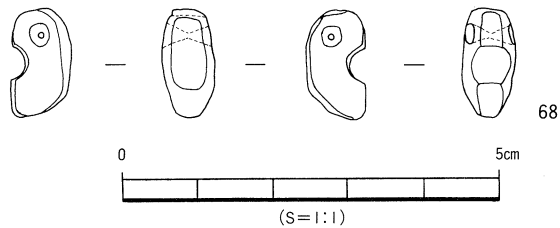
壺形土器（69・70）69・70ともに口縁端部が上下方向に拡張しており、69は拡張部に斜格子の刻みを施している。70は拡張部に4条の凹線文を施す。

甕形土器（71）上げ底で突出部を持つ底部である。

鉢形土器（72）備前焼である。平底の底部より、外反気味に立ち上がる。9条の放射状の櫛描き条線が施されている。



第28図 A区2号塚出土遺物実測図(1)

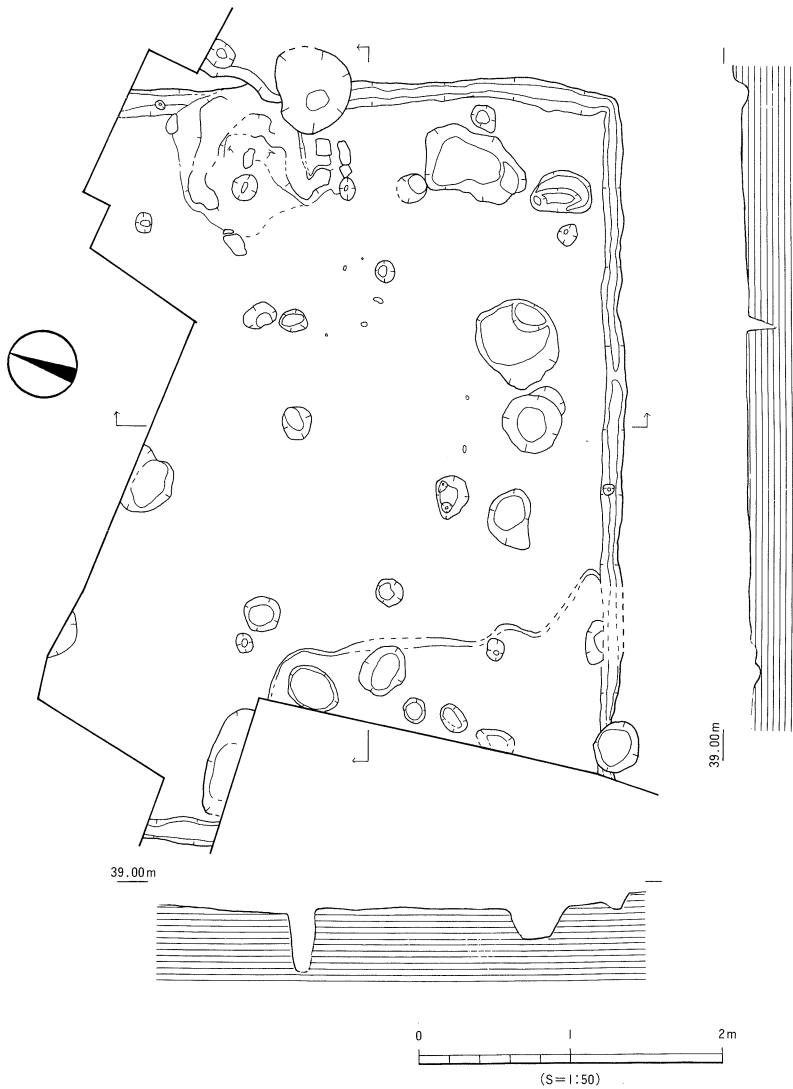


第29図 A区2号塚出土遺物実測図(2)

B 区

SB1 (第30・31図、図版11)

調査区中央N・S1、W・E1区に位置する。規模は東西5m×南北3.3m以上で壁高は6cmを測り、幅12cm、深さ3cmの壁体溝が残る。平面形は方形を呈しており、SB2・3を切っている。住居址内東壁中央付近に東西0.9m×南北1.1m、高さ約20cmの馬蹄型の作り付けカマドを検出した。残存状況より煙道が壁外に出ない構造であるが、煙道部が削平された可能性もある。床面より数基のピットが検出されたが住居址に伴うものかは判断しがたい。カマド



第30図 B区SB1測量図

調査の概要

内より土師器の甕・高坏・須恵器の坏身片が出土した。

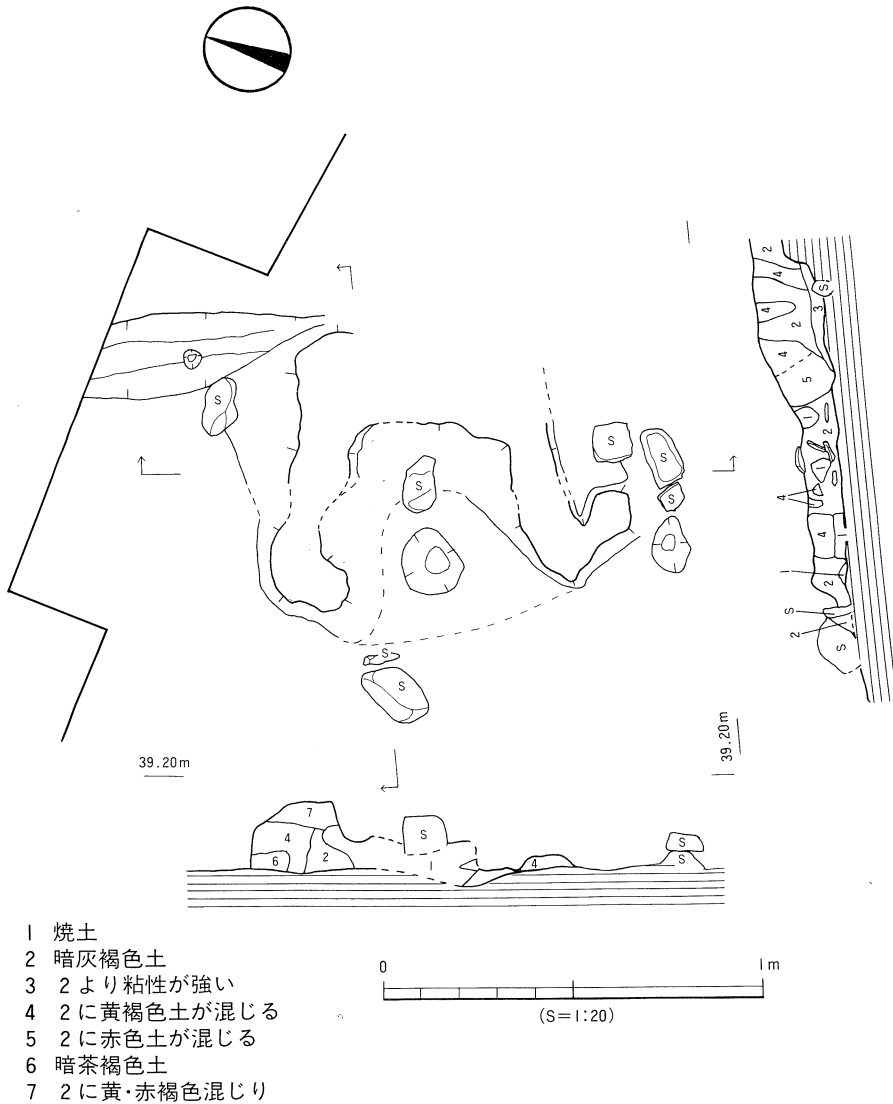
出土遺物（第32図、図版20）

甕形土器（73・74）73・74ともに張りの弱い胴部より、「く」の字形の頸部を呈しており、口縁部が内湾気味に立ち上がり、端面は平らな面をなす。

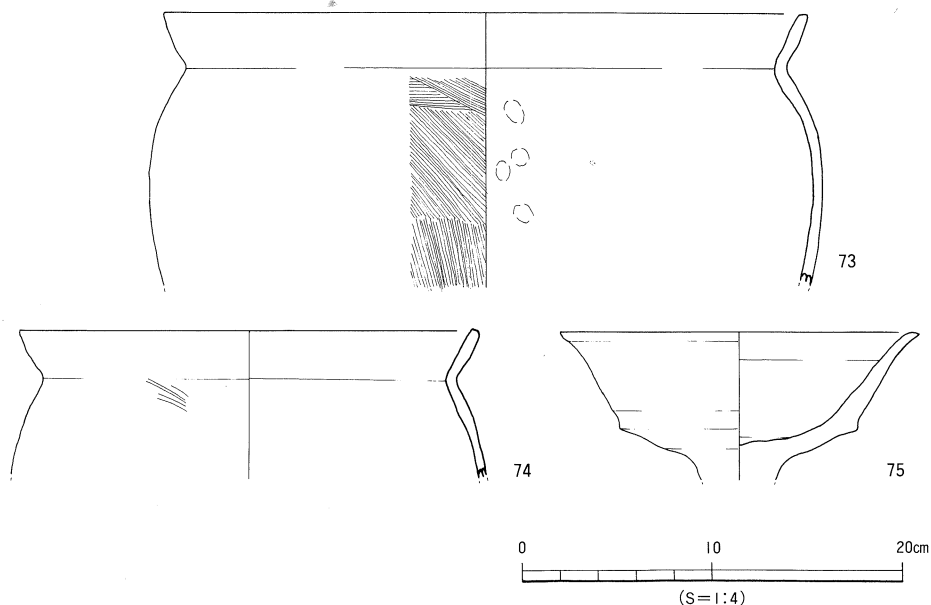
高坏形土器（75）口縁部が外反する。

**S B 2**

調査区東側N・S1, E1・2区に位置する。規模は直径8m、壁高は0.1mを測り、幅0.2



第31図 B区S B 1カマド測量図



第32図 B区SB1出土遺物実測図

m、深さ3cmの壁体溝を検出した。平面形は円形を呈しており、SB1に切られている。床面より数基のピットが検出されたが住居址に伴うものかは判断しがたい。遺物は甕、壁体溝より有柄磨製石鏃が出土しているだけで土器類は殆ど出土していない。

出土遺物（第33、図版20）

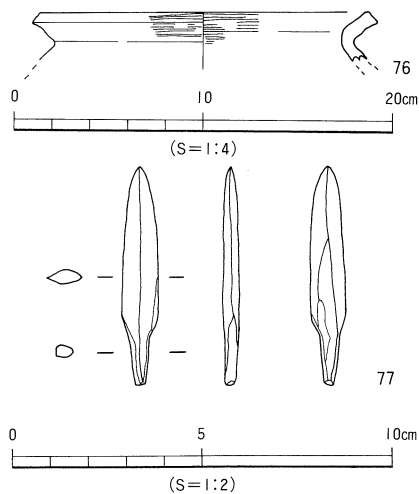
76は弥生式土器の甕の口縁部片である。「く」の字状の口縁部の端部は平らな面をなし刷毛状工具による4条の浅い凹線を施す。

77は有柄磨製石鏃である。

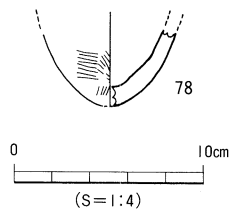
SB3（第35図、図版11）

調査区西側N・S1,W1・2区に位置する。規模は東西3.3m以上×南北3.5mで壁高は10cmを測り、幅20cmの壁体溝が残る。床面より柱穴を6基検出したが、本住居址に伴うものか判断し兼ねた。西側をSD1に切られ、弥生土器の細片のみが出土しただけである。

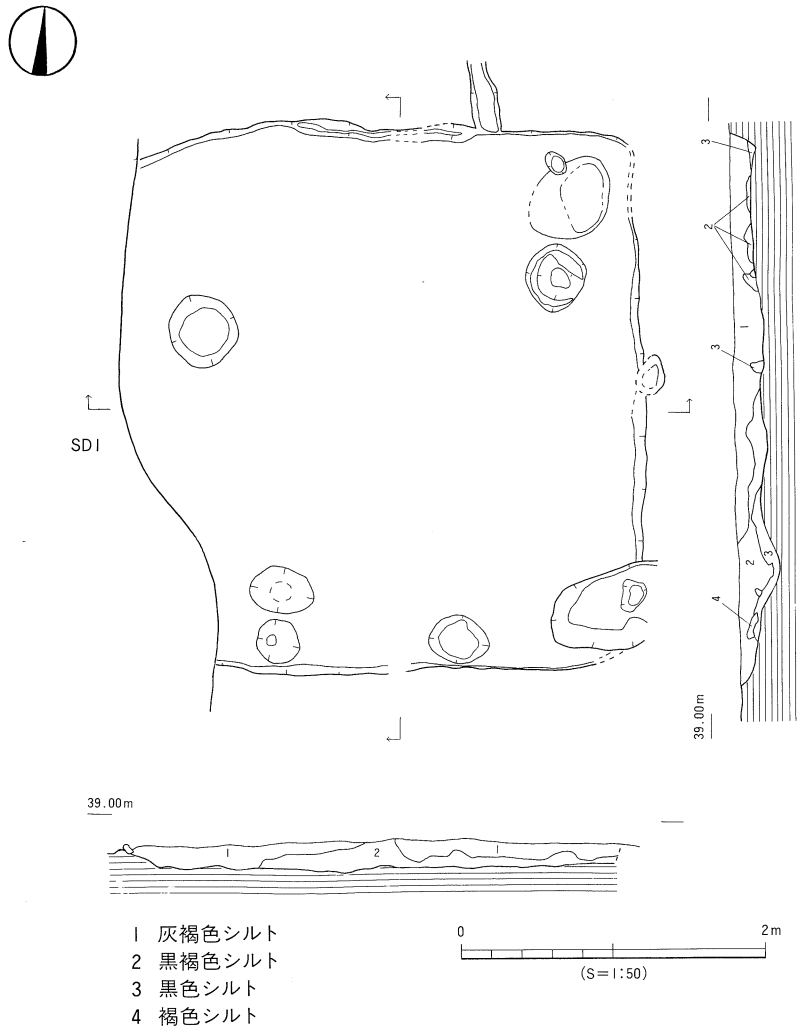
出土遺物（第34図）



第33図 B区SB2出土遺物実測図



第34図 B区SB3出土遺物実測図



第35図 B区SB3測量図

78は甕である。僅かに残る底部より内湾気味に立ち上がる。外面胴部に叩きが施されている。

**SD1**

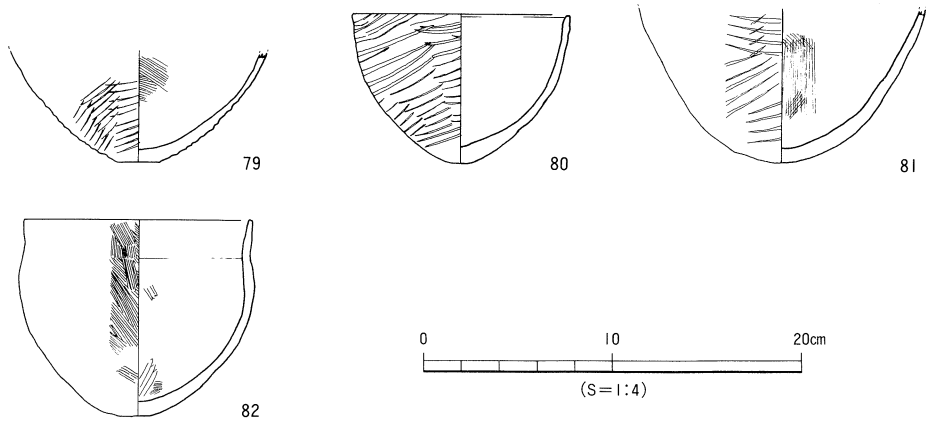
調査区西端N・S1,W2区に位置し、SB3を切っている。幅0.8m~1.5m、深さ0.21m、南北に長さ4.2m分を検出した。断面は「U字状」を呈しており、北から南に緩傾斜（比較差9cm）をなす。覆土は灰色土に黒褐色土混じりである。出土遺物はない。

**SP119** (第8図)

SB3の南側S2W2区、南壁より検出した。規模は東西0.9m×南北0.35m以上、深さ0.44mを測る。平面形は楕円形を呈しており、覆土は砂質土の混じった黒褐色シルトである。出土遺物は小型の鉢形土器が出土している。

出土遺物 (第36図、図版21)

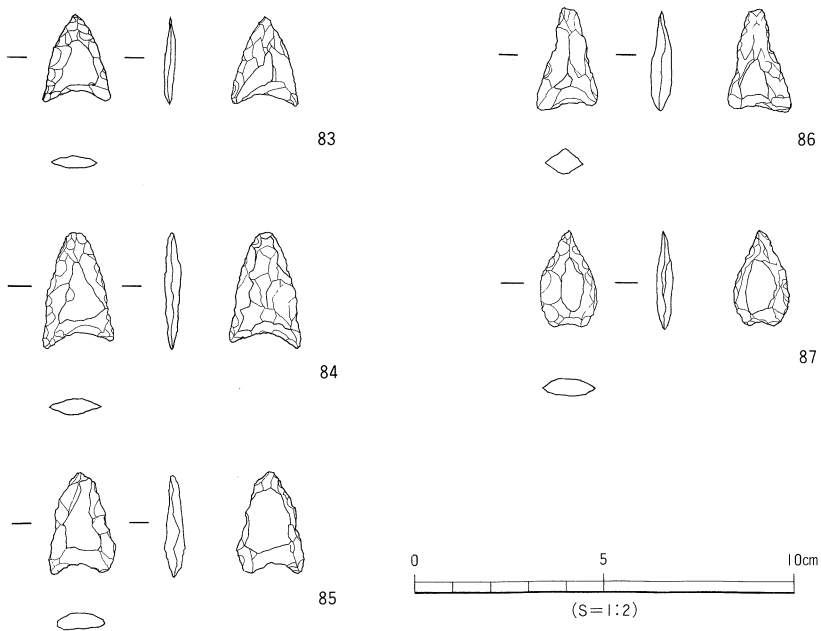
鉢形土器 (79~82) 79・80は僅かに残る底部より内湾気味に立ち上がる。81は丸底の底部より内湾気味に立ち上がる。82は丸底の底部で胴部は内湾しており、口縁部は上方向にのびる。



第36図 B区S P 119出土遺物実測図

第IV層出土遺物 (第37・38図、図版21)

石鏃 (83~87) 83~87はサヌカイト製の打製石鏃であり83~86は凹基式三角形石鏃である。87は凹基式葉型石鏃である。



第37図 B区第IV層出土遺物実測図 (1)



調査の概要

土製紡錘車 (88) 円盤状で中央に円孔1孔が穿たれている。

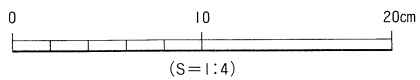
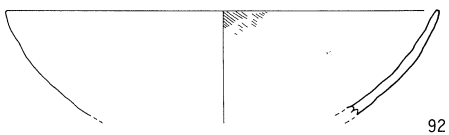
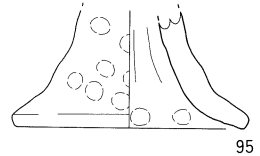
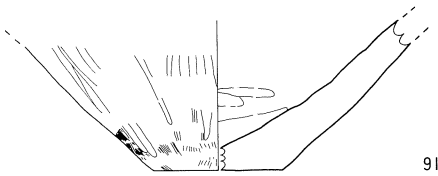
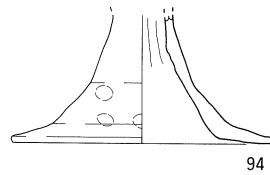
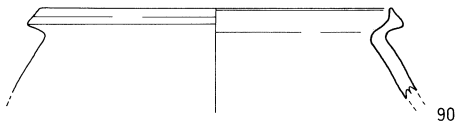
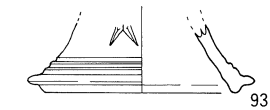
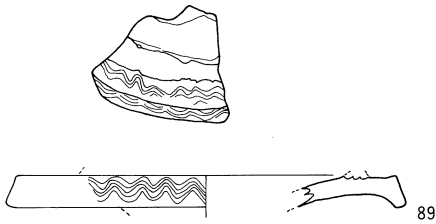
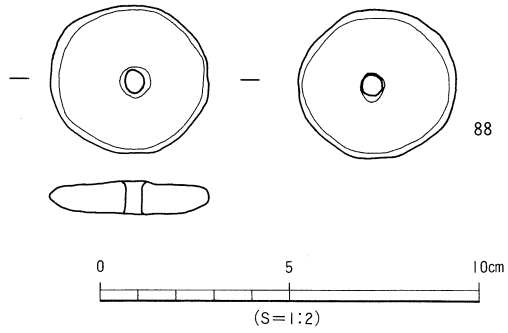
壺形土器 (89) ラップ状の口縁部より口縁端部が下方方向に拡張されており、拡張部および口縁内面に波状文を施している。口縁内面に貼り付け凸帯の痕が残る。

甕形土器 (90・91) 90は口縁端部をつまみ上げる。91は平底で内湾気味に立ち上げる。

鉢形土器 (92) 内湾しており、口縁端部が平らな面をなす。

高坏形土器 (93・94) 93は矢羽根状透しを有する凹線文期の典型的な高坏の脚部である。94は裾部が大きく開き、内面の柱裾部境に稜をもつ。

支脚形土器 (95) ラップ状に開く脚部である。



第38図 B区第IV層出土遺物実測図(2)

## 拾 遺

A 地区の塚 2 基については、不明な点が多い。構築時期としては、1 号塚から出土した土師器小皿が決め手になる。ただし、松山平野の近世土師器については編年研究がなされていないため断定はできないものの、岡山市教育委員会によって調査された江戸時代の足守陣屋跡（足守小）遺跡から出土した土師器小皿と酷似している（註1）ことから、1 号塚は、この遺跡の年代から、18 世紀後半に構築された塚と考えられる。2 基の塚については墳形の違いはあるが、埋土状況から同時期の塚と考えられる。

調査中並びに調査後、A 地区の塚について聞き取り調査などを行った。塚について明確な伝承は不明であるが、貴重な手掛かりになるかも知れないため、ここに記しておく。

### 1. 塚にまつわる伝承

旧土地所有者から聞き取りを行い、遺跡周辺の字名は「高木」であり、A 区は通称「お塚田」、B 区は「かぎ田」と呼ばれ、A 区は七畝、B 区は 1 反 1 畝ある。A 区の塚の謂れは、御主人が亡くなっているため詳細は不明であった。

方形の塚（1 号塚）上には、以前、五輪塔があったが、いつ頃か壊されてしまったらしいとのことである。正月やお盆には、必ず地主がお祀りしていたとのことである。

以前の塚は、もう少し小さかったが、耕作や草などで現状の大きさになったとのことである。

A 区の南側隣接地所有者によると、方形の塚（1 号塚）は、昔の死者を葬っている墓であると伝え聞いているとのことである。

以前、調査地周辺には多数の塚があり千人塚と呼ばれていたが、全て耕地のために整地され現存するのは A 区の塚 2 基だけである。

円形の塚（2 号）は東半分が市道で隠れていたが、調査後、この市道下に水道管理設工事を行うため掘削することになった。工事中、松山市教育委員会によって立会調査が実施された結果、市道下、2 号塚の東半分は以前の道路工事によるためか何も検出されなかったことが判明している。

### 2. 周辺の信仰対象など

周辺の信仰対象物などについてここに記しておく。

調査地の西約 100m に、素鷲神社及び真言宗豊山派萬防山得能寺があり、調査区の北東約 500m には竈神社がある。調査区東約 150m には共同墓地がある。

得能寺は、真義真言宗の寺で千手観音を本尊として祀り、境内には無水庵と呼ばれる本堂が今も残っている。明治・大正時代には松山の三十三観音の一つとして参拝者が多く賑った

## 調査の概要

ようである。現在は荒れ、この本堂がいつ建立されたかは不明である。境内の墓地の中で墓標の紀年は文化・安政しか読み取れなかった。

素鷲神社は、たけはやすきのおのかみ建速須蓋鳴神が祭られており、桑原八幡神社の末社である。由緒沿革は未詳である。本殿裏には、三つの社がある。中央の社は、方形状の石壇上に祭られている。左の社下には、五輪塔の空・風輪1個が無造作に置かれていた。この空・風輪は長さ約20cm、幅約10～13cmを測り、一石で造られており江戸時代以後と考えられる。また、境内には、天保六年（1835）の奉燈が建てられており、また、伝説のある月の出石があり、かつては水商売の人達で賑わったとのことである。

竈神社は、かまどの神である奥津日子命・奥津比売命の二神が祭られている。この竈神社は、沢田神社、奈良原神社、須賀神社及び竈神社の四社を合祀したものである。いつ建てられたかは不明。

共同墓地内の墓標について、享保二年（1717）、享保十九寅年（1734）元文四末年（1739）、寛保三年（1743）、安永四年（1775）寛政元年（1789）、文化二年（1805）、文化三年（1806）、文政二年（1819）、文政三年辰年（1820）、文政五年（1822）、文政七年（1824）、文政九年（1826）、文政十二年（1829）、天保九年（1838）、天保十二年（1841）、嘉永四年（1851）、安政六末年（1859）、慶應二寅年（1866）などの紀年名が読み取れた。

中世の河野家と関連する神社としては、東野に河野九朗通賢を主祭神にした東山神社があり、この境内には松山藩主の松平定行公の霊を祭った勝山神社もある。また、松末町に松末美濃守通為を主祭神にした松末神社もある。

### 3. 松山藩内の歴史的事例

1号塚の構築時期は、前述の様に18世紀後半に構築されたと考えられる。構築目的がはっきりしないため、18世紀に松山藩内で発生した干ばつ・飢饉・風水害などの主な事例を列記してみることにする（註2）。

- 元禄十五年（1702） 7月28日、大風あり、家崩壊2400戸、城内松300本折る
- 宝永元年（1704） 8月23日、大風により、松山領内で1300軒家崩壊
- 宝永四年（1707） 10月4日、地震あり、温泉145日とまる、湯祈禱の一番古い記述
- 享保二年（1717）、伊予豆彦神社（椿森）災上
- 享保五年（1720） 10月25日、藩主、定直没す、61才
- 享保六年（1721）閏7月15日、石手川決壊、死者72人
- 享保七年（1722） 6月23日、松山暴風雨、被害甚大、死者88人
- 享保八年（1723） 5月15日、大川文蔵を採用し、石手川改修
- 享保十四年（1729） 8～9月、伊予各地に暴風雨、水害発生
- 享保十七年（1732） 6月、長雨降り続き、各地の稲にうんか発生

樽味高木遺跡2次調査地

- 6月15日、<sup>\*</sup>うんか、稲につき、稲枯れ、堀江村餓死人七月より翌三月まで400人  
7月7日、収穫皆無、米麦価暴騰  
松山餓死者凡3489人、牛馬3907疋
- 享保十七年(1732) 9月22日、義農作兵衛死す  
享保十八年(1733) 1月、松山藩、飢饉による餓死者の慰霊祭を執行  
5月20日、藩主、定英没す、38才  
12月5日、松山騒動、山内興右エ門切腹す
- 元文四年(1739) 8月5日、松山領大風雨  
寛保元年(1741) 8月15日、久万山騒動にて家老奥平久兵衛、失脚す  
延享元年(1744) 8月7日、松山藩、大風雨  
宝暦五年(1755) 8月24日、松山藩、大風  
宝暦六年(1756) 4月22日、松山藩、重信川を改修  
宝暦十三年(1763) 3月18日、藩主、定喬没す、48才  
明和二年(1765) 2月11日、藩主、定功没す、33才  
明和七年(1770) 夏、松山地区に干ばつの被害甚大  
6月、干ばつのため、味酒社において雨乞い踊り挙行  
12月26日、新立から鉄砲町まで士家290戸、商家650戸を焼く大火事あった。
- 安永八年(1779) 7月14日、藩主、定静没す、51才  
天明三年(1783) 8月11日、松山領に大洪水  
天明四年(1784) 1月1日、落雷で天守閣焼失す、6月29日に幕府から再建許可がきた。  
閏1月7日、河原町より出火、百軒余焼失  
12月17日、竹之鼻町より出火、百軒余焼失
- 天明五年(1785) 11月2日、暴風雨あり、八股の榎倒れ、新樹を植えた  
寛政二年(1790) 7月、松山領、干ばつ被害七万四千五百余石  
寛政四年(1792) 夏、大風雨、洪水、田畑損毛高五万二千六百余石  
寛政十一年(1799) 7月、干ばつによる被害、松山領損毛六万七千余石

## 4. 小 結

今回の調査により、(1)弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての生活関連遺構と遺物  
(2)近世の塚を検出した。

(1)弥生時代は前期の遺物が破片であるが僅かに包含層より出土している。遺構は確実に弥生時代に時期比定できるものはA区S B 1で、中期後葉～後期初頭である。B区S B 2は時期決定する資料が乏しく、弥生時代後期の遺物が1点確認されたにすぎない。古墳時代はB区S B 3も細片のみの出土であり、古墳時代初頭の遺物が1点出土しただけで時期決定の資料に乏しい。古墳時代中期になると、前半にA区S B 3、後半にA区S B 2が確認され、後期前半にB区S B 1を検出した。A区S B 1の無頸壺は施文より東九州の様相が窺える。また、B区S B 2周辺より多数のチップに混じり5点の石鏃が出土していることより、石器制作が行われていたことが考えられる。概観すると平面形は四角形プランが5棟、円形プランが1棟検出された。内3棟は壁体溝を検出したが、支柱穴は未検出である。A区S B 2とSK 3の切り合い関係を検索したが、判断できなかった。B区S P 119より古墳時代初頭の一括遺物が出土した。

このことより、高木1次調査地において検出された古墳時代中期頃の集落の広がりが当地域にもみられる。

(2)塚2基の構築目的にはいろいろなことが観察される。まず、塚上から出土した五輪塔の破片から、真言宗による塚であると考えられる。

次に、墓の痕跡は2基とも無く、護摩壇の痕跡も無かった。1号塚の東側から土師器小皿が重なって出土したことは、何がしかの祭祀を「西向き」に行った痕跡と解することができる。これは、浄土思想（西法浄土）に基づく祭祀ではないだろうか。護摩壇の痕跡が無いことから修法壇の可能性が考えられる。土師器小皿を並べ、修法を行ったのであろう。修法の後にマウンドして、その痕跡を封じ込めている。なぜ封じ込めたのか。

修法の目的としてはいろいろ考えられる。まず、何がしかの供養または祈願ではないかということである。内容は不明であるが、18世紀後半には前列記の如く藩主が相次いで死去しており、また、天明の飢饉または干ばつがあったことも考慮する出来事であろう。

次に、周辺に多数の塚が存在していたことは、農村共同体における日常的祭祀行為かも知れない点が挙げられる。春・秋の彼岸に伴うものかも知れない。

塚のマウンド内から多数の礫を出土している。出土した礫には円礫や方形礫もあり、形は様々で、大きさは30cm大のものが大半を占めている。一般的にこの2基の塚は「積石塚」（註3）と呼ばれるものであるが、出土した礫の様相などから新しく「礫積塚」と呼称したい。この礫積塚については、今後の資料増加を待ちたい。

塚については、新名称「礫積塚」も含めて立正大学の坂詰秀一先生から多大のご指導を頂いたことに感謝いたします。

## 樽味高木遺跡 2次調査地

### 〔註〕

1. 平成4年3月、備前焼について岡山市教育委員会へ指導を仰ぎに行った際、足守陣屋跡遺跡出土の土師器小皿を実見した。
2. 列記するにあたり、『松山市史料集第13巻一年表・近世八・近現代五一』を参照にした。
3. 積石塚については、『日本考古学辞典』18版、東京堂出版、1964においては、次のような記述がなされている。「土壌をもって棺槨を覆い墳丘を作る代わりに、礫石を積み上げたものを積石塚という」。しかし、今回調査した塚の性格を考える上では、むしろ同辞典の「十三塚」の項目が参考になるので記述する。「13基の高塚が一群をなして密在するもの。……十三塚は戦死者や殉教者を葬ったとする伝説もあるが、築造の起源については中世民間に広く行われた十三仏の信仰に結びつける説……築造に修験者が関係したといわれる。したがって十三塚には何等外部施設が施されないものが多いが、石壇か立石の類のあることもある。また内部構造は学術調査を経たものが少ないので明らかではないが、供養または法賽の遺物が存する以外、特殊な施設はないようである。……十三塚は歴史時代の民間信仰の土壇として考古学上の対象となるものであり、その基本的な調査が要望される。」

### 〔参考文献〕

- 宮本一夫 1989『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室  
1991『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 梅木謙一 1991『松山大学構内遺跡』松山大学・松山市教育委員会  
1992『桑原地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター
- 株式会社竹岡レクリエーションセンター・財団法人君津郡市文化財センター 1992『竹岡十三塚遺跡』  
木更津市・財団法人君津郡市文化財センター 1993『田蔵中塚遺跡』
- 松山市史料集編集委員会 1988『松山市史料集第13巻一年表・近世八・近現代五一』
- みんなでつくる住みよい桑原地区委員会・桑原公民館 1981『ふるさと桑原』  
みんなでつくる住みよい桑原地区委員会・桑原公民館 1987『桑原史跡めぐり』
- 愛媛県神社庁 1974『松山市内の神社』『愛媛県神社誌』
- 浅井伯源編集1980『伊豫乃古跡（中豫ノ巻）』愛媛出版協会

### 遺構・遺物一覧（河野史知）

- (1) 以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4) 多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の記号について。◎→良好、○→良、△→不良

遺 構 一 覧

表 2 竪穴式住居址一覧(A区)

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
					高床	土壇	炉	カマド		
1	弥生中期後半	隅丸方形	2.78×2.1<×0.44				○		○	SK1に切られる。
2	古墳中期後半	隅丸方形	4.0×4.0×0.1						○	SK2に切られる。
3	古墳中期前半	不明	4.0<×1.0<×0.35						○	

表 3 竪穴式住居址一覧(B区)

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
					高床	土壇	炉	カマド		
1	古墳後期前半	方形	5.0×3.3×0.06				○	○	○	SB2・3を切る
2	弥生後期	円形	直径8.0×0.1						○	SB1に切られる
3	古墳初頭	方形	東西3.3m以上×3.5×0.1							SB1,SD1に切られる

表 4 土壇一覧(A区)

土壇 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	S1E1	隅丸長方形	舟底状	1.06×0.54×0.45	暗褐色シルト	土師	SB1を切る	古墳以降
2	S3W1	不定形	皿 状	3.6×1.8×0.1	黒褐色シルト		SB2を切る	不 明
3	S3E1	不定形	皿 状	2.0×1.6×0.1	黒褐色シルト			不 明

表 5 土壇一覧(B区)

土壇 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備考	時期
1	S1E1	不定形	皿 状	1.2以上×1.2×0.07	暗灰色土	弥 生		不明
2	S1E2	不定形	皿 状	0.96×0.53以上×0.08	暗茶褐色土	弥生・土師		不明
3	S1E2	楕円形	皿 状	0.61以上×0.28以上×0.19	暗褐色土	土 師		不明
4	S1E2	楕円形	舟底状	0.51以上×0.55×0.54	暗茶褐色土	弥生		弥生中期以降
5	N1E2	楕円形	皿 状	1.12×0.53以上×0.1	暗褐色土	弥生		不明
6	N1E1	不定形	舟底状	0.62以上×0.45以上×0.16	暗褐色土	弥生		不明
7	N1E1	不定形	皿 状	0.75×0.39×0.06	暗褐色土			不明
8	S1E1	方 形	舟底状	0.44×0.33×0.36	暗褐色土			不明
9	S1W1	不定形	皿 状	0.67以上×0.6×0.15	暗褐色土	弥生		不明
10	N1E2	不定形	皿 状	1.27×0.42以上×0.14	暗褐色土			不明

樽味高木遺跡 2次調査地

表6 溝一覽(A区)

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N1・S1, E2・3	レンズ状	5.0×0.16×0.05	黒褐色シルト		SB1を切る	不明

表7 溝一覽(B区)

溝(SD)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	備考	時期
1	N1・S1・2, W2	レンズ状	4.2×0.8~1.7×0.2	灰色土	土師・須恵・瓦	SB3を切る	中世以降

表8 SB1出土遺物観察表 土製品(A区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
1	甕	口径 38.0 残存高 31.5 最大胴径 39.8	口縁端部がやや拡張され 端面は凹面をなす。	①頸部—凸帯貼り付け後、 刻み目文様を施す ②胴下—ヘラ磨き	③胴上—ヘラケズリ	石・長(1~3) ○		13
2	甕	口径 17.6 器高 21.8 底径 6.0	口頸部が「く」の字状で 上げ底の底部。	ヘラミガキ	ヘラケズリ	密 ◎		13
3	壺	口径 13.8 器高 13.2 底径 6.0	口頸部が「く」の字状で 底部は平底である。	④胴上—ヨコナデ ⑤胴下—ヘラミガキ	ナデ	密 ◎	黒斑	13
4	壺	口径 6.6 器高 9.0 底径 5.6	張りだした胴部に6条の 凸帯を貼り付けている。	ナデ ヘラミガキ	⑥胴上—ナデ ⑦胴下—ヘラケズリ	密 ○		13

表9 SB1出土遺物観察表 石製品(A区)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
5	石庖丁	1/3	緑泥片岩	6.7以上	4.0以上	0.5	22.36		13
6	石鏡	完形品	赤色頁岩	2.6	1.7	0.2	0.99		13

表10 SB2出土遺物観察表 土製品(A区)

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
7	坏蓋	口径 11.9 残存高 3.6	口縁部は内傾する明瞭な 段を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
8	甕	口径 26.0 最大胴径 28.6 残存高 16.6	口頸部が「く」の字状。 口縁端部は平らな面をな す。	摩滅の為不明	⑧胴上—ナデ	石・長(1~2) ◎		14
9	甕	口径 20.8 最大胴径 29.0 残存高 17.0	口頸部が「く」の字状。 口縁端部は平らな面をな す。	摩滅の為不明	⑨口縁—ハケ	石・長(1~2) ◎		



遺物観察表

S B 2 出土遺物観察表 土製品(A区)

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
10	甕	口径 (15.8) 残存高 5.6	「く」の字状の頸部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明			
11	小 型 丸底壺	口径 9.6 最大胴径 14.0 残存高 14.8	球状の体部に口縁部が外傾し端部が丸く納められる。	ハケ (7本/1cm)	⑧ーヘラケズリ	密 ◎		14
12	小 型 丸底壺	口径 10.0 器高 14.3 最大胴径 12.8	球状の体部に口縁部が外傾し、端部が尖り気味である。	ハケ (8本/1cm)	⑧ーハケ (6本/cm) ⑧ーヘラケズリ	密 ◎		14
13	高 環	口径 18.6 器高 13.0 底径 11.6	外反する口縁部は長く環底部は裾部が屈曲する。	摩滅の為不明	⑧下ーハケ (6本/1cm) ⑧柱ーヘラケズリ	石・長 (1~3) ◎		14
14	高 環	口径 18.4 器高 12.6 底径 11.8	外反する口縁部は長く環底部は裾部が屈曲する。	⑧上ーヨコナデ	⑧柱ーヘラケズリ ⑧上ーヨコナデ ⑧下ーハケ	石・長 (1~3) ◎		14
15	高 環	口径 18.0 残存高 4.6	外反する長い口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		
16	鉢	口径 13.6 器高 6.4 底径 5.2	平底で僅かに外傾する口縁部、口縁端部はやや細くなる。	⑧縁ーハケ ⑧下ーナデ	⑧下ー底部ーナデ	石・長 (1) ◎		14

表11 S B 3 出土遺物観察表 石製品(A区)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	石庖丁	1/3	緑泥片岩	11.4	10.2	1.5	29.91		14

表12 S B 3 出土遺物観察表 土製品(A区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
18	蓋 環	口径 (13.0) 残存高 3.9	垂下する口縁端部は凹面を有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		

表13 第IV層出土遺物観察表 石製品(A区)

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				外径(cm)	外径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
19	白 玉	4/5	ガラス	0.5	0.2	0.4	0.1		15

## 樽味高木遺跡 2次調査地

表14 第IV層出土遺物観察表 土製品(A区)

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面			
20	壺	残存高 3.0	胴上部に無軸の本葉文。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~2) ○		15
21	壺	口径 (32.0) 残存高 4.2	口縁端部を上下に拡張し、6条の凹線文上に棒状浮文を貼る。	ハケ(8本/1cm) ナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) ◎		15
22	壺	口径 (30.4) 残存高 3.7	口縁端部を上下に拡張し、3条の凹線を施す。	ヘラミカギ ナデ	ケズリ	石・長(1~3) ◎		15
23	壺	口径 (25.2) 残存高 4.1	口縁端部を上下に拡張し、4条の凹線文上に刻み目を施す。	ナデ	ヨコナデ	石・長(1~2) ◎		
24	壺	残存高 5.4	頸部に凸帯を1条貼り巡らせている。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~3) ◎		15
25	甕	口径 (15.4) 残存高 5.7	外反する頸部より更に口縁部が外反する。	㊦—ナデ ㊧上—タタキ(右上り)	㊦—ハケ(7本/1cm)	石・長(1~3) ◎		15
26	甕	口径 (20.0) 残存高 3.8	「く」の字状の頸部より口縁端部がやや外反し、平らな面をなす。	㊦—ヨコナデ ㊦上—ハケ(5本/1cm)	㊦—ヨコナデ ハケ(4本/1cm) ㊦—ヘラケズリ	石・長(1~3) ◎		
27	甕	口径 (25.0) 残存高 5.4	「く」の字状の頸部より口縁上部を直立気味に立ち上げる。	㊦—ヨコナデ ㊦上—ハケ(10本/1cm)	摩滅の為不明	石・長(1) ◎		15
28	甕	口径 16.0 器高 25.6 最大胴径 23.4	「く」の字状の頸部より、口縁部が内湾気味に立ち上がる。	㊦—ヨコナデ ㊦上—ナデ ㊦下—ハケ(6本/1cm)	㊦—ヨコナデ ㊦—ナデ	密 ◎		15
29	甕 (底部)	底径 7.8 残存高 3.2	上げ底の張り出された底部である。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~5) ○		15
30	高坏	底径 10.0 残存高 11.5	坏底部は裾部が屈曲する。充填法。	摩滅の為不明	㊦柱—ヘラケズリ	密 ◎		15
31	椀	口径 (13.3) 残存高 4.5	内湾する胴部より口縁端部が外反する。	摩滅の為不明	ナデ	密 ◎		
32	椀	口径 (11.4) 底径 6.0 残存高 4.0	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	密 ◎		15
33	甗	口径 27.4 器高 28.2 底径 8.0	底部中央に大振りの円孔、その周りに4孔の小振りの楕円孔。	ハケ(5本/1cm)	ハケ(6本/1cm)	石・長(1~3) ○		16
34	甗	口径 25.0 器高 18.0 底径 9.0	底部中央に大振りの円孔、その周りに4孔の小振りの楕円孔。	ハケ(6本/1cm)	ナデ	石・長(1~3) ◎		16
35	甕	口径 20.0 残存高 6.1	口縁部は大きく外反し端部は上下に拡張する。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		17
36	甕	口径 22.0 残存高 6.8	口縁部は大きく外反し端部は上下に拡張する。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		17

遺物観察表

第IV層出土遺物観察表 土製品(A区)

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
37	壺	口径 (15.0) 残存高 4.6	口縁部は外反し、端部はやや拡張する。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
38	高坏	口径 12.4 残存高 6.3	口縁部は外反し、体部には波状文を施す。脚部に透かし有り。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		17
39	蓋坏	基部径(12.0) 残存高 4.0	垂下する口縁部、口縁端部は外反して段をなす。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		17
40	蓋坏	口径 (11.9) 残存高 3.4	垂下する口縁部、口縁端部は丸くおさめられる。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
41	坏身	口径 10.4 残存高 4.2	直線的に内傾する立ち上がり。端部は段を有し内傾、受部は上方向。	㊦-ヨコナテ ㊧-2/3回転ヘラケズリ	ヨコナテ	密 ◎		17
42	坏身	口径 11.1 残存高 4.7	直線的に内傾する立ち上がり、端部は丸く、受部は外方向。	㊦-ヨコナテ ㊧-1/2回転ヘラケズリ	ヨコナテ	密 ◎		17
43	坏身	口径 10.9 残存高 5.2	内傾する立ち上がり、受部は外方向。	㊦-ヨコナテ ㊧-1/2回転ヘラケズリ	ヨコナテ	密 ◎		17
44	坏身	口径 15.0 器高 4.9 底径 11.0	体部と底部の境は稜をなす。高台はハの字状に開き、平坦面で接地。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		17

表15 1号塚出土遺物観察表 土製品(A区)

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
45	皿	口径 9.6 器高 1.5 底径 6.0	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
46	皿	口径 9.6 器高 1.7 底径 7.2	直線的に外方向に開き口縁端部が尖る。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
47	皿	口径 (9.8) 器高 1.8 底径 (6.0)	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
48	皿	口径 (9.4) 器高 1.6 底径 (5.2)	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
49	皿	口径 9.6 器高 1.5 底径 6.2	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
50	皿	口径 9.8 器高 1.9 底径 5.5	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18
51	皿	口径 (9.8) 器高 1.6 底径 (5.8)	外方向に大きく開く。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		18

樽味高木遺跡 2 次調査地

1 号塚出土遺物観察表 土製品 (A 区)

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
52	皿	口径 (9.8) 残存高 1.8	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
53	皿	口径 9.6 残存高 1.5	外方向に大きく開き口縁部が膨らみ気味。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
54	皿	口径 (9.0) 器高 1.5	直線的に外方向に開き口縁端部が尖る。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
55	皿	口径 (9.6) 器高 1.6 底径 (6.6)	内湾気味に立ち上がり口縁端が尖る。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
56	皿	口径 10.0 器高 1.6 底径 7.8	胴部が屈曲する。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
57	皿	口径 9.6 器高 1.7 底径 7.2	内湾気味に立ち上がり口縁端が尖る。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
58	皿	口径 (9.6) 残存高 1.7	内湾気味に立ち上がり口縁端が尖る。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
59	皿	口径 (9.6) 器高 1.5 底径 (6.4)	内湾気味に立ち上がり口縁端が尖る。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
60	皿	口径 (9.9) 残存高 1.5	内湾気味に立ち上がり口縁端が尖る。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		
61	皿	口径 9.5 器高 1.5 底径 6.9	内面胴下部が肥厚気味である。	ヨコナテ 底部回転糸切り	ヨコナテ	密 ◎		
62	器台	残存高 6.5	「ハ」の字状脚部より受部が平らな面をなす。	ナテ	ナテ	密 ○		19
63	碗 (唐津)	底径 3.8 残存高 5.2 高台高 0.9	高台が下方向にのびる。	施釉の為不明	施釉の為不明	密 ◎		19

表16 1 号塚出土遺物観察表 石製品 (A 区)

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
64	磨製石斧	1/2	緑泥片岩	9.7以上	2.3以上	3.7以上	112.53		19
65	五輪塔(火輪部)	3/5	角礫岩	19.9	14.9	11.1	4.0kg		19
66	五輪塔(空輪部)	ほぼ完形	角礫岩	16.2	10.1	10.0	2.0kg		19

遺物観察表

表17 2号塚出土遺物観察表 石製品(A区)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
67	扁平片刃磨製石斧	9/10	緑泥片岩	9.9	4.6	2.0	203.72		20
68	勾玉	完形	硬玉	1.5	0.8	0.7	1.4		20

表18 2号塚出土遺物観察表 土製品(A区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
69	壺	口径 (32.6) 残存高 4.1	口縁端部が上下方向に拡張される。	(口縁)ーヨコナテ	摩滅の為不明	石・長(1~3) ◎		20
70	壺	口径 (23.6) 残存高 2.3	拡張部に4条の凹線文。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~3) ◎		
71	甕	底径 (4.9) 残存高 4.0	上げ底の突出部を持つ底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~3) ○		
72	摺鉢 (備前)	底径 12.0 残存高 6.0	放射線状に9条の櫛条痕。	ナテ	ヨコナテ	密 ◎		20

表19 SB1出土遺物観察表 土製品(B区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
73	甕	口径 (34.0) 残存高 14.0 最大胴径(35.6)	張りの弱い胴部より、頸部が「く」の字状を呈する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	長・石(1~3) ○		20
74	甕	口径 (24.2) 残存高 7.5	「く」の字状の頸部をもつ。	肩部にハケ(5本/1cm)	ナテ	石・長(1~2) ○		
75	高坏	口径 19.0 残存高 7.8	外反する口縁部は長く坏底部は裾部が屈曲する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	密 ◎		20

表20 SB2出土遺物観察表 土製品(B区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
76	甕	口径 (17.3) 残存高 3.0	「く」の字状の頸部より、口縁端部が平らな面をなす。	ヨコナテ	ヨコナテ	密 ◎		20

樽味高木遺跡 2次調査地

表21 SB2出土遺物観察表 石製品(B区)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
77	有柄磨製石鏃	完形	緑泥片岩	5.7	0.95	0.41	2.91		20

表22 SB3出土遺物観察表 土製品(B区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
78	甕	底径 0.8 残存高 4.0	僅かに残る底部より、内湾気味に立ち上がる。	ハケ(8本/1cm)	ナデ	石・長(1~3) ◎		

表23 SP119出土遺物観察表 土製品(B区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面			
79	鉢	底径 1.8 残存高 5.2	僅かに残る底部より内湾気味に立ち上がる。	タタキ(11本/5cm)	ハケ(7本/1cm)	密 ◎		
80	鉢	底径 1.1 残存高 7.9	僅かに残る底部より内湾気味に立ち上がる。	タタキ(10本/5cm)	ナデ	石・長(1~3) ◎		21
81	鉢	残存高 8.1	丸底の底部より内湾気味に立ち上がる。	タタキ(10本/5cm)	ハケ(7本/1cm)	石・長(1~2) ◎		
82	鉢	口径 12.0 器高 10.3	丸底の底部で胴部は内湾しており、口縁部は上方向にのびる。	ハケ(11本/1cm)	ナデ	石・長(1~2) ○		21

表24 第IV層出土遺物観察表 石製品(B区)

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
83	石鏃	完形	サヌカイト	2.1	1.3	0.3	1.06		21
84	石鏃	完形	サヌカイト	2.65	1.45	0.4	1.73		21
85	石鏃	完形	サヌカイト	2.4	1.3	0.42	2.15		21
86	石鏃	完形	サヌカイト	2.5	1.6	0.5	1.82		21
87	石鏃	完形	サヌカイト	2.5	1.4	0.42	1.82		21

遺物観察表

表25 第IV層出土遺物観察表 土製品(B区)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎 焼 土 成	備考	図版
				外 面	内 面			
88	紡錘車	直径 3.9 厚さ 0.85 重さ 13.3	円盤状で円孔が1孔。	ナデ	ナデ	石・長(1~2) ◎		21
89	壺	口径 (20.0) 残存高 1.7	口縁端部が下方向に拡張される。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	石・長(1~4) ◎		21
90	甕	口径 (18.5) 残存高 4.5	口縁端部がつまみ上げ状。	ヨコナデ	ヨコナデ	密 ◎		21
91	壺	底径 (6.8) 残存高 7.8	平底の底部より内湾気味に立ち上がる。	⑧—ヘラミガキ ハケ(9本/1cm)	ヘラミガキ	石・長(1~4)		
92	鉢	口径 (22.6) 残存高 5.9	内湾し口縁部が尖り気味。	摩滅の為不明	⑩—ハケ(8本/1cm)	密 ◎		
93	高坏	底径 (10.0) 残存高 4.6	矢羽根状透しを有する。	ヨコナデ	ヨコナデ	長・石(1~3) ○		21
94	高坏	底径 13.6 残存高 6.8	裾部が屈曲する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	密 ◎		21
95	支脚	底径 12.0 残存高 6.2	ラッパ状に開く脚部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	長・石(1~5) ○		21





第3章

タル ミ タカ ギ  
樽味高木遺跡

— 3 次調査地 —



## 1. 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

1991（平成3）年3月、株式会社三実より松山市樽味4丁目178—3地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された（第39図）。

確認願いが提出された樽味4丁目178—3は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81樽味遺物包含地』内にあたる。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。同包含地内では樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）〔宮本一夫 1990〕や樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡、樽味高木遺跡〔梅木謙一 1989〕などの調査が行われており、弥生時代から中世にかけての集落が存在していたことが明らかになりつつある。

周辺には、北は文京遺跡などを含む道後城北遺跡郡〔西田栄他 1976・梅木謙一 1991〕が、南は来住廃寺跡〔小笠原好彦 1979〕や久米高畑遺跡〔西尾幸則 1989〕などを含む久米地区があり、弥生時代から中世まで断続して営まれた大集落が存在する。

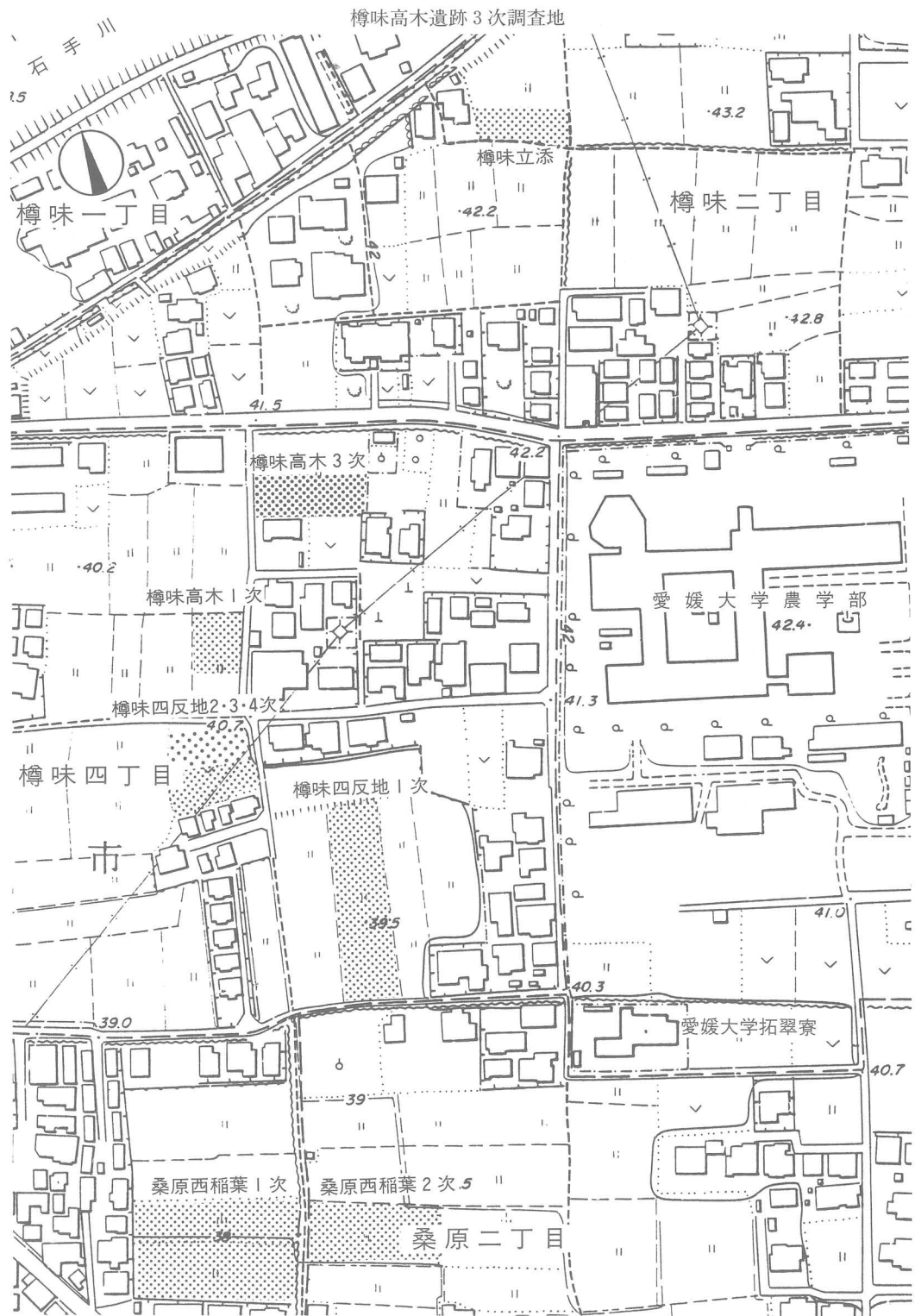
これらのことから当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1991（平成3）年4月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と柱穴数基を検出し、当該地に弥生時代から中世の集落関連遺構があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課・株式会社三実の両者は遺跡の取扱いについて協議を重ね、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造や古地形の解明を主目的とし、文化教育課が主体となり株式会社三実の協力のもと1992（平成4）年、3月10日に開始した。

### (2) 調査の経緯

1992（平成4）年3月10日より重機により表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘結果及び深掘りによる土層観察により、地表下約30cmまで剥ぎ取りを行い、排土はすべて調査地外に搬出したため表土剥ぎ取りに3日間を費やした。その後、調査地内に仮設事務所を設置し、作業用具等を搬入した。

3月23日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始した。4月7日より遺物包含層である第Ⅳ層の掘り下げ及び遺物検出を行う。4月14日、第Ⅴ層上面にて遺構検出を行い竪穴式住居址や溝、柱穴等数多くの遺構を検出する。4月23日からS B 1の掘り下げ及び遺物検出



第39図 調査地位置図 (S=1:2,500)

## 調 査 組 織

を中心に行い、5月7日、SB1の出土遺物の測量・取り上げを行う。当日、田崎博之、宮本一夫両先生に調査指導を乞う。5月13日、完掘写真を撮影し、5月16日、遺構の測量図が完了する。5月18日、拡張掘り及び深掘りを行い、5月22日、出土遺物、調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

5月25日より松山市埋蔵文化財センターにて報告書に関する整理作業を行う。この間、奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県教育委員会、大阪市文化財協会、田原本町教育委員会、京都文化博物館他にて資料調査を行う。

### (3) 調査組織

**調査地** 松山市樽味4丁目178-3

**遺跡名** 樽味高木遺跡3次調査地

**調査期間** 野外調査 1992（平成4）年3月10日～同年5月22日

室内調査 1992（平成4）年5月25日～同年8月31日

**調査面積** 479m<sup>2</sup>

**調査委託** 株式会社三実

**調査担当** 梅木 謙一・宮内 慎一・武正 良浩・大西 朋子

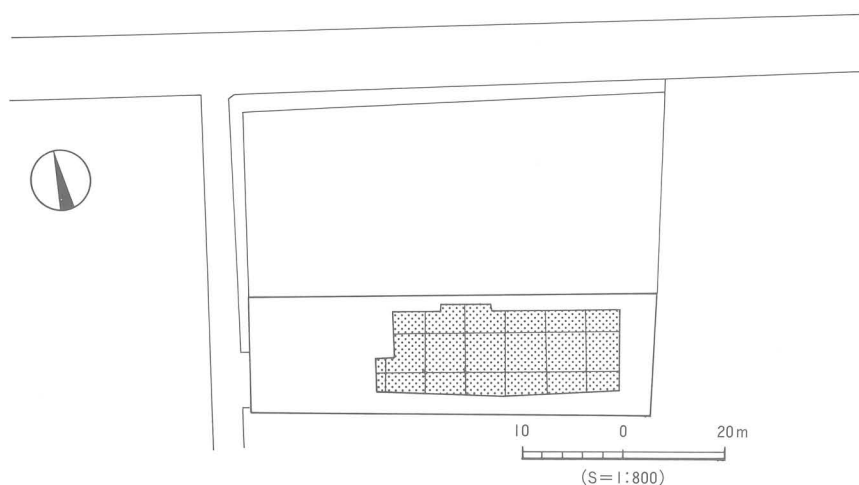
**調査作業員** 高橋 恒・水口あをい・山本 圭・渡部 竜二・木村 浩紀・大久保英昭

中島 宏・西原 聖二・富山 寛之・溝部 真功・山下 邦明・坂本 守

山口 裕二・林 亨・檜垣 貴仁・小笠原聖二・森田 利恵・松本美知子

黒田 令子・山下満佐子・大西 陽子・松山 桂子・三木 和代・渡部 芙美

兵頭 千恵・好光明日香・一花 誠子



第40図 調査地測量図

## 2. 層 位 (第41・42図、図版22)

本調査地の基本層位は、第 I 層表土、第 II 層黄灰色土、第 III 層暗緑黄色土、第 IV 層暗褐色土、第 V 層褐色粘質土である。第 V 層より下位の土層は、土層図に示すとおりである。

第 I 層—近現代の造成工事及び農耕による客土である (厚さ 25~35cm)。

第 II 層—水田耕作に伴う床土である (厚さ 5~10cm)。

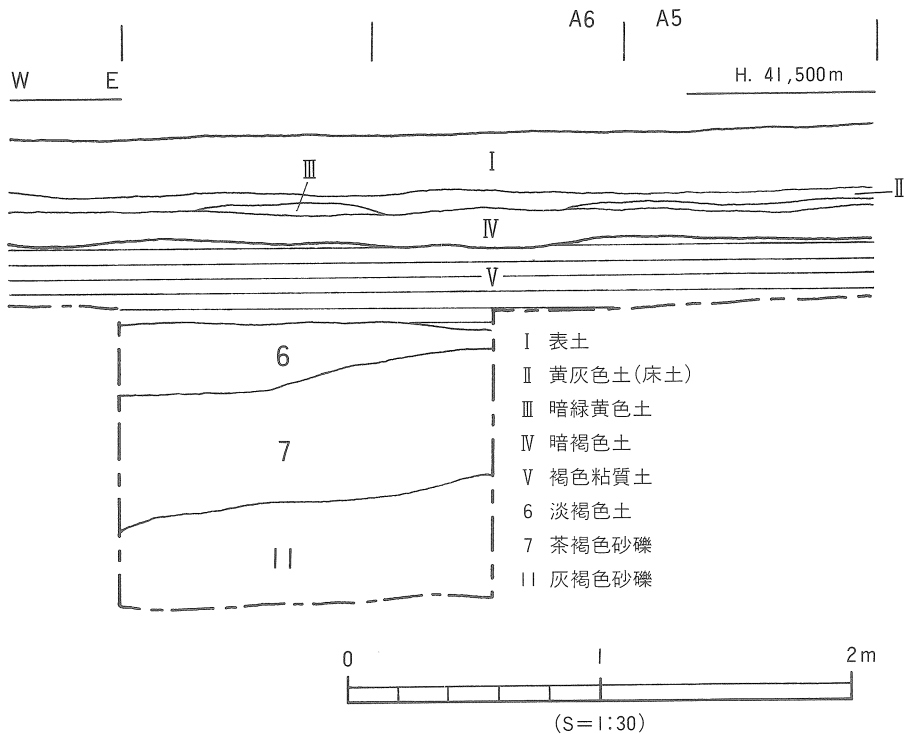
第 III 層—調査区内に部分的にみられる (厚さ 3~5 cm)。

第 IV 層—調査区東半分を除く地域でみられ、北東から南西に向けて緩傾斜堆積をなす (厚さ 10~20cm)。

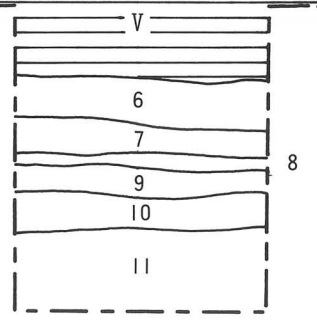
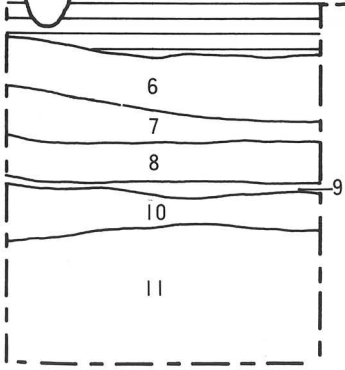
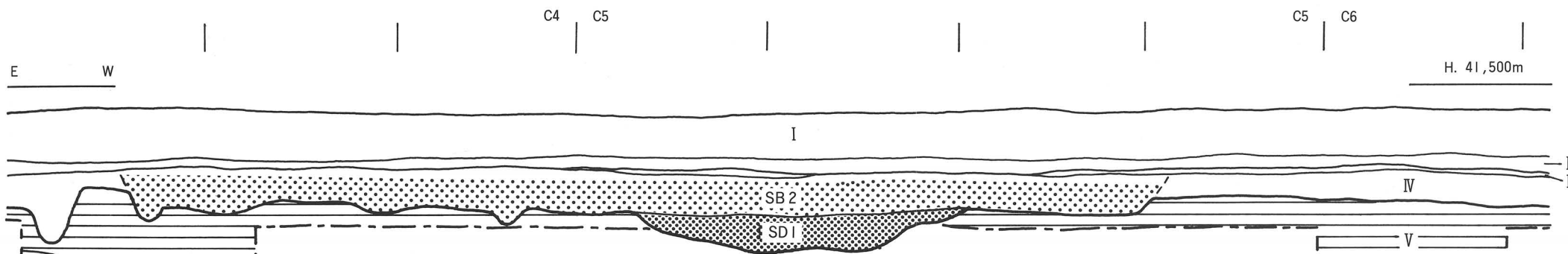
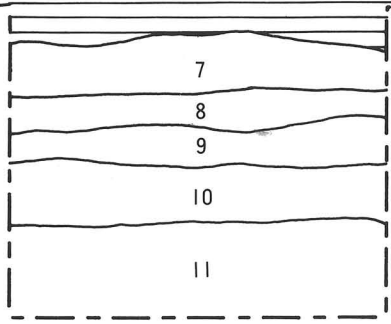
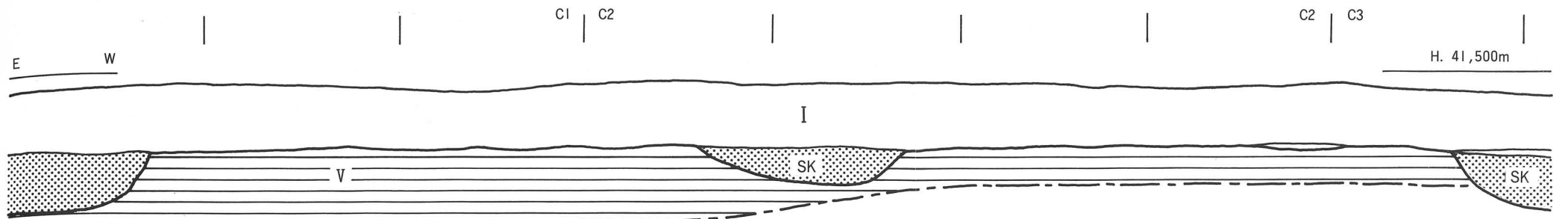
第 V 層—地山と呼ばれるものである (厚さ 30~50cm)。調査区北西隅及び、南東隅に拳大の礫が露出している箇所がみられる。

第 6 層—淡褐色土。調査区南西部にみられ、調査区中央部から南西に向けて傾斜堆積をなす (厚さ 10~30cm)。

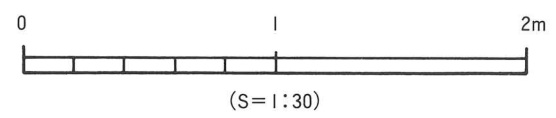
第 7 層—茶褐色土。調査区ほぼ全域でみられ、その堆積は調査区北西隅が最も厚く、3~5 cm 大の円礫を多く含む (厚さ 10~50cm)。



第41図 北壁土層図



- |             |         |          |
|-------------|---------|----------|
| I 表土        | V 褐色粘質土 | 9 黄褐色砂礫  |
| II 黄灰色土(床土) | 6 淡褐色土  | 10 黄褐色砂  |
| III 暗緑黄色土   | 7 茶褐色砂礫 | 11 灰褐色砂礫 |
| IV 暗褐色土     | 8 黄褐色砂  |          |

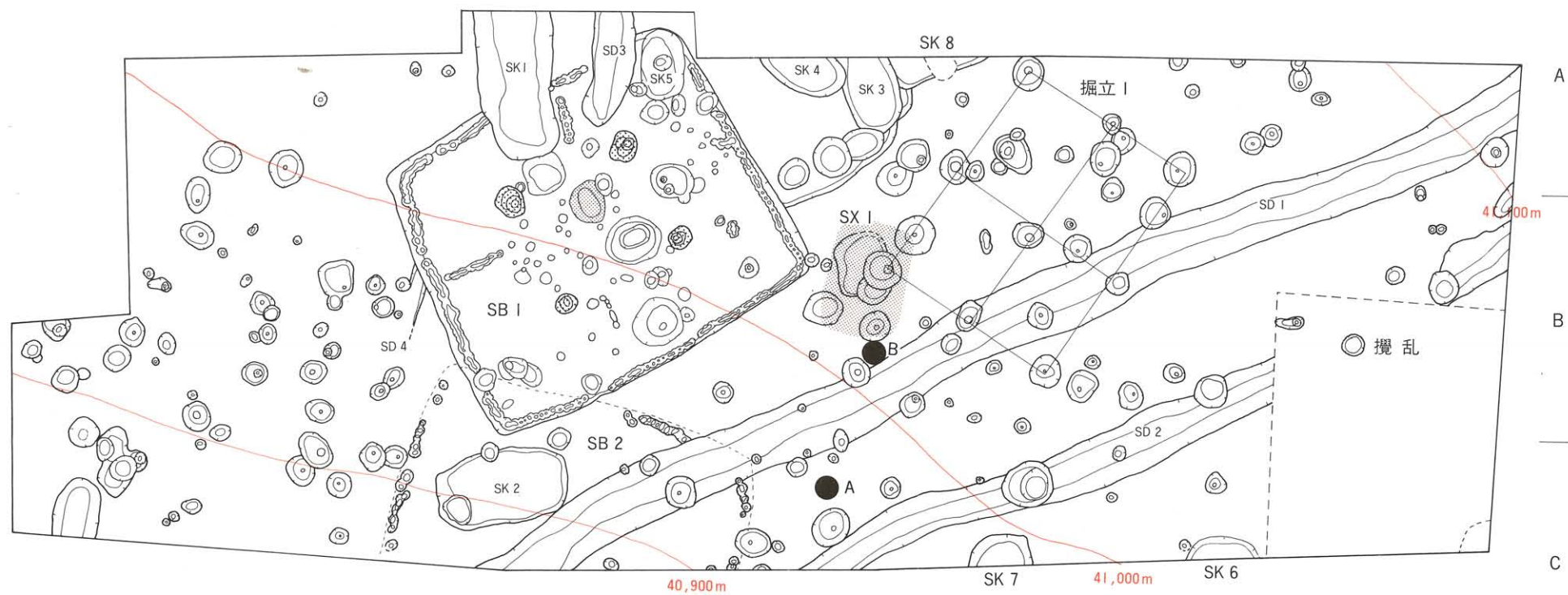


第42図 南壁土層図

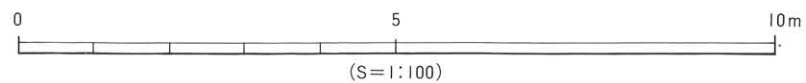




1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7



● 絵画土器  
出土地点(A・B)



第43図 遺構配置図



## 層 位

第8層—黄褐色砂。調査区北部を除く地域でみられ、北東から南西に向けて傾斜をなす。

1～2mm大の砂粒で、土層観察等により流砂層と考えられる（厚さ5～40cm）。

第9層—黄褐色砂。第8層と同様の検出状況を示す。5～10cm大の円礫を多く含む（厚さ5～20cm）。

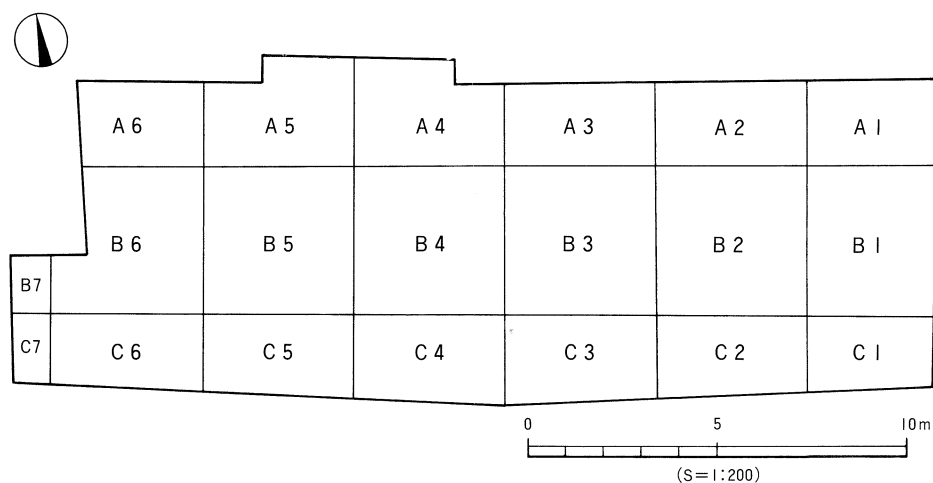
第10層—黄褐色砂礫。第8、9層と同様の検出状況を示し、砂粒は1～2mm大のものである。第8層と同様に流砂層と考えられ、第8層と同一層の可能性もある（厚さ10～20cm）。

第11層—灰褐色砂礫。調査区全域でみられ、その上面の標高は北東部が高く、南西に向けて傾斜をなす。わずかながら起伏がみられる。拳大の円・角礫からなり、おそらく旧石手川系の砂礫層と考えられる。

遺構は第IV層中及び第V層上面での検出である（第43図）。第IV層中では竪穴式住居址2棟（古墳中期以降）を、第V層上面では掘立柱建物址1棟、溝4条、土壇8基、柱穴204基（住居址、掘立柱建物柱穴を含む）、土器溜り（S X 1）他を検出した。ただし、第V層上面検出の遺構は、その深さなどから考えると本来は第IV層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。

遺物は遺構内及び第IV層からの出土である。第IV層からは、弥生土器・土師器・須恵器のほか、石製品としては石斧、石鏃他が混在して出土した。注目すべきものとしては、この第IV層中出土の絵画土器がある（巻頭図版）。

第V層上面の標高を測量すると、調査区北東部が最も高く漸次、南西部に向けて傾斜をなしている。なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた（第44図）



第44図 調査地区割図

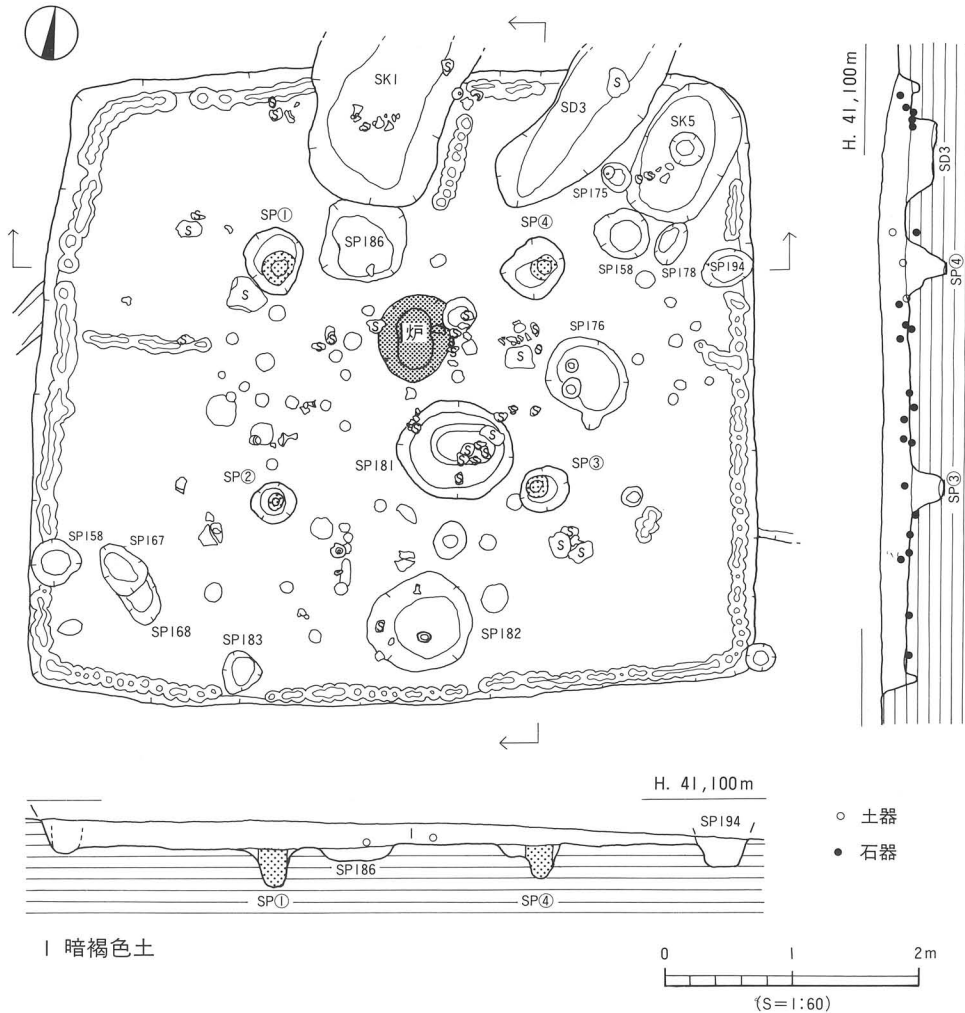
### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) 竪穴式住居址

本調査において確認された住居址は2棟である。第Ⅳ層中にてSB1を第Ⅴ層上面にてSB2を検出したが、SB2については本来は第Ⅳ層以上の層から掘り込まれたものである。平面形はいずれも方形～長方形であり、両者とも壁体溝がみられる。ただし、SB2については壁体溝のみの検出である。

#### SB1 (第45図、図版24～27)

調査区中央部やや北寄りA5～B5区に位置する。住居址南西壁はSB2号住居址壁体溝小ピットに切れられ、北壁は土壌SK1及び溝SD3に切られている。平面形は隅丸方形を呈



第45図 SB1測量図

## 調査の概要

し、規模は東西幅5.7m、南北幅5.0m、壁高は住居址北西隅で28cm、南東隅で15cm（検出面下）を測る。覆土は暗褐色土である。床面は比較的硬く平坦である。壁体に沿って幅12～20cm、深さ3～12cmの小ピットが廻っている。床面北部及び西部中央部に幅15cm、長さ1m、深さ約8cmの断面「V」字状の溝を検出した。この溝床は一部凹凸になっている。

主柱穴はSP①・②・③・④の4本である。各柱穴は円～楕円形を呈し、径30～50cm、深さ25～30cm、柱穴間は190～200cmを測る。この他、床面にて多数の小ピットを検出したが、その性格は不明である。炉は住居址中央部やや北よりに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径70cm、短径60cm、断面は皿状を呈し、深さ約12cmを測る。炉内にて焼土及び炭を確認している。その他、住居址北東部にて楕円形土壙（SK5）を検出した。規模は長径115cm、短径70cmで、北側がやや幅広になっている。断面は皿状を呈し、深さ20cmを測る。本土壙の覆土は住居址と同様であるため、本土壙は本住居址の施設であると考えられる。しかしながら、その性格は不明である。

また、住居址床面にて10数基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。

遺物は、埋土上部と下部とでその時期が異なる（第46～48図）。埋土上部では、弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土したが、これは本住居址を覆う包含層土壌と考えられる。一方、埋土下部においては、床面直上及び床面付近から完形品を含む土師器片を多数検出した。炉址内からは、鉢形土器（29）が、炉址の東側では、完形の小型丸底壺（23）が出土した。またSP182では高環形土器（41）の脚部が柱穴内に入った状況で出土した。いずれの土器も完形に近いものであり一括性の高いものである。

その他、床面から浮離した状況で、径30～35cm、厚さ15cm程度の石を2個検出したが、その性格はわからない。

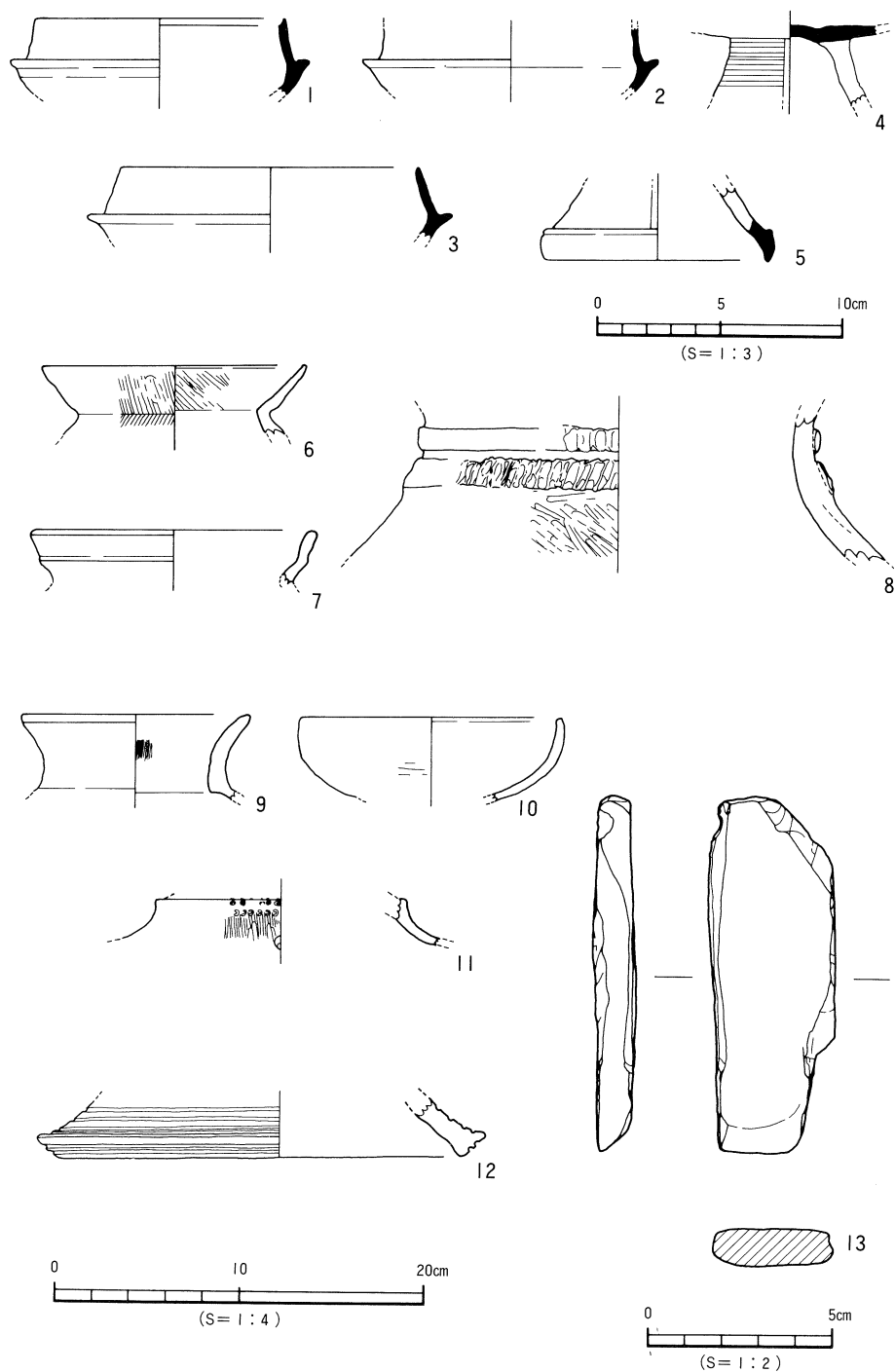
出土遺物（第46～48図、図版32～36）

埋土上層と埋土下層の遺物に分けて解説する。

埋土上層出土遺物（1～13）

1・2は口径10cm程度、3は口径約12cmを測る須恵器の坏身。いずれも小片である。1は、たちあがり端部は内傾する凹面をなし、3は尖り気味に丸い。4・5は須恵器高環小片。両者ともにスカシが看取される。これら須恵器は6世紀前半代のもものと判断される。6・7は土師器の甕形土器、10は椀形土器である。6は、口縁部は内湾してたちあがり口縁端部は先細りする。頸部内面に弱い稜をもつ。内外面共に刷毛目調整を施す。7は口縁部に屈曲部をもつもので、口縁端部は丸くおさめる。10は内湾してたちあがる体部に、やや内湾する口縁部がつく。

樽味高木遺跡 3 次調査地



第46図 S B I 埋土上層出土遺物実測図

## 調査の概要

8・9は弥生後期の壺形土器である。8は肩部片で頸部と肩部の境に押圧による凸帯が2条貼付けされる。肩部外面にミガキを施す。9は口縁部は外反して端部は細く丸く仕上げている。

11・12は高環形土器の脚部片。11は脚裾部に円孔をを穿ち、脚部屈曲部に竹管及び半截竹管文を施すものである。12は脚端部を拡張し、脚端部に4条の沈線文（擬凹線文）、脚下端部に2条の沈線文を施す。

13は、ほぼ完形の扁平片刃石斧である。長さ9.6cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm、重さ63.9gと、やや大型品である。材質は粘板岩の類であろう。

### 埋土下層出土遺物（14～45）

#### 土師器（14～29・32～45）

甕形土器（14～22） 14～17は短く外反する口縁部をもち、口縁端部は先細りする。頸部内面に弱い稜をもつ。18・21は口縁部は外反する。18は口縁端部は丸みのある「コ」字状に仕上げ、21はわずかに内傾する。19・20は内湾気味にたちあがる口縁部をもち、口縁端部は肥厚する。22は口縁上部を直立気味に立ちあがらせることを特徴とする。

壺形土器（23～26） 23～25は小型品である。23は完形品。扁平の体部に外傾する口縁部をもちものである。口頸部境には稜はなく、口縁端は細く丸く仕上げる。口径は胴部最大径を凌がない。胴部内外面は横方向のヘラ削り、口頸部外面は刷毛目調整を施す。24は口頸部境にわずかに稜をもつ。外面は全体に刷毛目調整を施す。26は大型品。球形の体部で、外面は刷毛目調整を施し、内面は削り痕を顕著に残す。

高環形土器（27・32～45） 27は脚部小片。外面に7条の沈線文と羽状文を施す。32～40は坏部の接合部の形状で三つに分類できる。①：接合部が段になるもの（32～36）、②：接合部で屈曲するもの（37・38・40）、③：坏底部よりゆるやかに外反してたちあがるもの（39）である。口縁端部は外反するもの（32～34・37・39）、外傾するもの（36・40）がある。坏底部は32・33・36に充填技法がみられる。

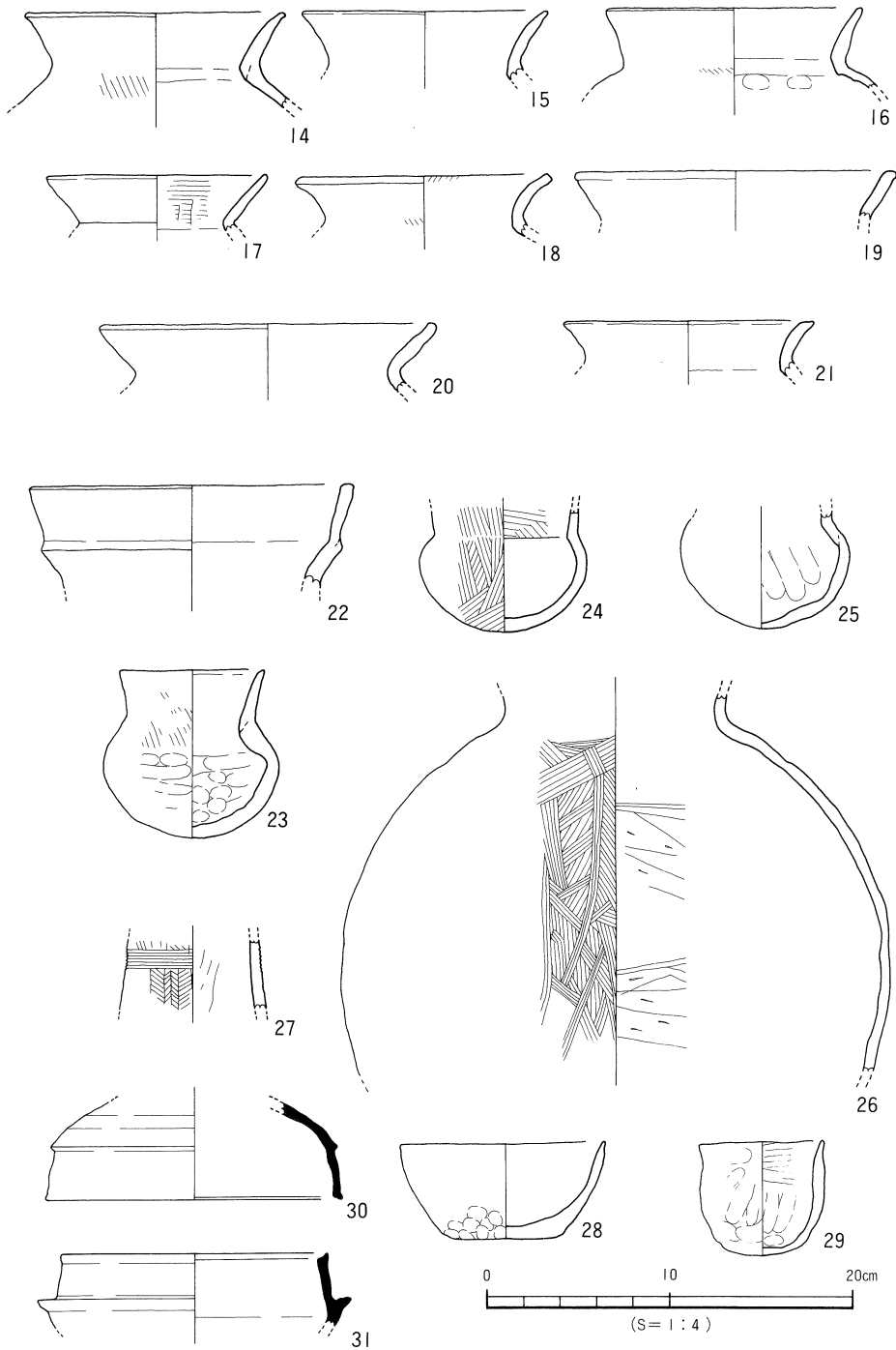
41～45は低脚で、柱部は三角錐状を呈する。裾部は長く外反して開く。内面の柱部と裾部の境には稜をもつ。44は充填技法である。

鉢形土器（28・29） 28は平底の底部から、外傾して立ちあがり、口縁部は内湾する。口縁端部は先細りする。底部外面に指頭痕を顕著に残す。29は炉内出土の鉢形土器。口径6.8cm、器高6.2cmの小型品で、口縁部は外反する。

#### 須恵器（30・31）

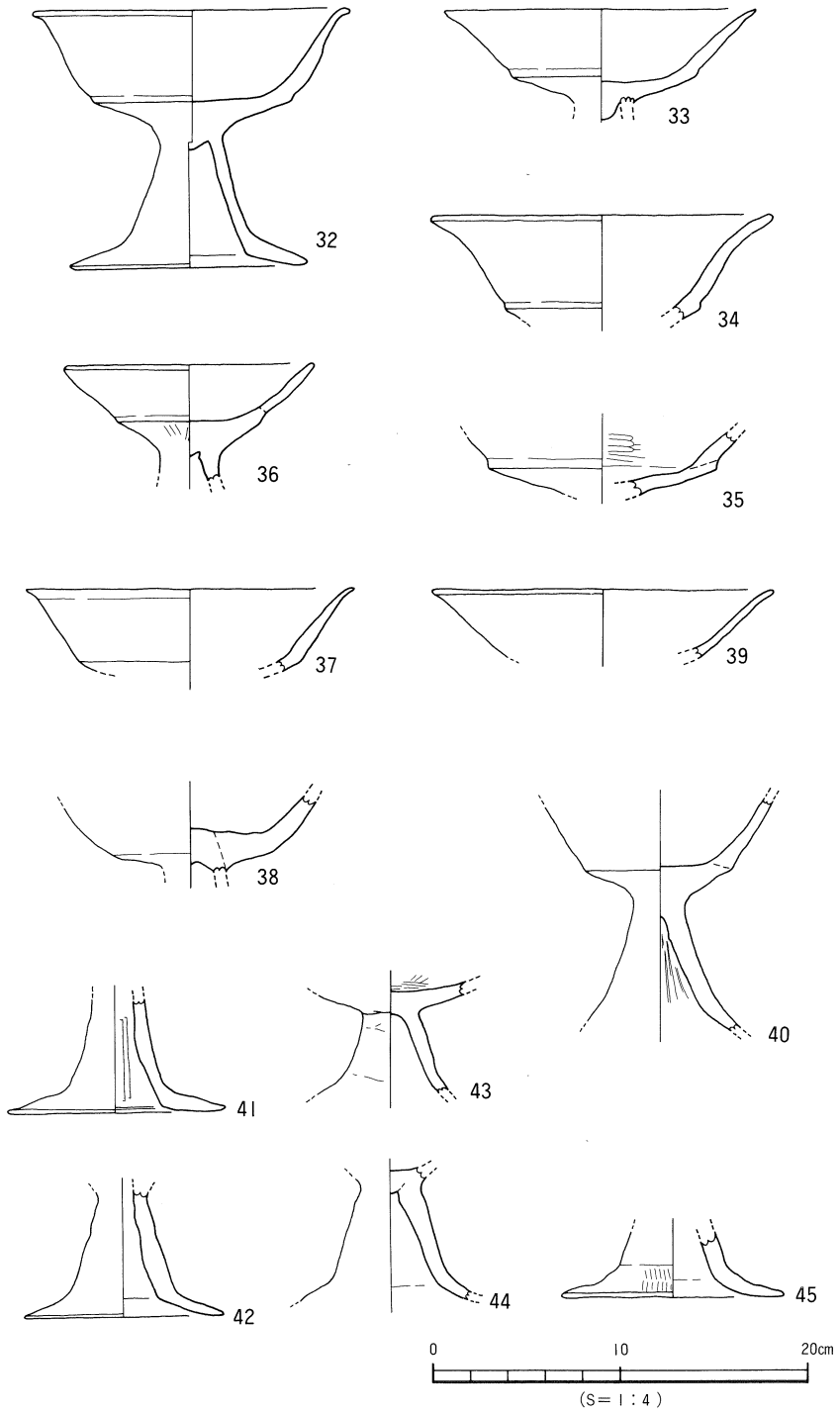
30は口径約12cmをはかる坏蓋。明瞭な稜をもつ。口縁部は外反気味に下がり、端部は内傾する。31は口径11cm前後の坏身。たちあがりは内傾し、端部は内傾する凹面をなす。

樽味高木遺跡 3 次調査地



第47図 S B I 埋土下層出土遺物実測図 (I)

調査の概要



第48図 S B I 埋土下層出土遺物実測図 (2)

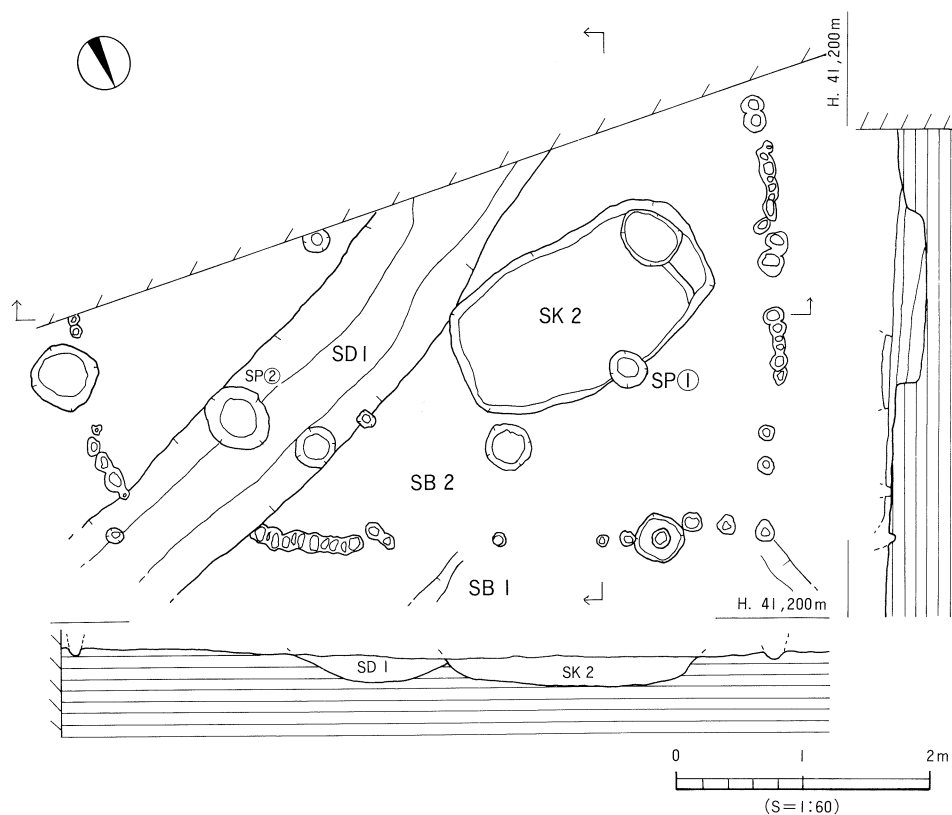
樽味高木遺跡 3 次調査地

時期：出土遺物は全体的にみて、古墳時代中期後半～後期初頭の範囲に入るものである。樽味高木遺跡の S B 5 号住居址よりやや新しい時期のものと考えられる。出土状況より、埋土下層部出土品は、本住居址の埋没・廃棄時に伴う可能性が高い。これらのことから本住居址は、古墳時代中期後半～後期初頭に廃棄・埋没したものとする。

S B 2 (第49図、図版28)

調査区南西部 C 4・5 区に位置する。住居址南半部は調査区外へ続き、北西部は S B 1 号住居址を、北東部は S D 1 を切っている。ただし、S B 1 号住居址との切り合いは、S B 2 号住居址の壁体溝に相当する位置にある小ピット列にて、その切り合い関係を知る。住居址上部は後世の削平を受け破損しており、ほとんどの地点で S B 2 号住居址の床面が露出した状況であった。平面形は(隅丸)方形ないし(隅丸)長方形を呈するものと考えられ、規模は東西幅5.6m、南北幅3.6mを測る。本住居址に伴う施設として壁体溝に相当する位置に小ピット列を確認した。小ピットは径8～19.5cm、深さ3～19.5cmである。小ピット内より土師器片、須恵器片が数点出土している。

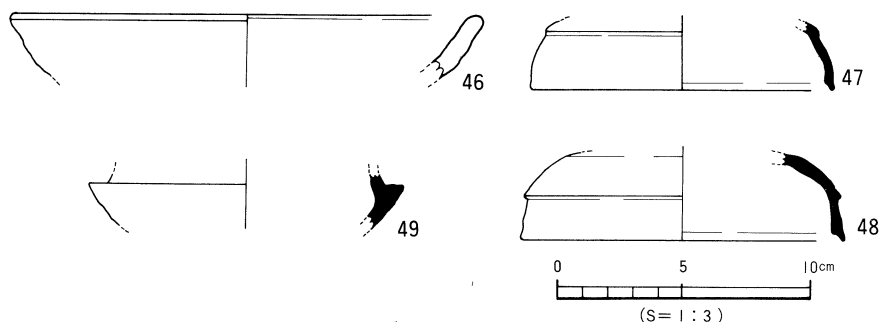
支柱穴は、S P ①・②の2本を検出した。調査区外に他に2本あるものと考えられ、支柱



第49図 S B 2 測量図



## 調査の概要



第50図 S B 2 出土遺物実測図

穴はS B 1号住居址同様4本である可能性が高い。柱穴は円～楕円形で、径30～50cm、深さ20～30cm、柱穴間は3mを測る。床面は比較的硬く、北東から南西に向けて緩傾斜をなす（比高差5cm）。床面にて主柱穴以外に大小5基の柱穴を検出したが、本住居址に伴うかどうかはわからない。

この他、本住居址の北側の床面にて85×70cm、深さ約10cmの楕円形を呈する凹地を検出した。埋土中には炭と焼土が含まれていた。

### 出土遺物（第50図）

土師器（46） 46は甕形土器の口縁部片。推定口径18.8cmを測る中型のものである。口縁部は内湾気味にたちあがり口縁端部は丸くおさめる。内外面共にヨコナテ調整を施す。

須恵器（47～49） 47・48は珠をもたない須恵器坏蓋。47は推定口径11.8cmを測る。天井部と口縁部を分ける稜は退化し、丸みをおびたものになっている。48は推定口径12.8cm。口縁部はやや外反して下がり、端部は内傾する段をなす。稜は断面三角形で比較的鈍い。

49は坏身小片。受部は断面三角形で太く、端部は尖り気味である。

時期：本住居址の遺物は僅かであるため正確な時期は判断しがたいが、S B 1号住居址及びS D 1を切ることなどから廃棄・埋没時期の上限を古墳時代後期におくことができよう。

## (2) 掘立柱建物址

本調査において確認された掘立柱建物址は1棟である。ただし、調査区西側B 6～C 7区にて柱穴が集中して検出されており、同地点に建物址が存在した可能性もある。

1号掘立柱建物址（第51図、図版29） 調査区中央やや東寄りA 2～B 3区に位置する。柱穴S P 48・139はS D 1を切っている。第V層上面での検出であるが、土層観察等により、本来は第IV層中から掘り込まれたものである。

建物は2×2間の総柱建物址と考えられ、桁行長4.0m、梁行長3.15mを測る。東西棟で、平均柱間は東西2.0m、南北1.5mである。各柱穴は、円または楕円形を呈し径30～60cm、深さ



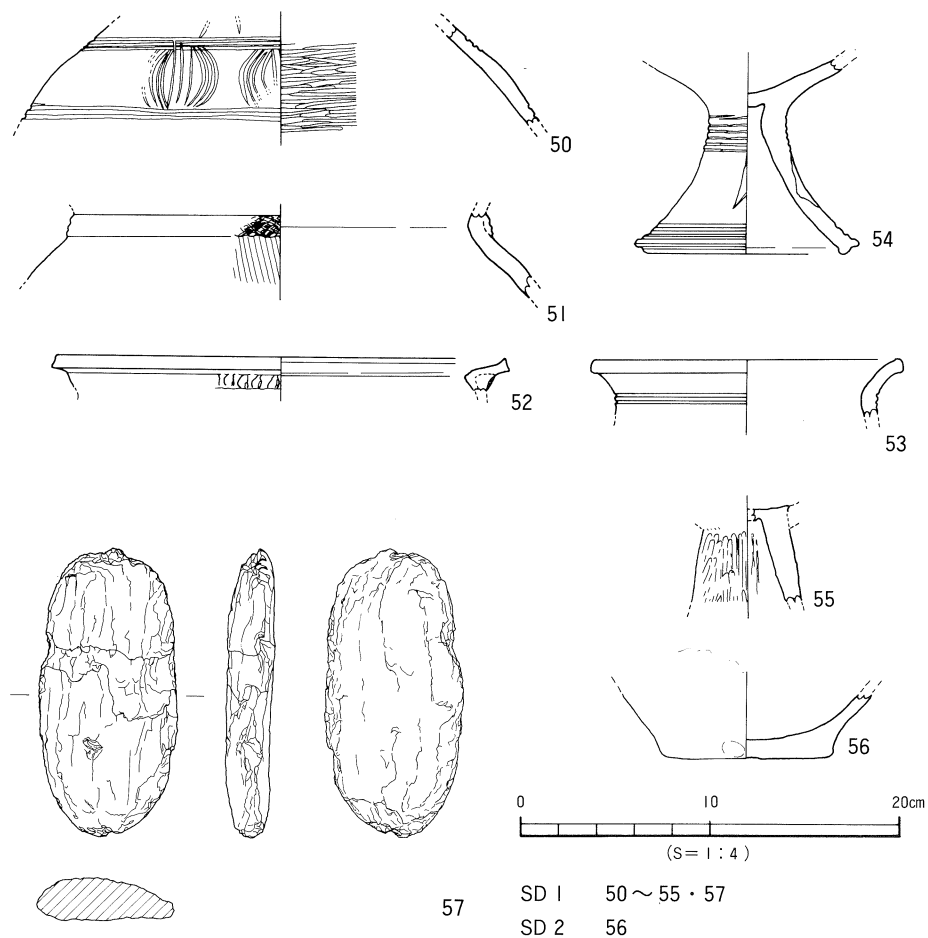
調査の概要

したものと考えられる。

遺物は溝の上面にて須恵器片が、埋土中からは弥生土器片が出土した。ただし、上面検出の須恵器片については流れ込みによる可能性が高い。

出土遺物（第52図、図版37）

50は弥生時代前期の壺形土器。頸部に3条のへら描き沈線文が2段に施され、沈線文間に直線状及び弧状の沈線文が3～4条施される。内面は横方向のミガキが認められる。51は壺形土器の肩部片。貼付の凸帯上に斜格子文を施す。52は口縁端部をつまみ上げる甕形土器で、肩部に刻目凸帯が1条貼付される。弥生第Ⅳ様式に属するものである。53は弥生時代前期の甕形土器。肩部に3条のへら描き沈線文を施す。54は矢羽根状透かしを有する高環形土器である。柱部に6条の平行沈線が施され、さらに脚裾部に3条、脚下端に1条の凹線文がそれ



第52図 S D I ・ S D 2 出土遺物実測図

ぞれ施される。55は高環形土器の脚部小片。柱状の脚部で、外面は縦方向の丁寧なヘラミガキを施す。57は石器素材。

時期：出土遺物等から、本遺構は弥生時代前～後期に使用し、かつ埋没したものとする。

**SD2** (図版29) SD1とほぼ平行して走る溝である。遺構東部は攪乱により削平され、また数基の柱穴によって切られている。断面形、及び規模は、SD1と同様で、わずかに深さがSD1に較べ浅い。溝床は平坦で埋土はSD1と同様の黒褐色土である。その性格もSD1と同様地境を示す境界であろうと考える。

時期：出土遺物はほとんどなく、時期の決定は難しいが、SD2を切る柱穴内の出土遺物や層位関係等から上限を古墳時代におくことがであろう。

他の溝状遺構についての詳細は表28に記す。

#### (4) 土 壙

本調査において確認された土壙は8基である。7基については第V層上面での検出で、SK5はSB1内に伴うものである。

**SK1** (図版30) 調査区北西A4・5区に位置する。南側はSB1を切り、北側は調査区外へ続く。第IV層中からの掘り込みである。平面形は長楕円形を呈すると考えられ、規模は長径2.4m、短径1.3m、深さ70cmを測る。断面形は舟底状をなし埋土は上層が暗褐色土、下層は粘性の強い黒褐色土であり炭化物が検出された。遺物はわずかに土師器片、須恵器片が数点出土しているのみである。また、床面付近に径20～25cm、厚さ10cm程度の石が2点検出された。遺構の性格は下層において炭化物を検出したことなどから炉の可能性が考えられる。2個の石についても、なんらかの役割でこの炉に伴うものと考えてよかろう。遺構の時期については遺物が僅かであるため明確な時期は判断しがたいが、SB1を切ることから、古墳時代中期後半以後に廃棄・埋没したものとする。

**SK2** (図版28) 調査区南西C5区に位置し、SB2号住居址北西部床面において検出された。SD1を切りSP①、SP157に切られる。2.05m×1.20mの隅丸長方形を呈し、深さ17cmを測る。埋土は暗褐色土で炭が少量混じる。出土遺物は、基底部より弥生土器片が1点出土している。しかしながら、SK2の時期・性格やSB2に伴うものかどうかはわからない。

その他の土壙についての詳細は表29に記す。

#### (5) その他の遺構と遺物

本調査において確認された柱穴は204基(住居址、掘立柱建物柱穴を含む)である。いずれも第V層上面での検出である。埋土の違いにより3グループに分けられる。柱穴内からの遺物の出土はあまりみられないが、少なくとも3時期に分けられるものと考えられる。

この他には土器溜りSX1を確認している。

S X I 調査地中央やや北東よりB3区に位置する。明確な掘り方は確認できなかった。80×120cmの範囲で土器が集中して検出された。出土遺物は甕形土器、壺形土器、高環形土器で、一括品として資料性が高い。

出土遺物（第53図、図版38・39）

甕形土器（58～62・66～69） 58～60は口縁端部をつまみ上げ状にする甕形土器。58は口縁が「く」の字状を呈する胴張りのもので、59・60は口縁逆「L」字状を呈する胴の張りの弱いものである。器面外面は、すべて頸部に横方向のナデ、胴部上半部には縦方向の刷毛目、胴部下半には縦方向のミガキが施される。

61・62は口縁部に凹線文を施す甕形土器。両者とも2条の凹線文が施される。61は、口縁内面がやや内湾し、口縁屈曲部に1条の凸帯が貼付される。62は凸帯上に刻目を施す。内外面共に刷毛目調整を施す。

66～69は甕形土器の底部。すべて平底をなし、外面に縦方向のミガキが認められる。

壺形土器（63） 63は口縁部に3条の凹線文を施すもの。口縁内面はナデによりわずかに凹む。頸部下半に縦方向のミガキがみられる。

高環形土器（64・65） 64は内傾する口縁に5条の凹線文が施される。凹線文以下や頸部外面に縦方向のミガキが施される。内面は刷毛目調整後、ミガキがみられる。65は高環の脚部で、外面には刷毛目調整が若干残る。矢羽根透かしは貫通せず、脚端部に3条の凹線文が施される。

時期：これらの土器は弥生時代中期後半のものである。

第IV層出土遺物（第54～57図）

須恵器（第54図）

坏蓋（70～72） 天井部は比較的扁平で、天井部と口縁部を分ける稜は鋭い。口縁部はやや外反気味に下がり、端部は内傾する段をなす。

坏身（74～78） 74・75はたちあがり長く内傾し、端部は内傾する凹面をなす。76・77は扁平な底部をもつ。77はたちあがり端部は尖り気味に丸く仕上げる。

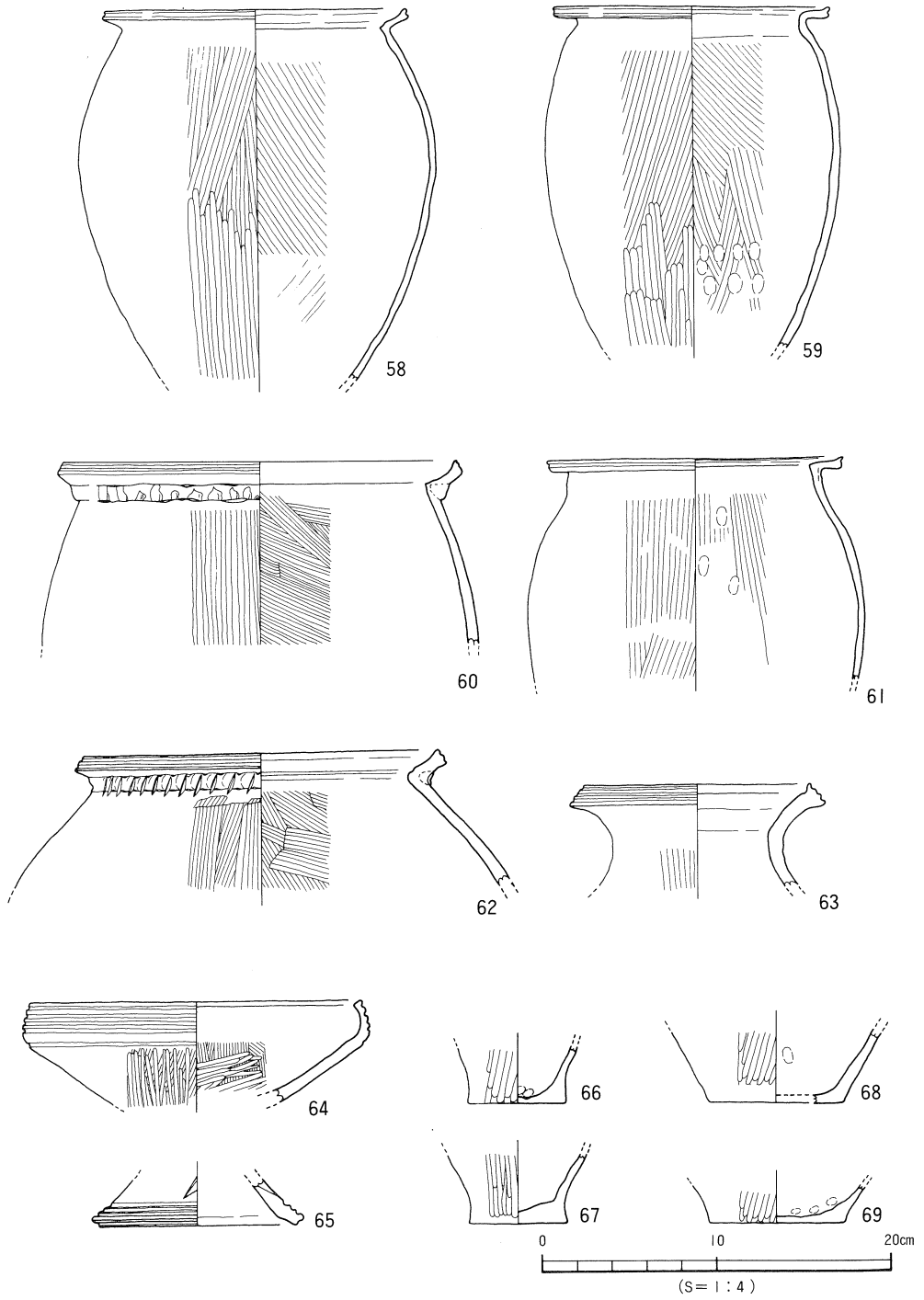
高環（73・79・80） 73は有蓋高環の蓋。つまみ中央部は凹む。79・80は脚部片。3方向に透かしが看取される。

壺（81・82） 81は広口壺。やや肩の張る胴部から外反気味に立ち上がり、口縁部は下方に肥厚する。胴部外面に平行叩き、内面に円弧叩きを施す。82は短頸壺。口縁部は丸くおさめる。

埴瓶（83） 83は埴瓶の口縁部片。口縁部は内湾し端部は内方に屈曲する。中位に1条の凹線を施す。

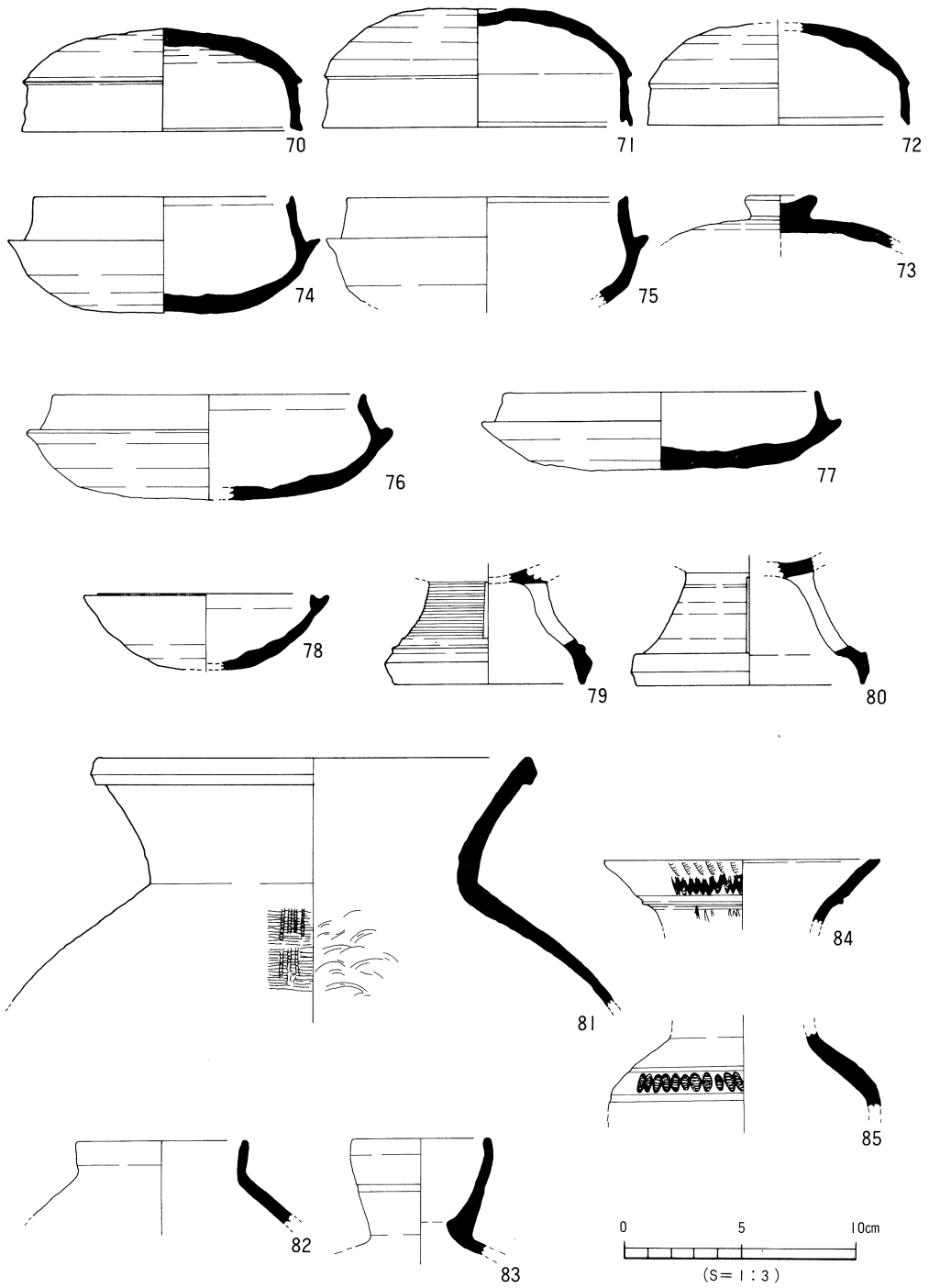
罌（84・85） 84は口縁部は上外方に大きく外反し、端部は内傾する段をなす。凸帯の上下に波状文を施す。85は胴部片。2条の沈線間に刺突列点文を施す。

樽味高木遺跡 3 次調査地



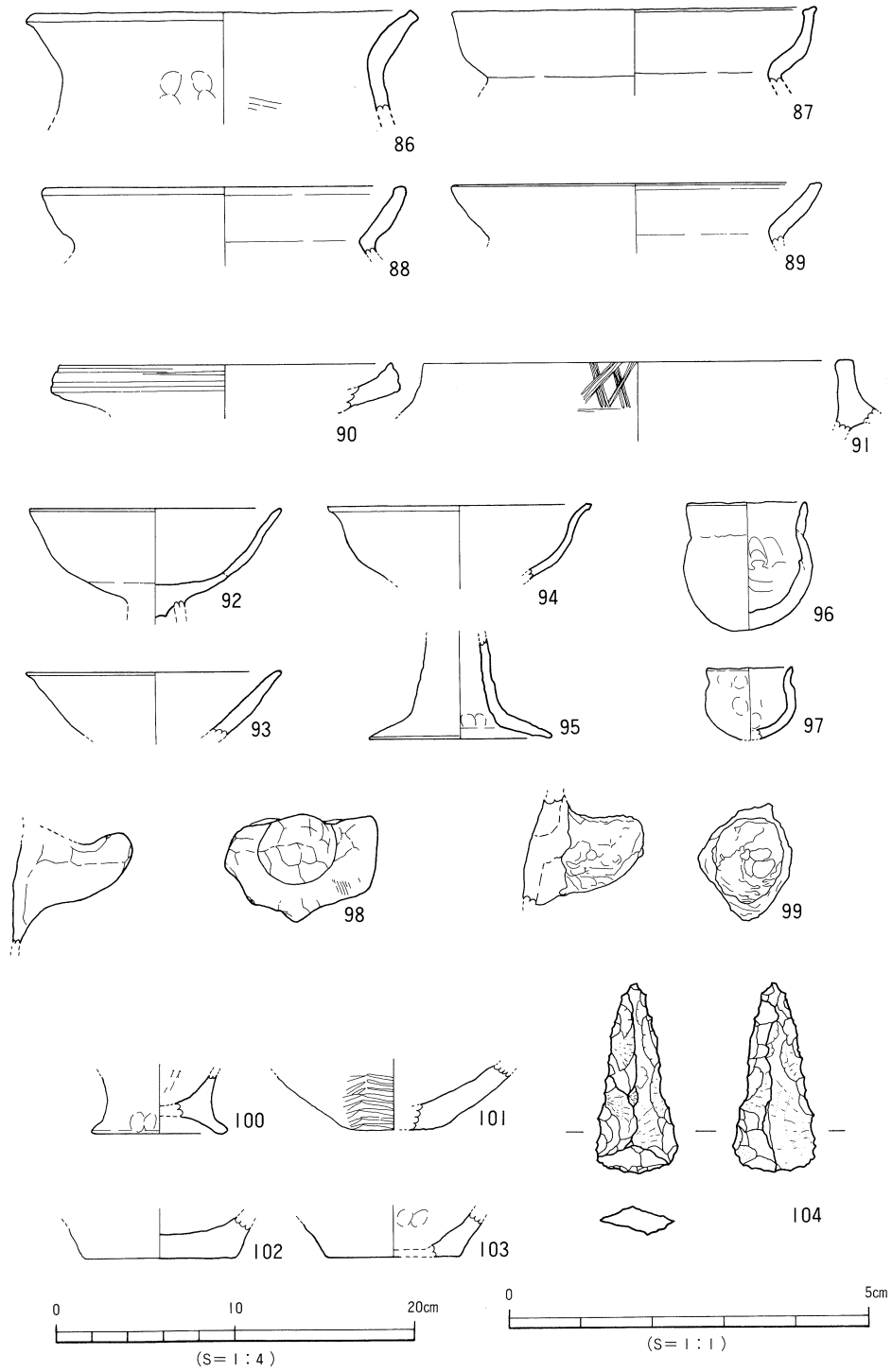
第53図 S X I 出土遺物実測図

調査の概要



第54図 第IV層出土遺物実測図(1)

樽味高木遺跡 3 次調査地



第55図 第IV層出土遺物実測図(2)



土師器・弥生土器（第55図）

甕形土器（86～89） 86は口縁部は外反し口縁中位はわずかに肥厚する。87は口縁上位で屈曲した後直立し口縁端部は内傾する。88・89は口縁部は内湾し、端部は肥厚、89は内傾する稜をもつ。

壺形土器（90・91・96） 90は口縁端部はわずかに上方に肥厚し、口縁部に2条の凹線文を施す。91は複合口縁壺。口縁拡張部は内傾し、斜格子文を施す。96は小型の壺。肩部の張りは弱く、胴部最大径は口径を凌ぐ。口縁端部は先細りする。

高環形土器（92～95） 92～94は坏部片。92は坏屈曲部にわずかに稜をもつ。92・93共に碗形の坏部で口縁部は外反する。95は脚部片。裾部は長く内湾し、柱裾部内面にわずかに稜をもつ。

ミニチュア土器（97） 97はミニチュア品。内外面共に指頭痕を顕著に残す。

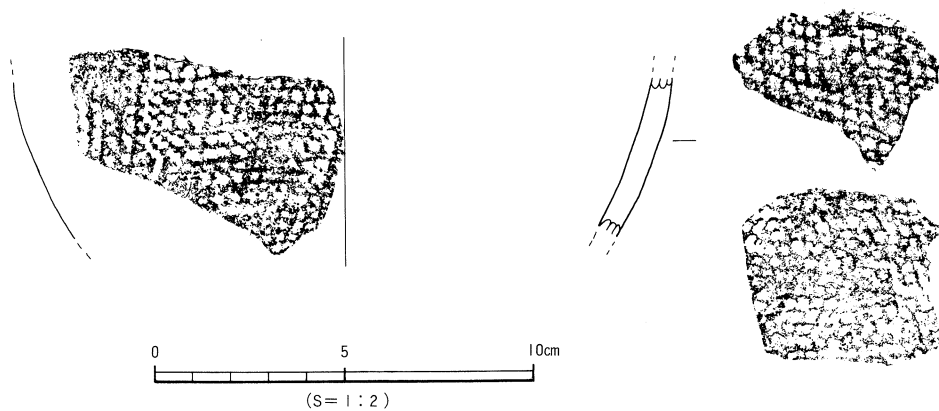
甑形土器（98・99） 98・99は甑の把手。両者共に上外方に湾曲する。

100・101は甕形土器、102・103は壺形土器の底部。100は上げ底を呈する。101はわずかに突出する底部で外面に叩き調整を施す。102・103は平底。調整は摩滅の為不明である。

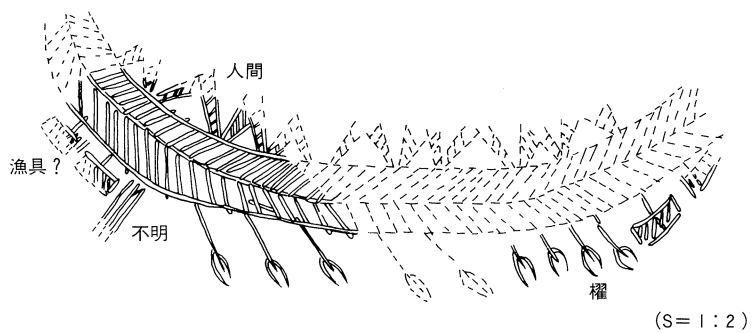
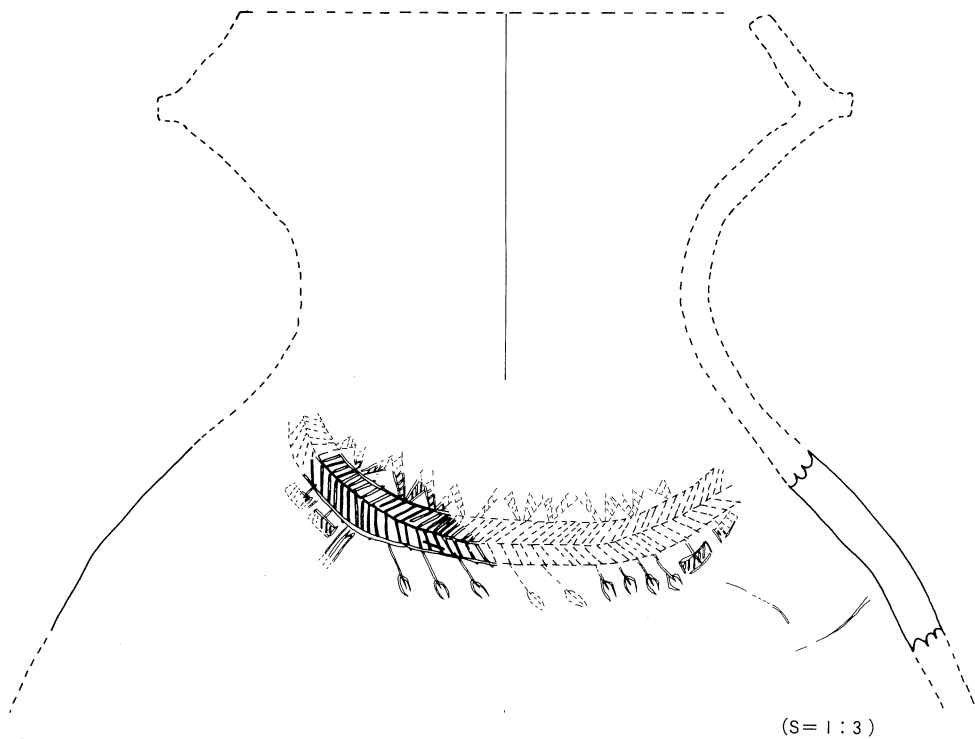
石鏃（104） 完形品・緑泥片岩製。

朝鮮系軟質土器（第56図）

朝鮮形軟質土器は8点出土した（本稿掲載は3点）。第Ⅳ層包含層からの出土である。器表面に施される叩きは、正格子叩きと斜格子叩きの2種類があり、少なくとも2個体以上の破片と推定される。器種の判断されるものとしては1個体がある。胴部径や傾きなどから判断すると、壺形土器もしくは長胴の甕形土器と考えられる。外面は正格子叩きが施され、内面はナデにより仕上げられているが、内面に叩きのあて具の痕跡は確認できなかった。胎土は石英、長石のほか、赤色土粒（シャモットか?）を含んでいる。



第56図 第Ⅳ層出土遺物実測図（3）



第57図 線刻画土器実測図

#### 線刻画（絵画）土器（第57図）

調査区の中央部やや南よりA地点とB地点から船を描いた線刻画（絵画）土器が出土した（第44図）。出土地点は約2m離れてはいるものの同一個体であることを確認した。船が描かれている土器は唐古鍵遺跡や清水風遺跡などこれまでに11遺跡14例が報告されている。今回出土のものは、頸部付近の破片で（幅7～8cm、長さ11～12cm、厚さ1.5cm）、両方とも第IV層包含層掘り下げ時に出土したものである。包含層は厚さ約20cmの堆積をはかり弥生時代～中世の遺物が混在していたものの分層できなかつたため堆積時期は明確には判断しえなかつた。しかしながら土器の径や傾き、器面調整等から復元すると、松山平野における弥生時代後期の複合口縁壺形土器になるものと推定される。

器面調整は、頸部上半部外面（絵が描かれている部分）は刷毛目調整後ナデ消しを、下半部外面は横方向のへう磨きを施している。内面は上半部がヨコナデ、下半部は縦方向の粗い刷毛目調整を施している。

船については、船首は左側で、櫂は現状で8本（推定9本か）を確認している。次に船の上に描かれている「W」字状のものであるが、これは人間の足を表現しているものと考えられる。現状で4対が確認できる。その他、船の両側に各2個の四角形状のものが、ほぼ左右対称に描かれている。おそらくは漁撈具（網か?）の類であろうと思われるが類例がなく断定はできない。まあ船首側の四角形状のもの横に描かれている3本線については、船の構造物なのか、あるいは漁撈具の類のものかはわからない。

## 4. 小 結

### (1) 弥生時代

遺構 弥生時代に時期比定できるのは土器溜りSX1である。遺物の出土状況より一括投棄がなされたことが知れる。

遺物 中期後葉以降の遺物が大半をしめ、包含層と遺構埋土より出土した。他に、前期の遺物が溝SD1から出土している。SX1からは多様な土器が良好な状態で出土した。甕形土器、壺形土器、高坏形土器が出土しており、中期後半の器種構成を考えるうえでの好資料（一括資料）となるものである。

甕形土器は、口縁端をつまみあげるものや、口縁に凹線文をもち頸部に刻目の凸帯を貼付するものである。壺形土器は、口縁に凹線文をもつ小型壺である。高坏形土器は口縁部に凹線文をもち、やや内湾するものである。脚部に矢羽根透かしをもっている。

各器種とも弥生第IV様式に属するものである。

## (2) 古墳時代

**遺構** 本調査検出の竪穴式住居址は古墳時代の築造と考えられる。切り合い関係から S B 1 が S B 2 に先行する。平面形は四角形プランで、支柱穴は S B 1 で 4 本を検出した。S B 1 では壁体沿いに壁体溝が巡る。その溝中に小ピットが検出された。S B 2 では壁体溝は検出されなかったものの、S B 1 と同様の小ピットが検出された。さらには、S B 1 の床面にて無数の小ピットが検出された。これら小ピットは樽味高木遺跡〔梅木・宮内1992〕や松山大学構内遺跡 2 次調査〔梅木・宮内 1991〕など、松山平野の竪穴式住居址にみられる構築物である。

注目されるのは S B 1 である。埋土上層部出土の遺物は、弥生土器・土師器・須恵器が混在していたが、埋土下層部出土の遺物については一括性の高い資料である。床面出土の小型丸底壺は、口径が胴部径より小さく、頸部はやや短くなっている。甕形土器は口縁端部の内傾と肥厚はあまりみられない。高環形土器は、口縁部は内湾して立ち上がり口縁端がやや外反する形態をとる。形式学的には樽味高木遺跡 S B 5 号住居址よりはやや新しい時期のものと考えられる。古墳時代中期後半の土器様相が知れるものとして好資料となるものである。

## (3) 線刻画（絵画）土器の出土

第Ⅳ層中から船を描いた線刻画（絵画）土器が出土した。土器は復元すると松山平野における弥生時代後期の複合口縁壺形土器になるものと考えられる。本調査出土の線刻画（絵画）土器の特徴は、従来出土しているものにはない表現方法で描かれているところである。特に、船の本体や人間の表現などはこれまでにない意匠である。船については、船体の羽状文による充填や、スピード感のある櫂の表現などがそれである。また、人間については、従来、足は 1 本線もしくは 2 本線で描かれているものがほとんどであるが斜線により充填している点の特徴である。船が描かれている土器はこれまでも出土例はあるが、今回出土のものはそれらに較べ表現方法がよりリアルで、なおかつ写実性に富んでいる。しかも非常に丁寧な線刻を施しているところなども注目されるところである。

今回出土の線刻画（絵画）土器は、原始・古代の船舶の構造を考えるうえでは重要でありかつ貴重な資料である。一方、本調査地は第 1 図からもわかるように海岸からはなれた内陸の平野部にあっている。このような内陸地域から海に関連するものを描いた土器が出土したことは非常に興味深く、間接的ではあるが内陸集落と海のつながりを知る 1 つの手がかりとなるものである。

なお、線刻画については石野博信、佐原 真、橋本裕行、藤田三郎、朝鮮系軟質土器については田中清美、今津啓子ほか多くの方々の指導と助言を賜った。感謝申し上げます（敬称略）。

〔参考文献〕

- 佐原 真 1990 「弥生土器の絵画」 『考古学雑誌』第66巻第1号
- 春成 秀爾 1991 「絵画から記号へ」 国立歴史民俗博物館研究報告第35集
- 橋本 裕行 1988 「東日本弥生土器絵画・記号総論」 橿原考古学研究所論集
- 藤田 三郎 1983 『唐古・鍵遺跡13・14・15次発掘調査概報』 田原本町教育委員会  
 1984 『唐古・鍵遺跡16・18・19次発掘調査概報』 田原本町教育委員会  
 1986 『唐古・鍵遺跡22・24・25次発掘調査概報』 田原本町教育委員会  
 1989 『唐古・鍵遺跡32・33次発掘調査概報』 田原本町教育委員会
- 永島暉臣慎・中尾 芳治 1982 『長原遺跡発掘調査報告』 勸 大阪市文化財協会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986 「絵画と記号」
- 京都府京都文化博物館 1989 「海を渡って来た人と文化」
- 林 巳奈夫 1978 『漢代の分物』 京都大学人物科学研究所
- ヒラリー・スチュアート 1987 「海と川のインディアン」
- 今津 啓子 1987 「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」 『東アジアの考古と歴史下』  
 岡崎 敬先生退官記念論集
- 韓式系土器研究会 1991 『韓式系土器研究Ⅲ』
- 梅木 謙一 1989 「樽味高木遺跡」 『桑原地区の遺跡』 勸松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

遺構・遺物一覧（宮内慎一）

(1) 以上の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。

例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。

(3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴上→胴部上位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、蜜→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長(1~4) →「1~4 mm大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良

樽味高木遺跡3次調査地

表26 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	支柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
					高床	土壌	炉	カマド		
1	古墳中期	隅丸方形	5.7×5.0×0.28	4		○	○		○	SB2,SK1,SD3に切られる。
2	古墳中期以降	隅丸方形	5.6×3.6× $\alpha$	(2)		○			○	SD1を切る。

表27 掘立柱建物址一覧

掘立	規 模 (間)	方位	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	2×2	東西	400(13.3)	6.5, 6.8	315(10.5)	5.1, 5.4	12.6	弥生～古墳	SD1を切る

表28 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A1～A5	U字状	19.00×0.95×0.30	黒褐色土	弥生・須恵	SK2に切られる。	弥生以降
2	B1～C4	U字状	13.50×0.85×0.15	黒褐色土	弥生・土師・須恵		弥生以降
3	A4	凹レンズ状	1.20×0.36×0.17	暗褐色土		SB1を切る。	古墳中期以降
4	B5	皿状	0.50×0.25×0.06	暗褐色土		SB1に切られる。	古墳中期以前

表29 土壌一覧

土壌 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	A5	長楕円形	摺鉢状	2.50×1.75×0.70	黒色粘質土		SB1を切る。	古墳中期以降
2	C5	長方形	皿状	2.10×1.25×0.25	褐色土	弥生	SD1を切る。 SB2床面検出	弥生以降
3	A3	楕円形	摺鉢状	1.30×0.92×0.18	褐色土	弥生・土師・須恵	SK8を切る。	時期不明
4	A3	楕円形	皿状	1.70×0.60×0.07	暗褐色土	土師・須恵		時期不明
5	A4	楕円形	皿状	1.15×0.70×0.20	暗褐色土	土師・須恵	SB1床面	古墳中期
6	C2	円形	逆台形状	1.20×0.30×0.25	暗褐色土			時期不明
7	C3	円形	皿状	1.00×0.50×0.15	暗褐色土			時期不明
8	A3	方形	皿状	1.40×0.60×0.10	暗褐色土	弥生・土師・須恵	SK3に切られる。	時期不明

遺物観察表

表30 SB1上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
1	坏身	口径 (10.2) 受部径(12.1) 残高 3.0	たちあがりは直線的にのび、端部は内傾する凹面をなす。受部端に沈線状の凹み。	⑪一回転ナデ ⑫一回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎			
2	坏身	受部径(12.0) 残高 2.5	受部は比較的長く、やや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎			
3	坏身	口径 (12.0) 受部径(14.8)	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部はほぼ水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎			
4	高坏	脚部径(4.9) 残高 3.0	ハの字状に開く高坏の脚部片。スカシ窓あり。	⑬一回転ナデ ⑭一回転カキ目	⑮一ナデ ⑯一回転ナデ	青灰色	密 ◎			
5	高坏	脚部径 (9.0) 残高 2.9	高坏脚部小片。脚部部に1状の凸線が巡る。スカシ窓看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎			
6	甕	口径 (14.3) 残高 3.7	内湾する口縁部。口縁端部はわずかに内側に突出する。	⑰一ハケ(6本/1cm)→ナデ ⑱一ハケ(6本/1cm)	⑲一ハケ→ナデ ⑳一ナデ	黄褐色	石・長(1~2) ◎			32
7	甕	口径 (15.6) 残高 3.0	内湾する口縁部。口縁部上部に口曲部をもつ。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色	石・長(1~2) ◎			
8	壺	頸部径(21.0) 残高 7.8	壺形土器の頸部片。押圧による2条の凸帯が貼付される。	㉑一ヨコナデ ㉒一ヘラミガキ	ヨコナデ	灰褐色	石・長(1~5) ◎			32
9	壺	口径 (12.4) 残高 4.6	外反する口縁部。口縁端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	㉓一乳褐色 ㉔一赤褐色	石・長(1~2) ○			32
10	碗	口径 (14.0) 残高 4.6	内湾気味にたちあがる口縁部。端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	㉕一黄褐色 ㉖一黒灰色	密 ◎			32
11	高坏	残高 2.5	高坏の脚部小片。屈曲部上下位に半截竹管文及び竹管文を施す。円孔看取。	ハケ(10本/1cm)	ハケ→ナデ	㉗一褐色 ㉘一暗褐色	石・長(1~2) ◎			
12	高坏	脚部径(21.7) 残高 3.2	脚部部は拡張し、裾下部に4条の擬凹線文、端面に2条の沈線文を施す。		ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~4) ◎			32

表31 SB1上層出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
13	扁平片刃石斧	完形	粘板岩	9.6	3.4	1.1	63.958		32

表32 SB1下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 焼	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
14	甕	口径 (14.0) 残高 5.2	内湾して外反する口縁部。端部は先細りする。	⑴ ヨコナデ ⑵ ハケ(7本/1cm)	⑶ ヨコナデ ⑷ ヘラケズリ	黄灰色	石・長(1~3) ○			33

樽味高木遺跡 3次調査地

S B 1 下層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
15	甕	口径 (13.4) 残高 3.7	外反する口縁部。 1/6の残存。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤褐色	密 ○		
16	甕	口径 (13.8) 残高 4.4	口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	㊶-ヨコナデ ㊷-ハケ→ヨコナデ	㊶-ヨコナデ ㊷-ヘラケズリ	㊸-褐色 ㊹-赤褐色	密 ◎		33
17	甕	口径 (12.1) 残高 3.0	内湾気味にたちあがる口縁部。端部は丸い。	ナデ	ハケ→ナデ	㊸-灰黄色 ㊹-黄褐色	石・長(1~2) ◎		
18	甕	口径 (13.4) 残高 3.3	外湾してたちあがる口縁部。端部は丸くおさめる。	㊶-ヨコナデ ㊷-ハケ	ヨコナデ	㊸-黒灰色 ㊹-黄灰色	密 ◎		
19	甕	口径 (17.6) 残高 2.7	口縁部はわずかに内湾し、端部は外方に突出する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄灰色	石・長(1~2) ◎		
20	甕	口径 (18.2) 残高 3.7	内湾する口縁部。端部はコ字状でやや内傾する。	摩滅の為不明	ヨコナデ	黄灰色	石・長(1~2) ◎		33
21	甕	口径 (13.8) 残高 3.0	外反する口縁部。端部はわずかに外方に突出する。 1/8の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	㊸-灰黄色 ㊹-黄褐色	密 ◎		
22	壺	口径 (17.4) 残高 5.7	外反する頸部に、外反する口縁部がつく。	ヨコナデ	㊶-摩滅の為不明 ㊷-ヨコナデ	㊸-乳褐色 ㊹-赤褐色	石・長(1~2) 金 ○		33
23	小型丸底壺	口径 7.8 器高 9.2	完形品。肩部は強く張り、胴下半はすままる。口縁部はやや内湾し、端部は先細り。	㊶-ヨコナデ ㊷上-ハケ(7本/1cm) →ヨコナデ ㊷下-ナデ	㊶-ヨコナデ ㊷-ナデ	㊸-乳褐色 ㊹-黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎		33
24	小型丸底壺	残高 7.5	肩部の張りが強い。 2/3の残存。	ハケ(7本/1cm)	㊶-ハケ(7本/1cm) ㊷-ナデ	乳灰色	密 ◎		33
25	小型丸底壺	残高 6.5	肩部は張り、胴下半はすままる。胴部内面に指頭痕顕著。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	灰黄色	石・長(1~5) ◎		
26	壺	頸部径(12.2) 残高 20.3	半球形の胴部。	ハケ(10~12本/1cm)	㊷上-ヨコナデ ㊷下-ヘラケズリ	㊸-乳褐色 ㊹-赤褐色	石・長(1~5) ○		34
27	高坏	残高 3.7	器台の脚部小片。7条の沈線文と縦方向の有軸羽状文を施す。		ナデ	㊸-灰黄色 ㊹-灰色	石・長(1~2) ◎		
28	椀	口径 (11.2) 器高 5.3	内湾してたちあがる口縁部。端部は先細りする。底部は平底。	ナデ	摩滅の為不明	黄褐色	密 ◎		34
29	鉢	口径 6.7 器高 6.3	完形品。丸底の底部から内湾気味にたちあがり、口縁部は外反する。	ナデ	㊶-ハケ ㊷-ナデ	淡灰褐色	石・長(1~3) ◎	炉内	34
30	坏蓋	口径 (12.0) 残高 4.0	口縁部は外反気味に下がり、端部は内傾する。	㊸-回転ヘラ削り ㊶-回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		34
31	坏身	口径 (10.8) 受部径(12.8) 残高 3.0	たちあがり内傾し、端部は内傾する。受部はやや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		34



遺物観察表

S B 1 下層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
32	高坏	口径 (17.0) 底径 12.6 残高 13.6	口縁端部は外反する。 屈曲部は丸みのある段をもつ。	ヨコナテ	ヨコナテ	淡黄色	石・長(1~3) ◎		35
33	高坏	口径 (16.7) 残高 5.1	口縁部は外反し、屈曲部に段をもつ。充墳技法。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤褐色	石・長(1~3) ○		35
34	高坏	口径 (18.0) 残高 5.6	深い坏部。屈曲部は丸みのある段をもつ。口縁端部はややうすく丸い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄褐色	石・長(1~5) ○		35
35	高坏	残高 3.5	坏屈曲部は丸みのある段。1/6残存。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	⑥一暗褐色 ⑦一暗黄色	石・長(1~3) 金 ◎		35
36	高坏	口径 (13.2) 残高 6.2	内湾する口縁部。屈曲部にわずかに稜をもつ。充墳技法。	ナテ	ナテ	乳黄色	密 ○	黒斑	35
37	高坏	口径 (17.6) 残高 4.4	外傾外反する口縁部。端部は先細りする。屈曲部はかすかに稜をもつ。	ヨコナテ	ヨコナテ	⑥一黒灰色 ⑦一淡黄色	密 ◎	黒斑	
38	高坏	残高 4.0	内湾する口縁部。坏屈曲部はかすかに稜をもつ。	ヨコナテ	ヨコナテ	⑥一灰褐色 ⑦一淡黄色	石・長 1 ◎		35
39	高坏	口径 (18.0) 残高 3.7	外傾外反する口縁部1/3残存。	ハケ→ヨコナテ	ヨコナテ	黄褐色	密 ◎		
40	高坏	残高 12.7	坏屈曲部は稜をもつ。器壁は厚い。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄色	石・長(1~2) 金 ○		36
41	高坏	底径 11.6 残高 6.2	裾部は長く内湾し、器壁は厚い。柱-裾部内面に稜あり。	⑧一板ナテ ⑨一ヨコナテ	ヨコナテ	⑥一褐色 ⑦一茶褐色	石・長(1~2) 金 ◎		36
42	高坏	底径 10.6 残高 7.2	柱部はややふくらみ、裾部は長い。柱-裾部内面に稜あり。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳灰色	石・長(1~3) ◎		36
43	高坏	残高 6.4	組み合わせ技法。	ヨコナテ	⑩一ハケ→ナテ ⑪一ヨコナテ	乳黄色	石・長(1~3) ◎		36
44	高坏	残高 6.5	三角錐状の柱部。充墳技法。	ヨコナテ	ヨコナテ	⑥一赤褐色 ⑦一乳棕色	密 ◎		36
45	高坏	底径 (11.8) 残高 3.5	高坏の脚部片。	⑫一ヨコナテ ⑬一ハケ(6本/1cm)・ナテ	ナテ	褐色	密 ◎		

表33 S B 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
46	甕	口径 (18.8) 残高 2.5	内湾する口縁部。端部は丸くおさめる。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳褐色	石・長(1~2) ◎		

樽味高木遺跡 3次調査地

S B 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
47	坏蓋	口径 (11.8) 残高 2.7	天井部と口縁部の境界は凹線による。口縁部は内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
48	坏蓋	口径 (12.8) 残高 3.4	天井部と口縁部の境界の稜は段差による。口縁部は外反し、端部は内傾。	㊦-回転ヘラ削り ㊧-回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
49	坏身	受部径(12.8) 残高 2.1	たちあがりは内傾。受部は太く、水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		

表34 S D 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
50	壺	残高 5.3	頸部片。上下に3条の沈線文を施し、その間に弧文が施文される。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	㊦-茶褐色 ㊧-黄褐色	石・長(1~3) 金 ◎	SD1	37
51	壺	頸部径(22.0)	頸部片。1条の凸帯が貼付され、凸帯上に斜格子文を施す。	ハケ(5~6本/1cm)	ヨコナデ	㊦-黄褐色 ㊧-淡褐色	石・長(1~2) ◎	SD1	
52	甗	口径 (23.7) 残高 1.7	口縁部は押圧による凸帯が貼付される。口縁端部は上方につまみあげられる。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~3) ◎	SD1	
53	甗	口径 (16.2) 残高 2.9	小片。頸部外面にヘラによる2条の沈線文を施す。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	褐色	石・長(1~2) ○	SD1	
54	高坏	脚底径 10.3 残高 10.3	脚中位に6条の沈線文、脚裾部に4条の凹線文、端部に1条の沈線文を施す。	㊦-ヘラミガキ ㊧-ナデ	㊦-ヘラミガキ ㊧-摩滅の為不明	㊦-赤褐色 ㊧-暗褐色	石・長(1~4) ◎	SD1	37
55	高坏	残高 5.1	高坏の脚部片。組み合わせ技法。	ヘラミガキ	ナデ	㊦-茶褐色 ㊧-灰黄色	密 ◎	SD1	
56	壺	底径 9.0 残高 3.4	やや突出する底部から上外方に内湾気味にたちあがる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	㊦-暗褐色 ㊧-灰褐色	石・長(1~5) ◎	SD2	37

表35 S D 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
57	不明	完形	緑泥片岩	15.1	7.4	2.4	387.5		37

表36 S X 1 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
58	甗	口径 (17.6) 残高 21.4	口縁端部を上方につまみあげる。頸部に横方向のナデを施す。	㊦-ヨコナデ ㊧上-ハケ(4本/1cm) ㊧下-ヘラミガキ	㊦-ヨコナデ ㊧上-ハケ ㊧下-ヘラケズリ	㊦-赤褐色 ㊧-黄褐色	石・長(1~3) ◎		38

遺物観察表

S X 1出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
59	甗	口径 (16.0) 残高 19.5	水平に折れまがる口縁部。端部はわずかに上方につまみあげられている。	①—ヨコナデ ②上—ハケ(6本/1cm) ②下—ハケ→ヘラミガキ	①—ヨコナデ ②—ハケ(6本/1cm)	赤褐色	石・長(1~2) ◎		38
60	甗	口径 (17.0) 残高 12.8	口縁端部はわずかに上方につまみあげられ、口唇部に1条の凹線文を施す。	①—ヨコナデ ②—ナデ ③—ハケ(6本/1cm)	①—ヨコナデ ②—ハケ(10本/1cm)	赤褐色	石・長(1~2) ◎	煤	38
61	甗	口径 (22.4) 残高 10.5	口縁部に2条の凹線文をもち、頸部に押圧による凸帯を貼付する。	①—ヨコナデ ②—ハケ(10~11本/1cm)	①—ヨコナデ ②—ハケ(10~11本/1cm)	褐色	密 ◎		38
62	甗	口径 (20.4) 残高 7.8	口縁部に2条の凹線文をもち、頸部に押圧による刻目凸帯を貼付。	①—ヨコナデ ②—ハケ(6本/1cm)	①—ヨコナデ ②—ハケ(6本/1cm)	灰黄褐色	石・長(1~2) ◎		39
63	壺	口径 (13.0) 残高 5.8	口縁部に3条の凹線文を施す。口縁部内面は、わずかにナデ凹む。	①—ヨコナデ ②—ヘラミガキ	①—ヨコナデ ②—ナデ	黄褐色	石・長(1~2) ◎		39
64	高坏	口径 (19.2) 残高 6.0	口縁部はやや内湾し5条の凹線文を施す。	①上—ナデ ②下—ハケ(10本/1cm)	①上—ヨコナデ ②下—ハケ(14本/1cm) →ヘラミガキ	褐色	密 ◎	黒斑	39
65	高坏	底径 (11.3) 残高 2.6	64と同一個体か。裾部に3条の凹線文。裾部に1条の凹線文。矢羽透し看取。	①上—ハケ→ヨコナデ ②下—ナデ	①上—ナデ ②下—ヨコナデ	褐色	密 ◎		39
66	甗	底径 (5.6) 残高 3.1	平底。わずかに直立して立ちあがる。	①—ヘラミガキ ②—ナデ	ナデ(指頭痕)	褐色	密 ◎		39
67	甗	底径 5.7 残高 4.0	平底。内傾した後、外傾して立ち上がる。	①—ヘラミガキ ②—ナデ	ナデ	赤褐色	石・長(1~2) ◎		39
68	甗	底径 7.8 残高 4.1	平底。外傾して立ち上がる。	①—ヘラミガキ ②—ナデ	ナデ(指頭痕)	灰褐色	石・長(1~2) ◎		
69	甗	底径 7.8 残高 2.2	平底。外湾しながら立ち上がる。	①—ヘラミガキ ②—ナデ	ナデ(指頭痕顕著)	灰褐色	石・長(1~2) ◎		39

表37 第IV層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土	備 考	図版
				外 面	内 面				
70	坏蓋	口径 (12.0) 稜径 (12.0) 器高 4.4	天井部はやや丸みをもつ。口縁部は内湾気味に下がり口縁端部は内傾する。	①—回転ヘラ削り ②—回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		40
71	坏蓋	口径 (13.3) 稜径 (13.2) 器高 5.1	天井部は丸みをもち、稜は段差により浮かびあがらせている。口縁端部は凹面。	①—回転ヘラ削り ②—回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		40
72	坏蓋	口径 (11.3) 稜径 (11.2) 残高 4.8	天井部は丸く、稜はわずかに突出する。口縁端部は内傾	①—回転ヘラ削り ②—回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
73	蓋	つまみ径3.1 残高 1.9	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹む。	①—つまみ—ナデ ②—回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎		

樽味高木遺跡 3次調査地

第IV層 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎焼	土成	備考	図版
				外面	内面					
74	坏身	口径 11.0 受部径 13.4 器高 5.0	ほぼ完形。たちあがりは内傾し、端部は内傾。底部はやや平底。	㊦一回転ナデ ㊧一回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			40
75	坏身	口径 (12.0) 受部径(13.8) 残高 4.5	たちあがりは内傾し、端部はわずかに凹面をなす。受部は短く上方にのびる。	㊦一回転ナデ ㊧一回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎			
76	坏身	口径 (13.2) 受部径(15.8) 器高 2.8	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部は、太く、底部は平底。	㊦一回転ナデ ㊧一回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎			40
77	坏身	口径 (13.2) 受部径(15.5) 器高 3.3	たちあがりは厚みがなく、端部は丸い。受部は太くやや上方にのび、底部は平底。	㊦一回転ナデ ㊧一回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	密 ◎			40
78	坏身	口径 (9.2) 残高 3.3	たちあがりは非常に短く内傾。底部は深さはあるが扁平底。	㊦一回転ナデ ㊧一回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			
79	高坏	底径 (8.2) 残高 5.0	低脚の高坏。脚端部付近は段をなして下がり、端部は内傾。スカシあり。	㊨中 回転カキ目 ㊨下 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			
80	高坏	底径 (9.8) 残高 5.4	脚部はハの字状に外反して下がり、端部付近で段をなし内傾、スカシ看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎			40
81	壺	口径 (18.4) 残高 10.6	やや肩のはる胴部から外反気味にたちあがり、口縁端は下方に肥厚。	㊦一回転ナデ ㊨一平行叩き	㊦一回転ナデ ㊨一円弧叩き	青灰色 灰白色	密 ◎			40
82	壺	口径 (7.4) 残高 3.6	短くやや上方にのびる口縁部。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	密 ○			
83	提瓶	口径 (5.9) 残高 5.0	口縁端は内側に湾曲し端部は丸い。中に1条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	石・長(1~3) ◎	自然釉		
84	甕	口径 (12.0) 残高 2.8	口縁部は上方に大きく開き端部は内傾する段をなす。口縁に刺突文、他に波状文あり。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			
85	甕	残高 3.3	甕の肩部片。外面に2条の沈線が巡り、沈線間に刺突列点文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎			
86	甕	口径 (21.0) 残高 5.6	ゆるやかに曲がる「く」字状口縁。口縁部中位は肥厚する。	㊦ 摩滅の為不明 ㊨ ナデ(指頭痕)	㊦ ナデ ㊨ ハケ	乳灰色	石・長(1~2) 金 ◎			41
87	甕	口径 (20.1) 残高 4.2	内湾する口縁部。口縁上部に屈曲部をもち、口縁端部は内傾する。	摩滅の為不明	ナデ	灰褐色	密 ◎			41
88	甕	口径 (20.0) 残高 3.8	口縁部は内湾気味に立ちあがり内端部が肥厚する。	摩滅の為不明	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~4) ◎			
89	甕	口径 (20.6) 残高 3.5	口縁部は内湾気味に立ちあがり端部は内傾する稜をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	赤褐色	石・長(1~3) ○			
90	壺	口径 (18.6) 残高 2.7	口縁端部はわずかに上方に肥厚し、口縁部に2条の凹線文を施す。	ヨコナデ	ナデ	暗灰褐色	石・長(1~2) ◎			

遺物観察表

第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
91	壺	口径 (23.8) 残高 4.0	複合口縁壺。口縁拡張部は内傾し、斜格子文を施す。	ナデ	ヨコナデ	乳黄茶色	石・長(1~2) ◎		41
92	高坏	口径 14.2 残高 6.0	内湾する口縁部。坏屈曲部はかすかに稜をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	茶褐色	石・長(1~4) ○		
93	高坏	口径 (14.2) 残高 3.6	内湾する口縁部、端部は先細りする。	ヨコナデ	摩滅の為不明	黄褐色	石・長(1~2) ◎		
94	高坏	口径 (14.7) 残高 4.1	口縁部は内湾し、端部付近で外湾する。	ヨコナデ	摩滅の為不明	茶橙色	石・長(1) ◎		41
95	高坏	底径 10.2 残高 5.6	裾部は長く内湾し、柱一裾部内面にわずかに稜あり。	摩滅の為不明	ヨコナデ	暗赤褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎		41
96	小型 丸底壺	口径 (6.7) 器高 7.2	完形品。肩部の張りは弱く胴部最大径は、口径を凌ぐ、口縁端部は先細りする。	摩滅の為不明	ナデ	黒灰色 乳灰色 乳灰色	密 ◎		41
97	ミニチュア	口径 (4.7) 残高 4.0	丸底。内外面共に指頭痕顕著。	ナデ	ナデ	灰褐色	密 ◎		
98	甌		甌の把手。上外方に湾曲する。			淡橙褐色 茶褐色	石・長(1~3) ◎		41
99	甌		甌の把手			乳茶色	密 ◎		
100	甕	底径 (7.6) 残高 3.3	くびれの上げ底を呈する甕の底部。	ナデ	ケズリ	乳茶色 茶褐色	密◎		
101	甕	底径 (4.4) 残高 3.1	丸みのある小さい平底。器壁は厚い。	タタキ	摩滅の為不明	乳黄色 乳赤茶色	石・長(1~3) ○		
102	壺	底径 (8.4) 残高 1.7	平底。上外方にたちあがる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳橙色 乳灰色	石・長(1~3) ◎		
103	壺	底径 (7.2) 残高 2.5	小片。	摩滅の為不明	不明	淡茶褐色 灰黄色	石・長(1~2) ◎		

表38 第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
104	石鏃	完形	緑泥片岩	2.7	1.15	0.4	0.872		41



第4章

タル ミ シ タン ジ  
樽味四反地遺跡

— 2・3・4 次調査地 —





## 第4章 樽味四反地遺跡2・3・4次調査地

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査に至る経緯

1991（平成3）年6月6日、日浅 忠哲氏より松山市樽味4丁目216地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された（第58図）。

当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『81 樽味遺物包含地』内にあたる。当地を含む桑原・樽味地区はこれまでも数多くの調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている。同包含地内では樽味四反地遺跡1次調査地において古墳～中世の自然流路やAT火山灰が検出されている。樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）1次調査では弥生時代前期の土壙や溝が、同2次調査では中世の掘立柱建物址や溝、水口、柵列等の集落関連遺構が検出されている。そのほか樽味立添遺跡では弥生時代から古墳時代の集落関連遺構が検出され、包含層中から『貨泉』が出土している。とりわけ当地の北方、約80m離れた地点に船が描かれた土器が出土した樽味高木遺跡3次調査地が存在するほか、当地に隣接して古墳時代中期の竪穴式住居址を含む集落関連遺構や遺物を検出した樽味高木遺跡1次調査地などがある。

周辺地域では、北は文京遺跡（愛媛大学構内）などを含む道後城北遺跡群が、南には白鳳期創建とされる来住廃寺跡や久米高畑遺跡群があり、弥生時代から中世まで断続して営まれた大集落地帯が存在する。

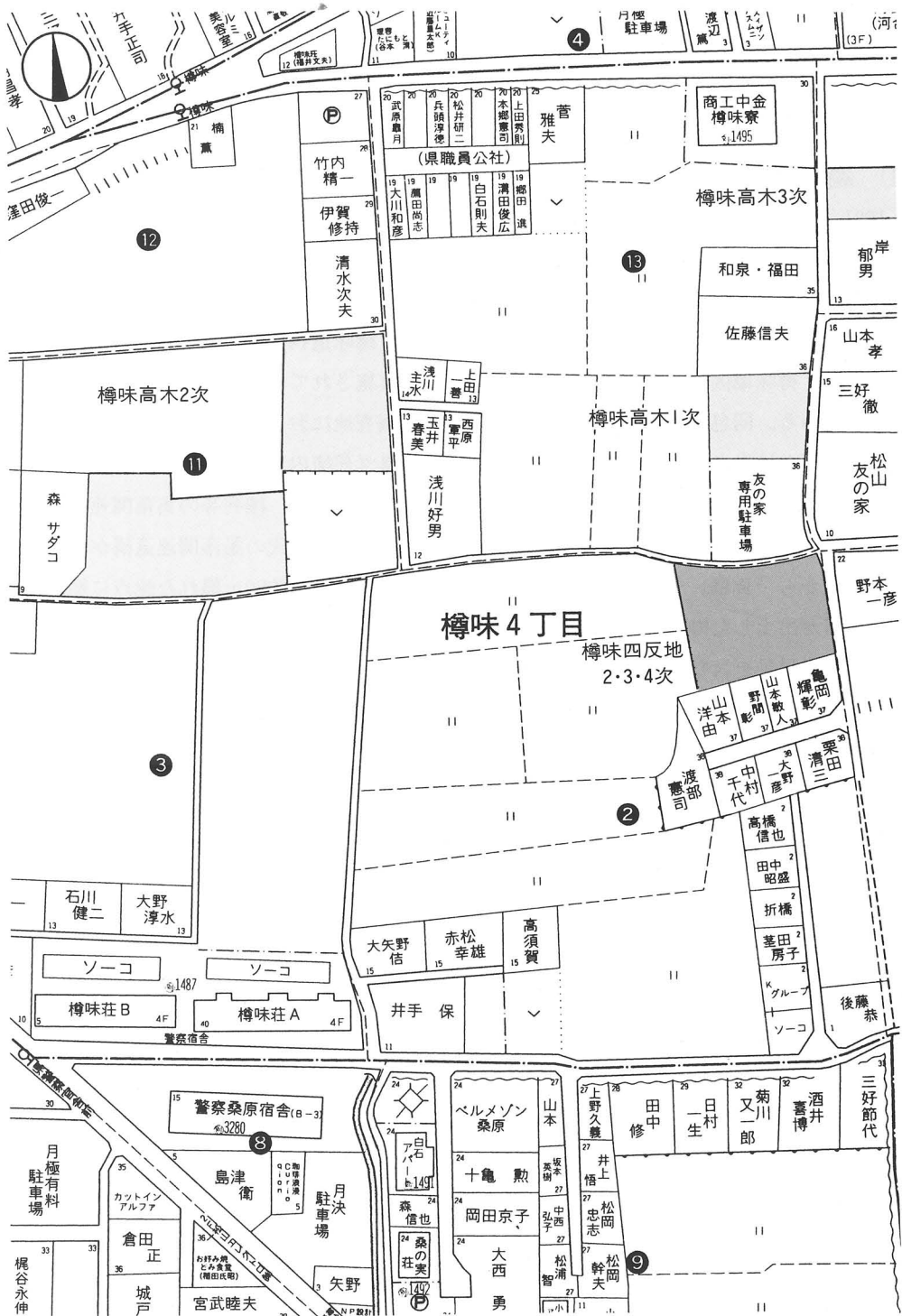
これらのことから、文化教育課・財団法人 松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は当該地における埋蔵文化財の有無とさらには遺跡の範囲やその性格を確認するため 1991（平成3）年7月30日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、溝状遺構2条、柱穴7基のほか弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層を検出した。この結果を受け文化教育課・埋文センターと申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発によって失われる遺構・遺物について記録保存のために発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代から中世にかけての当該地及び周辺地域の集落構造解明を主目的とし埋文センターが主体となり申請者の協力のもと1992（平成4）年9月1日に開始した。

#### (2) 調査の経緯

調査地は石手川左岸の洪積世扇状地上、標高約40m前後に立地する。調査以前は耕地整備された水田であった。調査申請面積は937㎡である。

今回の調査は平成4年度と5年度の2度に分けて行われた（第59図）。平成4年度の調査は調査地の南側部分462.71㎡が調査対象地である。調査地西半部300㎡は2次調査地（国庫補助事業）、残りの162.71㎡は3次調査地（平成4年度分）として調査を実施した。

樽味四反地遺跡 2・3・4次調査地



第58図 調査地位置図

## 調査の経過

翌年、平成5年度は調査地の北側部分474.08㎡が調査対象地である。4年度と同様に調査地を東西に分け、西半部229.43㎡を4次調査地（国庫補助事業）、残りの244.65㎡を3次調査地（平成5年度分）として調査を実施した。調査事務所、廃土運場等のため最終的な発掘調査面積は2・3・4次調査全体で700㎡余りとなった。

本報告書では2・3・4次調査において検出した遺構・遺物等が重複する可能性があるため各調査結果をまとめて、1遺跡の調査として報告する。

### (3) 調査組織

**調査地** 松山市樽味4丁目216

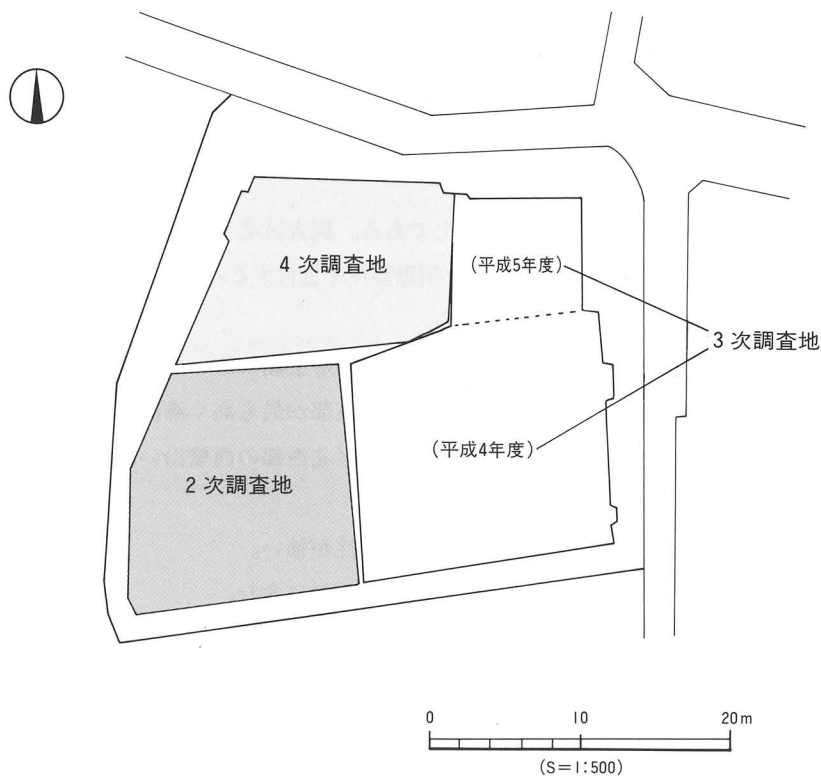
**遺跡名** 樽味四反地遺跡2・3・4次調査

**調査期間** 2次調査 1992（平成4）年9月1日～同年10月31日

3次調査 1992（平成4）年10月1日～同年10月31日  
1993（平成5）年8月1日～同年9月30日

4次調査 1993（平成5）年8月1日～同年9月30日

**調査面積** 937㎡



第59図 調査地測量図

調査担当 梅木 謙一  
宮内 慎一  
武正 良浩  
加島 次郎

調査作業員

高橋 恒、山本 圭、大久保英昭、小野 敬通、坂元 守、神 直哉、  
富山 貴之、広瀬 貴、溝部 真功、山口 裕二、山下 邦明、黒田 正機、  
林 亨、中島 宏、西原 聖二、小笠原聖二、金城 治男、川上 貴之、  
桧垣 貴仁、三宅 康孝、森田 浩司、石田真佐夫、野口 昌弘、森田 利恵、  
松本美知子、黒田 令子、持永 皆子、上西 真弓、生鷹 千代、竹下 加織

## 2. 層 位 (第60・61図、図版44)

本調査地の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層茶褐色土、第Ⅲ層灰褐色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層黄褐色土である。第Ⅴ層以下の土層は第60図に示すとおりである(深掘り地点)。

第Ⅰ層—近現代の農耕による客土で地表下20~30cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層—農耕に伴う床土である。近現代の陶磁器片が数点出土している。

第Ⅲ層—微弱な土色の差異からⅢ—A層灰色土、Ⅲ—B層灰色土(粘性強)、Ⅲ—C層灰褐色土に分層される。Ⅲ—A、B層は調査地南東部のみにみられ、Ⅲ—C層は調査区南半部ほぼ全域にみられる。遺物は土師器・須恵器・陶磁器片が少量出土している。

第Ⅳ層—炭化物の細片を多く含む黒褐色土である。調査区北半部のみにみられ、遺物は少量の弥生土器片と多量の土師器・須恵器片を包含する。そのほかに柱状片刃石斧・有溝石錘・管玉等が出土している。

第Ⅴ層—黄褐色土で調査区ほぼ全域でみられる。本層上面において遺構を検出している。

第Ⅴ層上面の標高を測量すると調査区北東部が最も高く漸次、南西部に向けて緩傾斜している。第Ⅵ層以下の土層は調査区北西部の西壁沿いに深堀をし土層観察を行ったものである。

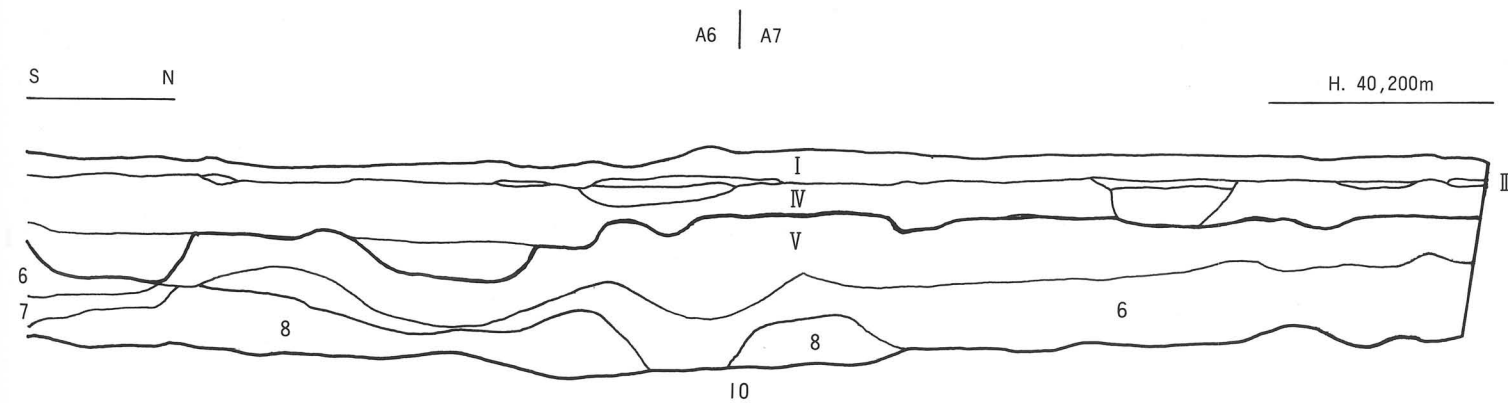
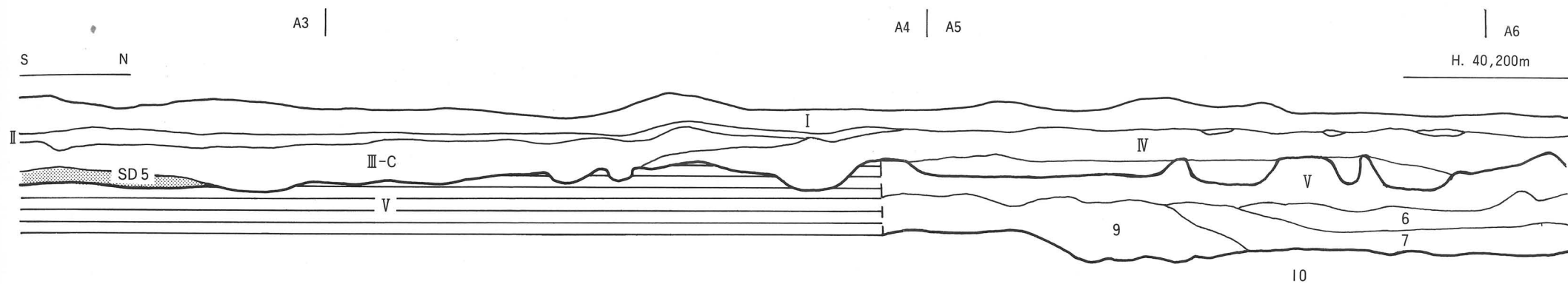
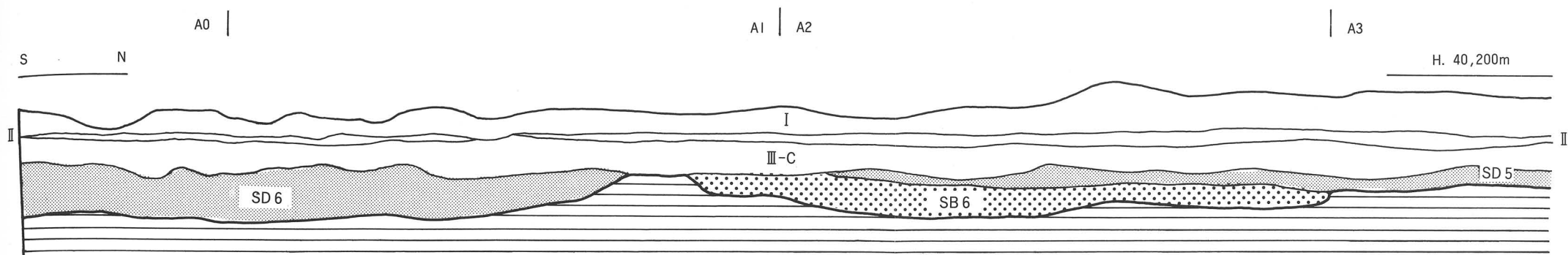
第Ⅵ層—第Ⅴ層よりやや色調の淡い黄褐色土で粘性が強い。

第Ⅶ層—黄褐色の粘質土で2~4mmの白色砂粒を多量に含む。

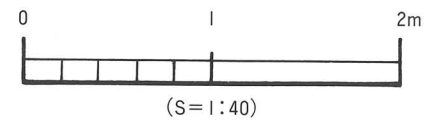
第Ⅷ層—暗褐色の砂礫土と砂質土が交互に四層堆積する。砂礫土層は2~5mmの小円礫で構成され、砂質土層は3~4mm大の砂礫が含まれる。

第Ⅸ層—色調は第Ⅷ層に類似するが、本層は5cm大の円礫で構成されている点で第Ⅷ層と異なる。

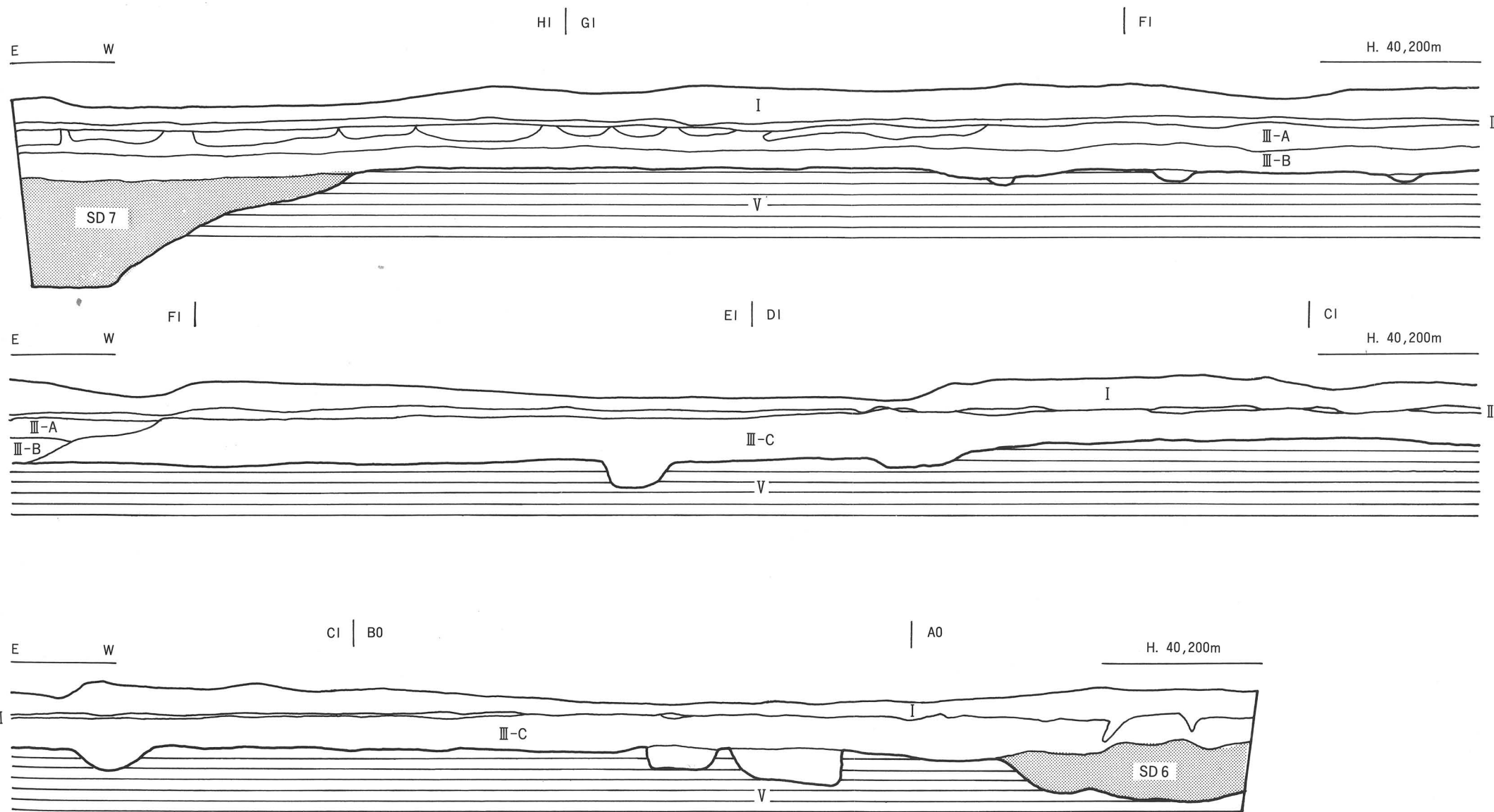
第Ⅹ層—黄褐色の砂礫層で、拳~人頭大の円礫が凝縮した状態であった。



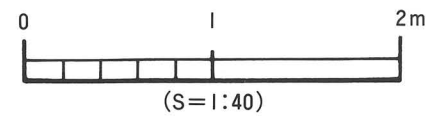
- I 表土 II 緑灰色土(床土) III-C 灰褐色土 IV 黒褐色土 V 黄褐色土  
 6 淡黄褐色粘質土 7 黄褐色粘質土 8 暗褐色砂礫 9 暗褐色砂礫(5cm大の礫)  
 10 黄褐色砂礫



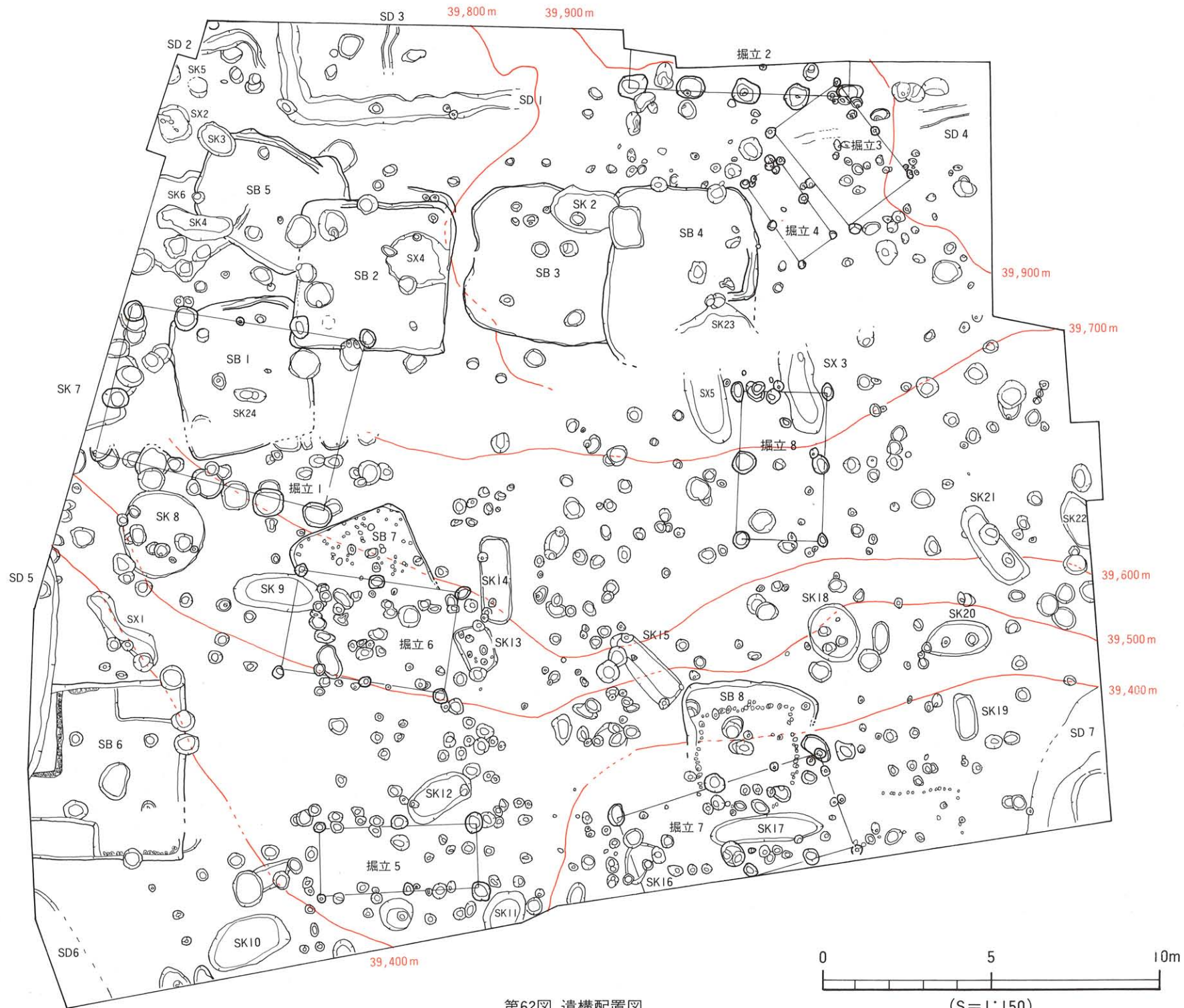
第60図 西壁土層図



- I 表土
- II 緑灰色土(床土)
- III-A 灰色土
- III-B 灰色土(粘性強)
- III-C 灰褐色土
- IV 黒褐色土
- V 黄褐色土



第61図 南壁土層図



第62図 遺構配置図

(S=1:150)

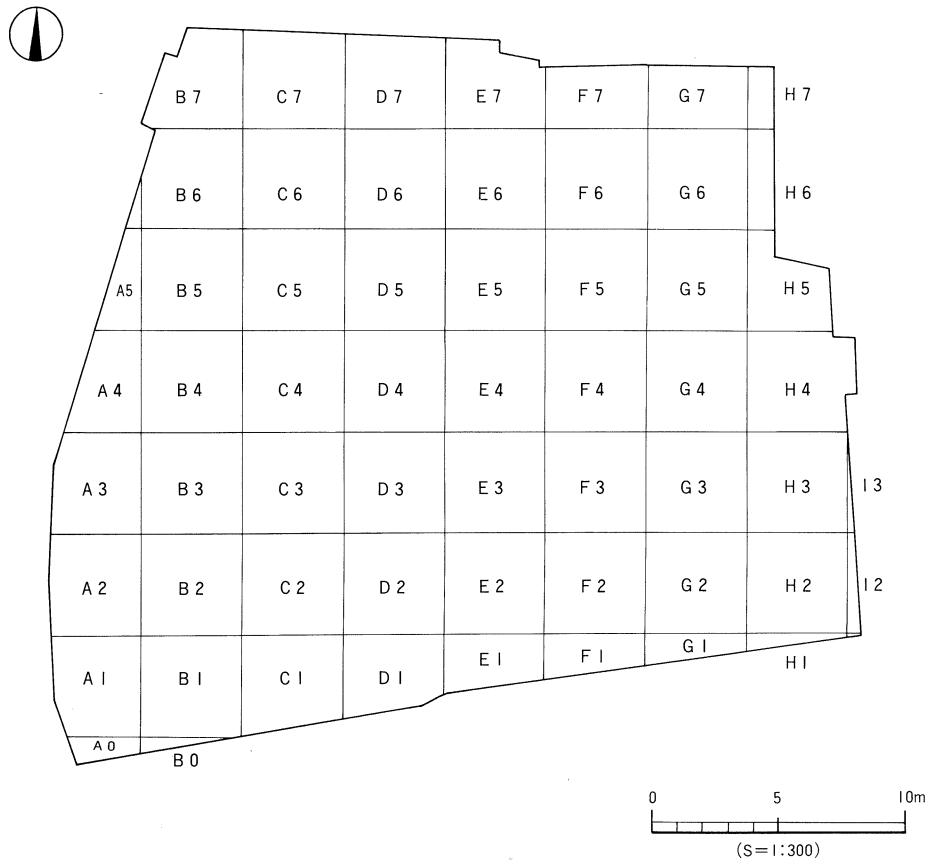


層 位

遺構は、第Ⅲ層中及び第Ⅴ層上面で検出した（第62図）。第Ⅲ層中では、14・15世紀代の遺物を含む溝1条（SD5）を検出した。第Ⅴ層上面では竪穴式住居址8棟、掘立柱建物址8棟、溝6条、土壇24基、柱穴763基、性格不明遺構5基を検出した。ただし第Ⅴ層上面検出の遺構はその深さなどから考えると本来は第Ⅳ層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものが多い。

これらのことから各層は出土遺物、検出遺構から判断すると、第Ⅲ層は古代～中世、第Ⅳ層は弥生～古代までに堆積したものと判断される。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリッドに分けた。呼称名は第63図に記す。



第63図 調査地区割図



### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) 竪穴式住居址

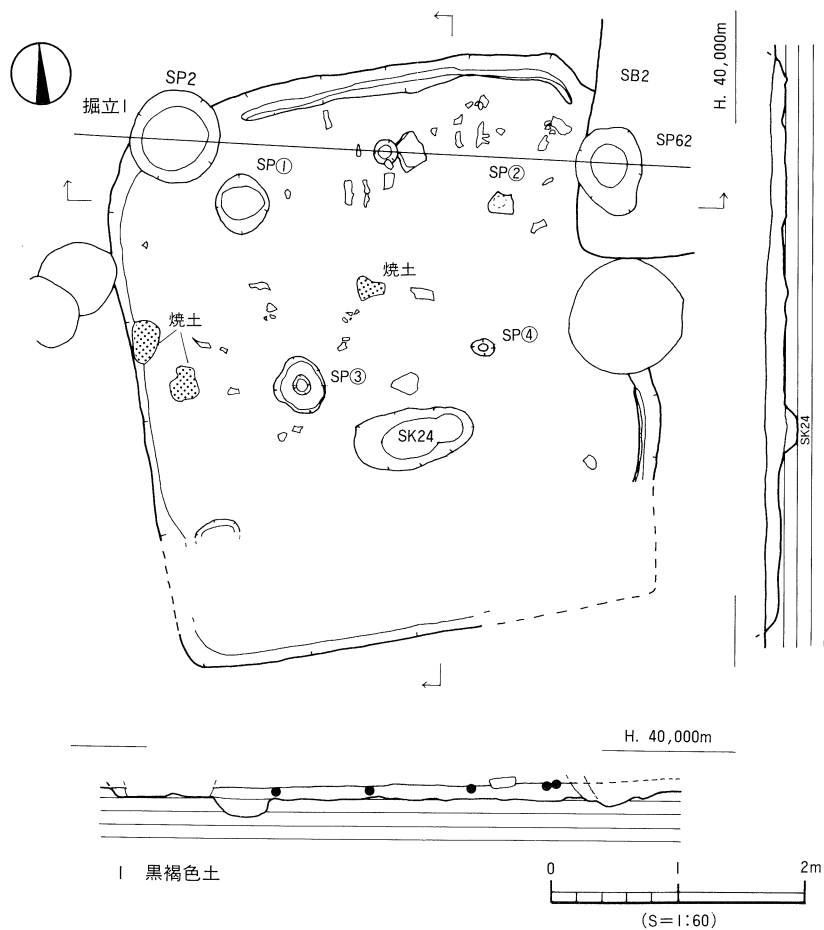
本調査において確認された竪穴式住居址は 8 棟である。すべて第 V 層上面での検出である。住居址は近現代の造成等により壁高が 10cm にみえないものもある。平面形は隅丸方形あるいは長方形プランをなす。

##### 1) 弥生時代

弥生時代の住居址は 2 棟 (SB 1・8) である。平面形は両者とも隅丸の方形プランをなす。

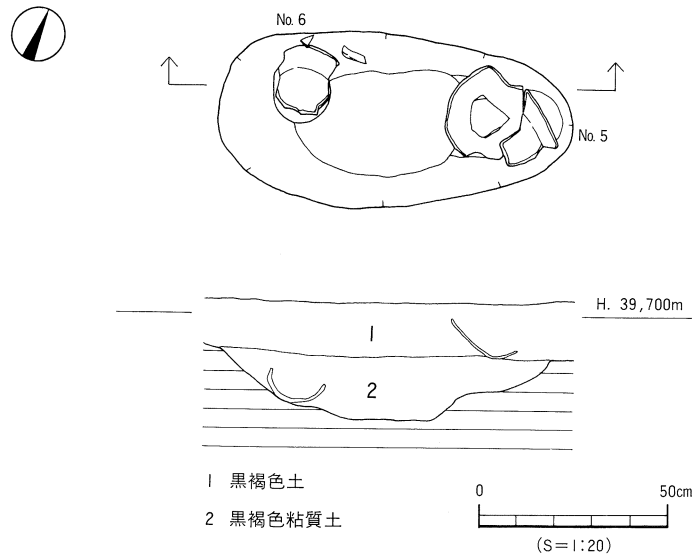
##### SB 1 (第 64・65 図、図版 47・48) [4 次調査]

調査区北西部 B 5 区に位置する。住居址北東部は SB 2 号住居址に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北 4.3m、東西 4.2m、壁高は 10cm を測る。埋土は黒褐色土である。本住居址を含め、各住居址の覆土の上には包含層である第 IV 層が堆積しているものの、住居址の遺存状況は良好といえるものではなかった。



第 64 図 SB 1 測量図

## 調査の概要



第65図 S B I 内 S K 24 測量図

主柱穴は S P ①・②・③・④の4本を検出したが、柱穴の出土状況から他に2本あるものと考えられ、主柱穴は6本であった可能性が高い。柱穴は円～楕円形で径10～50cm、深さ35～40cm、柱穴間は1.1～2.0mを測る。

住居址床面はほぼ平坦で比較的硬い。住居址北側の壁体に沿って幅20cm、深さ2～8cm、断面U字状の溝が検出された。

炉は検出されなかったものの住居址中央部と西壁付近の床面にて焼土を検出した。焼土は径20～30cmの範囲に分布するが、これに伴う落ち込みは未検出である。貯蔵穴 S K 24は住居址南側の床面にて検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は幅45cm、長さ94cm、深さ17cmを測る。埋土は住居址埋土と同様の黒褐色土である。

遺物は床面上には少なく、床面から浮いた状況で出土した。貯蔵穴からは大型と小型の鉢形土器が、住居址西壁付近の床面から緑色片岩製の石器素材が出土した。

### 出土遺物 (第66図、図版58)

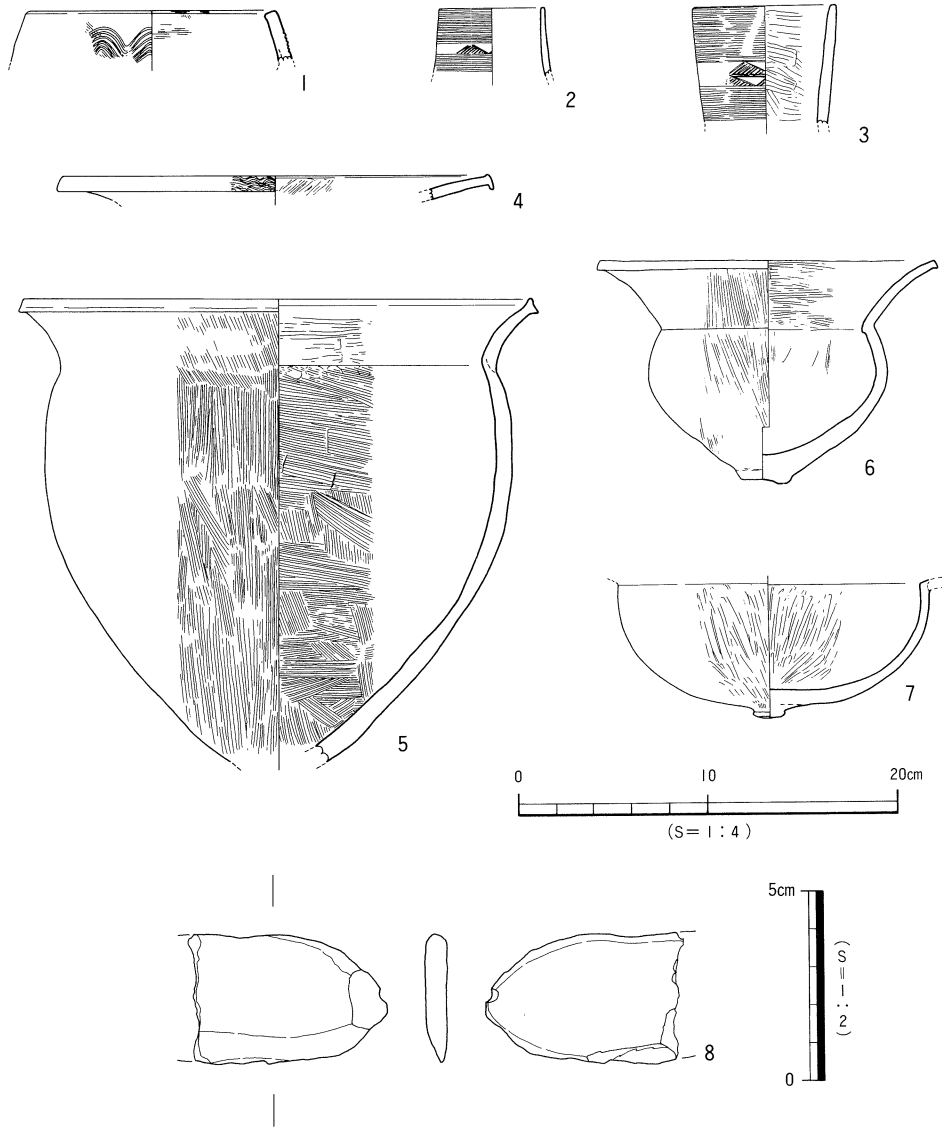
壺形土器 (1～3) 1は複合口縁壺の口縁部片である。内傾する口縁部で波状文を施す。2・3は直口壺の口縁部片である。楕描き細洗線文を施す。

器台形土器 (4) 受部の小片である。拡張された口縁端面には楕描波状文が施される。  
鉢形土器 (5～7) 5・6は貯蔵穴 S K 24出土の鉢形土器である。5は口径27cmを測る大型品である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は上下に拡張する。内外面共に刷毛目調整を施す。6はつば状に長く外反する口縁部を持ち、底部は突出する。外面は縦方向の刷毛目調整、口縁部内面は横方向の刷毛目調整、胴部内面は縦方向のケズリ痕を残す。7は底部

にボタン状の突出部をもつ。内外面共に刷毛目調整を施す。

石器素材(8) 8はSB1の床面直上出土の石器素材と考えられる石製品である。左半部を大きく欠く。法量は長さ5.2cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm、重量18.7gである。緑色片岩製。

時期：貯蔵穴SK24から出土した鉢形土器の形態及び調整等から、本住居址の廃棄時期は弥生時代後期末に比定される。



第66図 SB1出土遺物実測図

## 調査の概要

### S B 8 (第67図、図版48)〔3次調査〕

調査区南東部E 2～F 3区に位置する。本住居址は後世の削平が著しく、壁体は北壁のみの検出である。壁体の内側床面にて径2～6cm、深さ5～8cmの小ピットが方形状に並ぶことから、本住居址の施設かもしくは、別の遺構との重複の可能性も考えられる。

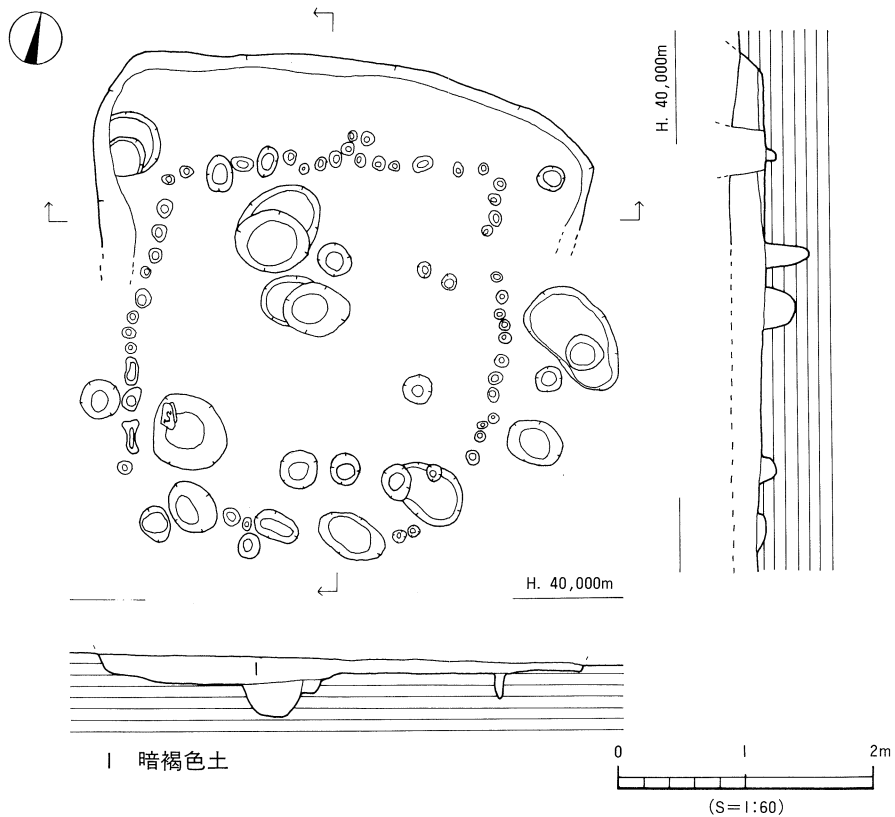
平面形は隅丸の方形状を呈するものと考えられ、規模は東西4m、南北検出長1.8m、壁高20cmを測る。床面は比較的硬い。埋土は暗褐色土である。床面にて大小数基の柱穴を検出したが本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。

#### 出土遺物 (第68図、図版59)

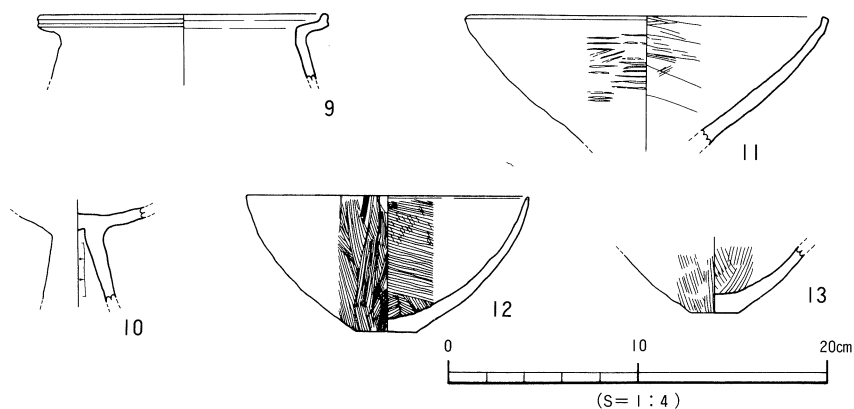
甕形土器 (9) 逆L字形口縁を呈する甕形土器。口縁端部は上方に拡張し、口縁端面に1条の凹線文を施す。内外面共に刷毛目調整を施す。

高環形土器 (10) 三角錐状の柱部。中空。柱部内面にケズリ調整を施す。

鉢形土器 (11～13) 11は体部は外傾して立ち上がり口縁部はやや内湾する。口縁端部はわずかに内方に屈曲する。体部外面に叩き調整、内面は刷毛目調整を施す。12は平底の底部



第67図 S B 8 測量図



第68図 SB 8 出土遺物実測図

から内湾気味に立ち上がり口縁部は直立する。口縁端部は先細りする。内外面共に刷毛目調整を施す。13は底部片。平底の底部から内湾気味に立ち上がる。内外面共に刷毛目調整を施す。

時期：鉢形土器は床面付近出土であることから本住居址の廃棄時に伴う遺物である可能性が高く、本住居址の廃棄・埋没時期は弥生時代後期末と考えられる。

## 2)古墳時代前期

古墳時代前期の住居址は3棟（SB 3・4・6）である。第V層上面で検出した。

### SB 6（第69図、図版49・50）〔2次調査〕

調査区南西隅A 1～B 3区に位置する。住居址北西部は溝SD 5に切られ、西壁は調査区外へ続く。南東部は攪乱により削平されている。平面形は隅丸の方形を呈するものと考えられ、規模は南北5.3m、東西検出長4.5m、壁高は30cmを測る。床面は比較的硬く、北から南に向けて緩傾斜をなす。

主柱穴はSP ①・②・③・④の4本である。柱穴は円～楕円形を呈し、径38～70cm、深さ15～30cm、柱穴間は2.0～2.2mを測る。

炉は住居址のほぼ中央部に位置する。平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は長径120cm、短径70cm、深さ12cmを測る。断面形は皿状を呈する。炉内にて炭化物を確認している。

内部施設としては住居址北東部、北西部及び南西部の壁体に沿って幅1m、高さ20cm前後の地山削り出しの屋内高床部（ベッド状遺構）を検出した。住居址床面からは北壁、南壁及び北西部高床部の壁体に沿って幅10cm、深さ6cm、断面「U」字状の溝が巡り、溝内にて径6～10cm、深さ5～10cmの小ピットを検出した。本住居址の埋土は上層部は暗灰褐色土、下層部は暗褐色である。遺物は、暗褐色土中（下層部）より土器片が散在して出土している。炉の上面付近からは鉢形土器が出土した。

調査の概要

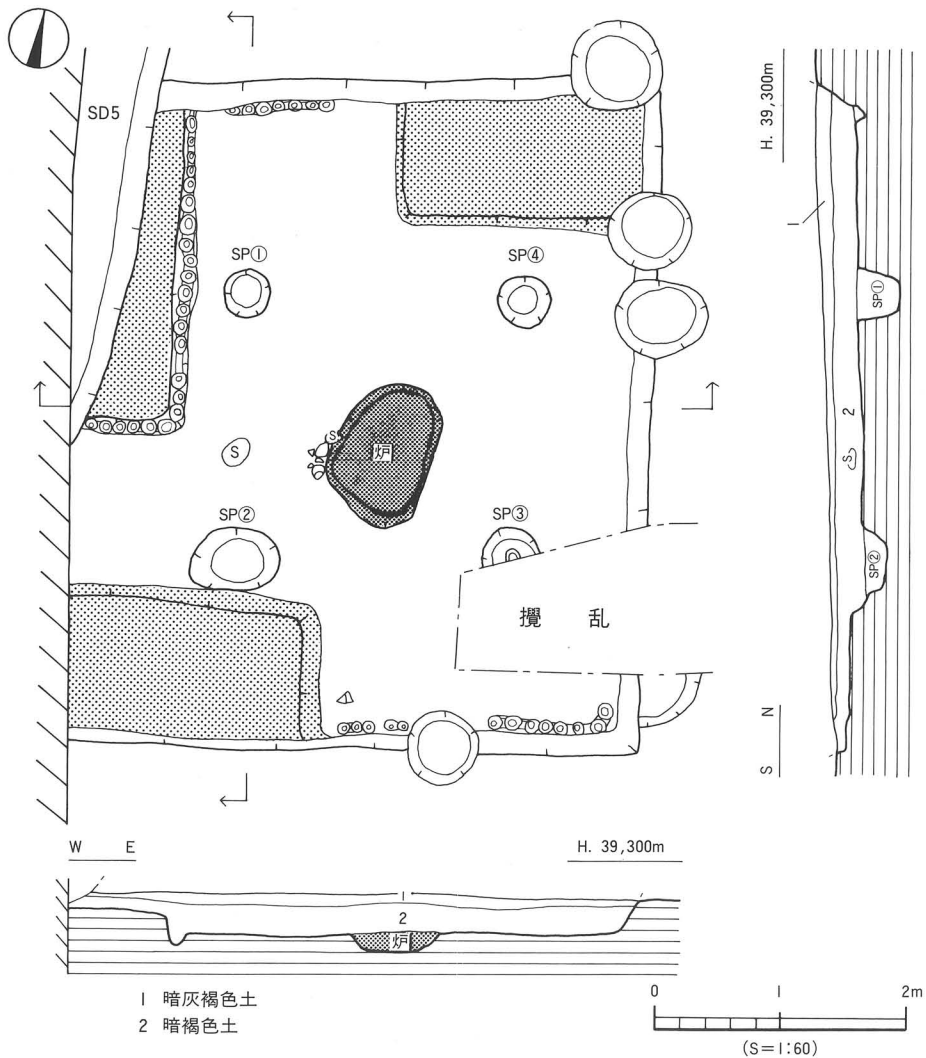
出土遺物（第70図、図版59）

甕形土器（14） 14は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。口縁部はやや外反気味に立ち上がり口縁端部は「コ」字状におさめる。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面共に刷毛目調整を施す。

壺形土器（15・16） 15は広口壺、16は複合口縁壺である。15は口縁端部が下外方に拡張され、端面に波状文を施す。

注口土器（17） 17は口縁下位に貼付による凸帯が施され、凸帯上に刻み目を施す。広島地方にみられる注口土器の可能性はある。

鉢形土器（18・19） 18は推定口径37.6cmを測る大型品である。口縁部は「く」の字状を呈し口縁端面に2条の凹線文を施す。底部は平底である。調整は胴部内外面共に刷毛目調整



第69図 SB6 測量図

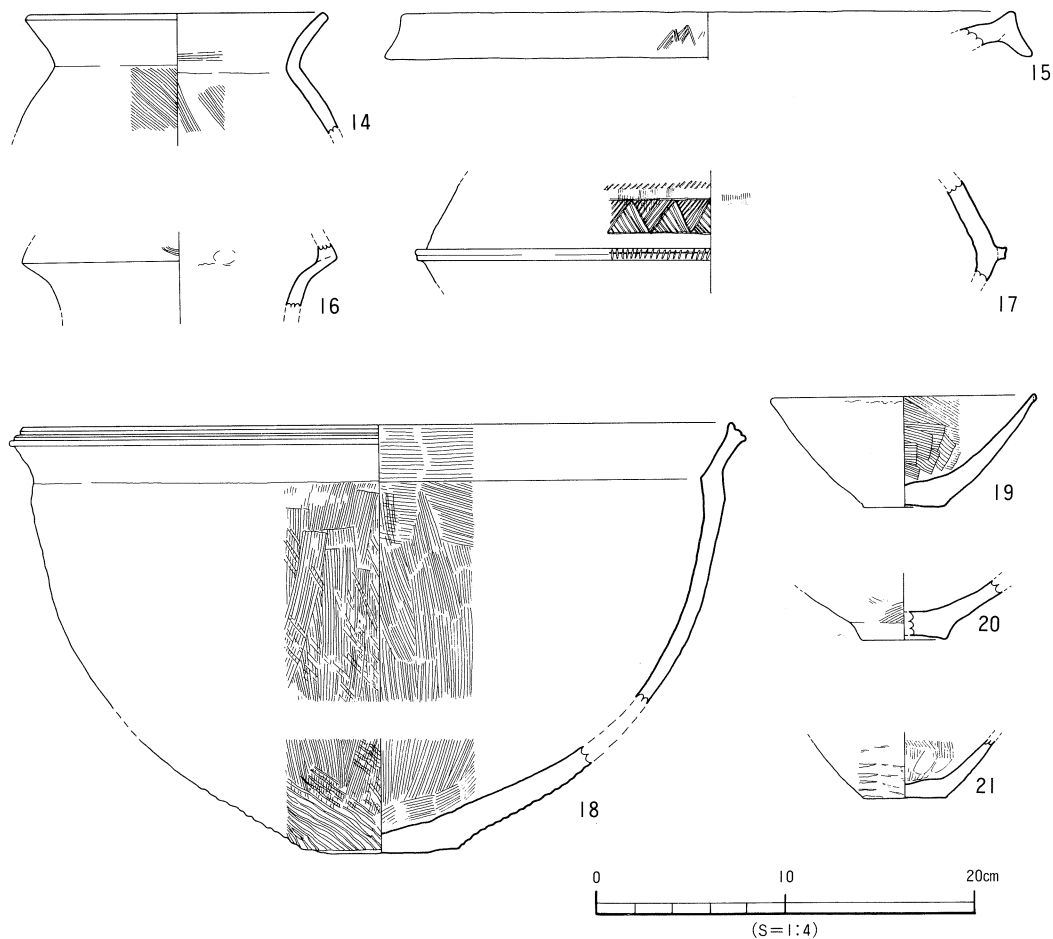
を施し、胴部下位外面には叩き調整がみられる。19は内湾する口縁部をもち口縁端部は「コ」字状におさめる。底部はやや突出している。内外面共に刷毛目調整を施す。

20は鉢形土器、21は甕形土器の底部と思われる。20はボタン状に突出するやや上げ底を呈する底部である。21は平底で外面に叩き痕を顕著に残す。

時期：出土遺物は全体的にみて古墳時代初頭～前期の範囲におさまるものである。よって本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代初頭～前期と考えられる。

**S B 3** (第71図、図版51)〔4次調査〕

調査区中央部やや北寄り D 5～E 6 区に位置する。住居址北東部は土壙 S K 2 に、東側は S B 4 号住居址及び土壙 S K 1 に切られる。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北4.7m、東西検出長4.2m、壁高は6～12cmを測る。埋土は小円礫(河原石)を多量に含む黒褐色土である。



第70図 S B 6 出土遺物実測図

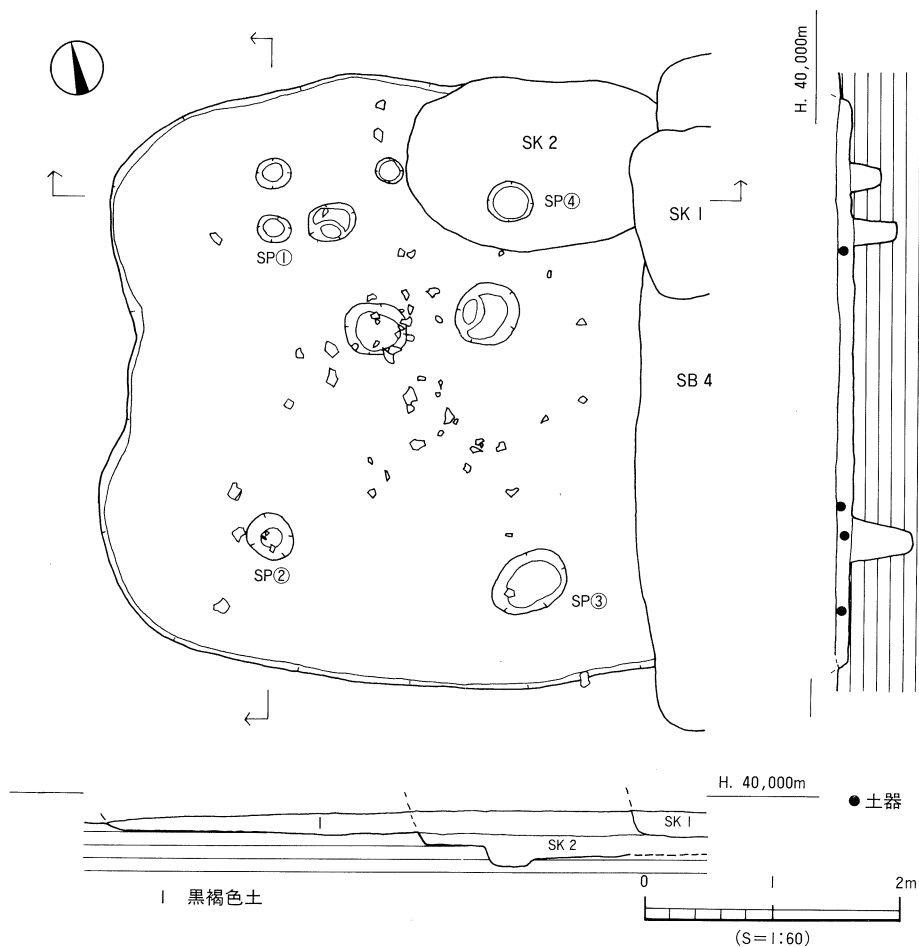
## 調 査 の 概 要

る。主柱穴はSP①・②・③・④の4本である。柱穴は円～楕円形を呈し、径24～60cm、深さ5～50cm、柱穴間は1.7～2.6mを測る。床面は円礫（河原石）が露呈しており凹凸が著しい。床面にて主柱穴以外に5基の柱穴を検出したが本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。炉は未検出である。

遺物は主柱穴間でまとも出土したが、その多くは床面から遊離している。

出土遺物（第72図、図版60）

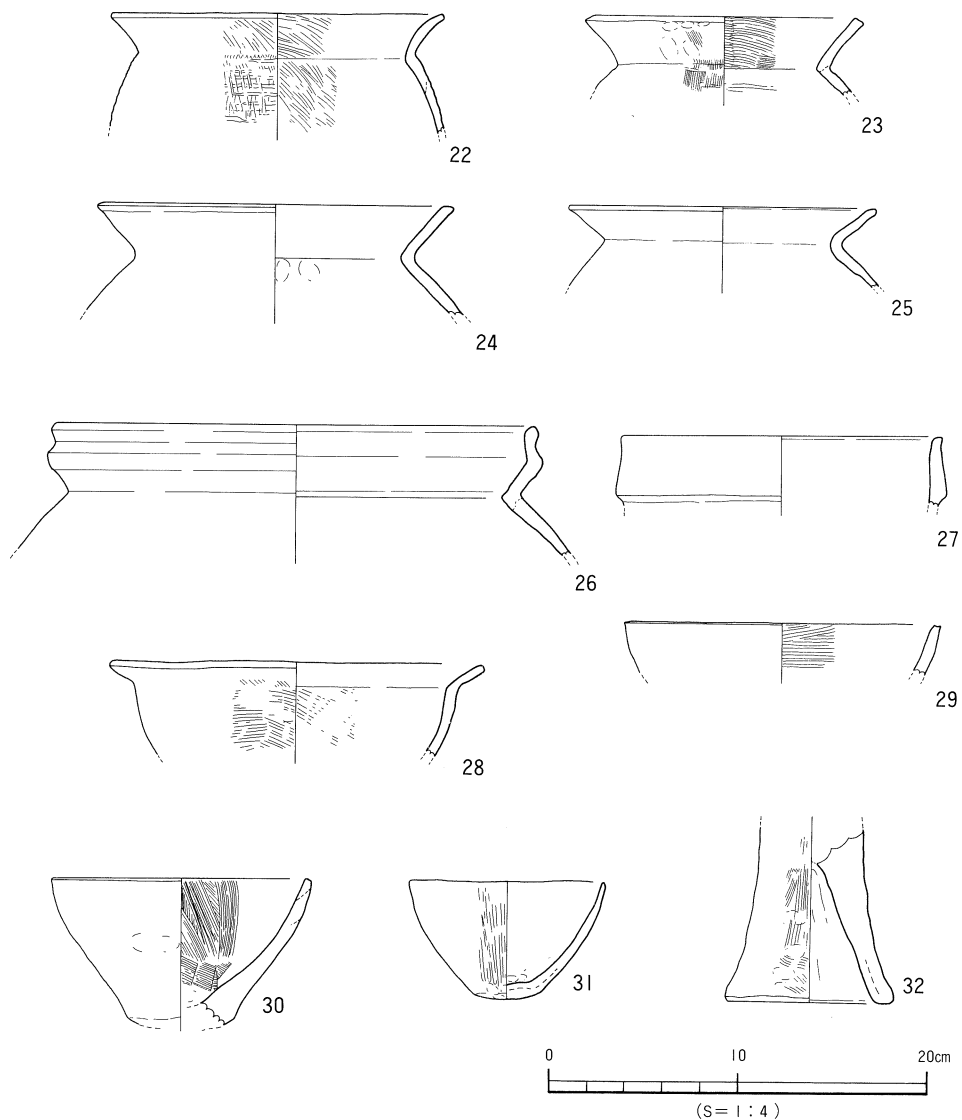
甕形土器（22～26） 22～25は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。22・23は口縁部はやや外反し端部は「コ」字状におさめる。胴部外面に刷毛目調整を施す。24・25はやや内湾する口縁部をもち、26は口縁中位に屈曲部をもち上部を直立気味に立ち上がらせる。口縁端部は丸く仕上げる。内外面共にヨコナデ調整を施す。



第71図 SB 3 測量図



壺形土器 (27) 27は二重口縁壺の口縁部片。口縁拡張部はほぼ直立し端部は内傾する。  
 鉢形土器 (28~31) 28は口縁部は外反し端部は「コ」字状におさめる。口縁部はヨコナ  
 デ、胴部内外面は共に刷毛目調整を施す。29~31は口縁部は内傾ないし直立するものである。  
 29は口縁端面は水平で「コ」字状に仕上げる。30は厚めの平底に内傾して立ちあがる口縁部  
 をもつ。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。底部は突出する。31は丸みのある平底で直立す  
 る口縁部をもつものである。口縁端部は先細りし丸くおさめる。胴部下位外面にヘラミガキ  
 調整を施す。



第72図 S B 3 出土遺物実測図

## 調査の概要

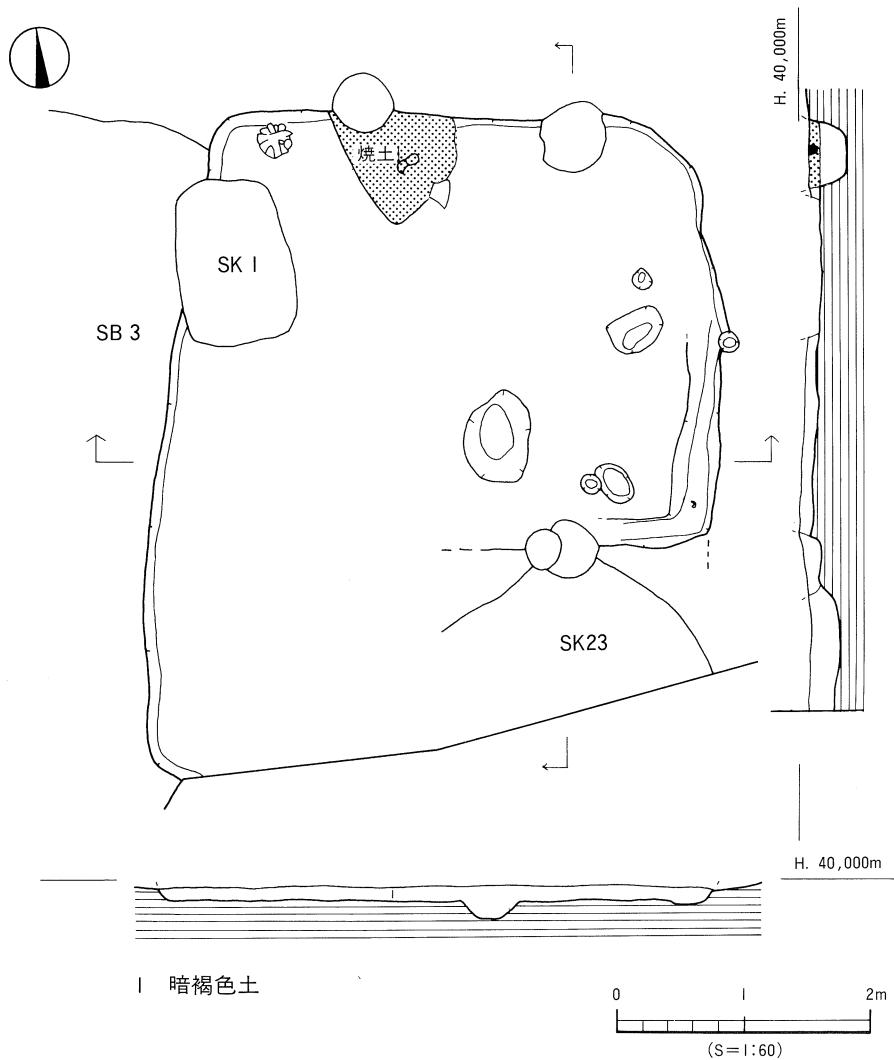
支脚形土器 (32) 32は中空・柱状の体部をもつもので、外面は刷毛目調整、内面はナデ調整を施す。

時期：出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前半の範囲におさまるものであるが、床面付近出土遺物などから本住居址の廃棄時期を古墳時代前期と考える。

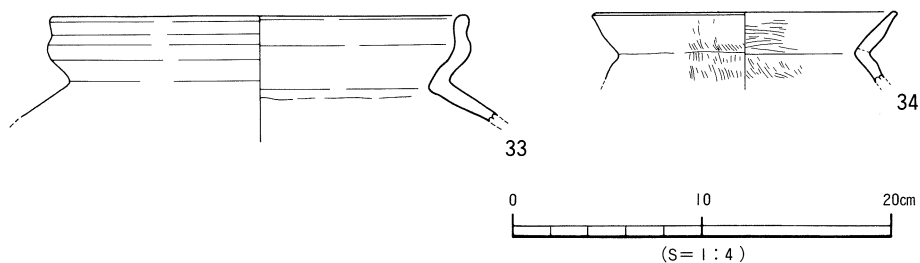
### SB4 (第73図、図版51・52)〔3次調査〕

調査区中央部北寄りE5～F6区に位置する。SB3号住居址を切り土墪SK1に切られる。住居址南側は土墪SK23と重複するが切り合い関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は南北検出長3.2m以上、東西4.3m、壁高10cmを測る。

埋土は小円礫(河原石)を少量含む暗褐色土である。床面はSB3号住居址と同様、円礫



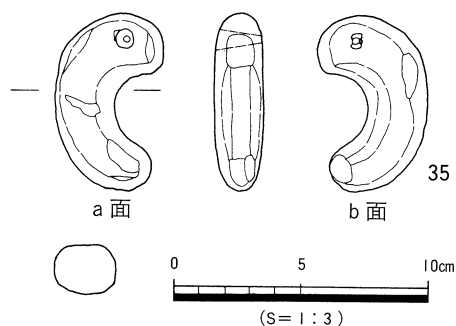
第73図 SB4測量図



が露呈し凹凸が著しい。主柱穴や炉は未検出である。北壁付近にて広い範囲に焼土を検出した。遺物は埋土中から土師器小片が数点出土したにとどまる。壁体溝からは勾玉が1点出土している。

出土遺物（第74図、図版60）

甕形土器（33・34） 33は口縁中位に屈曲部をもち上位は直立気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。調整は内外面共に摩滅の為不明である。



第74図 S B 4 出土遺物実測図

34は内湾する口縁部をもち、口縁端部は丸く仕上げる。内外面共に刷毛目調整を施す。

勾玉（35） 35は壁体溝出土。一部に破損が認められるものの全体の遺存はおおむね良好である。研磨は両面に及んでいるものの、それぞれの面で稜が確認されることから丁寧なものとは言えない。横断面形態は隅丸方形を呈している。穿孔はa面からの片面穿孔である。瑪瑙製。

時期：本住居址はS B 3号住居址を切るものの出土品をみると形式差があまり認められずS B 3と時期差が少ないものと考えられる。よって本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代前期に比定されよう。

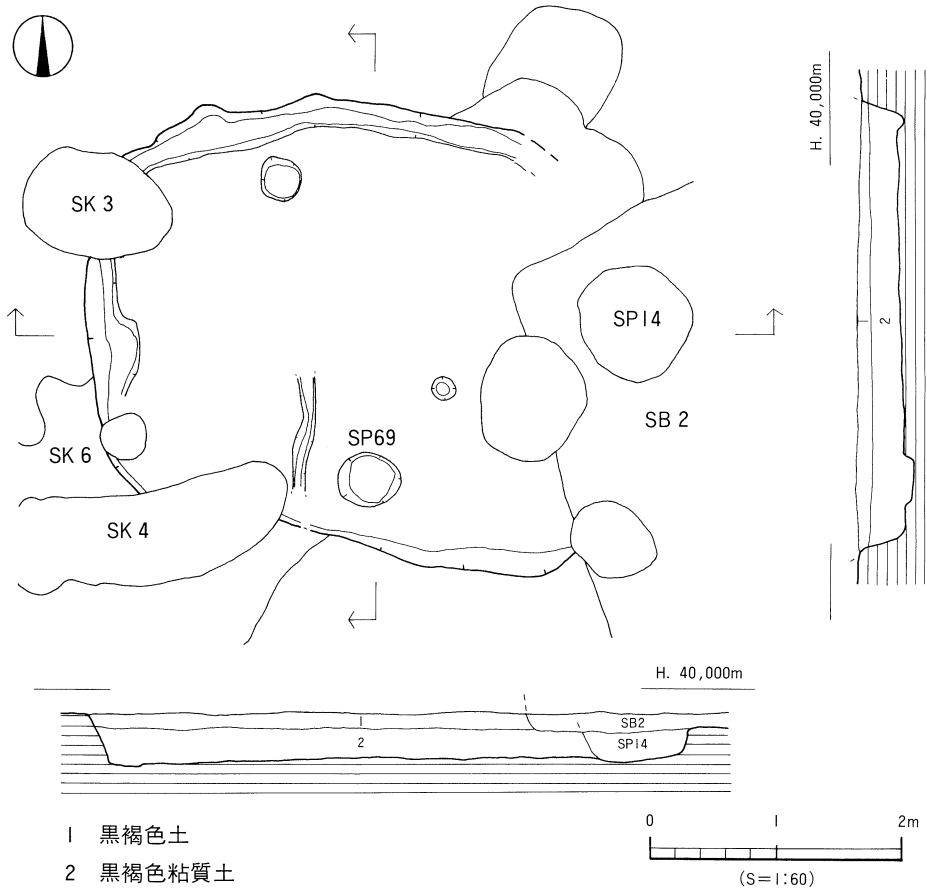
### 3)古墳時代中期

古墳時代中期の住居址は2棟（S B 5・7）である。両者ともに第V層上面での検出である。

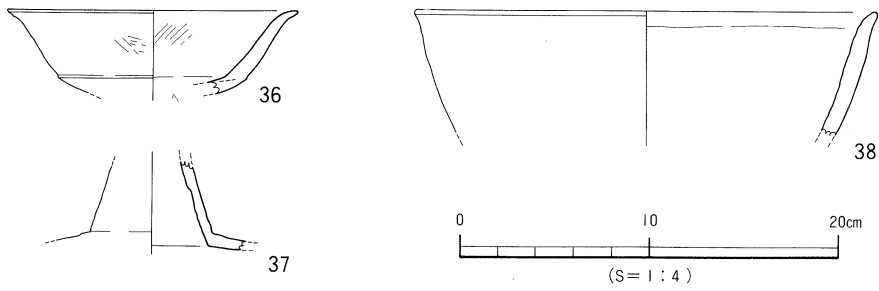
#### S B 5（第75図、図版52）〔4次調査〕

調査区南西部B 5～C 6区に位置する・東壁はS B 2号住居址に切られ南西及び北西隅はそれぞれS K 4、S K 3に切られる。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は東西4.5m、南北3.5m、壁高22～28cmを測る。埋土は黒褐色土である。床面は北東から南北に向けて緩傾斜し、硬くしまっている。住居址北東部には幅25cm、深さ4cm、断面「U」字状の壁体溝が巡っている。なお住居址中央部南寄りでは南北方向にのびる小溝を1条検出したが

調査の概要



第75図 S B 5 測量図



第76図 S B 5 出土遺物実測図

本住居址に伴うものであるかは判断できなかった。主柱穴及び炉は未検出である。

遺物は埋土中から弥生土器片、土師器片が散在して出土した。

出土遺物 (第76図)

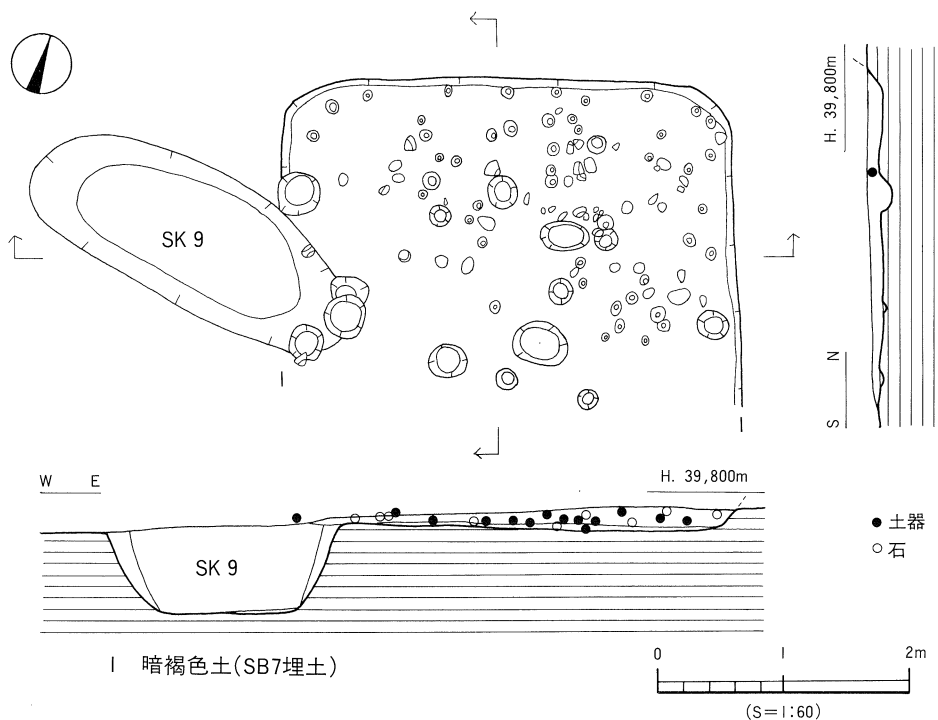
高坏形土器 (36・37) 36は坏部片。坏屈曲部は丸みのある稜をもつ。坏上部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。外面は刷毛目調整、内面は刷毛目調整後ナデ調整を施す。37は脚部片。三角錐状を呈する柱部に長く開く裾部をもつ。柱部と裾部境内面には稜をもつ。

鉢形土器 (38) 38は直立する体部にやや外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げる。

時期：高坏形土器の形態は古墳時代中期の特徴を示している。高坏形土器片は床面付近の出土品で摩滅も少ないことから本住居址に伴うものと考えられる。よって本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代中期に比定されよう。

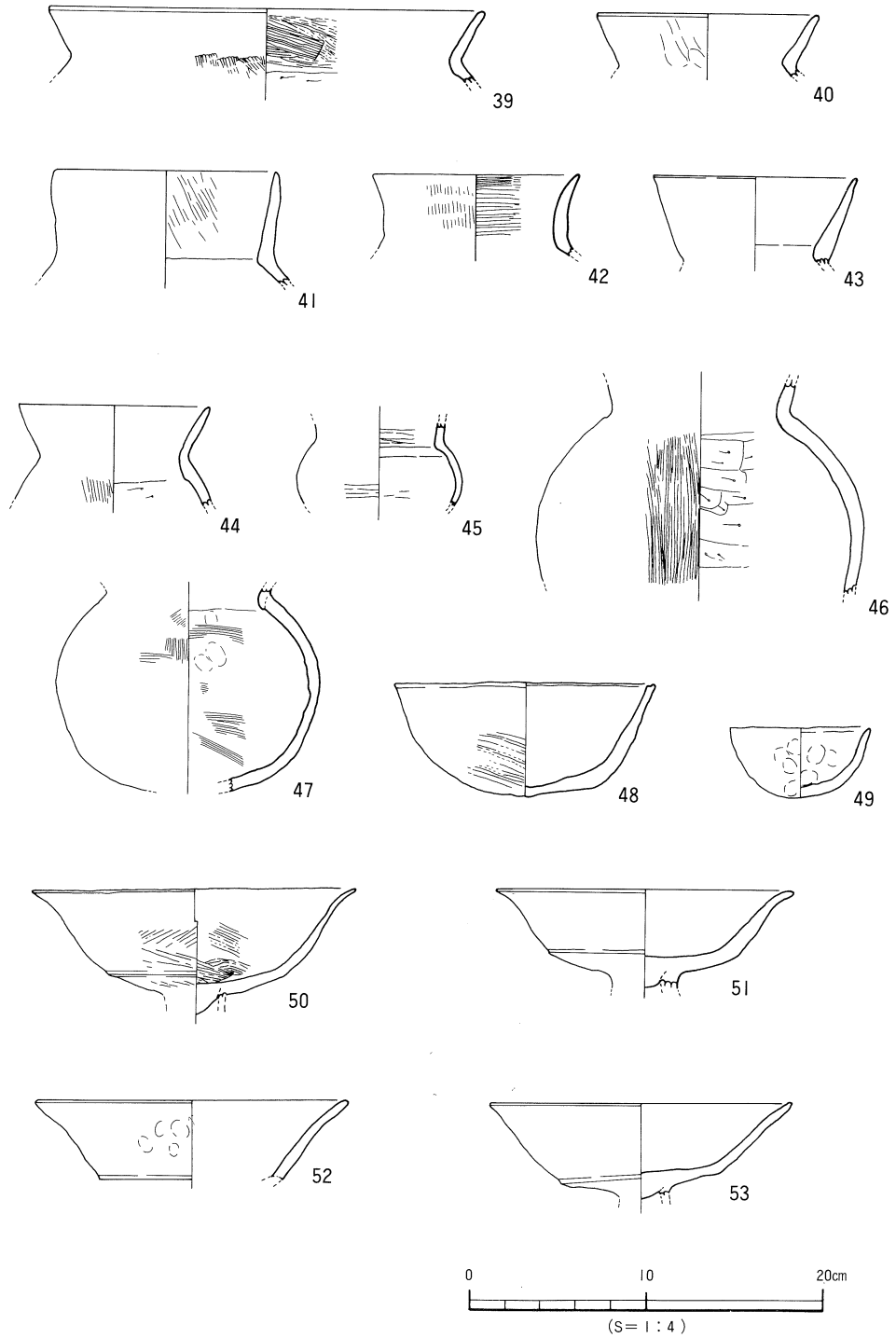
S B 7 (第77図、図版53・54) [2次調査]

調査区中央部西寄り C 3 ~ D 4 区に位置する。住居址西壁は土壙 SK 9 と重複するが切り合い関係は明確にできなかった。平面形は隅丸方形もしくは長方形を呈するものと考えられ、規模は3.5m、南北検出長2.7mを測る。壁高は北壁で約15cmを測るが、住居址南半部は後世の削平等により住居址検出時すでに第 V 層が露出した状況であった。埋土は暗褐色土である。床面は比較的硬くしまっている。土層観察及び遺物の出土状況から本住居址は暗褐色土を貼



第77図 S B 7 測量図

調査の概要



第78図 S B 7 出土遺物実測図

りつけた貼り床構造の可能性がある。床面にて大小14基の柱穴を検出したが主柱穴は特定できなかった。

壁体に沿って径6～10cm、深さ6～8cmの小ピットが点在して検出された。また、床面にて径6～8cm、深さ5～8cmの小ピットが多数検出された。

遺物は住居址北東部床面にて集中して出土している。

出土遺物（第78図、図版61）

甕形土器（39・40） 39・40は口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。39の胴部内面にケズリ調整を施す。40は内外面共にナデ調整を施す。

壺形土器（41～47） 口縁部は直立して立ち上がるもの（41・43・44）と外反するもの（42）がある。いずれも口縁端部は先細りし丸くおさめる。45は胴部中位がふくらみもち46・47はほぼ球形の体部をもつ。46は外面は刷毛目調整、内面はケズリ調整を施す。47は内外面共に刷毛目調整を施す。

鉢形土器（48・49） 平底の底部から内湾して立ち上がる体部をもつ。口縁部はわずかに外反し、48の口縁端部はわずかにナデ凹む。49の端面は先細りする。49は内外面共に指頭痕を顕著に残す。

高坏形土器（50～53） 坏屈曲部はいずれもわずかに段をなす。坏上部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。50は内外面共に刷毛目調整、その他はいずれもヨコナデ、ナデ調整を施す。

時期：遺物は埋土中の出土ではあるが、高坏形土器の形態が古墳時代中期の特徴を示すものである。よって本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代中期と考える。

#### 4)古墳時代後期

古墳時代後期の住居址は1棟（SB2）である。第V層上面で検出した。

**SB2**（第79図、図版54・55）〔4次調査〕

調査区北西部C5～D6区に位置する。北西隅はSB5号住居址を切り南西隅はSB1号住居址を切る。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西4.7m、南北4.6m、壁高14～20cmを測る。埋土は黒褐色土である。主柱穴はSP①・②・③の3本を検出したが、これらは「コ」字状に配列することから住居址内南西部に主柱穴が想定され、4本柱であったと考えられる。柱穴は円形を呈し、規模は径20～30cm、深さ10～20cm、柱穴間は2.0～2.8mを測る。床面はほぼ平坦で比較的硬い。北壁に沿って幅14～20cm、深さ9～13cmの壁体溝が検出された。炉は未検出である。

住居址東壁近くの床面にて土壙（SX4）を検出した。平面形は不整形円形を呈し、規模は長径1.8m、短径1.6m、深さ18cmを測る。土壙東壁には著しい凹凸がみられた。埋土は第V層の塊状ブロックを含む黒褐色土である。炭化物・焼土は認められなかった。

調査の概要

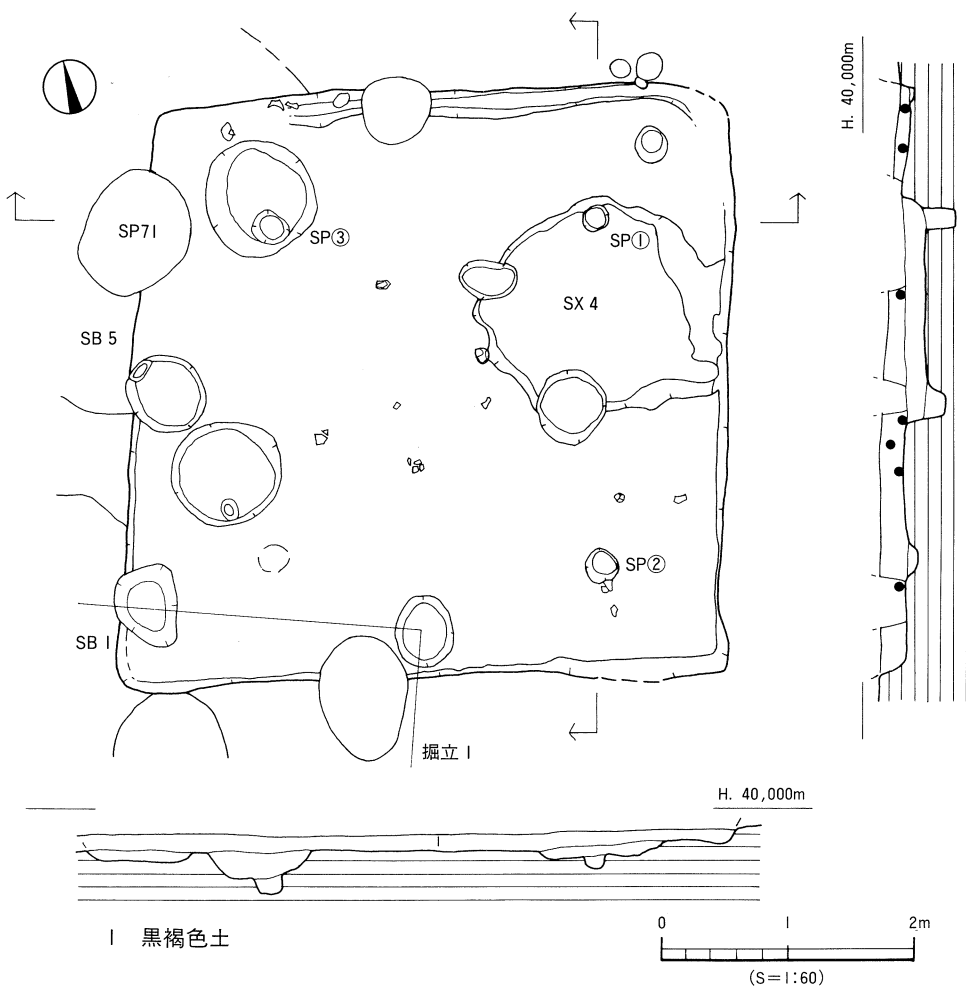
遺物は壁体溝及び住居址中央部床面から甕形土器や須恵器坏身・坏蓋が出土した。土壌SX4からは土師器小片が少量出土したにとどまる。

出土遺物（第80・81図、図版62）

甕形土器（54～57） 口縁部は内湾して立ち上がる。口縁端部は54・55は内傾し、56は丸く仕上げる。54・56の胴部外面は刷毛目調整を施す。57は小型品。口縁部はわずかに外反し端部は先細りする。胴部内面にケズリ痕を残す。

製塩土器（58） 58は製塩土器の口縁部小片。口縁端部は先細りする。外面全体に叩き調整を施す。

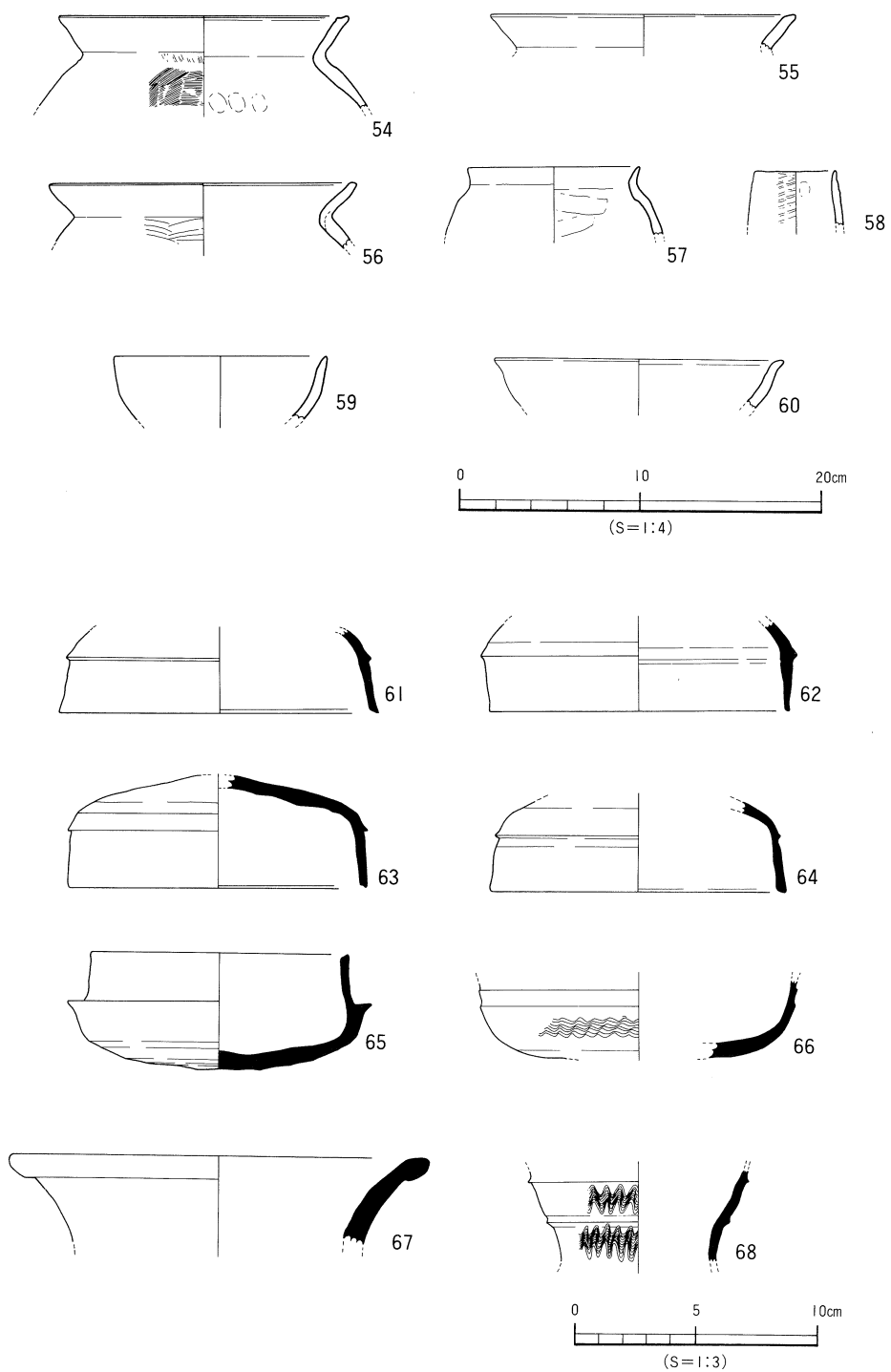
椀形土器（59） 59は体部は内湾し、口縁部は直立する。口縁端部は先細りする。内外面共にヨコナテ調整を施す。



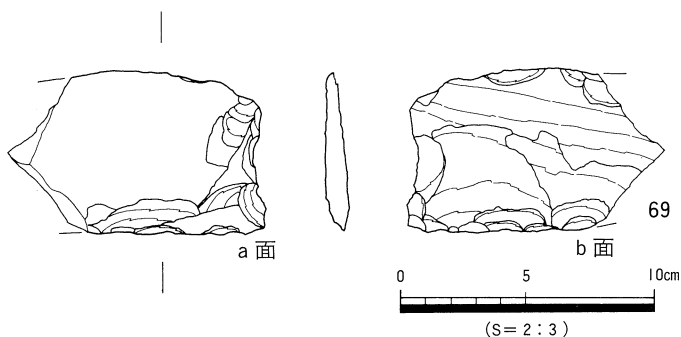
第79図 SB 2 測量図



樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地



第80図 S B 2 出土遺物実測図 (1)



第81図 SB2出土遺物実測図(2)

高环形土器(60) 60は高环形土器の坏部片。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。

坏蓋(61~64) 口縁部は直立して下がるもの(62)と、外反して下がるもの(61・63・64)がある。いずれも断面三角形の稜をもち、口縁部は内傾する段をなす。

坏身(65) たちあがりは直立し、端部は内傾する段をなす。受部は外方に水平にのびる。

高坏(66) 66は無蓋高坏の坏部。椀形の坏部に2条の凸帯を貼付する。凸帯下に波状文を施す。

壺(67・68) 67は口縁部は外反し、口縁端部は珠玉状におさめる。内外面共に回転ナデ調整を施す。68は直口壺の頸部片。凸帯が上下に1条ずつ貼付され、凸帯下に波状文を施す。

石庖丁(69) 69はSB2床面ほぼ直上からの出土である。左半部を欠く未製品である。研磨を行う前の段階で製作が中止されている。自然礫を分割した剥片を素材としており、a面には広く自然面が残置し、b面には素材面が認められる。a面の右側縁には両面からの階段状剥離によって抉りが作出されている。法量は長さ10cm、幅6.5cm、厚さ1.0cm、重量85.9gである。

時期：壁体溝及び床面出土遺物から本住居址の廃棄・埋没時期は古墳時代後期(前半)と考える。

## (2) 掘立柱建物址

本調査において確認した掘立柱建物址は8棟である。いずれも第V層上面での検出であるが、柱穴の深さなどから考えると本来は第IV層以上の層から掘り込まれた可能性が高いものばかりである。また、調査区南東部にて柱穴が集中して検出されており、この他にも建物址が存在していた可能性も高い。

### 1号掘立柱建物址(第82図)〔2次調査〕

調査区西部A4~C5区に位置する建物址でSB1号住居址、及びSB2号住居址を切っている。4×2間の東西棟で規模は桁行長7.0m、梁行長5.0mを測る。桁間はほぼ一定して

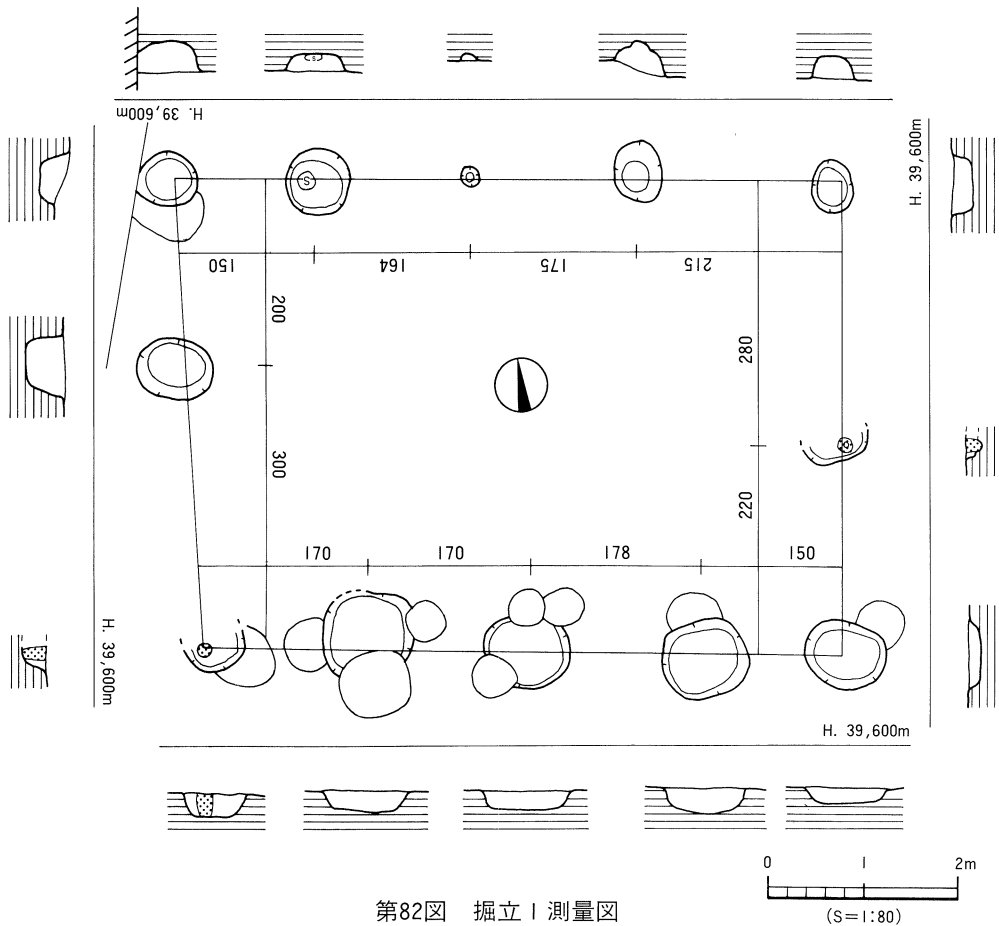
いるが、梁間はやや北側部分が広がっている。各柱穴は円～楕円形を呈し、径60～90cm、深さは50cmを測る。柱穴SP2の床面に20cm大の扁平な石が敷かれていた。柱の支えであろう。柱穴埋土は暗褐色土を基調とするが、炭化物を含む柱穴も存在する。柱穴内から土師器・須恵器の細片が少量出土している。

**2号掘立柱建物址**（第83図、図版55）〔2次調査〕

調査区北東部E7～G7区に位置する。建物の北側は調査区外へと続く。桁行長6.3mを測る東西棟で各柱穴間は1.5～1.6mとほぼ一定している。柱穴は楕円形を呈し径50～80cm、深さ15～30cmを測る。柱痕径は20～26cmを測る。柱穴埋土は1号建物址と同様の暗褐色土である。遺物は土師器の細片が数点出土したにとどまる。

**3号掘立柱建物址**（第83図）〔3次調査〕

調査区北東部F7～G7区に位置する。一部、柱穴が2号建物址と重複し、切り合い関係から2号建物址が先行する。2×1間の南北棟で、規模は桁行長3.6m、梁行長2.4mを測る。各柱穴は円形を呈し径20～40cm、深さ5～15cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土である。柱穴内



第82図 掘立I測量図

調査の概要

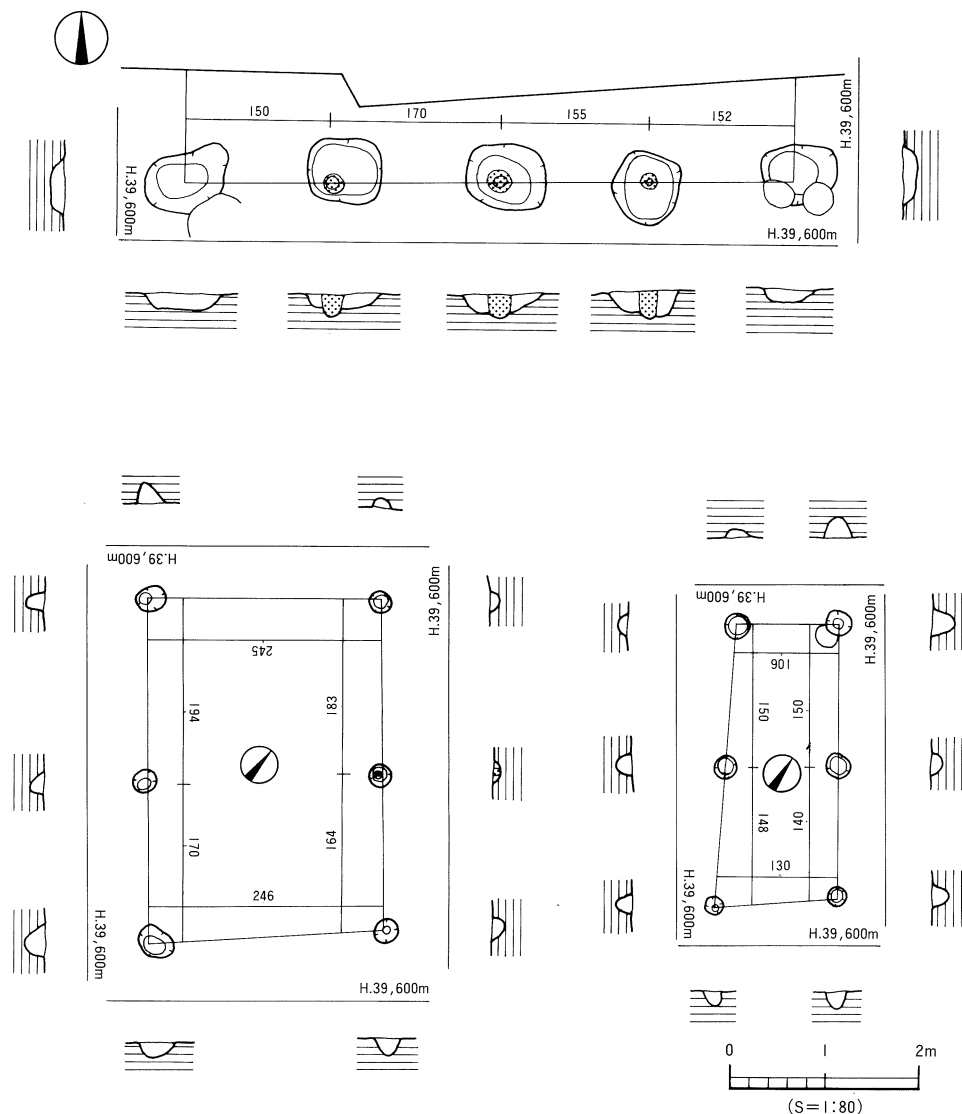
からの遺物の出土はない。

4号掘立柱建物址 (第83図)〔3次調査〕

調査区北東部F6～G6区に位置する。桁行長3.0m、梁行長1.3mを測る南北棟で建物方位を3号建物址と等しくする。各柱穴は円形を呈し径20～30cm、深さ5～12cmを測る。柱穴埋土は3号建物址と同様の灰褐色土である。柱穴内からの遺物の出土はない。

5号掘立柱建物址 (第84図)〔2次調査〕

調査区南西部C1～D2区に位置する。2×1内も建物址で主軸は1号建物址に比べてやや西に偏している。規模は桁行長4.0m、梁行長2.0mを測り、柱穴間は2.0mほぼ一定して



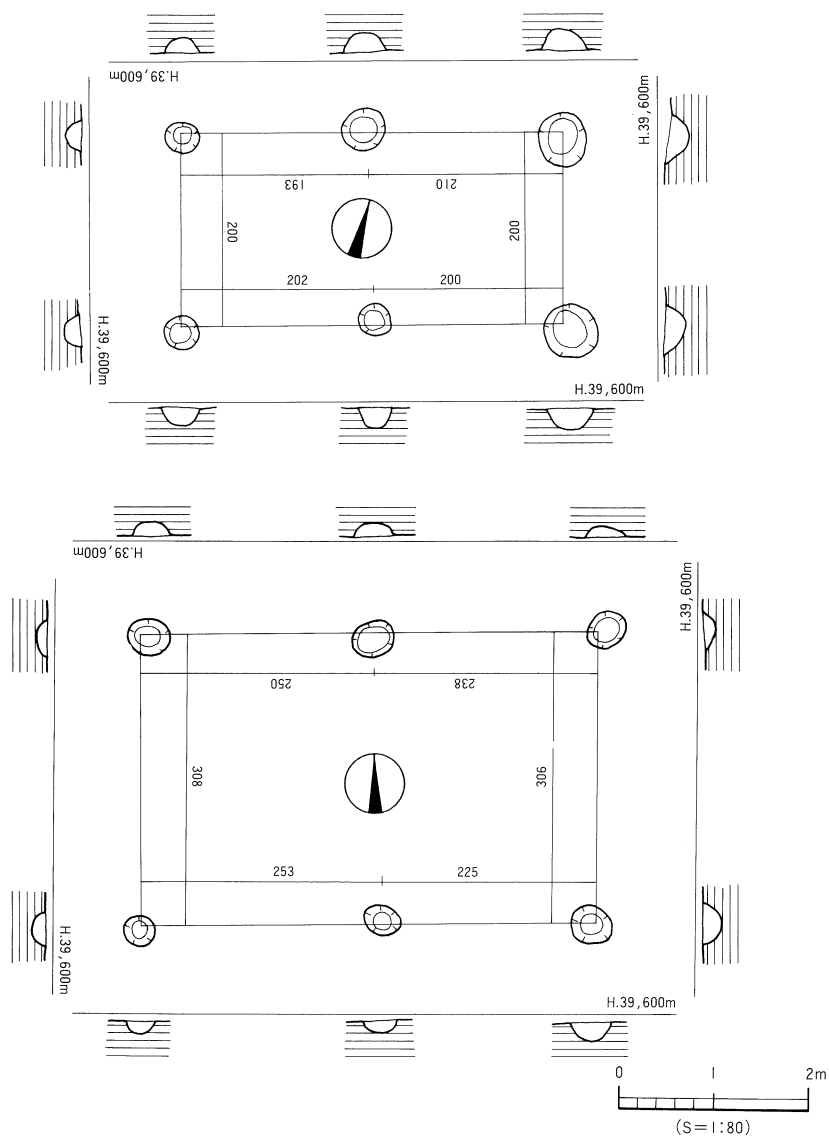
第83図 掘立2〔上〕掘立3〔左下〕掘立4〔右下〕測量図

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

いる。各柱穴は円～楕円形を呈し、径30～50cm、深さ10～20cmを測る。柱穴埋土は第Ⅲ層と同様の灰褐色土である。柱穴内からは土師器小片が数点出土している。

6号掘立柱建物址 (第84図)〔2次調査〕

調査区南西部B3～D3区に位置する建物址でSB7号住居址を切っている。2×1間の東西棟で主軸を1号建物址とほぼ等しくする。規模は桁行長4.8m、梁行長3.0mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し、径20～50cm、深さ15～20cmを測る。柱穴埋土は第Ⅲ層と同様の灰褐色土である。柱穴内からは土師器細片が少量出土している。



第84図 掘立5〔上〕掘立6〔下〕測量図

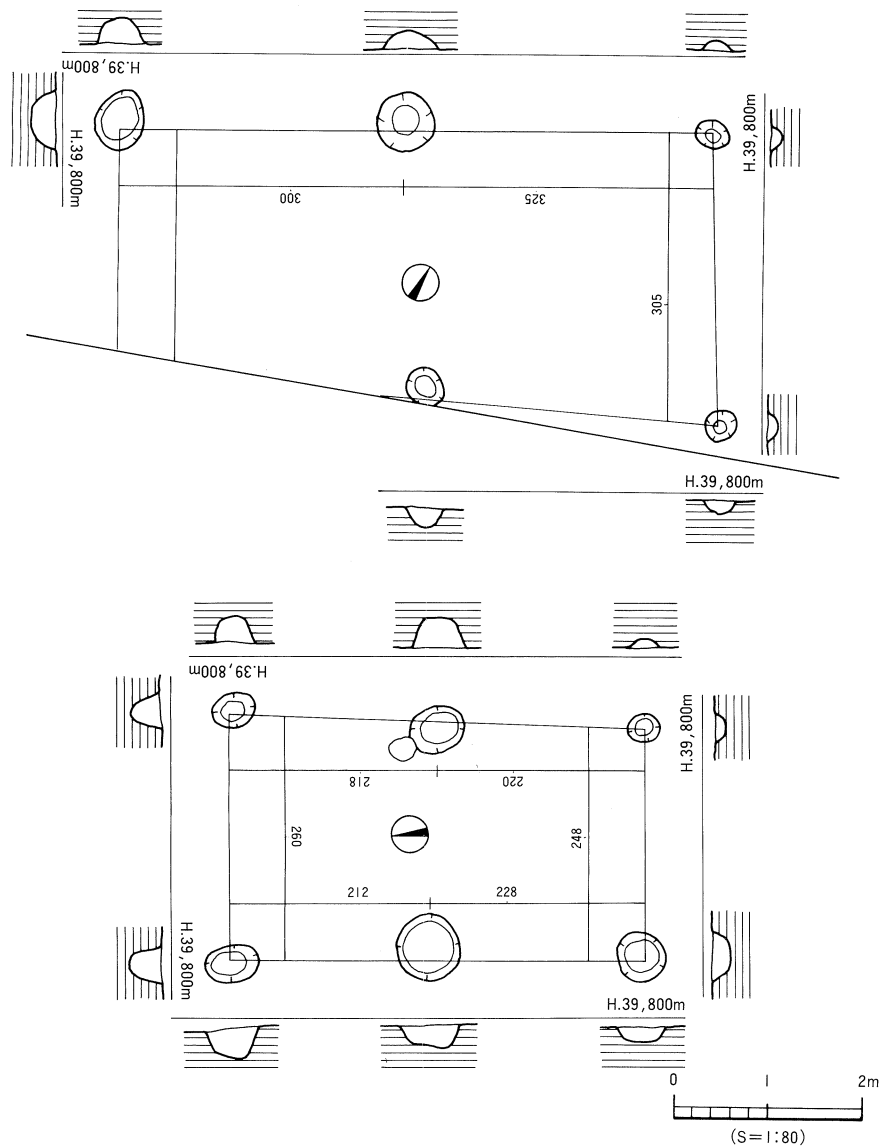
調査の概要

7号掘立柱建物址（第85図）〔3次調査〕

調査区南側E 1～G 2区に位置する。建物の西隅は調査区外へと続く。2×1間の建物址で規模は桁行長6.2m、梁行長3.0mを測る。各柱穴は楕円形を呈し、径30～60cm、深さ12～30cmを測る。柱穴間は約3mを測りほぼ一定している。柱穴埋土は灰褐色土である。柱穴内からの遺物の出土はみられない。

8号掘立柱建物址（第85図）〔3次調査〕

調査区中央東寄りF 4～G 5区に位置する。2×1間の南北棟で、規模は桁行長4.4m、梁



第85図 掘立7〔上〕掘立8〔下〕測量図

行長2.6mを測る。各柱穴は円～楕円形を呈し径25～60cm、深さ10～30cmを測る。柱穴埋土は灰褐色土であり柱穴内からは土師器の細片が数点出土したにとどまる。

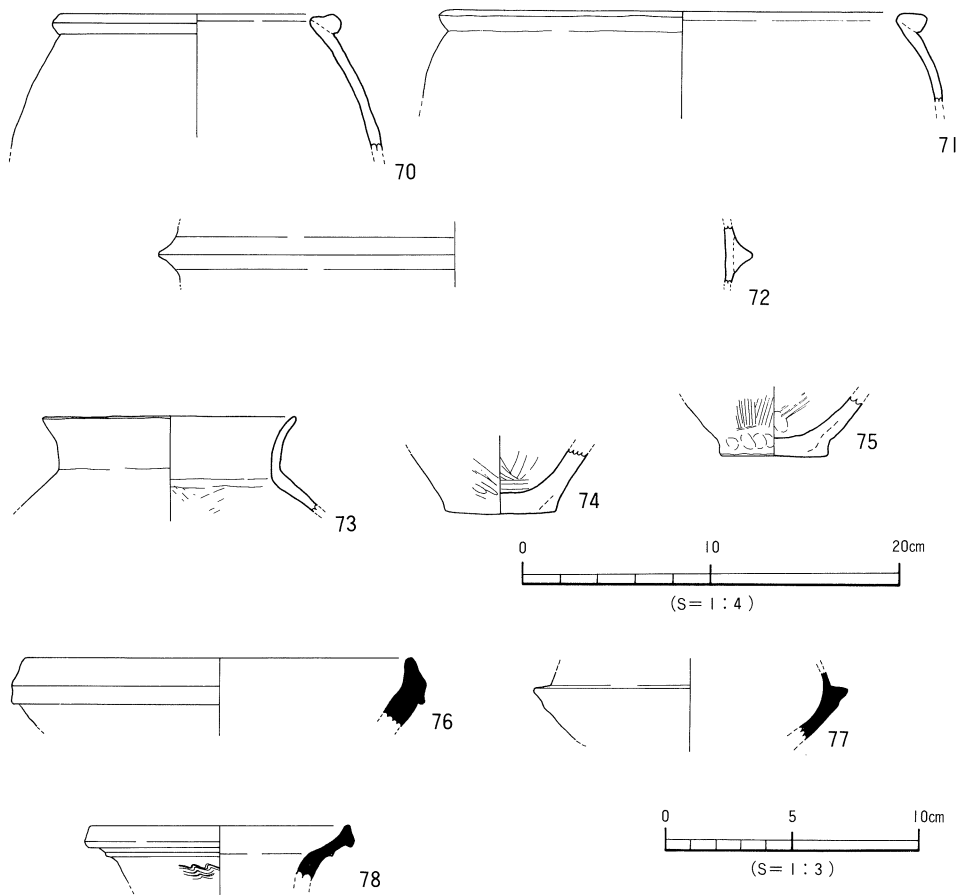
以上の掘立柱建物址については柱穴内からの遺物の出土が僅少であり詳細な年代付けは難しいが、切り合い関係や柱穴埋土等から1号建物址及び2号建物址は古墳時代後期以降、その他の建物址は中世段階の建物址と考える。

(3) 溝 (第62・86図)

本調査において確認された溝は7条である。SD5は第Ⅲ層中、他はいずれも第Ⅴ層上面での検出である。

SD1〔4次調査〕

調査区北西部C7～D7区に位置する。平面形は西端で北に屈曲する「L」字形を呈する。断面形はU字状を呈し、上場幅60～90cm、深さ8cmを測る。埋土は黒褐色土である。埋土中



SD5 70・72・76・78      SD7 71・78  
SD1 73～75・77

第86図 S D 出土遺物実測図

## 調査の概要

に砂粒を多く含まないことから水利に関する流路としての機能は有していないものと考えられる。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器の小片が数点出土したにとどまる。出土遺物等から古墳時代以降に埋没したものと考えられる。

### SD5〔4次調査〕

調査区西壁沿いA2～A4区を南北に流れる溝でSB6号住居址を切っている。溝底は北から南に向けて緩傾斜をなす(比高差5cm)。断面形は皿状を呈し、上場検出幅40cm、深さ8cmを測る。埋土は第Ⅲ層と同様の灰褐色土である。SD1と同様、水利に伴うものとは考えがたい。時期はSB6号住居址を切ることや出土遺物、埋土等から中世段階に掘削されたものと考えられる。

出土遺物(70・72・76・78) 70は土師器羽釜片。口縁部は内湾し、口縁端部に断面円形状で下膨れの凸帯を貼付する。内外面共にヨコナテ調整を施す。72は土釜片。直立気味の口縁部に断面三角形の凸帯を貼付する。14c。76は備前焼の摺鉢。口縁上端をほぼ垂直に立ち上げる。78は須恵器壺。口縁端部は上下方に肥厚し口縁下に1条の凸帯が巡る。頸部に波状文を施す。5c。

SD1出土遺物(73～75・77) 73・74は甕形土器。73は口縁部は直立気味に立ち上がり端部付近で外反する。口縁端部は丸く仕上げる。74はわずかに突出する平底の底部。内外面共にミガキ調整を施す。75は壺形土器の底部片。突出する平底から内湾気味に立ち上がる。底部外面に指頭痕を顕著に残す。弥生後期。77は須恵器坏身片。6c。

SD7出土遺物(71) 71は土師器羽釜。口縁部は内湾し、口縁部上端部に断面三角形の下膨れの凸帯を貼付する。内外面共にナテ調整を施す。14c～15c。

本調査で検出した溝状遺構に関する詳細は表41に記す。

## (4) 土 壙

本調査において確認された土壙は24基である。いずれも第Ⅴ層上面での検出である。SK24はSB1号住居址内に伴うものである。ただしSK6は住居址の可能性もある。平面形と埋土により5分類される。SK1・14は長方形で埋土が灰褐色土、SK8・18は円形で埋土が黒褐色土、SK2・3・13・16は楕円形で埋土が褐色土、SK4・15・17・19は長楕円形で埋土が褐色土、SK9・10・11・12・20・21・22の平面形は長楕円形で埋土は黒褐色土である。

### SK1(第87図、図版56)〔4次調査〕

調査区中央部やや北寄りE6区に位置する。SB4号住居址及びSK2を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北1.2m、東西0.8m、深さ20cmを測る。埋土は1.5cm大の小円礫を多量に含む灰褐色土を基調とし、部分的に炭化物が認められた。床面はほぼ平坦である。床面の南側から長さ15cm、幅10cm、厚さ5cmの石枕が出土している。石枕は上面が南から北に向けて傾斜するように置かれていた。この石枕の周囲で高台付坏・玉・鉄器が出土



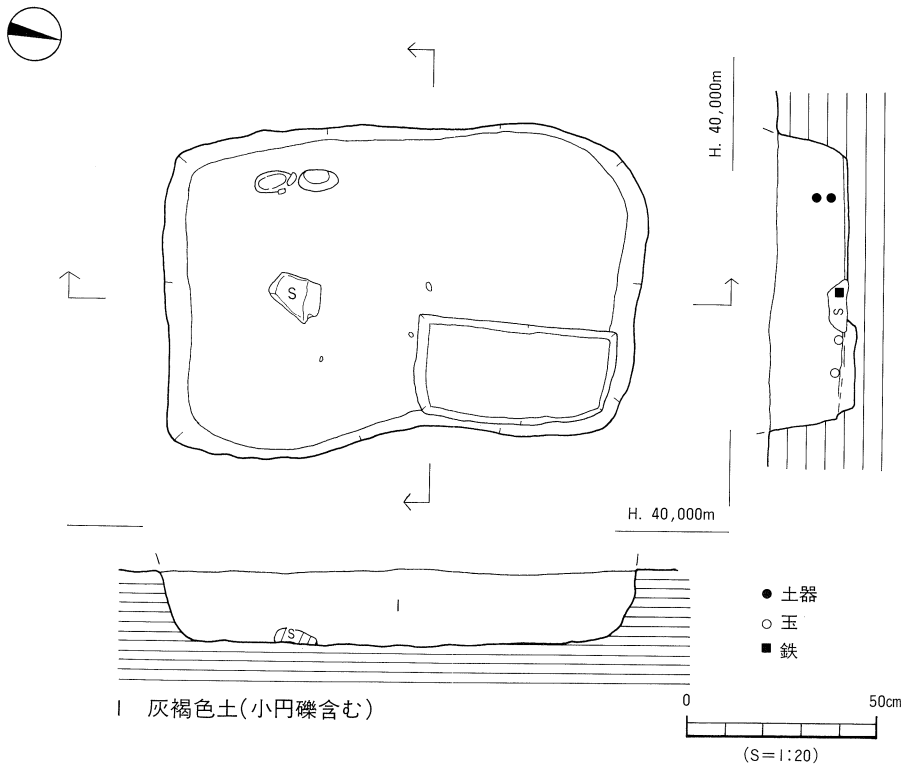
している。高台付坏は石枕の西側で床面からやや遊離した状態で2点出土している。両者とも完形品で内面が東を向いて並列しておりやや直立した状態であった。玉は石枕の東側の床面から2点出土している。南側の玉は半割され、その片方のみが出土した。

北側の玉の近くでは用途不明の鉄器が床面からやや遊離した状態で出土した。発掘調査時の土層観察では木棺等の痕跡は認められなかった。遺構の平面形・規模・遺物等から S K 1 は墓として機能していたことが想定される。

出土遺物（第88図、図版63）

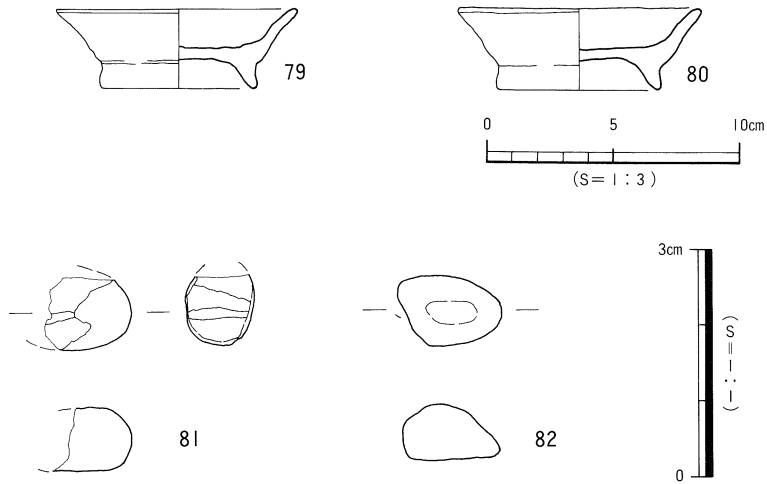
79・80共に完形品である。79は口径9.6cm、器高3.2cm、80は口径9.3cm、器高3.2cmを測る。形態は底部より外方へ向かって広がり口縁部でやや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。底部に断面三角形の高台を貼付する。外面はナデ調整、内面は口縁部はヨコナデ調整、底部はナデ調整を施す。色調は内外面共に乳灰黄色である。胎土は密で焼成は良好である。

玉（81・82） 81・82は S K 1 の床面直上出土。81は左半部を大きく欠く破損品である。平面形態はゆるやかな楕円形と想定され、横断面形態は楕円形に近い。玉のほぼ中央に片側



第87図 S K 1 測量図

調査の概要



第88図 S K I 出土遺物実測図

穿孔が施されており、破損はちょうどこの穿孔部で認められる。欠いている左半部は本遺構埋土から認められていないことから、副葬時に意図的に割られた可能性が高い。法量は長さ1.0cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm、重量1.2gである。碧玉製。82は完形品である。平面、横断面形態ともに不整形を呈している。研磨は器面全体に及んでおらず一部にのみ認められる。法量は長さ0.9cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、重量1.4gである。石英製(?)。

時期：出土した高台付坏の形態等から本遺構は古代末～中世初頭に時期比定されるものと考えられる。

S K 5 (第89図、図版57) [4次調査]

調査区北西部B7区に位置する。遺構の遺存状態は悪く、遺構の西側は後世の削平を受け、不明である。平面形は円形を呈するものと思われ、規模は径50cm前後と想定される。埋土はやや粘性のある灰褐色土であり、炭化物を少量含む。

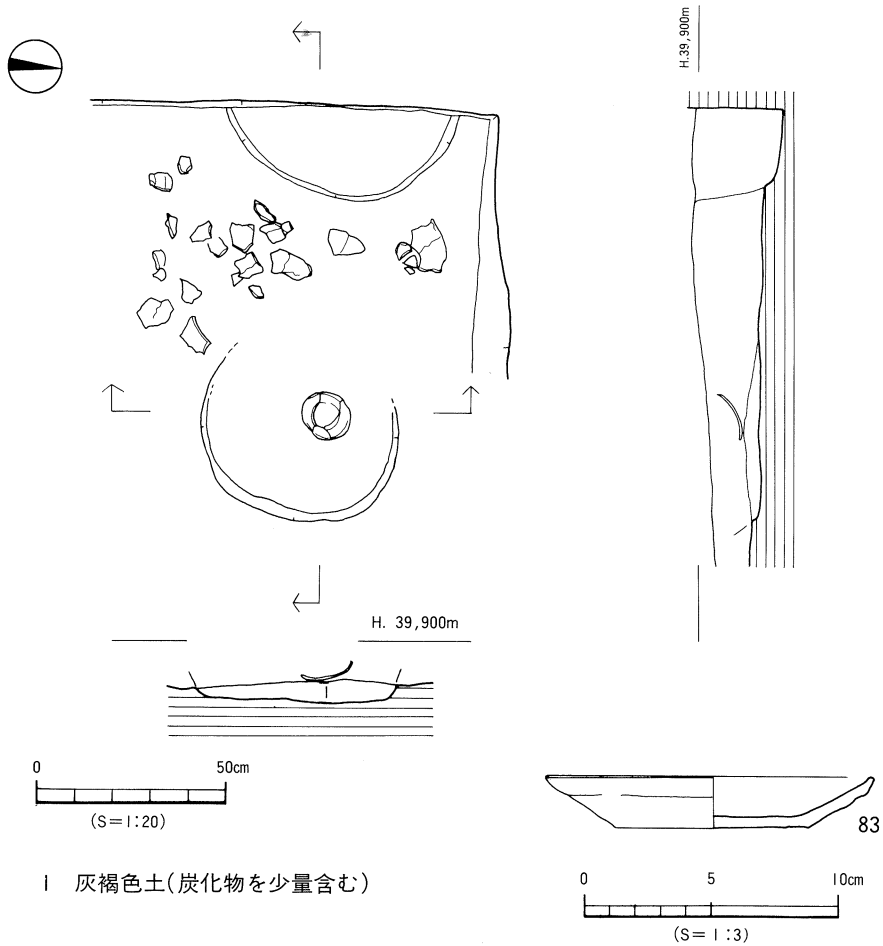
遺物は遺構中央部から完形の土師皿1点、その直下から遺存状態の悪い歯が数点出土した。土師皿は外底を下に向けた状態であった。

出土遺物 (図版63)

83はS K 5出土の土師器坏である。口径12.7cm、器高2.1cmを測る。形態は平底の底部から斜め上部に直線的に立ち上がり口縁部はわずかに内湾する。底部は回転糸切りによって切り離される。内外面共にヨコナデ調整を施す。色調は乳黄色である。胎土は密で焼成は良好である。

時期：出土した土師皿の諸特徴から16世紀時代の遺構と考えられる。

他の土壙状遺構については時期を知り得るものは少ないが出土遺物を第90図に掲載した。



Ⅰ 灰褐色土(炭化物を少量含む)

第89図 S K 5 測量図・出土遺物実測図

S K 8 出土遺物 (84~86) 84・85は甕形土器。84は口縁端部が上下方に拡張され、口縁端面はナデ凹む。85は口縁部が内湾気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。内外面共にヨコナテ調整を施す。86は複合口縁壺。口縁拡張部はは直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁外面は刷毛目調整を施す。

S K 10 出土遺物 (87~89) 87は「く」の字状口縁を呈する甕形土器。口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。口縁内面にわずかに稜をもつ。88・89は壺形土器の頸部片。89は頸部と胴部の境に断面三角形の凸帯を貼付し、凸帯上に大きめの刻み目を施す。内外面共に刷毛目調整を施す。

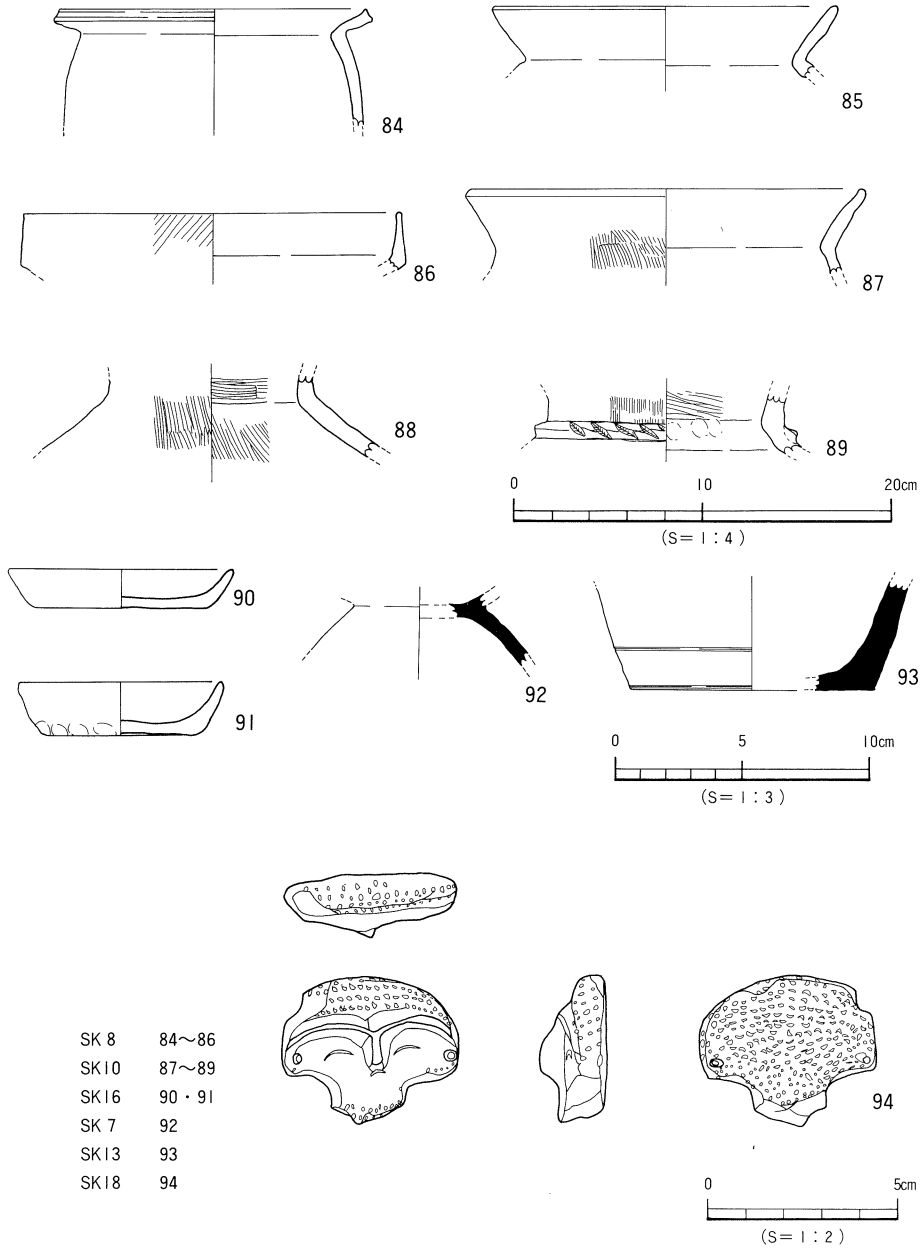
S K 16 出土遺物 (90・91) 90・91は土師器皿。90は口縁部は外傾し、端部は丸く仕上げる。91は深さのある皿。内湾気味に立ち上がる口縁部。端部は尖り気味に丸くおさめる。90・91共に底部切り離しは回転ヘラ切りによる。内外面共に口縁部はヨコナテ、底部はナデ調整を施す。

調査の概要

S K 7 出土遺物 (92) 92は須恵器高坏。脚部は内湾する。6 c。

S K 13 出土遺物 (93) 93は須恵器壺。平底の底部から上外方に直傾的に立ち上がる。底部付近に2条の沈線を施す。9 c。

S K 18 出土遺物 (94) 94は分銅形土製品である。S K 18の埋土上面からの出土であり、



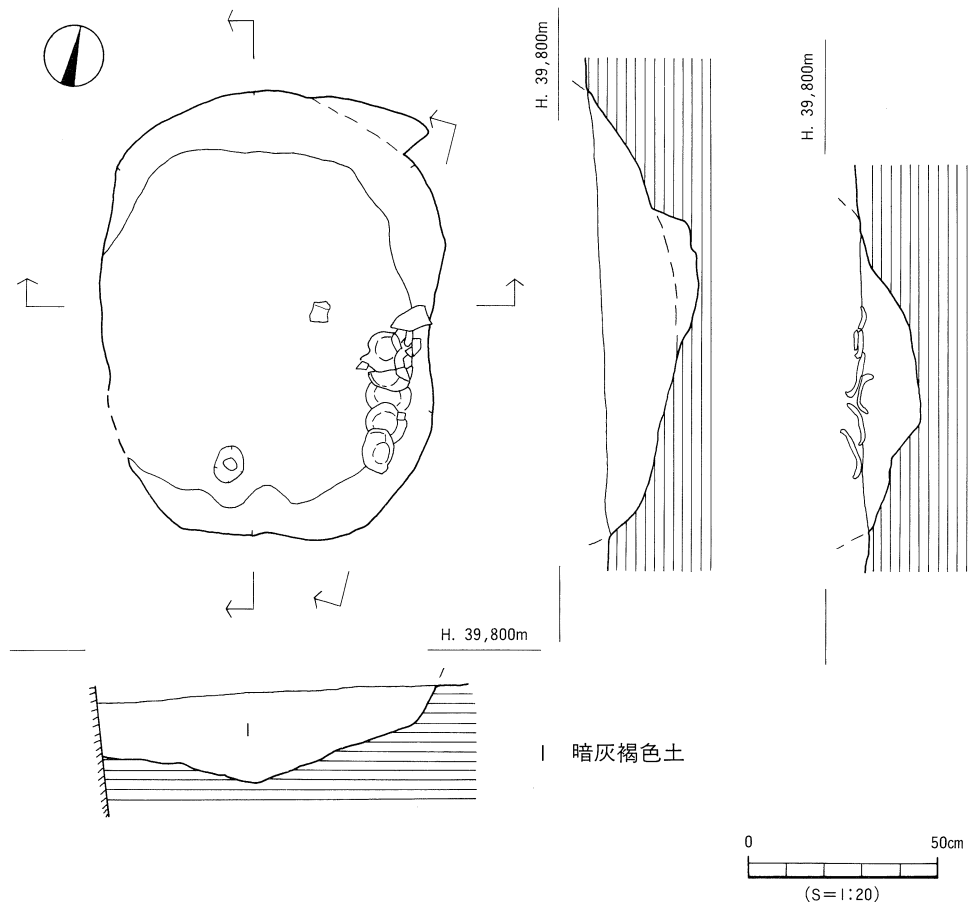
- SK 8 84~86
- SK 10 87~89
- SK 16 90・91
- SK 7 92
- SK 13 93
- SK 18 94

第90図 S K 出土遺物実測図

流れ込みの可能性もある。下半部を欠失している。器形は円形で表裏とも平坦である。肩は断面三角形の凸帯を貼り付け、鼻を一体で表現する。目と口は同一施文具と推定される道具で半月形に線刻する。また、くり込み部両端に左右一対で表面から穿孔しており耳を表現したと思われる。頭髮は肩の上から裏面にかけてほぼ全面に刺突文を施すことによって表現する。色調は表裏面共に黄褐色である。胎土は細かい砂粒を含む。焼成は良好で、頭髮、目裏面の刺突の部分にベンガラ塗彩の痕跡がみられ、当初は全面に塗彩されていたものと推測される。残在長3.8cm、上半部最大幅4.7cm、くり込み部最大幅1.9cm、上端面厚さ0.9cm、くり込み部厚さ1.2cmを測る。

出土遺物・切り合い等よりSK 2は古墳時代以降、SK 6は古墳時代中期以前、SK 3・4・9・23は古墳時代中期以降、SK 13・14は中世以降のものであろう。

本調査で検出した土壌に関する詳細は表42に記す。



第91図 SX 2 測量図

(5) その他の遺構と遺物

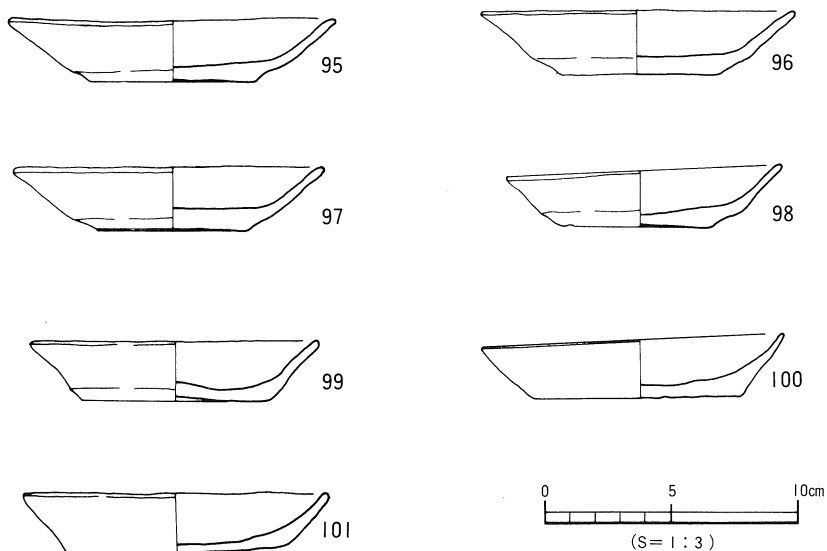
本調査において確認された柱穴は763基（掘立柱建物柱穴を含む）である。すべて第Ⅴ層上面での検出である。柱穴内からの遺物の出土は少量で、弥生土器・土師器・須恵器小片が出土している。他に性格不明遺構（S X 1～5）を5基検出した。

S X 2（第91図、図版57）〔4次調査〕

調査区北西部B7区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北1.5m、東西0.7m、深さ12～26cmを測る。埋土は暗灰褐色土である。床面は凹凸が著しく特に遺構西部で顕著である。これは人為的というより植物の成育に伴う凹みであろう。遺物は土師皿が7点遺構の東壁付近で床面から15cm程度遊離した状況で出土した。これらはすべて同一面で出土している。また土師皿を覆う埋土と土師皿より下の埋土が同じであることから遺物はS X 2に伴うものと判断した。出土した土師皿は野外調査時では6点と認識していたが、その後の整理で計7点であることが明らかになった。調査時では北側の土師皿から順に番号をつけて取り上げを行った。出土状況に差異が認められ、N O. 95・97・99・100は外底を下にN O. 96・98は外底を上に向けていた。

出土遺物（第92図、図版64）

いずれも完形もしくは完形に近い出土品である。形態は底部付近に稜を持つもの（95～98）と持たないもの（99～101）に分類される。口縁部は外反するもの（95～100）と内湾するもの（102）があり口縁端部はすべて丸く仕上げる。底部は、すべて平底である。底部の切り離



第92図 S X 2 出土遺物実測図

しは回転糸切りによるもの (95~98)、回転ヘラ切りによるもの (99)、不明のもの (100・101) がある。調整は内外面共にヨコナデ調整を施すもの (95~98) とナデ調整を施すもの (99~101) がある。色調は内外面共に乳黄色~乳黄灰色である。胎土はいずれも密で焼成は良好である。

時期：出土した土師皿から S X 2 は16世紀代に比定される。

#### 柱穴出土遺物 (第93・94図、図版65)

甕形土器 (102・103) 102は推定口径40cmを測る大型品。口縁部は外反し端部は「コ」字状に仕上げる。口縁下に凸帯が巡り、凸帯上に押圧痕を残す。103は口縁部は内湾し端部は丸く仕上げる。頸部外面には稜をもたない。

壺形土器 (104) 104は複合口縁壺。口縁部は外反し、口縁拡張部は内湾する。口縁拡張部外面に波状文を施す。口縁部は刷毛目調整、口縁拡張部はヨコナデ調整を施す。

高坏形土器 (105・106) 105・106は高坏形土器の坏部。105は坏屈曲部にわずかに段をもつ。坏部は内湾して立ちあがり口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げる。106は坏屈曲部に弱い稜をもつ。内外面共にナデ調整を施す。

土釜 (107) 107は土釜の口縁部片。口縁部は短く直立し、口縁端部は平坦面をなす。断面台形状の鐙部を貼付する。外面はヨコナデ、内面はナデ調整を施す。

皿 (108・109) 108・109は土師器皿。108はわずかに上げ底の底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部の切り離しは回転糸切りによる。内外面共にヨコナデ調整を施す。109は平底の底部から直立気味に立ち上がり口縁部は大きく外反する。底部切り離しは回転糸切りによる。

坏蓋 (110~112) 110・111は須恵器坏蓋。110は扁平な天井部から口縁部に下がり、口縁部は下方に屈曲する。口縁端部は尖り気味に丸い。111は坏蓋のつまみ片。中央部が大きく凹む。112は天井部は丸く、口縁部は直立して下がり口縁端部は内傾する。断面三角形の稜をもつ。

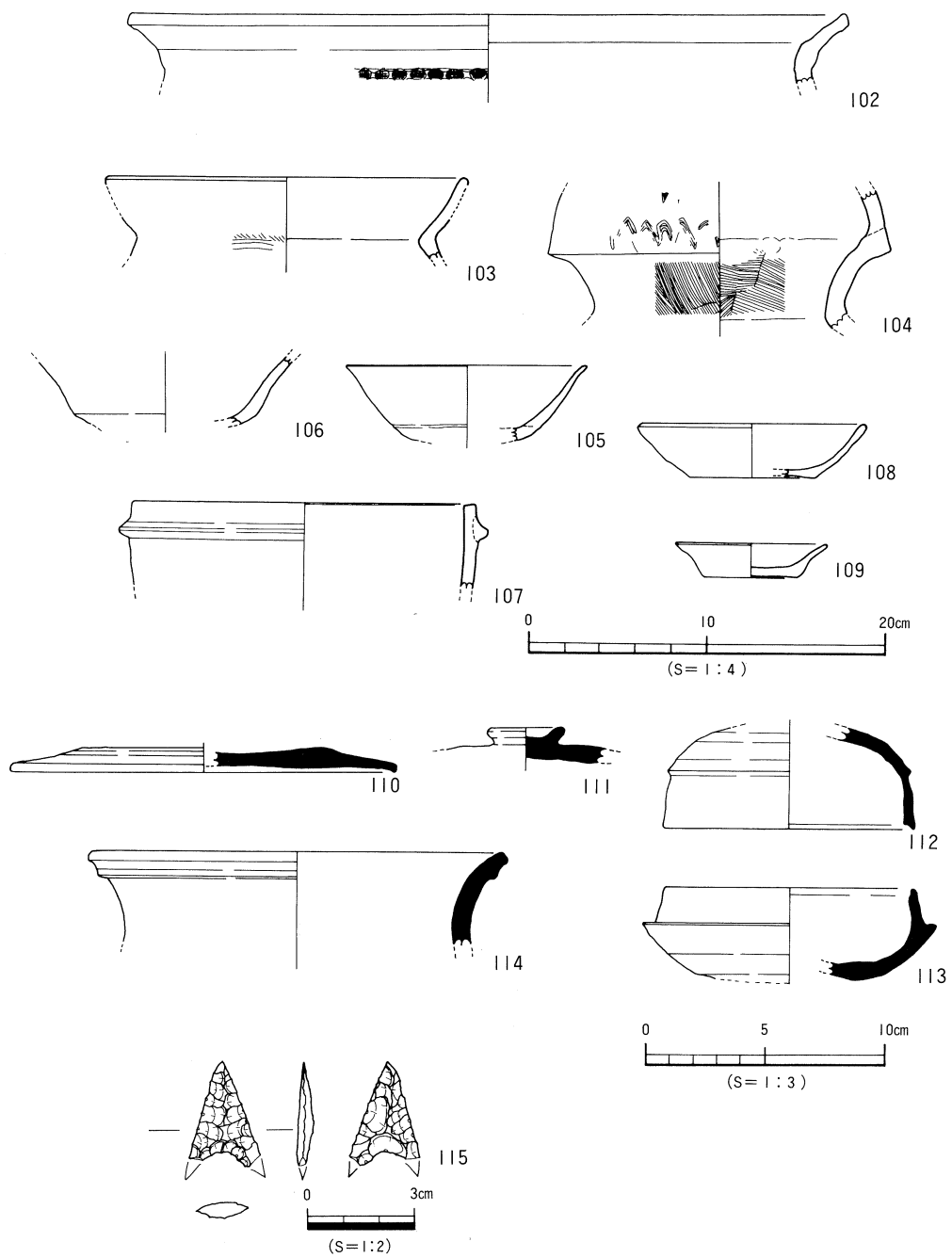
坏身 (113) 113はたちあがりは内傾し、端部は不明瞭な段をなす。

壺 (114) 口縁部は外反し端部は「コ」字状におさめる。口縁下に断面三角形の凸帯が巡る。

石鏃 (115) 115は S P 34埋土出土。比較的厚みのある剥片を素材とした凹基無茎式の打製石鏃である。両脚の先端部を欠く。両面のほぼ全面に細部調整が加えられており、初剥離面は認められない。基部に施された抉りは推定で0.8cmを測り、長さの25%前後を占める。法量は長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量1.6gである。サヌカイト製。

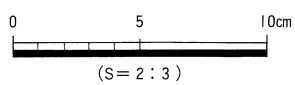
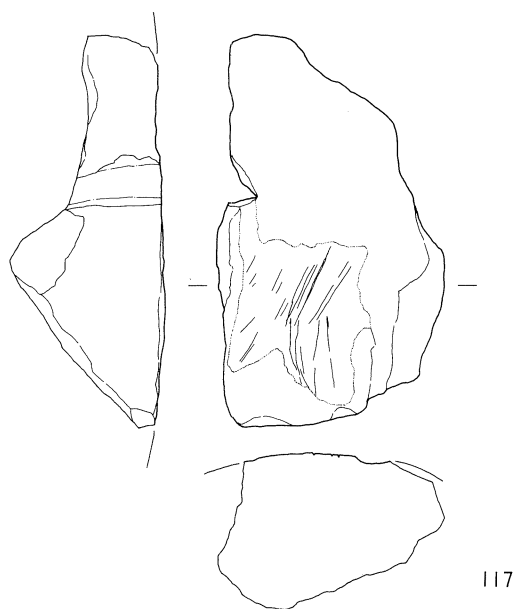
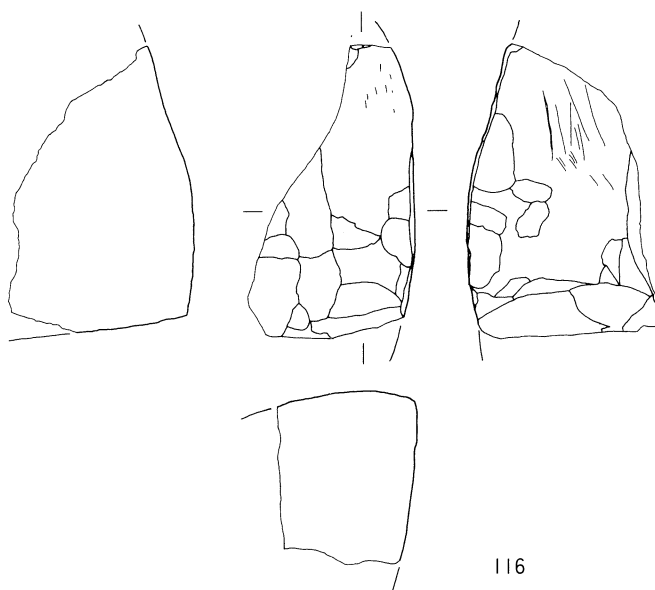
砥石 (116・117) 116・117は S P 33埋土出土。116は不整形をしており、裏面が大きく欠く破損品である。使用痕は表面と左側面に看取される。表面の使用痕は中央から下端にかけて認められる縦・斜め方向の線条痕である。左側面のはV字形を呈し、使用頻度の高さを想

調査の概要



第93図 S P 出土遺物実測図 (I)





第94図 S P 出土遺物実測図 (2)

## 調査の概要

定させるものである。法量は長さ15.1cm、幅8.9cm、厚さ6.1cm、重量599.5gである。117は長方形を呈するものと想定される破損品である。使用痕には、わずかに細かい線条痕があり器面の円滑なもの、ある一定の大きさに削り取られたようなものの二種が認められる。法量は長さ11.5cm、幅6.8cm、厚さ7.2cm、重量545.6gである。石材は117と同一であるが名称は不明である。

### 第Ⅲ層出土遺物（第95図、図版66）

#### 土師器

羽釜（118～120） 口縁部は内湾して立ち上がる。118・119は口唇上端に断面三角形の凸帯を貼付する。120は口縁端に断面三角形の下膨れの凸帯を貼付する。内外面共にヨコナデ調整を施す。

土釜（121） 121は土釜小片。鐙は断面三角形で外方向に長く水平にのびる。

皿（122～128） 口縁部は内湾気味に立ち上がるもの（123～125・127）と、直線的に立ち上がるもの（122・128）がある。底部の切り離しは回転糸切りによるもの（123・125・127）があり、その他は摩滅の為不明である。いずれも内外面共にヨコナデ調整を施す。

坏（129・130） 129は平底の底部から外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。成形手法はロクロによる。底部は回転ヘラ切りによって切り離された後ヨコナデ調整を施す。口縁部は内外面共にヨコナデ調整を施す。130はやや突出する平底の底部から外方へ向かってたちあがる。全体の約半分を欠失している。底部切り離しは摩滅の為不明。

陶磁器（131・132） 131・132は備前焼摺鉢。口縁部は粘土を貼付け、口唇面を上下に拡張する。内外面共に回転ナデ調整を施す。底部は欠損している。胴部内面に9条の放射状の楕描き条線を施す。

### 第Ⅳ層出土遺物（第96～98図、図版66・67）

#### 土師器

甕形土器（133～136） 133は口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内傾する面をなす。外面は刷毛目調整後ヨコナデ調整を施し、内面は刷毛目調整を施す。134・135は内湾する口縁部と内傾する口縁端部をもつ。134は内面に指頭痕を残す。136は胴部が長胴となるもので、口縁端部は丸みのある「コ」字状に仕上げる。

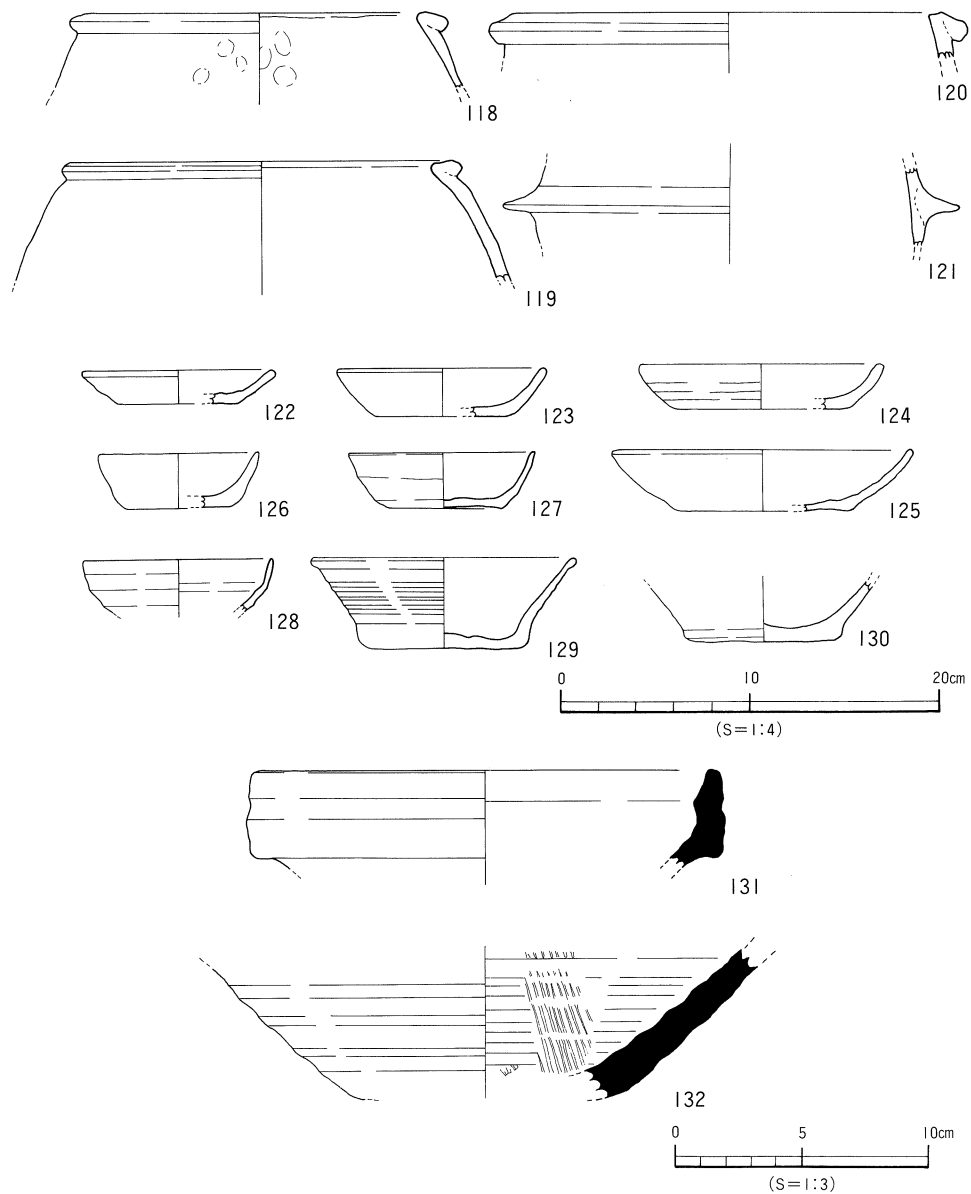
壺形土器（137・138） 137は複合口縁壺。口縁拡張部に屈曲部をもちその上下に波状文を施す。内外面共に刷毛目調整を施す。138は二重口縁壺。直立して立ち上がる口縁拡張部に波状文及び円形浮文を施す。

甗形土器（139） 胴部は直立してたちあがり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げる。外面は刷毛目調整後ナデ調整を、内面はヨコナデ調整を施す。

高環形土器（140・141） 140は高環の坏部片。坏屈曲部に稜をもつ。141は脚部片。三角錐状の柱部に外反する裾部をもつ。柱部と裾部の境内面に弱い稜をもつ。

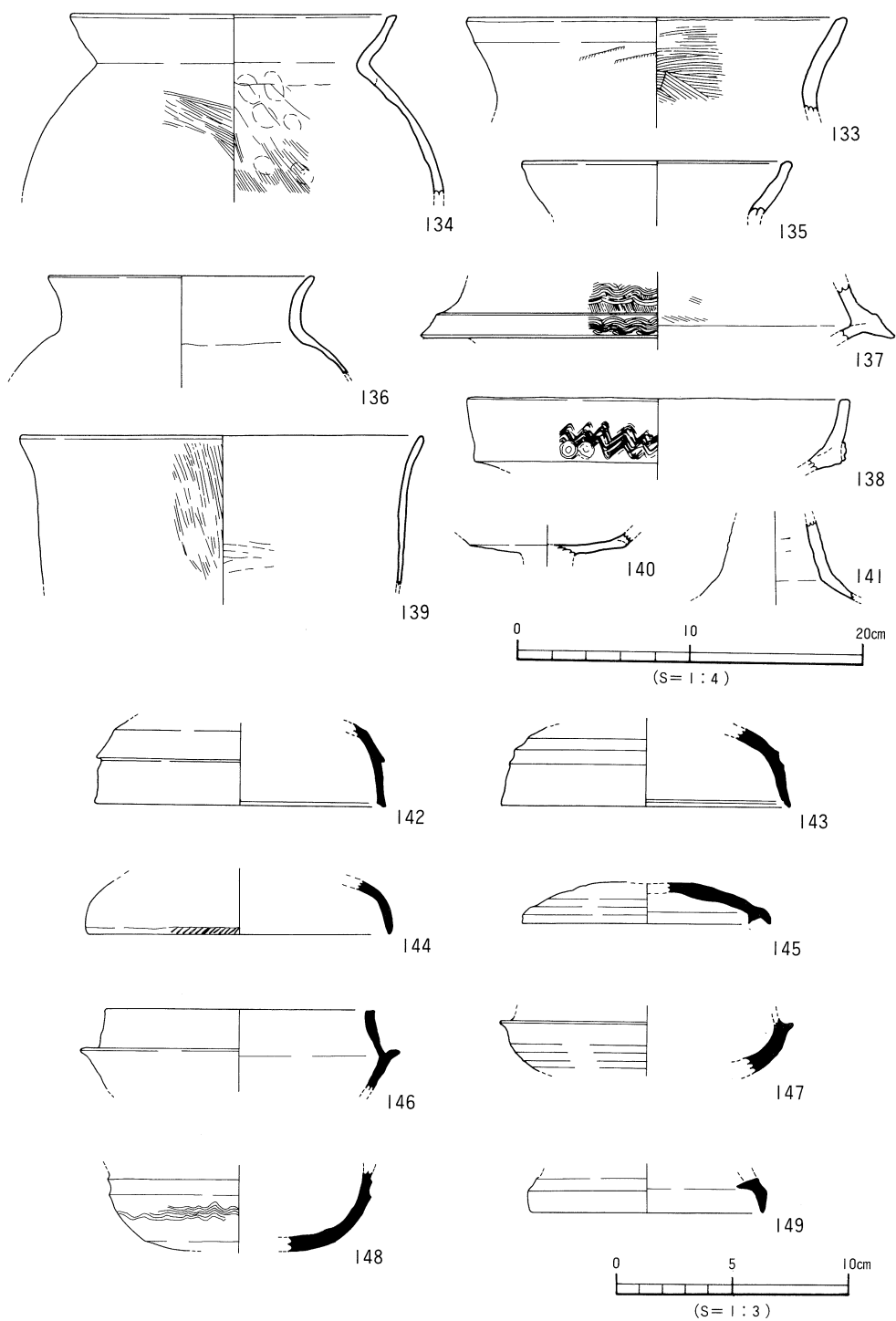
須恵器

坏蓋 (142~145) 142は口縁部は直立気味に下がり、端部は内傾する段をなす。天井部と口縁部をわける稜は段差による。143は口縁部は外反して下がり端部は尖り気味である。天井部と口縁部をわける稜は凹線による。144は稜は消失している。口縁端面に刻み目を施す。145はかえりのある坏蓋で、かえり端部と口縁端部は同一面で接地する。



第95図 第Ⅲ層出土遺物実測図

調査の概要



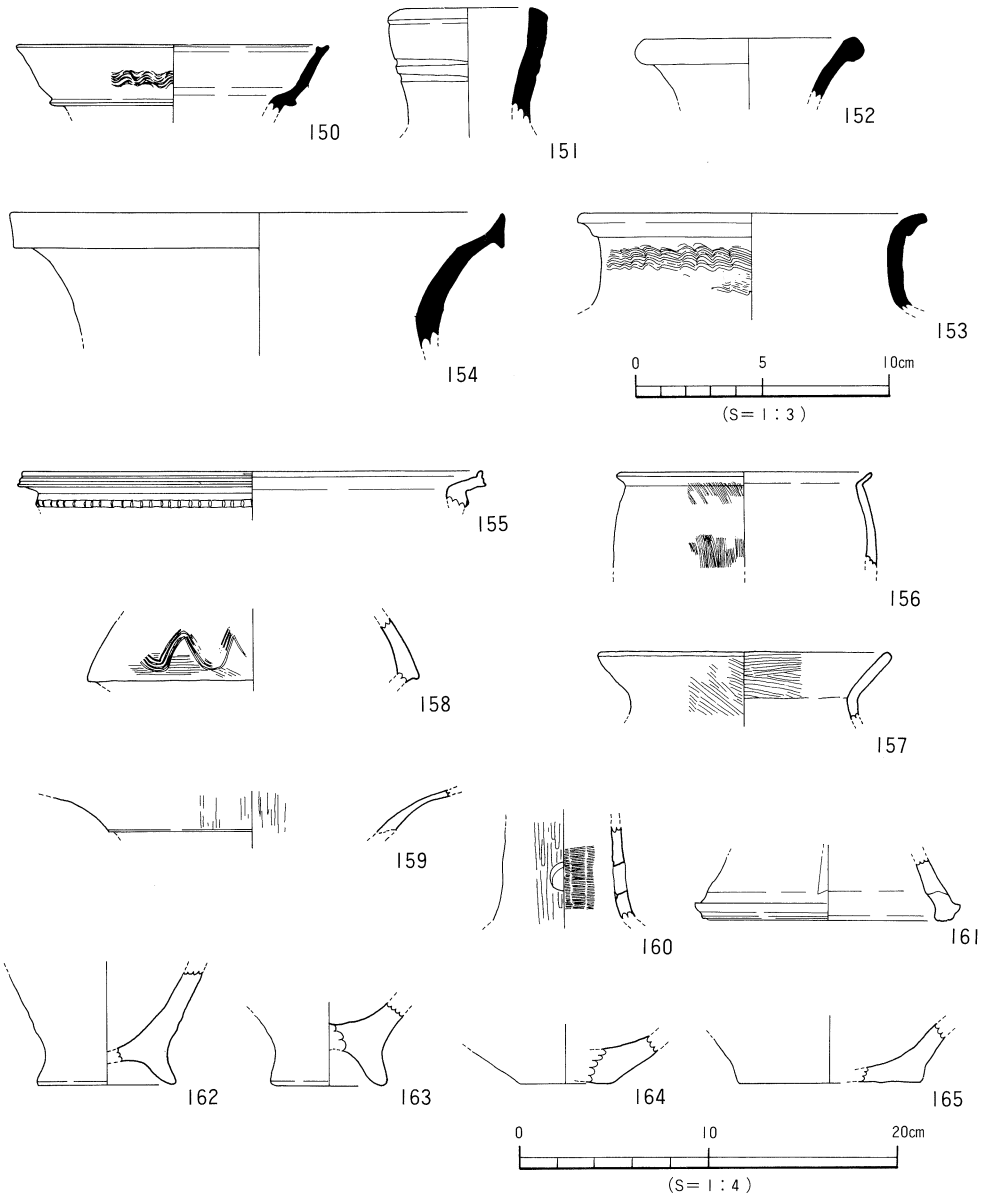
第96図 第IV層出土遺物実測図(1)

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

坏身 (146・147) 146はたちあがりは内傾し、端部は平坦面をなす。受部端に沈線状の凹みがみられる。

高坏 (148・149) 148は無蓋高坏の坏部片。2条の凸帯を貼付けし凸帯下に波状文を施す。149は脚部小片。脚端部は下方に屈曲し、端面は尖り気味に丸く仕上げる。

琮 (150) 150は琮の口縁部片。口縁部は外反し、端部は凹面をなす。口縁下に1条の凸帯が巡り、口縁部と凸帯の間に波状文を施す。



第97図 第IV層出土遺物実測図 (2)

調査の概要

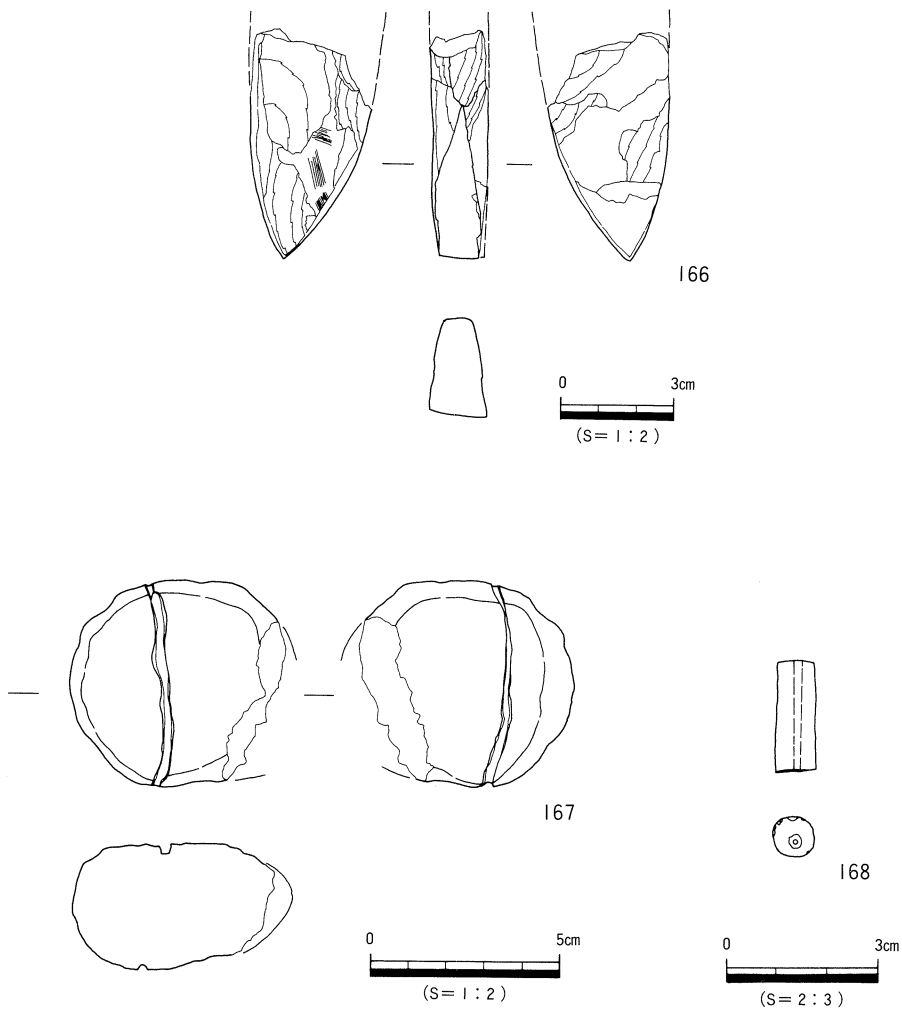
提瓶 (151) 151は提瓶の口縁部。口縁端部は外傾する面をなす。口縁中位に2条の沈線が巡る。

壺 (152・153) 152・153は壺の口頸部片。口縁部は外反し、152は口縁端部を珠玉状におさめる。153は下方に拡張し、頸部に数条の波状文を施す。

甕 (154) 154は甕の口頸部片。口縁部は外反し端部は上下方に拡張する。口縁端部内面にわずかに稜が認められる。

弥生土器・石製品

甕形土器 (155~157) 155は小片。口縁端部は上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。



第98図 第IV層出土遺物実測図 (3)

内外面共にヨコナテ調整を施す。\*156は「く」の字状口縁を呈する小型品。胴部外面は刷毛目調整後ナテ調整を施す。157は頸部外面に稜をもたない。内外面共に粗い刷毛目調整を施す。

壺形土器 (158) 158は複合口縁壺。内湾する口縁拡張部に4条の櫛描波状文を施す。外面に刷毛目調整を施す。

高坏形土器 (159~161) 159は高坏の坏部片。坏屈曲部は段をなし、口縁部は大きく外反する。口縁端部は欠損している。内面に縦方向のミガキ調整を施す。160は柱状の柱部に1.5cm大の円孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整、内面は刷毛目調整後ナテ調整を施す。161は脚部片。脚端部を上方に拡張し、端面に3条の凹線を施す。裾部に透かしあり。

162・163は甕形土器、164・165は壺形土器の底部である。162・163はくびれの上げ底を呈し、胴部外面はミガキ調整を施す。164はわずかに上げ底を呈し、165は突出する平底をもつ。

柱状片刃石斧 (166) 基部が大きく欠損する。右側面は一部剥落する。左側面の研磨は丁寧になされ、前主面には縦方向の丁寧な研磨が認められる。横断面形は側面が身膨れ状の台形を呈している。法量は長さ6.0cm、幅3.3cm、厚さ0.44cm、重量40.1gである。緑色片岩製。

有溝礫石錘 (167) 一部破損する。風化の進行する花崗岩の自然礫を素材とし、短軸方向に擦り切りによる一条の溝が刻み込まれている。溝の深さは均一ではなく0.3~0.7cmを測る。法量は長さ5.4cm、幅5.7cm、厚さ3.5cm、重量133.2gである。

管玉 (168) 完形品。全体の研磨は比較的丁寧になされている。上下の端面はやや丸みをもつ。穿孔は上方からの片面穿孔である。法量は長さ2.15cm、幅0.8cm、厚さ0.8cm、重量2.6gである。碧玉製。

## 4. 小 結

本調査において弥生時代・古墳時代・古代~中世の遺構と遺物を確認することができた。

### 1. 弥生時代

確実に弥生時代に時期比定できるのはSB1とSB8である。平面形は隅丸の方形を呈する。いずれも後期末のものである。当地を含めた周辺地域で、これまで希少だった当該期の竪穴式住居址の検出は当時の住居形態や構造を考えるうえで好資料となるものである。終末期の方形の住居址で6本柱の主柱穴を有する竪穴式住居址は東本遺跡2次調査で既に報告されており、本調査を含めて今後の周辺地域において類例の増加が予想される。なお、包含層である第IV層からは弥生時代中期末の土器が出土していることから周辺に該期の遺構が存在していた可能性が考えられる。

### 2. 古墳時代

本調査検出の遺構や遺物の主体をなす。

前期 SB3・4・6は松山平野でも数少ない前期の竪穴式住居址である。いずれも平

面形は隅丸の方形プランをなす。支柱穴はS B 3・6にて4本を検出している。注目されるものはS B 6に付設された屋内高床部（ベット状遺構）である。従来、松山平野で検出される高床部は屋内の四周あるいは三周に付設される場合がほとんどである。しかしながら、本住居址の場合は住居址の3つのコーナーに付設されている。これは北部九州、福岡県八女市西中ノ沢遺跡検出のS B 5号住居址（古墳時代中期）にその形状が類似しており、当地との交流があった可能性が考えられ非常に興味深い資料である。

中期 注目されるものはS B 7である。遺物は住居址北東部の床面付近に集中して出土した。高環形土器の出土数が比較的多く、遺存状況の良好な坏部が4点出土している。高環形土器に比べて他の器種は少量かつ小片であり好対照の出土状況をなす。土器様相は高環形土器はいずれも坏屈曲部に段をもち口縁部がやや外反する。

後期以降 古墳時代後期の遺構はS B 2があるほか、時期特定はできないものの掘立柱建物址のなかで古墳時代後期以降のものがある。1・2号建物址は掘り方や柱痕等明確に検出できた当該期の遺構である。遺物は5世紀末～6世紀前半、7世紀代の須恵器が出土している。

### 3. 古代～中世

古代～中世の遺構としては掘立柱建物址のほか、土壙S K 1・5、性格不明遺構S X 2がある。S K 1・5は土壙墓として考えられる。S K 1からは完形の土師器坏のほか玉や鉄器が、S K 5からは同じく完形の土師皿1点と歯が出土している。またS X 2からは土師皿8点が連なりあって出土している。これらの遺構や伴した遺物は当時の埋葬観念や社会構造を考えるうえで好資料となるものである。

### 4 包含層出土品

包含層中の出土ではあるが管玉が良好な遺存状況で出土した。桑原地区の集落遺跡からの出土は初例である。管玉の所有は当時の首長層における権威の象徴を示すものであり、今回の管玉の出土は樽味四反地遺跡を含む桑原地区において一定以上の権力を担った有力者の存在を示唆している。

そのほか土壙S K 18上面（流れ込みの可能性あり）から分銅形土製品が出土している。同地区での出土は管玉と同様に初例であり興味深い資料である。

#### 〔参考文献〕

- 石野 博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館  
 宮本 一夫 1989 『樽味・鷹子遺跡の調査』愛媛大学考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室  
 田崎 博之 1993 『樽味遺跡II』愛媛大学埋蔵文化財調査室  
 梅木 謙一 1992 『桑原地区の遺跡』(勸松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター)



樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

表39 竪穴式住居址一覧

竪穴 (SB)	時 期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内部施設				周壁溝	備 考
					高床	土壇	炉	カマド		
1	弥生後期	隅丸方形	4.2×3.2+ $\alpha$ ×0.10	4(6)	○	○		○	SB2・掘立1に切られる。	
2	古墳後期	隅丸方形	4.7×4.6×0.20	3(4)				○	SB1・SB5を切る。	
3	古墳前期	隅丸方形	4.7×4.2×0.12	4					SB4・SK1・SK2に切られる。	
4	古墳前期	隅丸長方形	5.3×2.4+ $\alpha$ ×0.10						SB3を切り、SK1に切られる。	
5	古墳中期	隅丸長方形	4.5×3.5×0.28					○	SB2・SK3・SK4に切られる。	
6	古墳前期	隅丸方形	5.3×4.5×0.30	4	○		○	○	SD5に切られる。	
7	古墳中期	隅丸方形	3.5×2.7×0.15					○	掘立5に切られる。	
8	弥生後期	隅丸方形	3.9×3.8×0.20							

表40 掘立柱建物址一覧

掘立	規 模 (間)	方 位	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	4×2	東西	704(23.5)	5・5.5・5.8・7.2	500(16.7)	7.3・9.4	35.2	古墳後期以降	SB1・2を切る。
2	4×1+ $\alpha$	東西	637(21.2)	5・6・5.2・5	110(3.7)	3.7	7.0	古墳以降	
3	2×1	南北	364(12.1)	5.7・6.4	245(8.2)	8.2	8.9	中世	
4	2×1	南北	300(10.0)	5・5	130(4.3)	4.3	3.9	中世	
5	2×1	東西	402(13.4)	6.7・6.7	200(6.7)	6.7	8.0	中世	
6	2×1	東西	478(15.9)	7.5・8.4	306(10.2)	10.2	14.6	中世	SB7を切る。
7	2×1	東西	625(20.8)	10.8・10	305(10.2)	10.2	19.0	中世	
8	2×1	南北	440(14.7)	7.3・7.4	260(8.7)	8.7	11.4	中世	

表41 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	C7~D7	U字状	9.80×0.60×0.08	黒褐色土	弥生・須恵	古墳以降	
2	B7	皿状	2.00×0.50×0.08	灰褐色土			
3	C7	皿状	1.30×0.20×0.05	黒褐色土			
4	F7~H7	皿状	5.10×0.60×0.06	緑灰色土		近世	
5	A2~A4	皿状	7.08×0.40×0.08	灰褐色土	土師・須恵	中世	SB6を切る。
6	A0~A1	船底状	4.20×0.40×0.04	暗灰色土		不明	
7	H1~H2	船底状	4.90×2.50×0.40	灰褐色土	土師	中世	

## 遺 構 一 覧

表42 土 壌 一 覧

土 壌 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	E6	長方形	皿状	1.20×0.86×0.20	灰褐色土	土師・石・鉄・玉	中世	SB4, SK2を切る。
2	E6	楕円形	皿状	2.00×1.32×0.22	黒褐色土		古墳前期以降	SB3・SB4を切る。
3	B6・7	楕円形	船底状	1.25×0.75×0.25	茶褐色土		古墳中期以降	SB5を切る。
4	B6	不整楕円形	船底状	2.20×0.82×0.20	茶褐色土		古墳中期以降	SB5・SK6を切る。
5	B7	円形	皿状	0.5+ $\alpha$ ×0.5+ $\alpha$ ×0.05	灰褐色土	土師・歯	中世	
6	B6	不整形	皿状	2.80×2.64×0.28	黒褐色土		古墳中期以前	SB5に切られる。
7	A4・5	不整円形	皿状	2.40×1.22×0.18	黒褐色土		不明	
8	A3~B4	円形	皿状	2.63×2.52×0.08	黒褐色土+ 黄色土	弥生・土師・須恵	古墳以降	
9	B3~C3	長楕円形	船底状	2.78×1.02×0.68	黒褐色土+ 褐色土		古墳中期	SB7と重複
10	B0・1	不整楕円形	船底状	2.45×1.40×0.47	黒褐色土	弥生	不明	
11	D1	円形	皿状	1.20×1.20×0.23	黒褐色土		不明	
12	C2~D2	隅丸長方形	皿状	2.00×1.10×0.28	暗灰色土		不明	
13	D3	長方形	逆台形状	2.58×0.84×0.10	茶褐色土	土師・須恵	中世	
14	D3・4	長方形	皿状	3.23×2.10×0.44	灰褐色土	土師・須恵	中世	
15	E2・3	長方形	皿状	2.45×1.10×0.25	茶褐色土		不明	
16	E1	不整楕円形	船底状	1.25×0.75×0.23	褐色土		不明	
17	F1・2	長楕円形	皿状	3.20×0.80×0.12	褐色土		不明	
18	F3~G3	円形	皿状	1.70×1.45×0.15	黒褐色土	弥生・土師	古墳以降	
19	G2~H2	長方形	船底状	2.65×1.20×0.12	褐色土		不明	
20	G3~H3	不整楕円形	船底状	1.92×0.97×0.22	黒褐色土	弥生・土師	古墳以降	
21	H3・4	隅丸長方形	逆台形状	2.60×0.92×0.43	黒褐色土	弥生・土師	古墳以降	
22	H4	不整楕円形	皿状	3.35×1.43×0.17	黒褐色土		不明	
23	E5~F5	方形	皿状	1.70×1.40×0.12	黒褐色土		古墳中期	SB4と重複
24	B5	楕円形	皿状	0.94×0.45×0.17	黒褐色土	弥生	弥生後期	SB1内

表43 性格不明遺構一 覧

性格不明 (SX)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	A3	不整楕円形	船底状	2.80×0.80×0.43	黒褐色土		不明	
2	B7	長方形	船底状	1.15×0.90×0.26	暗灰褐色土	土師皿	中世	
3	F4・5	楕円形	船底状	2.50×1.00×0.28	黒褐色土		不明	
4	C6~D6	方形	船底状	1.80×1.60×0.15	黒褐色土		古墳後期	SB2床面検出
5	F4・5	楕円形	船底状	2.00×1.30×0.32	黒褐色土		不明	

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

表44 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	口径 (13.4) 残高 2.7	複合口縁壺の口縁部片。 端部は内傾する。波状文あり。	ヨコナテ	ハケ→ヨコナテ	暗灰褐色	石・長(1~4) ◎		
2	壺	口径 (5.6) 残高 3.6	直口壺。小片。口縁端部は先細りする。多重の沈線文を2段に施す。	ヨコナテ	ヨコナテ	黄褐色	密 ◎		
3	壺	口径 (7.6) 残高 6.2	直立する口縁部。端部は丸く仕上げる。	ヨコナテ	ハケ(6本/1cm)	茶褐色	密 ◎		
4	器台	口径 (22.4) 残高 1.3	受部小片。口縁端部は上下方に拡張。端面に波状文を施す。	ナテ	ミガキ	橙褐色	密 ◎		
5	鉢	口径 (27.0) 残高 24.4	大型品。口縁端部は上下方に拡張。口縁部はくの字に折り曲げる。	①-ヨコナテ ②-ハケ(10~12本/1cm)	ハケ(8~10本/1cm)	黄褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎	黒斑 SK24	58
6	鉢	口径 (17.7) 底径 2.4 器高 12.3	口縁部は大きく外反。端部はやや下方に拡張。底部はわずかに上げ底。	①-ヨコナテ ②-ハケ(8本/1cm)	ハケ	褐色	石・長(1~3) ◎	煤 SK24	58
7	鉢	底径 1.7 残高 3.4	突出する底部。	ヘラミガキ	ヘラミガキ	褐色	密(石・長1~2) ◎		58

表45 SB1 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
8	石器素材	1/2	緑色片岩	5.2	3.4	0.6	18.7		58

表46 SB8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
9	甕	口径 (15.1) 残高 3.3	逆L字形を呈する甕の口縁部。端部は上方に拡張し、端面に1条の凹線あり。	ヨコナテ	①-ヨコナテ ②-ナテ	乳褐色	密 ◎		
10	高坏	残高 5.0	高坏の脚部片。	ヨコナテ	③-ヨコナテ ④-ケズリ	褐色	密 ◎		59
11	鉢	口径 (19.2) 残高 6.7	外傾してたちあがり口縁端部はわずかに内方に屈曲する。	① ヨコナテ ②上-叩き ③下-ナテ	ハケ	褐色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎	黒斑	59
12	鉢	口径 (15.0) 底径 3.1 器高 7.1	平底の底部。内湾気味にたちあがり、口縁部は直立する。端部は尖り気味。	ハケ(10~11本/1cm)	ハケ(10~11本/1cm)	黄灰色	石・長(1~2) ◎	黒斑	59
13	鉢	底径 (2.4) 残高 3.5	平底の底部	ハケ	ハケ(7本/1cm)	暗灰褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎	黒斑	

遺物観察表

表47 S B 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
14	甕	口径 (15.3) 残高 6.1	「く」の字口縁。口縁端部は「コ」字状におさめる。	①—ヨコナテ ②—ハケ(9~10本/1cm)	①—ハケ→ナテ ②—ハケ(11~12本/1cm)	茶褐色 明褐色	石・長(1~3) ◎		59
15	壺	口径 (32.0) 残高 2.4	小片。口縁端部は下外方に拡張。波状文あり	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄褐色	石・長(1~3) ○		
16	壺	残高 3.7	複合口縁壺。口縁拡張部に波状文あり。	ヨコナテ	ナテ	灰黄褐色	石・長(1~2) ◎		
17	注口 土器	残高 5.3	小片。口縁下位に貼付による凸帯が巡り、凸帯上に刻み目を施す。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳褐色	石・長(1~2) ◎		59
18	鉢	口径 (37.6) 底径 (8.4)	口縁端部に2条の凹線あり。底部は平底風で胴下部以下に叩きを施す。	①—ヨコナテ ②上—ハケ(7本/1cm) ②下—タタキ→ハケ	①—ハケ ②—ハケ	黄褐色 暗灰褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
19	鉢	口径 (13.3) 残高 5.8	胴部は内湾し、口縁端部は「コ」字状におさめる。底部とやや突出する。	ハケ	ハケ	灰褐色 黒褐色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	59
20	壺	底径 (4.5) 残高 3.1	扁平な体部にボタン状に突出する。やや上げ底を呈する。	ハケ	ナテ	黒褐色	石・長(1~3) ◎		
21	甕	底径 4.0 残高 3.0	平底の底部。胴下部外面に叩き痕あり。	タタキ	ハケ	黄褐色	石・長(1~2) ◎		

表48 S B 3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
22	甕	口径 (17.5) 残高 6.3	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状におさめる。	①—ハケ(3~4本/1cm) ②—タタキ→ハケ	ハケ(4~5本/1cm)	暗灰褐色 淡褐色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		60
23	甕	口径 (13.9) 残高 3.9	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状におさめる。	①—ヨコナテ ②—タタキ→ハケ	ハケ(9本/1cm)	暗黒色 暗灰褐色	石・長(1~3) ◎		60
24	甕	口径 (18.9) 残高 5.7	やや内湾する口縁部。端部はわずかに面をなす。頸部に稜をもたない。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰黄褐色 灰黄色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		60
25	甕	口径 (16.2) 残高 4.1	内湾する口縁部。端部はわずかに内傾する。	①—ヨコナテ ②—ハケ	摩滅の為不明	褐色	石・長(1) ◎		
26	甕	口径 (25.0) 残高 6.7	内湾する口縁部。口縁部上部に屈曲部をもつ。口縁端面は丸く仕上げる。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄褐色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		
27	壺	口径 (17.0) 残高 3.6	二重口縁壺。口縁拡張部は直立。端部は内傾する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡褐色 淡灰黄色	石・長(2~4) ○		
28	鉢	口径 (20.0) 残高 4.8	外反する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	①—ヨコナテ ②—ハケ	①—ヨコナテ ②—ハケ→ナテ	乳黄白色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		60

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

S B 3 出土遺物観察表

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
29	鉢	口径 (16.7) 残高 2.7	内湾する口縁部。口縁端面はわずかに凹む。	摩滅の為不明	ハケ (6本/1cm)	暗灰褐色	密(石・長1) ◎		
30	鉢	口径 (13.7) 残高 7.7	やや丸みのある底部。口縁部は内湾気味に直立する。端部はわずかに凹む。	摩滅の為不明 (指頭痕)	ハケ (8本/1cm)	灰褐色 茶褐色	石・長(1~4) ◎		60
31	鉢	口径 (10.3) 底径 (3.3) 残高 5.9	やや丸みのある底部。内湾気味に直立する口縁部。端部は丸い。	ヘラミカキ	ナデ	黒灰色 淡灰褐色	密 ◎		60
32	支脚	底径 (8.5) 残高 9.2	三角錐状の柱部。中空。	ハケ→ナデ (指頭痕顕著)	ナデ	乳黄色	密(石長~3) 金ウソモ ◎		60

表49 S B 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
33	甕	口径 (22.0) 残高 5.7	内湾する口縁部。口縁部上部に屈曲部をもつ。口縁端部は丸く仕上げる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡灰黄色	石・長(1~3) ◎		60
34	甕	口径 (16.2) 残高 3.0	内湾する口縁部。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。	ハケ	ハケ	褐色	石・長(1~4) ◎		60

表50 S B 4 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
35	勾玉	ほぼ完形	瑪瑙製	3.6	1.2	1.0			60

表51 S B 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
36	高坏	口径 (17.6) 残高 3.2	坏屈曲部は丸みのある稜をもつ。口縁部は外反し、端部は先細り。	ハケ	ハケ→ナデ	乳黄褐色	密(石・長1) ◎		
37	高坏	残高 4.6	三角錐状の柱部。柱一帯部内面に稜あり。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳黄褐色	密 ◎		
38	鉢	口径 (24.0) 残高 6.4	直立する体部にやや外反する口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	摩滅の為不明	乳褐色 乳黄褐色	密 金ウソモ ◎		

遺物観察表

表52 SB7出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
39	甕	口径 (24.6) 残高 4.0	口縁部はわずかに内湾し 口縁上部は外反する。 口縁端部は丸い。	⑪—ヨコナテ ⑫—ハケ	⑪—ハケ (8本/1cm) ⑫—ヘラケズリ	茶褐色	石・長(1~2) ◎		
40	甕	口径 (12.4) 残高 3.5	口縁部はわずかに内湾。 口縁端部は丸くおさめる。	ナテ	ヨコナテ	乳白色	石・長(1~3) ○		61
41	壺	口径 (12.2) 残高 6.4	内湾して立ち上がる口縁部。 口縁端部は先細りする。	摩滅の為不明	ハケ	乳橙色 乳黄色	石・長(1~3) ○		61
42	壺	口径 (11.8) 残高 4.5	外反する口縁部。口縁端部は先細りする。 頸部内面はヘラ削りする。	ハケ→ナテ	⑪—ハケ (5本/1cm) ⑫—ヘラケズリ	灰黄褐色	石・長(1) ◎		61
43	壺	口径 (11.5) 残高 4.8	内湾する長い口縁部。口縁上部は外反し端部は先細りする。	摩滅の為不明	ナテ	乳黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
44	壺	口径 (11.6) 残高 5.6	口縁部は内湾し、端部は先細り。 頸部以下ヘラ削りする。器壁薄い。	摩滅の為不明	⑪—摩滅の為不明 ⑫—ヘラケズリ	乳褐色 淡黄褐色	石・長(1~2) ◎		61
45	壺	残高 4.5	肩部の張りが強い。胴部最大径以下ヘラ削りする。 器壁薄い。	⑪—ヨコナテ ⑫—ハケ	⑪—ハケ ⑫上—ナテ ⑫下—ヘラケズリ	灰黄色	密 ◎		
46	甕	残高 11.9	強く張る肩部。球形の胴部は内面にヘラ削り痕顕著。	ハケ (8本/1cm)	⑪—ナテ ⑫—ヘラケズリ	明褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
47	壺	残高 11.4	肩部が張り、底部はやや広めの丸底。 内面に指頭痕が残る。	ハケ	ハケ	乳黄褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	61
48	鉢	口径 14.8 器高 6.2	完形品。丸底でやや広い底部。 口縁部は内湾し口しん部に凹みあり。	⑪—ヨコナテ ⑫—ハケ	ヨコナテ	淡黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~2) ◎		61
49	鉢	口径 (7.9) 器高 3.9	手づくね品。外面に指頭痕を顕著に残す。	ナテ(指頭痕)	ナテ(指頭痕)	淡黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		61
50	高坏	口径 18.3 残高 7.1	坏屈曲部はわずかに段をなす。 口縁部は外反し、端部は丸く細る。	ハケ	ハケ (5本/1cm)	茶褐色	石・長(1~3) ◎		61
51	高坏	口径 (16.8) 残高 5.1	坏屈曲部はわずかに段をなす。 口縁部は外反する端部は先細り。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄褐色	密 ◎		61
52	高坏	口径 (17.8) 残高 4.45	坏屈曲部は段をもつ。口縁部は外反し、端部は丸く細い。	ヨコナテ	ヨコナテ	淡灰褐色	石・長(1~4) 金 ◎		
53	高坏	口径 17.0 残高 5.3	坏屈曲部は丸みのある段をなす。 深さのある坏部、口縁端部は丸く細い。	ヨコナテ	摩滅の為不明	淡黄褐色	石・長(1) ○		61

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

表53 SB2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
54	甕	口径 (14.8) 残高 5.1	内湾する口縁部。口縁端面は内傾する。	㊦-ヨコナデ ㊧-ハケ (17本/1cm)	㊦-ヨコナデ ㊧-摩滅の為不明	褐色	石・長(1-2) ◎		62
55	甕	口径 (16.0) 残高 2.0	わずかに内湾する口縁部。口縁端面は内傾する。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黄褐色	石・長(1-2) ◎		
56	甕	口径 (16.4) 残高 3.7	わずかに内湾する口縁部。口縁端面は丸みをもつ。	㊦-ヨコナデ ㊧-ハケ	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1-2) 金ウモンモ ◎		
57	甕	口径 (9.6) 残高 3.8	小型品。わずかに外反する口縁部。口縁端部は先細りする。	摩滅の為不明	ケズリ	淡黄褐色	密 金ウモンモ ◎	黒斑	62
58	製塩土器	口径 (4.4) 残高 3.1	製塩土器の口縁部。口縁端部は先細りする。小片。	叩き	ナデ	乳黄色 淡灰褐色	石・長(1-2) 金ウモンモ ◎		
59	椀	口径 (11.6) 残高 3.5	口縁部はゆるやかに外反。端部は先細りする。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色	密 ◎		
60	高環	口径 (16.0) 残高 2.7	高環の坏部片。口縁部は外反し、端部は丸く細る。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙褐色	密 ◎		
61	坏蓋	口径 (13.2) 残高 3.4	口縁部は外反して下がり。端部は内傾する段をなす。断面三角形の稜あり	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1-3) ◎		
62	坏蓋	口径 (12.4) 残高 3.6	口縁部は垂下し端部はわずかに内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗青灰色	密 ◎		
63	坏蓋	口径 (12.3) 残高 4.6	天井は中央部がやや突出する。口縁部は垂下し、端部は内傾する凹面をなす。	㊦-回転ヘラ削り 1/2 ㊧-回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1-3) ◎		62
64	坏蓋	口径 (12.2) 残高 3.7	口縁部はやや外反して下がり、端部は内傾する。	㊦-回転ヘラ削り ㊧-回転ナデ	回転ナデ	淡黄灰色	密(長3) ◎		62
65	坏身	口径 (10.6) 器高 4.8	たちあがりは直立し、端部は内傾する。受部は外方に水平にのびる。	㊦-回転ナデ ㊧-回転ヘラ削り 1/2	回転ナデ	灰色	石・長(1-2) ◎		62
66	高環	残高 3.1	無蓋高環の坏部。椀形の坏部で外面に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	石・長(1-3) ◎	釉	62
67	壺	口径 (17.4) 残高 3.6	外反する口縁部。端部は珠五状におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	白黄灰色 黄青灰色	石・長(1-2) ◎		
68	壺	残高 3.7	壺の頸部片。凸帯か2条貼付けられ、波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎	釉	

遺物観察表

表54 S B 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
69	石庖丁	3/4	緑色片岩	10.0	6.5	1.0	85.9	未製品	62

表55 S D 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
70	羽釜	口径 (15.2) 残高 7.1	内湾する口縁部。口縁端に断面円形状で下膨れの凸帯を貼付。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡灰褐色 褐灰色	石・長(1~3) ◎	SD5 煤	62
71	羽釜	口径 (25.9) 残高 4.7	内湾する口縁部。口唇上端部に断面三角形の下膨れの凸帯を貼付。	摩滅の為不明	㊶-ヨコナデ ㊷-ナデ	暗灰黄色 明灰黄褐色	石・長(1~3) ◎	SD7	62
72	羽釜	残高 3.1	口縁は直立し、やや下がった所に断面三角形の凸帯を貼付。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	淡黄褐色 暗褐色	石・長(1~4) ◎	SD5	62
73	甕	口径 (13.5) 残高 5.1	外反する口縁部。端部は丸く仕上げる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	暗灰褐色 暗黄褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎	SD1	62
74	甕	底径 5.9 残高 3.4	平底の底部。	ミガキ	ミガキ	乳黄褐色 黒色	密(砂粒) ◎	SD1	62
75	壺	底径 (5.6) 残高 3.1	丸みがあり突出する平底をもつ。	㊸-ハケ ㊹-ナデ(指頭痕)	ハケ→ナデ	暗褐色 淡暗黄色	密(石・長~2) 金ウンモ ◎	SD1 黒斑	62
76	播鉢	口径 (20.8) 残高 3.6	備前焼。口縁上端をほぼ垂直にたち上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	赤褐色	密 ○	SD5	62
77	坏身	残高 2.6	受部はほぼ水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 金ウンモ ◎	SD1	
78	壺	口径 (13.6) 残高 3.2	口縁端部は上下方に肥厚。口縁下に1条の凸帯が巡り凸帯下に波状文を施す。	ナデ	ナデ	淡白色	密 ◎	SD5	62

表56 S K 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
79	坏	口径 9.6 底径 6.4 器高 3.2	完形品。外反する口縁部。端部は丸い。断面三角形の高台を貼付。	ナデ	㊶-ヨコナデ ㊷-ナデ	乳灰黄色	石・長(1~2) ◎		63
80	坏	口径 9.3 底径 5.9 器高 3.2	完形品。外反する口縁部。断面三角形の高台を貼付する。	ナデ	㊶-ヨコナデ ㊷-ナデ	乳灰黄色	石・長(1~2) ◎		63



樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

表57 SK1 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
81	玉	1/2	石英	1.0	1.1	0.8	1.2		
82	玉	完形	石英	0.9	1.3	0.7	1.4		

表58 SK5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
83	坏	口径 12.7 底径 7.6 器高 2.1	平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁部は内湾。回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色	石・長(1-3) ◎		63

表59 SK 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
84	甕	口径 (16.2) 残高 6.1	くの字状口縁。口縁端部は上下方に拡張。端面は凹む。	㊦—ヨコナデ ㊧—摩滅の為不明	㊦—ヨコナデ ㊧—摩滅の為不明	黄褐色	石・長(1) ◎	SK8	63
85	甕	口径 (18.2) 残高 3.7	内湾気味の口縁部。端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1-3) ◎	SK8	63
86	壺	口径 (19.8) 残高 3.0	二重口縁壺。口縁拡張部は直立気味に立ちあがり、端部は丸く仕上げる。	ハケ	ヨコナデ	淡灰黄色 白灰黄色	石・長(1-3) ◎	SK8	
87	甕	口径 (21.0) 残高 4.5	くの字状口縁。外反気味にたちあがる。内面の稜はゆるやか。	ヨコナデ	摩滅の為不明	褐色 黄褐色	石・長(1-3) ○	SK10	
88	壺	頸径 (11.0) 残高 4.3	壺の頸部片。内面に弱い稜あり。	ハケ (6本/1cm)	㊦上—ハケ ㊦下—ナデ	茶褐色	石・長(1-4) 赤色酸化土粒 ○	SK10	
89	壺	頸径 (12.4) 残高 2.80	頸部に断面三角形の凸帯を貼付→大きめの刻み目を施す。	ハケ	㊦上—ハケ ㊦下—ナデ	褐色	石・長(1-2) ◎	SK10	
90	皿	口径 (11.8) 底径 9.1 器高 2.1	内湾気味にたちあがる口縁部。端部は丸い。底部切離しはへら切りによる。	㊦—ヨコナデ ㊦—ナデ	㊦—ヨコナデ ㊦—ナデ	灰褐色	密 ◎	SK16	63
91	皿	口径 10.6 底径 8.4 器高 2.85	内湾する口縁部。端部は丸い。底部切離しはへら切りによる。ほぼ完形。	㊦—ヨコナデ ㊦—ナデ (指頭痕)	㊦—ヨコナデ ㊦—ナデ	乳黄褐色 乳灰黄色	石・長(1-2) 金ウモン ◎	SK16	63
92	高坏	残高 2.9	内湾する脚部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1-2) ◎	SK7	

遺物観察表

S K出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
93	壺	底径 (12.9) 残高 5.7	平底の底部。上外方に直線的に立ちあがる。底部付近に2条の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 暗赤褐色	石・長(1~2) ◎	SK13	
94	分胴形 土製品	残存長 3.8	肩は断面三角形の凸帯を貼付け鼻と一体化。頭髪は刺突文で表現。	ナデ	ナデ	黄褐色	砂粒 ◎	SK18 上面	63

表60 S X 2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
95	皿	口径 12.9 底径 6.5 器高 2.5	平底。底部付近にわずかに稜あり。底部切離しは回転糸切りによる。	ナデ	ヨコナデ	乳黄色	密 ◎		64
96	皿	口径 12.4 底径 6.2 器高 2.5	平底。わずかに外反する口縁部。体部下位に稜あり。回転糸切り離し。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色	石・長(1~3) ◎		64
97	皿	口径 12.3 底径 5.9 器高 2.5	ほぼ完形品。平底の底部。体部は直線的にたちあがる。回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄褐色	密 ◎		64
98	皿	口径 10.8 底径 5.6 器高 2.5	体部下位にわずかに稜あり。口縁部はやや外反し端部は丸い。回転糸切り。	ヨコナデ	摩滅の為不明	乳黄褐色	密 ◎		64
99	皿	口径 11.3 底径 7.3 器高 2.4	ほぼ完形品。わずかに上げ底。体部下位に稜あり。回転ヘラ切り。	ナデ	ナデ	乳黄色	密 ◎		64
100	皿	口径 11.8 底径 8.2 器高 2.5	平底の底部から直線的にたちあがる。口縁部はわずかに外反。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳黄灰色	石・長(1~2) ◎		64
101	皿	口径 12.0 底径 8.6 器高 2.5	平底の底部。外反した後内湾する口縁部。端部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	乳黄黄色	密 ◎		64

表61 S P出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
102	甕	口径 (40.0) 残高 3.9	大型品。口縁部と胴部の境界に凸帯が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色 黒灰黄褐色	石・長(1~3) ◎	SP388	65
103	甕	口径 (20.2) 残高 4.5	内湾する口縁部。口縁端部は丸い。頭部外面には稜をもたない。	①一剝離の為不明 ②一ハケ	摩滅の為不明	黄灰褐色	石・長(1~2) ◎	SP14	

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

S P 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
104	壺	残高 7.8	複合口縁壺。口縁拡張部に2条の波状文を施す。	㊦口縁—ヨコナデ ㊦—ハケ (7本/1cm)	㊦口縁—ヨコナデ ㊦—ハケ (7本/1cm)	褐色	石・長(1~4) ◎	SPO61	
105	高坏	口径 (13.6) 残高 4.2	坏屈曲部はわずかに段をなす。口縁部は外反し、端部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	灰黄色 淡灰褐色	密(石・長1) 金ウソモ ◎	SPO59	
106	高坏	残高 3.7	坏屈曲部は稜をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色	石・長(1~3) 金ウソモ ◎	SP233	
107	土釜	口径 (19.2) 残高 4.7	口縁部は短く直立し、端部は平坦面をなす。断面台形状の鈎部。	ヨコナデ	ナデ	黒褐色 黄褐色	石・長(1) ○	SP317	65
108	皿	口径 (12.2) 底径 6.0 器高 2.6	内湾気味の口縁部。底部切り離しは糸切りによる。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰褐色 橙褐色	石・長(1~2) 金ウソモ ◎	SP224	65
109	皿	口径 (8.4) 底径 (5.2) 残高 1.9	平底の底部から直立気味にたちあがり、口縁部は外反する。回転糸切り。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳褐褐色	石・長(1~2) ◎	SP533	65
110	蓋	口径 (15.9) 残高 1.2	扁平な天井部。口縁部は下方に屈曲。端部は尖り気味。	㊦一回転ヘラ削り1/2 ㊦一回転ナデ	ナデ	淡灰色	密 ◎	SP21	65
111	蓋	つまみ径(3.2) 残高 1.5	つまみ中央部は大きく凹む。	回転ナデ	ナデ	白灰色	密 ◎	SP49	
112	坏蓋	口径 (10.6) 残高 4.2	丸味のある天井部。口縁部は直立して下がり、端部は内傾する。	㊦一回転ヘラ削り1/2 ㊦一回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 淡黄灰色	密(石・長4) ◎	SP472	65
113	坏身	口径 (10.6) 残高 3.8	たちあがりは内傾し、端部は不明瞭な段をなす。器壁は厚い。	㊦一回転ナデ ㊦一回転ヘラ削り1/2	回転ナデ	淡黄灰色	密 ◎	SP132 釉	65
114	壺	口径 (17.4) 残高 3.7	外反する口縁部。端部下位に凸帯が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	SP49	

表62 S P 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
115	石鎌	ほぼ完形	サヌカイト	2.9	2.0	0.45	1.6		65
116	砥石	3/4	不明	15.1	8.9	6.1	599.5		65
117	砥石	3/4	不明	11.5	6.8	7.2	545.6		65

遺物観察表

表63 第三層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
118	羽釜	口径 (19.9) 残高 3.9	口縁端部に断面三角形形状の凸帯を貼付。	ナテ	ナテ	黒灰黄褐色 淡灰黄色	密(長1~2) ◎		66
119	羽釜	口径 (20.1) 残高 6.3	口唇上端に断面三角形形状の凸帯を貼付。	㊶-ヨコナテ ㊷-ナテ	ヨコナテ	暗褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金ウソモ		66
120	羽釜	口径 (23.6) 残高 2.6	口縁端に断面三角形形状で下膨れの凸帯を貼付。	ヨコナテ	ヨコナテ	黒褐色 褐色	石・長(1~2) ○		
121	土釜	残高 4.1	小片。鐙は外方向に長く水平にのびる。	ヨコナテ	摩滅の為不明	暗灰褐色 淡灰黄色	石・長(1~2) ○		66
122	皿	口径 (7.6) 底径 (4.6)	平底。やや内湾する口縁部。端部は丸く仕上げる。	ヨコナテ	ヨコナテ	褐色	密(金ウソモ) ◎		
123	皿	口径 (8.2) 底径 (5.2) 器高 1.9	内湾する口縁部。端部は丸い。底部切離しは糸切りか？	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳橙色	密(長2) ◎		
124	皿	口径 (9.5) 底径 (6.1) 器高 1.8	内湾する口縁部。端部は丸く仕上げる。小片。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳褐色	密 ◎		
125	皿	口径 (11.8) 残高 2.5	内湾する口縁部。底部切離しは回転糸切りによる。	ヨコナテ	ヨコナテ	灰黄褐色	石・長(1) 金ウソモ ◎		
126	皿	口径 (8.5) 器高 2.9	深さのある皿。内湾する口縁部。端部は尖り気味に丸い。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄色	石・長(1~2) ◎		
127	皿	口径 9.8 底径 5.9 器高 3.0	内湾する口縁部。底部に回転糸切り痕を残す。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳橙色	密 ◎		
128	皿	口径 (10.1) 残高 2.8	体部中位でわずかに屈曲。口縁部は直立気味にたちあがる。	ヨコナテ	ヨコナテ	黄褐色	密 ◎		66
129	坏	口径 (14.0) 底部 (8.8) 器高 4.8	外反する口縁部。ロクロ成形。底部切離しは回転ヘラ切りによる。	ヨコナテ	㊶-ヨコナテ ㊸-回転ヘラ削り	灰黄褐色 黒褐色	密(長1~2) ◎		66
130	坏	底径 8.2 残高 3.1	やや突出する平底の底部。残存1/2。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	乳橙色	密 ◎		
131	摺鉢	口径 (18.5) 残高 4.0	備前焼。口縁部は粘土を貼付け、口唇面を上下に拡張。	回転ナテ	回転ナテ	灰色	長(1~4) ◎		66
132	摺鉢	残高 5.8	備前焼。胴部内面に9条の放射状の櫛描き条線を施す。	回転ナテ	回転ナテ	褐色	長(1~3) ◎		66

樽味四反地遺跡 2・3・4 次調査地

表64 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
133	甗	口径(18.8) 残高 10.3	内湾する口縁部。端部は内傾する。	摩滅の為不明	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ	乳黄橙色	石・長(1~3) ○		
134	甗	口径(22.0) 残高 5.4	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。頸部外面に稜はみられない。	ハケ→ヨコナデ	ハケ(6本/1cm)	暗褐色	石・長(1~5) ◎		66
135	甗	口径(15.5) 残高 3.0	内湾する口縁部。端部は丸く内傾する。	摩滅の為不明	ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~4) ◎		
136	甗	口径(15.8) 残高 5.9	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	暗褐色	石・長(1) 金ウンモ ◎		66
137	壺	残高 3.2	複合口縁壺。小片。	ハケ	ハケ→ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎		66
138	壺	口径(22.4) 残高 4.0	二重口縁壺。口縁接合部付近に円形浮文を貼付。	ナデ	摩滅の為不明	乳灰黄色	石・長(1~3) 金ウンモ ◎		66
139	甗	口径(23.0) 残高 8.6	胴部直立してたちあがり口縁部は外反する。	ハケ→ナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	甗(金ウンモ) ◎		
140	高環	残高 1.3	坏屈曲部は稜をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	石・長(1~2) ◎		
141	高環	残高 6.0	三角錐状の柱部。外反する裾部をもつ。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰褐色	石・長(1~2) 金ウンモ ◎		
142	坏蓋	口径(12.5) 残高 3.6	やや内湾する口縁部。端部は内傾する明瞭な段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石・長(1~3) ◎	釉	
143	坏蓋	口径(12.5) 残高 3.3	天井部と口縁部の境界は不明瞭。口縁端部内面に沈線状の凹みあり。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 青灰色	甗(石長1~2) ◎		
144	坏蓋	口径(12.8) 残高 2.3	天井部と口縁部を分ける稜は消失。口唇部に刻み目を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		67
145	坏蓋	口径(10.7) 残高 1.7	扁平な天井部。かえりは口縁端部と同位置で接地。	㊦ 回転ヘラ削り 1/2 ㊧ 回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	密 ◎	釉	67
146	坏身	口径(11.6) 残高 3.4	たちあがりは内傾し、端部はわずかに内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
147	坏身	残高 3.3	丸みのある底部・受部はほぼ水平にのびる。	㊦ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラ削り 1/2	回転ナデ	黄灰色 淡黄灰色	密(石長1~3) ◎		
148	高環	残高 3.4	無蓋高環。坏部に2条の凸帯を貼付。凸帯下に波状文を施す。	㊦ 回転ナデ ㊧ 回転ヘラ削り	回転ナデ	黄灰色	密 ○	釉	67
149	高環	底径(10.1) 残高 1.4	高環の脚端部小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		

遺物観察表

第IV層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
150	甗	口径(12.4) 残高 2.7	外反する口縁部。端部は内傾する。口縁下に1条の凸帯が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色	密 ◎		
151	提瓶	口径(6.3) 残高 4.5	提瓶の口縁部。口縁中に2条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ◎		
152	壺	口径(8.3) 残高 2.4	口縁端部は珠玉状におさめる。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	黒灰色 黄灰色	密 ◎		
153	壺	口径(13.8) 残高 3.8	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。頸部に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色 乳黄灰色	石・長(1) ◎		67
154	甗	口径(19.6) 残高 5.4	外反する口縁部。端部は上下方に拡張。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ◎		67
155	甗	口径(23.8) 残高 2.2	小片。口縁端部は上方に拡張。端面に2条の凹線あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐色	密 ◎		
156	甗	口径 13.0 残高 5.0	小型品。「く」の字状を呈する甗。	㊦ ナデ ㊧ ハケ→ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡褐灰色	石長(1~2) ◎		
157	甗	口径(15.5) 残高 3.5	「く」の字状口縁。口縁端は丸く仕上げる。	ハケ(6本/1cm)	ハケ(6本/1cm)	灰黄褐色 灰黄色	石長(1~3) ◎		
158	壺	残高 3.4	複合口縁壺。口縁拡張部に4条の波状文をほどこす。	ハケ	摩滅の為不明	黄褐色	長(1~2) 石(1~5) ◎		
159	高坏	残高 3.2	大きく外反する口縁部。坏屈曲部は段をなす。	摩滅の為不明	ミガキ	灰黄褐色 黄褐色	石長(1~4) ◎		
160	高坏	残高 5.2	高坏の柱部片。1.5cm大の円孔を穿つ。	ミガキ	ハケ→ナデ	淡黄褐色 淡褐色	密(石長1~2) ○		
161	高坏	底径(11.2) 残高 3.3	脚端部は上方に拡張。端面に3条の凹線を施す。透かしあり。	ナデ	ナデ	暗灰褐色	石長(1~2) ◎		
162	甗	底径(7.0) 残高 5.9	くびれの上げ底を呈する甗の底部。	㊦ ミガキ ㊧ ナデ	㊦ 摩滅の為不明 ㊧ ナデ	乳黄褐色	石長(1~2) ◎		
163	甗	底径(6.2) 残高 4.4	くびれの上げ底	㊦ ミガキ ㊧ ヨコナデ	㊦ 摩滅の為不明 ㊧ ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石長(1~3) 金ウンモ ◎		
164	壺	底径(4.8) 残高 2.5	わずかに上げ底を呈する壺の底部。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	暗灰色	石長(1~2) ◎	黒斑	
165	壺	底径(9.8) 残高 3.1	わずかに突出する平底をもつ。	摩滅の為不明	摩滅の為不明	暗灰色 褐色	石(1~3) 長(1~2) ◎		

## 樽味四反地遺跡2・3・4次調査地

表65 第IV層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
166	石斧	3/4	緑色片岩	6.0	3.3	0.44	40.1		67
167	石錘	3/4	花崗岩	5.5	5.7	3.5	133.2		67
168	管玉	完形	碧玉	2.15	0.8	0.8	2.6		67

第5章

クワ バラ タ ナカ  
桑原田中遺跡

— 2 次 調 査 地 —





# 第5章 桑原田中遺跡2次調査地

## 1. 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

1991（平成3）年10月、株式会社キクチより松山市桑原6丁目520番地（他2筆）における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された（第99図）。

当地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『83 枝松遺物包含地』内にあたる。周辺地域では、以前より調査が実施されており、当地一帯は周知の遺跡として知られている。同包含地内では、桑原高井遺跡・桑原田中遺跡・枝松遺跡などの調査が行われており、弥生時代から中近世にかけての集落が存在していたことが明らかになりつつある。

周辺には、北は樽味遺跡（愛媛大学農学部構内）、樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡、桑原西稲葉遺跡、西は小坂釜ノ口遺跡、東は経石山古墳、東野お茶屋台古墳、三島神社古墳、南は北久米浄蓮寺遺跡、福音寺遺跡などが密集している。

これらの事により、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1991（平成3）年11月に文化教育課は試掘調査を実施した。試掘調査の結果、溝2条と柱穴5基の遺構の他、弥生土器、土師器、須恵器の遺物を検出し、当該地に弥生時代から古墳時代に至る遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果を受け、文化教育課の指導のもと（勸松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターと株式会社キクチの二者は発掘調査について協議を行い、株式会社キクチの協力のもと1993（平成5）年3月4日より発掘調査を開始した。

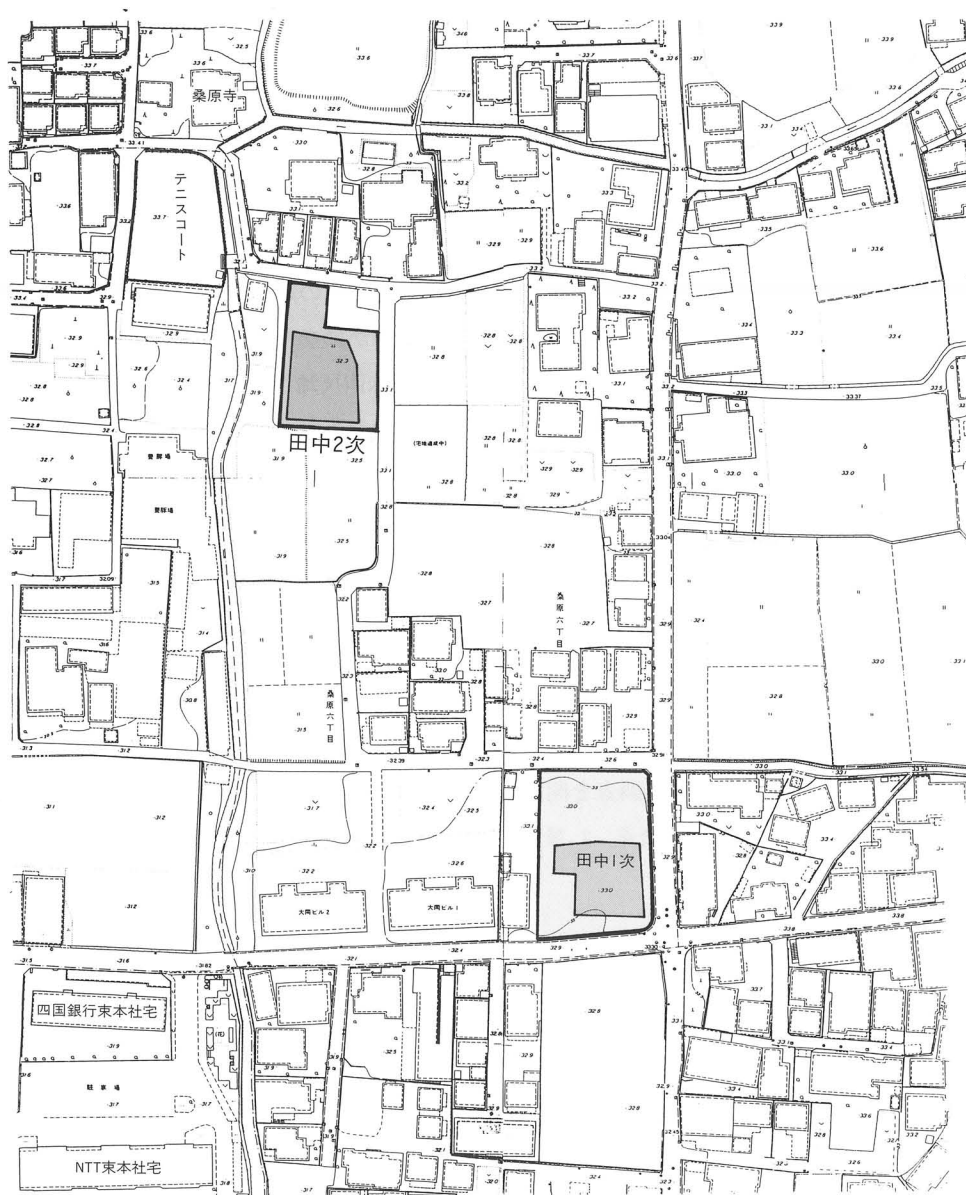
〔註〕 報告においては、1.調査の経過、2.層位、3.遺構、4.まとめは山本が、3.遺物は梅木が担当した。

### 〔文献〕

1. 桑原高井遺跡——西尾幸則・松村淳1980『浮穴・西石井荒神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡』松山市教育委員会
2. 桑原田中遺跡・枝松遺跡（3次）・樽味四反地遺跡・樽味高木遺跡・桑原西稲葉遺跡・経石山古墳——梅木謙一編1992『桑原地区の遺跡』（勸松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター）
3. 樽味遺跡——宮本一夫1989『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
4. 小坂釜ノ口遺跡——岸郁男・長井数秋・大山正風1973『釜ノ口遺跡調査報告書』松山教育委員会
5. 東野お茶屋台古墳——阪本安光1979『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会
6. 三島神社古墳——岸郁男・長井数秋・森光晴1972『三島神社古墳』松山市教育委員会

桑原田中遺跡 2次調査地

7. 北久米浄蓮寺遺跡——橋本雄一1994 『北久米浄蓮寺遺跡～3次調査地』松山市教育委員会・勸松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
8. 福音寺遺跡——森光晴1983 『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会



(S=1:2000)

第99図 調査地位置図

## 層 位

### (2) 調査組織

**調査地** 松山市桑原6丁目520、521、522

**遺跡名** 桑原田中遺跡2次調査地

**調査期間** 野外調査 平成5(1993)年3月4日～同年5月31日

室内調査 平成5(1993)年6月1日～同年7月31日

**調査面積** 421m<sup>2</sup>

**調査委託** 株式会社 キクチ

**調査担当** 梅木謙一・山本健一

**調査作業員** 波多野恭久、市川 泰弘、大西 清司、岡崎 政信、田底 英樹、藤井 和也、池内カヨコ、大西 元子、白井あさ子、田中 麗子、富岡キシオ、中屋 経子、平松 正乃、福本 清香

## 2. 層 位 (第100・101図)

本調査地は石手川中流域南岸の微高地上、標高32.2mに立地する。

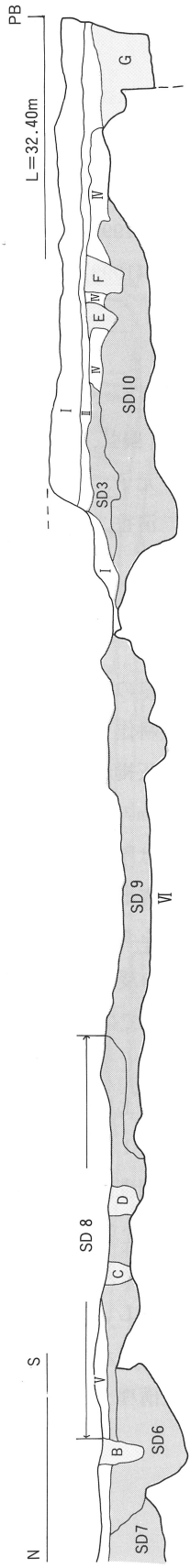
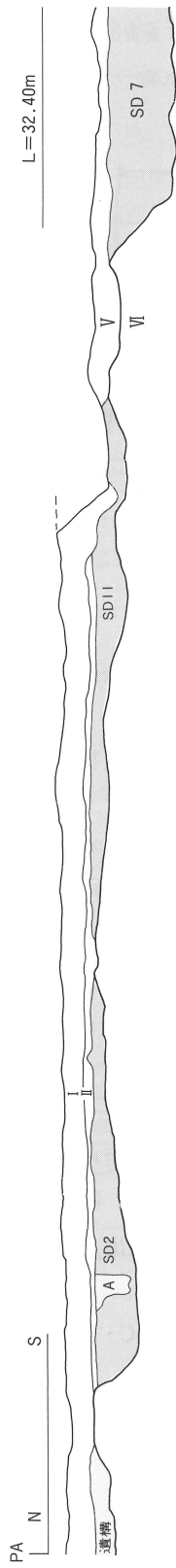
基本層位は、第Ⅰ層表土(耕作土)、第Ⅱ層灰赤褐色土(水田床土)、第Ⅲ層灰茶色土、第Ⅳ層灰茶色砂質土、第Ⅴ層明灰褐色砂質土、第Ⅵ層黄色土(地山)である。

第Ⅰ層及び第Ⅱ層は20～30cmの厚さを測る。第Ⅲ層は厚さ10～24cmを測り、遺物は須恵器、土師器の小片を含む。第Ⅳ層は厚さ8～18cmを測り、遺物は弥生土器、須恵器、土師器の小片を含む。第Ⅲ・Ⅳ層は、調査地南部に堆積に限られた。第Ⅴ層は厚さ5～16cmを測り、遺物は弥生土器、須恵器の小片を含み、調査区C2～C3区、D2～D3区での堆積に限られた。第Ⅵ層は北西部では削平を受けているものと思われ、第Ⅱ層下に第Ⅵ層の下位層が存在している。試掘調査時の深掘りでは、第Ⅵ層直下に灰色砂礫(層厚60cm以上)、最下層に黄色砂質土(層厚0cm以上)を確認している。

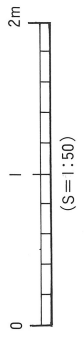
遺構は第Ⅲ層上面及び第Ⅵ層上面で検出した。

第Ⅲ層上面では掘立柱建物址1棟、溝3条、土壇1基、第Ⅵ層上面では溝9条、土壇6基を検出した。またこれ以外に調査区壁体沿いの深掘りの際に平面形態は調査に至らなかった遺構が土層図中にアルファベットで記入しており、検出層は以下の通りである。第Ⅱ層上面検出L・N、第Ⅲ層上面検出A～H、K、M、O～T、V、W、第Ⅵ層上面検出I、J、Uになり、第Ⅱ層上面検出の遺構L・Nは現代遺構である。

また、東壁中央部は第Ⅰ～Ⅳ層が削平を受けており欠除しているが遺構B・C・Dは遺構埋土が他の第Ⅲ層上面検出の遺構埋土と類似するため第Ⅲ層上面検出中に加えた。

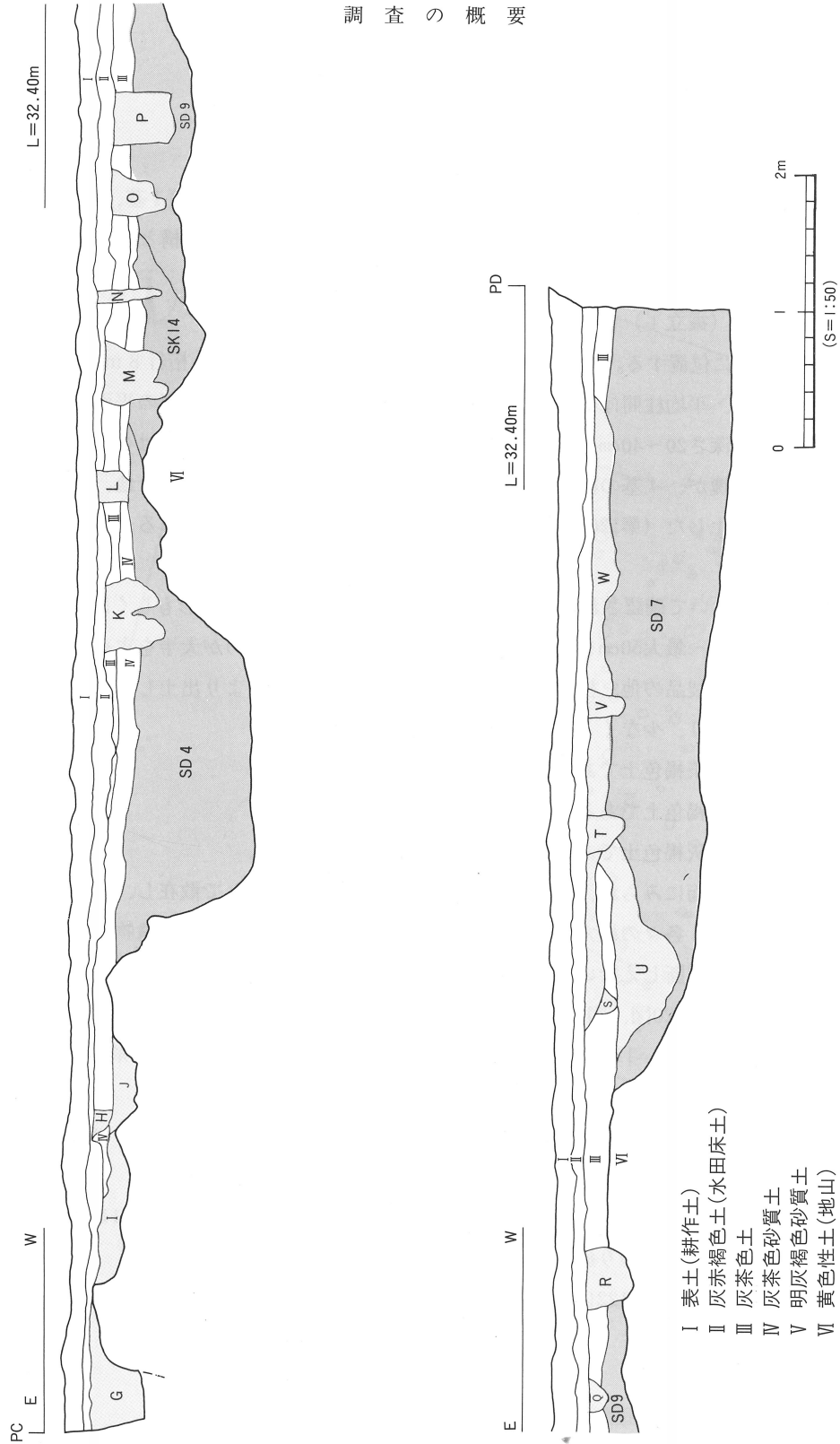


- I 表土 (耕作土)
- II 灰赤褐色土 (水田床土)
- III 灰茶色土
- IV 灰茶色砂質土
- V 明灰褐色砂質土
- VI 黄色土 (地山)



第100図 東壁土層図

調査の概要



第101図 南壁土層図

### 3. 調査の概要 (遺構と遺物)

#### (1) 第Ⅲ層上面検出の遺構 (第102図)

第Ⅲ層上面において検出された遺構は掘立柱建物址 1 棟、溝 3 条、土塋 1 基、柱穴 185 基である。このうち溝 3 条及び土塋 1 基は、出土遺物、埋土により近現代遺構と思われる。詳細は遺構一覧表に記す (表 66～68)。

#### 掘立柱建物址 (掘立 I) (第103図)

調査地中央部に位置する。建物規模は 2 間×4 間の総柱建物である。桁行 8 m、梁行 3.9 m を測る東西棟で、平均柱間は桁間・梁間とも 2 m である。各柱穴は楕円形の平面プランを呈し径 34～50 cm、深さ 20～40 cm を測る。柱穴埋土は暗灰褐色土である。遺物は 2 基の柱穴 (③、⑫) より焼土の塊が、4 基の柱穴 (③、⑧、⑨、⑪) より根詰石が出土した他、柱穴 ⑤ より土師皿 1 点が出土した (第 120 図 123)。123 は糸切り痕と思われるものである。14～15 C。

#### その他の柱穴

第Ⅲ層上面において確認された柱穴は 185 基である。平面プランは円形もしくは楕円形を呈し、径は最小 10 cm～最大 50 cm を測るものがあるが 20～40 cm 大のものが大半を占める。遺物は土師器、陶器、石製品の他、根詰石、焼土の塊、炭化物が埋土中より出土している。

埋土の違いにより、少なくとも 3 分類される。

- a 類 埋土が暗茶褐色土であるもの……………129 基
- b 類 埋土が灰褐色土であるもの……………49 基
- c 類 埋土が暗灰褐色土であるもの……………7 基

a 類は調査区全面にみられ、b 類は調査区北部寄り及び南部寄りで散在し、c 類は調査区中央部でみられる。各々の柱穴の造営に時期差が窺えるが、柱穴内からの遺物の出土はわずかであり明確には判断しえない。

#### S P 出土遺物 (第120図、図版 79)

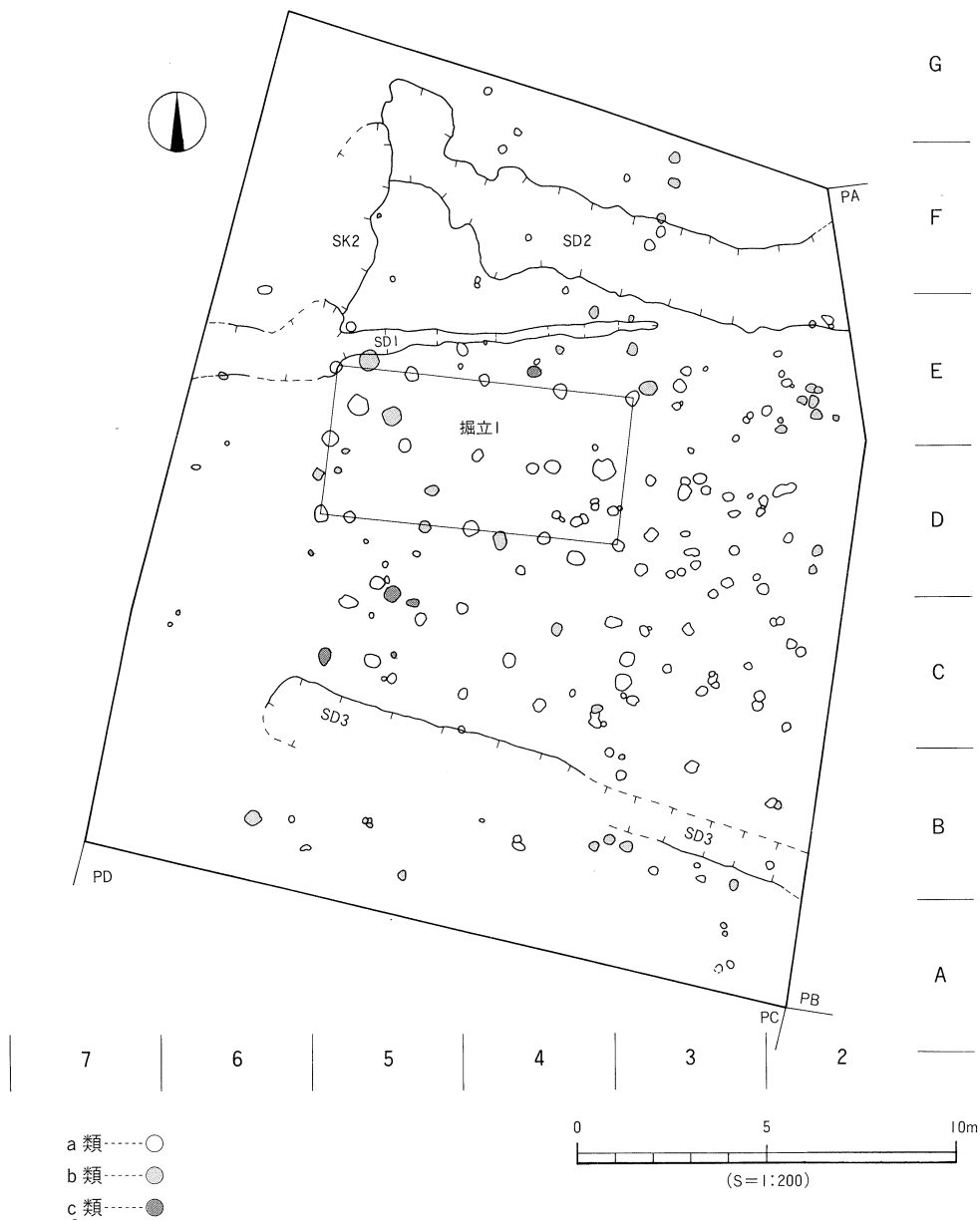
S P 21 出土品 (117) 117 は中型品で、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。糸切り痕。14～15 C。

S P 31 出土品 (121) 121 は中型品で、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部はやや厚く、端部は細く丸く仕上げる。糸切り痕。14～15 C。

S P 51 出土品 (118～120) 118・119 は小型品、120 は中型品である。118・119 は口縁端部がわずかに外反する。糸切り痕。14 C 後半～15 C 前半。

S P 73 出土品 (122) 122 は口縁部がわずかに外反する。貿易陶磁器青磁。14 C 後半～15 C。

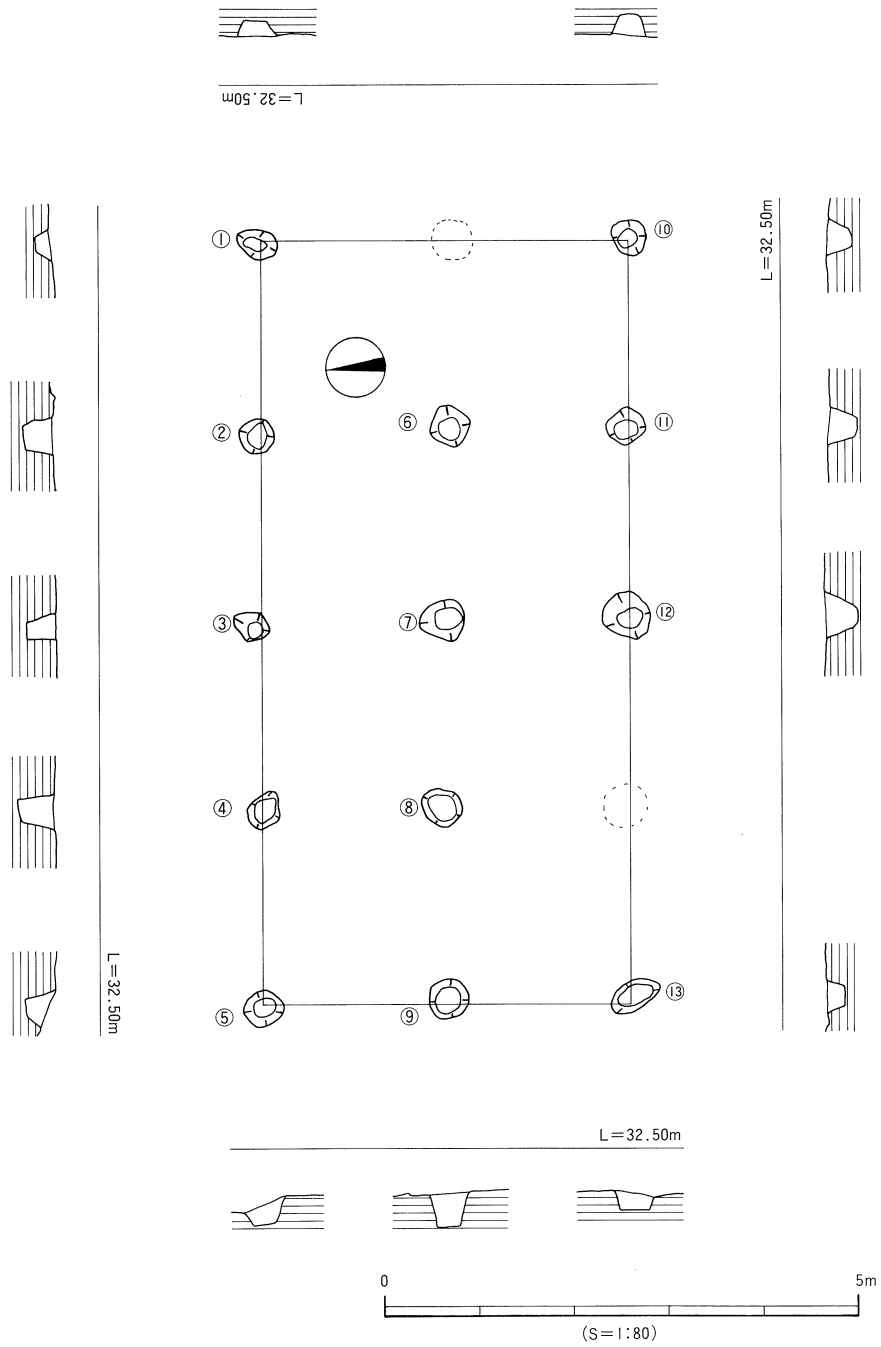
桑原田中遺跡 2次調査地



第102図 第三層上面（近現代）遺構配置図



調査の概要



第103図 掘立I測量図

〔2〕第Ⅵ層上面検出の遺構

第Ⅵ層上面において検出された遺構は溝8条、土壙6基である。

(1) 中世～近世 (第105図)

S D 4

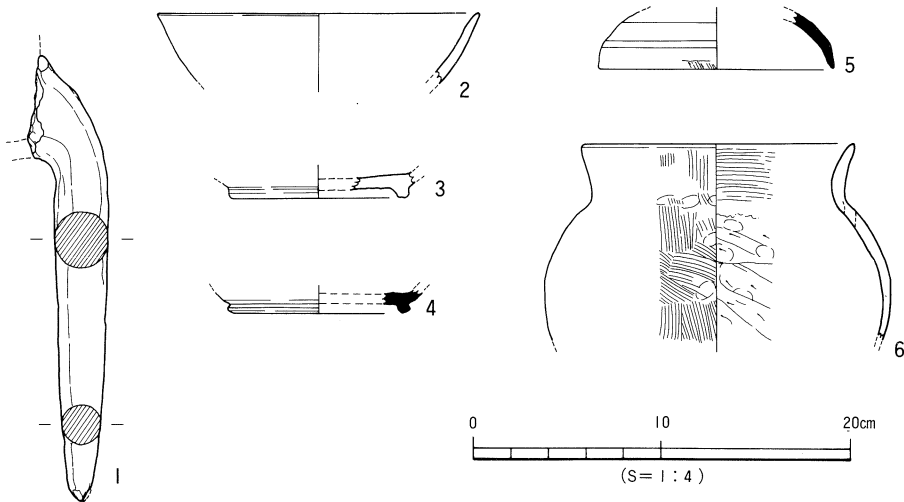
S D 4 は、調査区南部 A 4 ～ B ・ C 7 区に位置し、S K 14 及び他の溝を切っている。断面形は船底状を呈し、上場幅 2 m、深さ 60 cm、検出長 16 m を測る。床面は凹凸が激しいが、東から西へ向けて傾斜しており、B 5 ～ 6 区の凹地で最深部を測り、南西方向へ向きを変える。また床面の凹地部では溝の上場幅も広がっている。埋土は上層の暗灰茶褐色土（細砂混じり）、下層の灰色砂礫に分層できる。遺物は上層より須恵器片、土師器片が、下層より弥生土器、土師器、須恵器、土師皿が出土しているが大半のものが小片で磨滅している。

出土遺物 (第104図)

1 は三足鍋の脚部である。脚部はさしこみ式の接合であることが分かるものである。中世。2 は内面は黒色である内黒椀である。口縁端部は内傾する。11 C。3 は高台付坏の底部で、土師器である。4 は高台付坏の底部で、須恵器である。高台は「ハ」の字状を呈する。5 は須恵器の坏蓋で、口縁部外面は幅狭まの面をもち、細い刻目をもつ。6 は土師器甕で、頸部下内面に接合痕と指頭痕、ケズリ痕を顕著に残す。

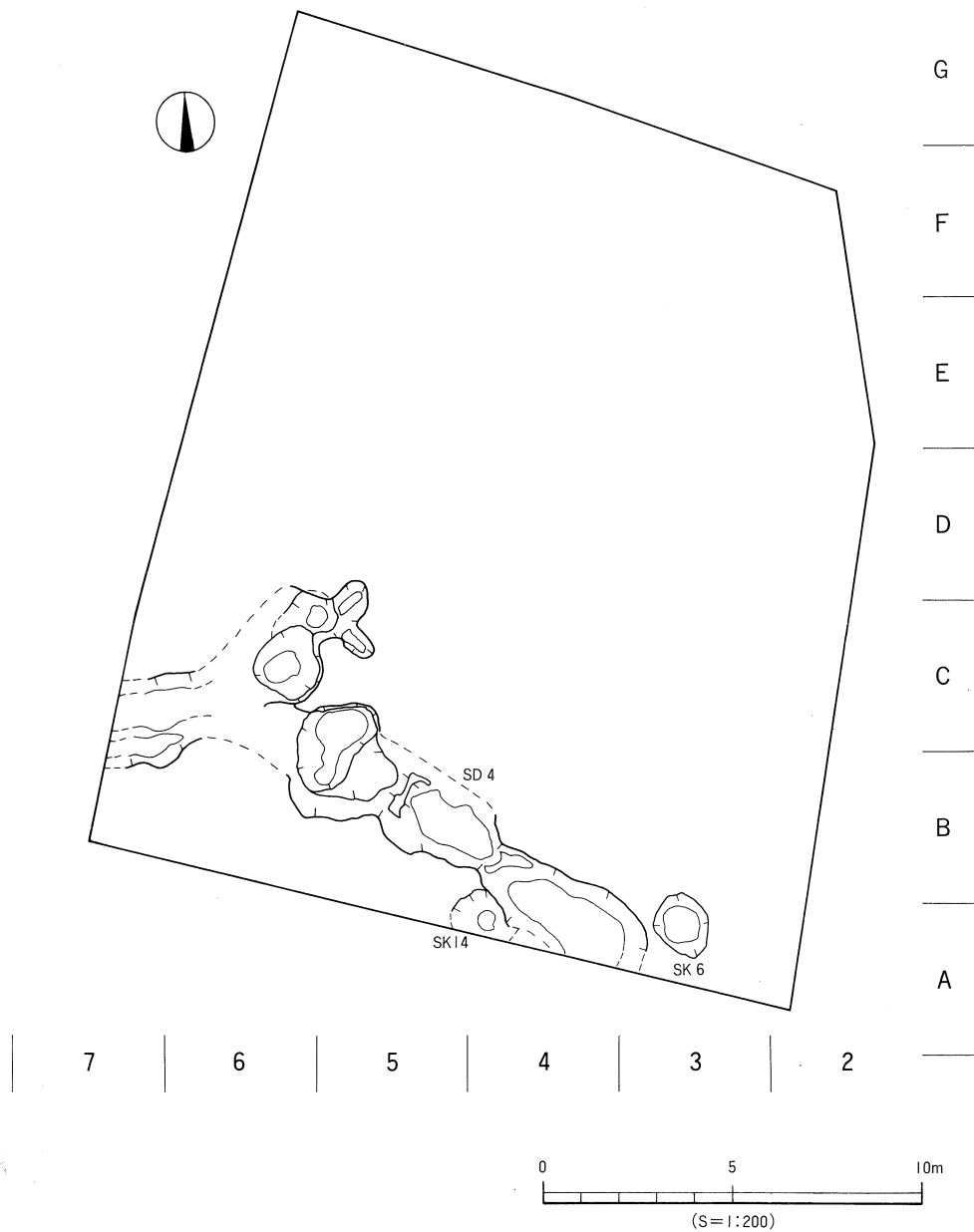
S K 6 ・ 14

S K 6 ・ 14 は、出土遺物が少量であり明確な時期の決定には至らないが遺構の埋土、切り合い関係から中世～近世と思われる。詳細は遺構一覧表に記す (表68)。



第104図 S D 4 出土遺物実測図

桑原田中遺跡 2次調査地



第105図 第VI層上面（中近世）遺構配置図

## 調査の概要

### (2) 古墳時代 (第106図)

#### S D 5 (第107図)

調査区北東～南西に位置し、S D 7に切られS K 3を切る。断面形は皿状を呈し、上場幅1.8m、深さ40cm、検出長14mを測る。床面はほぼ平坦であるがE 4区でやや浅くなる。埋土は上層の黒色土と、下層の灰色砂礫（礫石はこぶし大）の2層に分層される。遺物は上・下層より弥生土器、土師器が出土したが、下層では礫石と混在した状態で出土した。弥生土器は大半が摩滅を受けている。土師器はS D 7の出土状況とは異なりほとんど破片である。

#### 出土遺物 (第108図)

上層出土品 (7～11) 7は甕で、肩部が張る胴部に、外反する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外反する。内面頸部直下に接合痕、以下指頭痕とケズリ痕を看取する。8は有段の口縁部をもつ甕である。口縁端部は内傾し面をもつ。9～11は高坏脚部である。三角錐を呈する柱部に、水平に近く開く裾部をもつものである。柱裾部境の内面には稜をもつ。9は坏底部の充填が、10は指押しの痕が看取される。

下層出土品 (12～16) 12・13は甕である。12は短く外反する口縁部をもつ。内面には接合痕と指頭痕を顕著に残す。13は外反する口縁部で、口縁端部は内湾する。14は小型壺である。胴部中位が張り、頸胴部内面に弱い稜をもつ。15・16は高坏脚部である。柱裾部境の内面には稜をもつ。

#### S D 6 (第109図)

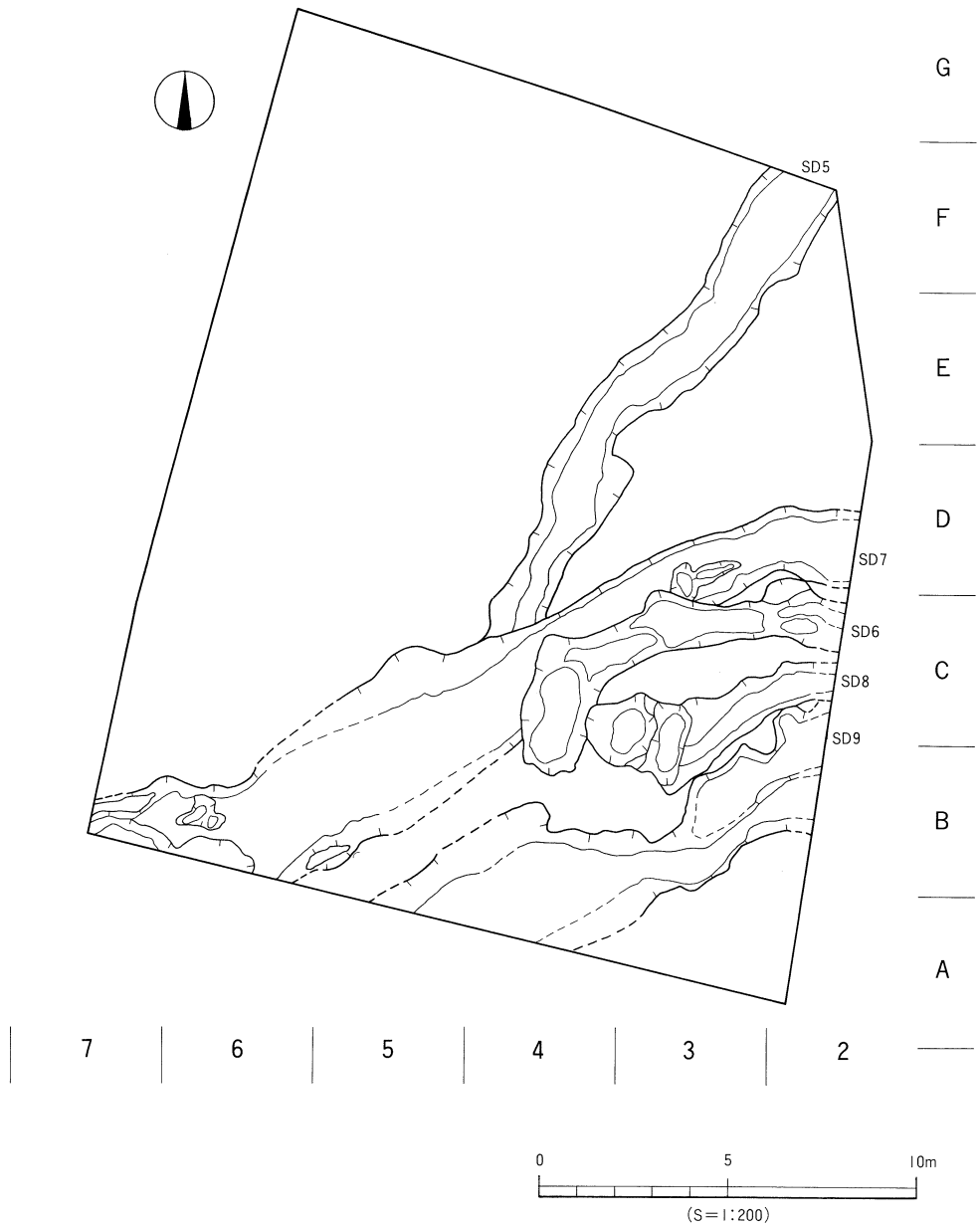
調査区中央から東寄りのB 4～C 2区に位置し、C 4区でやや南に曲がりB 4区まで確認された。S D 7を切りS D 8に切られる。また調査区南壁断面ではS D 6は確認されなかったためS D 9に切られるものと思われる。断面形は船底状を呈し、上場最大幅1.8m、深さ35～50cm、検出長9.7mを測る。床面はC 2区からB 4区にかけて傾斜しておりB 4区で最深部を測る。埋土は上層の黒色土、下層の灰色砂礫の2層に分層される。遺物は上層より弥生土器、土師器、下層より弥生土器、土師器が出土した。上・下層とも須恵器は破片が1点ずつの出土であり、土師器の中には甗の底部片がみられた。

#### 出土遺物 (第110図)

上層出土品 (17～23) 17～20は甕で、外反する口縁部をもつ。19・20は口縁端部が内湾し、20は端面は内傾する。21・22は小型品で、甕ないし鉢である。短く外反する口縁部をもつ。頸部内面に弱い稜をもつ。23は高坏の脚部である。裾部は端部が細る。

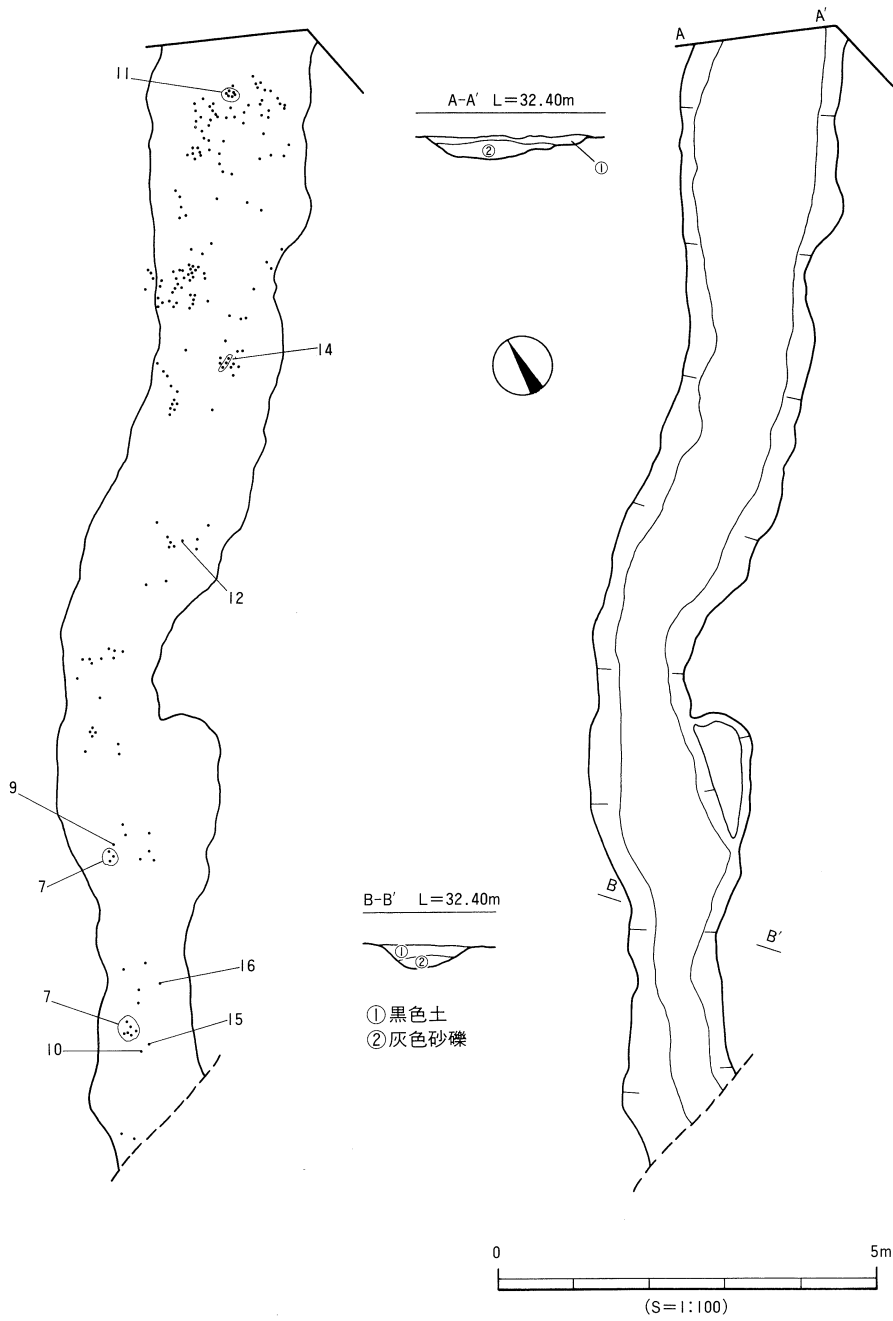
下層出土品 (24～28) 24～26は土師器、27は須恵器、28は弥生土器である。24は高坏坏部で、丸みのある弱い段をもつ。25は高坏脚部で外反する裾部は内面柱裾部境に稜をもつ。26は甗である。丸みのある底部には長円形の孔をもつ。27は罎で、肩部に波状文と凹線をもつ。28は器台と思われるもので、裾部に凹線文をもつ。胎土にカクセン石をもち、色調も平野のもの異なるため、搬入品の可能性が高い。

桑原田中遺跡 2次調査地

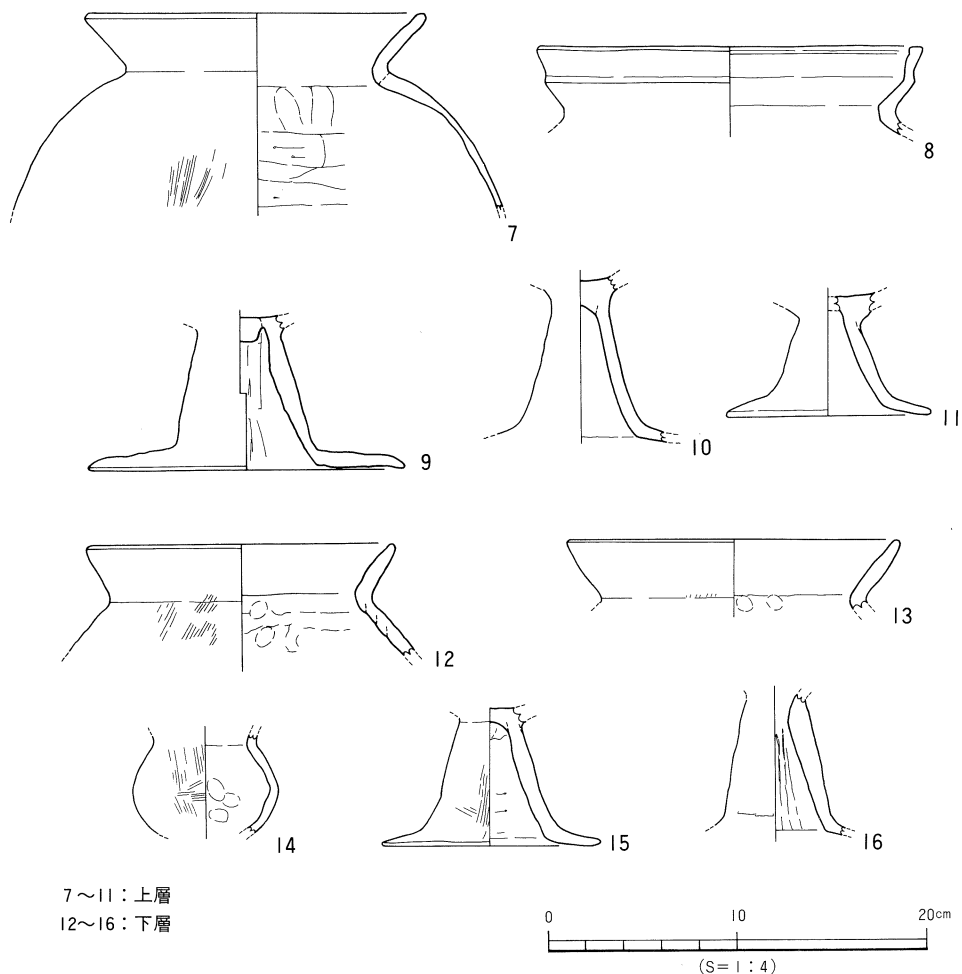


第106図 第VI層上面（古墳時代）遺構配置図

調査の概要



第107図 S D 5 測量図・遺物出土状況



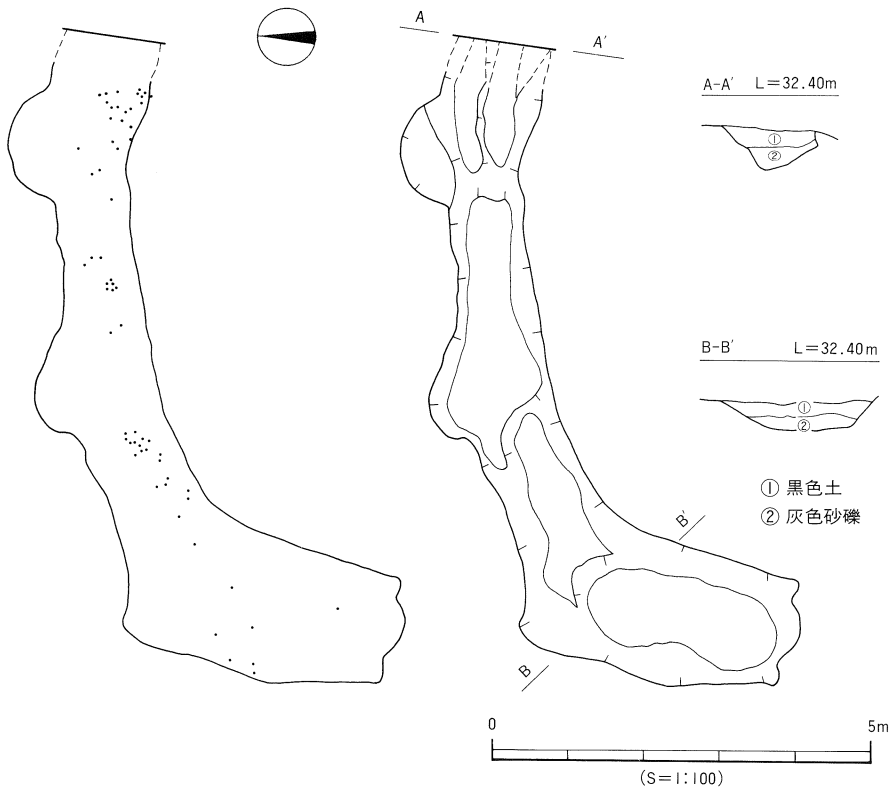
第108図 S D 5 上層・下層出土遺物実測図

その他 (29) 29はC 4区出土品であり、層は不明なものである。甕ないし壺と思われるもので、やや長い口縁部をもつ。口縁端部は丸みをもつ。

3) S D 7 (第111図)

調査区東部中央から南西隅に位置し、S D 4・6に切られ、S D 5を切る。断面形は皿状を呈し、上場最大幅3m、深さ30~50cm、検出長は21.6mを測る。床面には多少凹凸があり、東から西へ傾斜がみられる。埋土は上層の黒色土、下層の暗灰色砂礫の2層に大別される。ただし、溝東部D 2区では下層中に黄灰色砂の溜りが見られ、また溝南西部では下層上位に暗灰色砂礫と黄灰色砂の互相推積が見られた。遺物は上・下層より弥生土器、土師器が出土しているが弥生土器は摩滅を受けている。上層中の土師器は高坏・小型丸底壺の出土が目立ち比較的残りの良い状態で出土し、高坏はその場で割れた状態で出土したものである。

調査の概要



第109図 S D 6 測量図・遺物出土状況

出土遺物 (第112~118図、図版77~79)

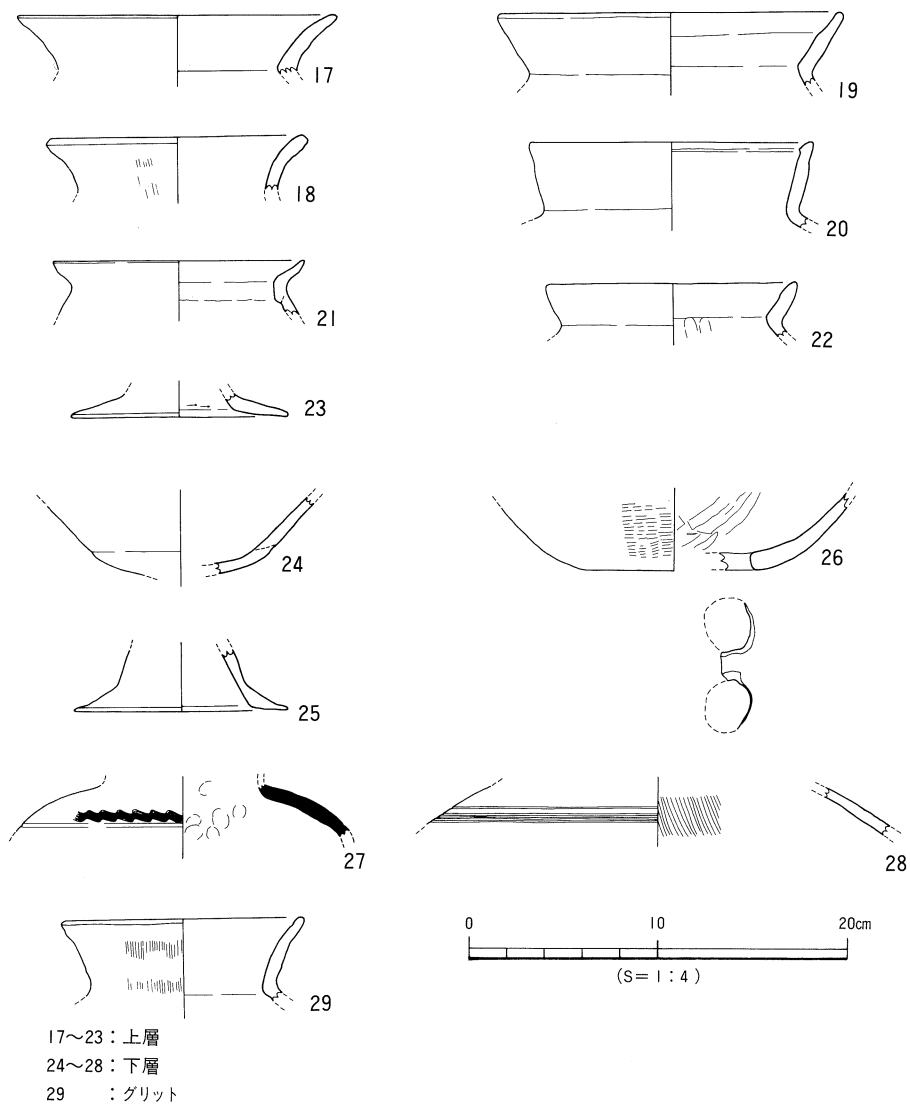
下層出土品 (30~60)

甕 (30~34) 30・31は口縁部は外反し、口縁端部は丸いものである。32~34は口縁部は内湾するもので、32・33は端部は丸く、34は内傾する端面をもつものである。

壺 (35~41) 35は完形品の小型壺である。胴下半部に膨らみをもち、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。底部と頸部下 (内面) に接合痕をもつ。36は壺のミニチュア品と思われるものである。胴下半部に膨らみをもち、内湾し立ち上がる短い口縁部をもつ。器壁が厚い。37は小型壺で、直立する短い頸部に、有段の口縁部をもつ。器壁薄く、仕上げが丁寧である。38~41は胴中位が張り、扁平な胴部に、頸部がしまる壺である。

高坏 (42~54) 坏部は接合部に弱い段をもち、わずかに外反する口縁部をもつ。脚部は三角錐状を呈する柱部に、水平に近く開く裾部をもつものである。脚部柱裾部境の内面には稜をもつ。坏底部は、充填が看取されるもの (42・43・47・48) と押指されるもの (52・53) がある。脚裾部は端部が薄く、裾部は湾曲する。





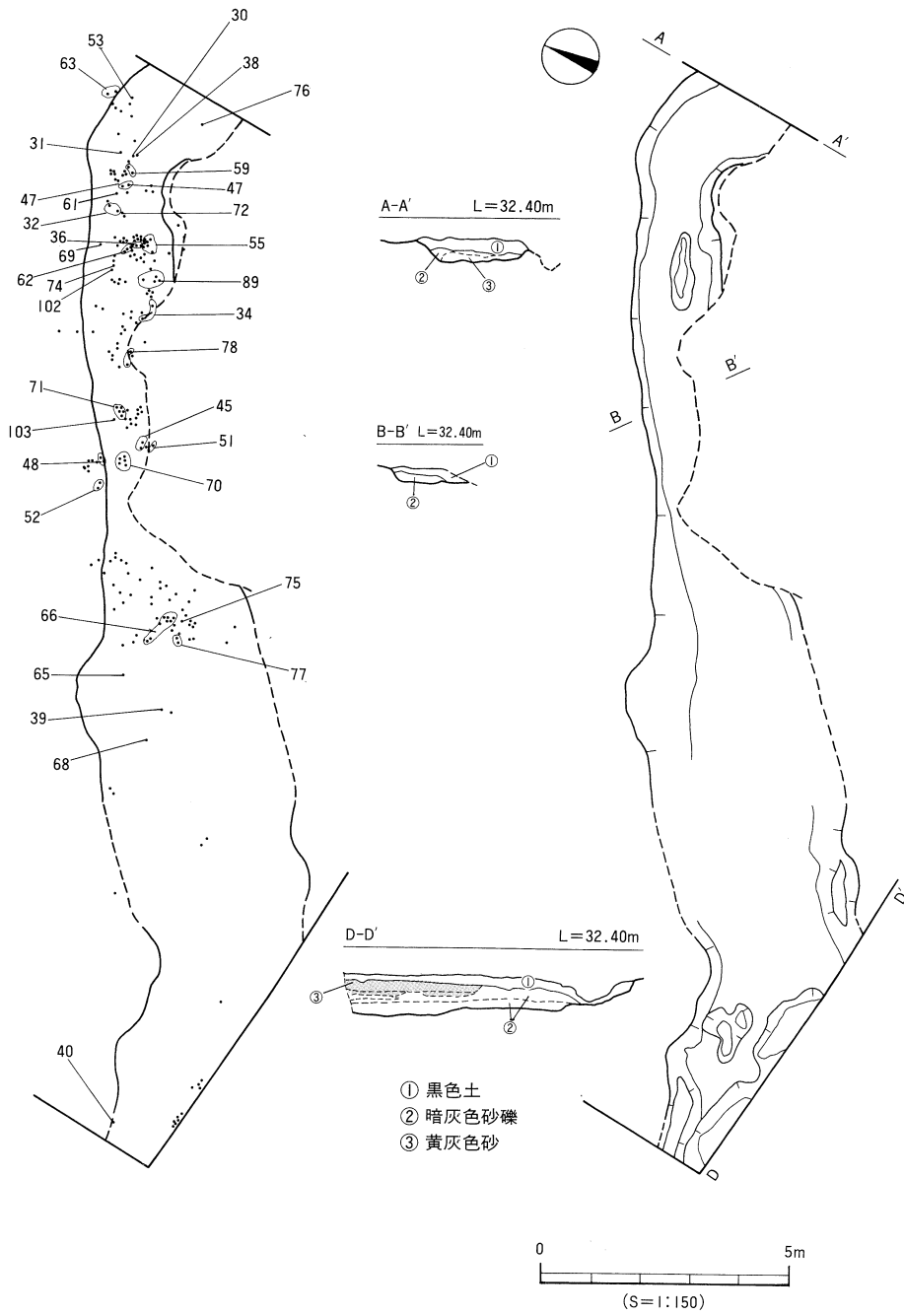
第110図 S D 6 上層・下層出土遺物実測図

鉢 (55) 片口の鉢である。口縁端部を成形した後、片口部を成形する。

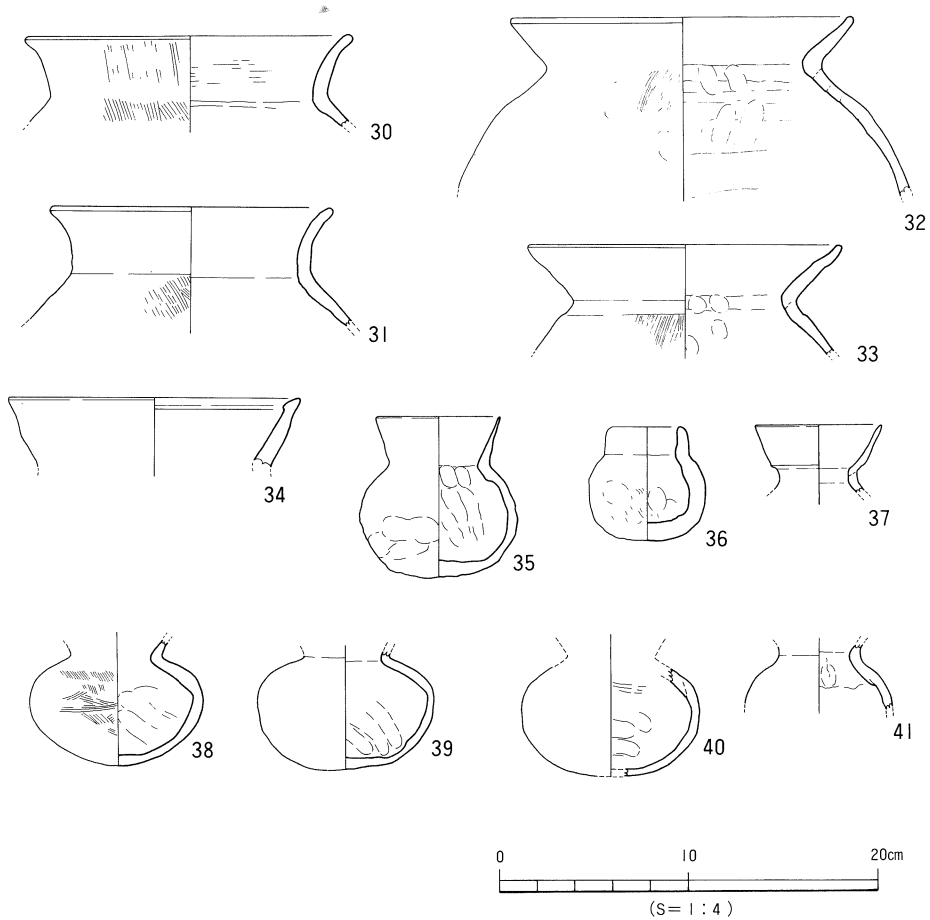
甌 (56~58) 56は把手部である。上外方に突出する。57・58は底部で、丸みのある平底となる。57は円形、58は隅丸三角形状を呈する孔をもつ。

その他 (59・60) 59は鉢と思われるものである。器壁が薄く、胴部が強く張るもので、異形品である。60は外反する口縁部で、端部はナテ凹みする。器壁が厚く、口径も大きく異形品である。

調査の概要



第III図 S D 7 測量図・遺物出土状況



第112図 S D 7 下層出土遺物実測図 (1)

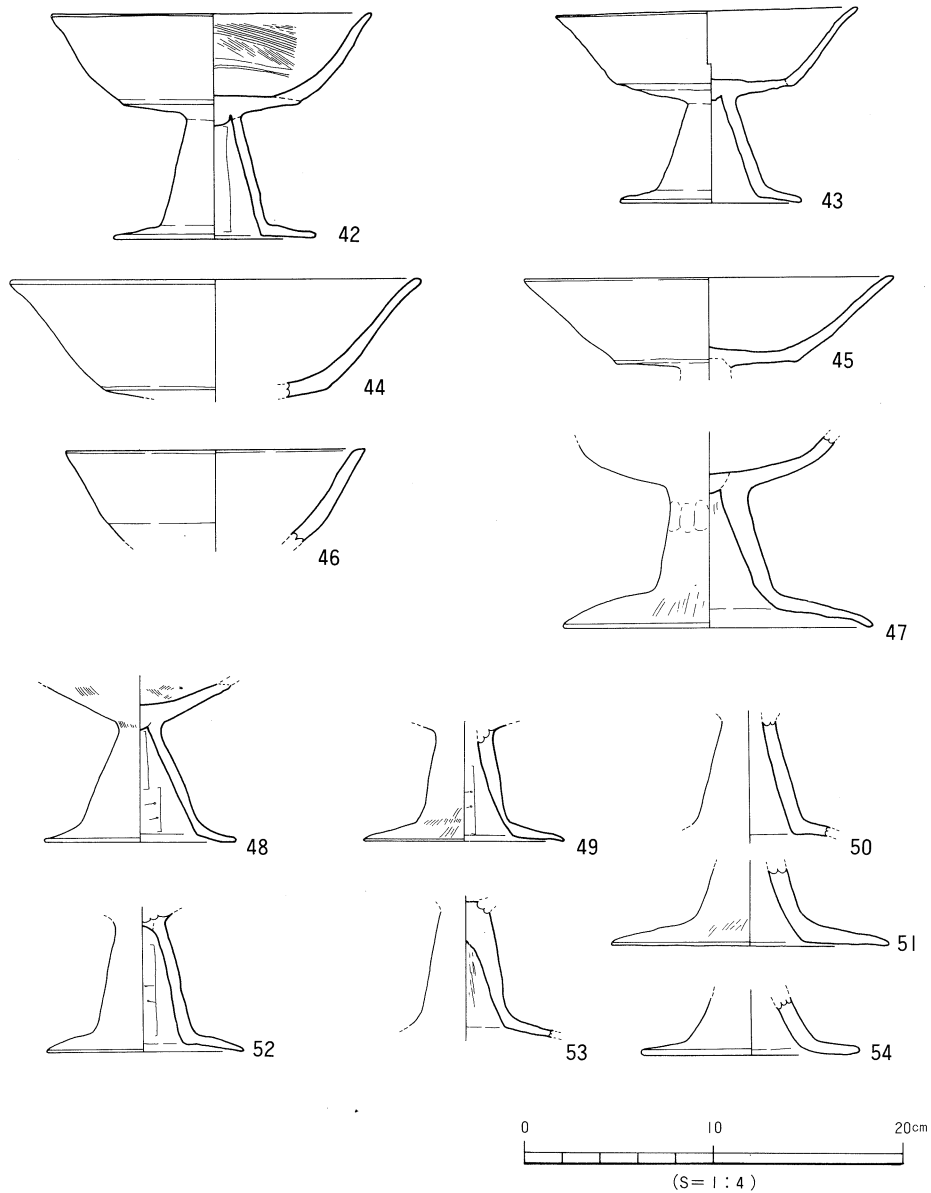
上層出土品 (第115図、61~78)

甕 (61~64) 外反する口縁部をもつ。62・63は端部がナデによりわずか(部分的)に内湾する。64は口縁端部は内湾し、器壁は薄くなるため、その形状は段状となる。

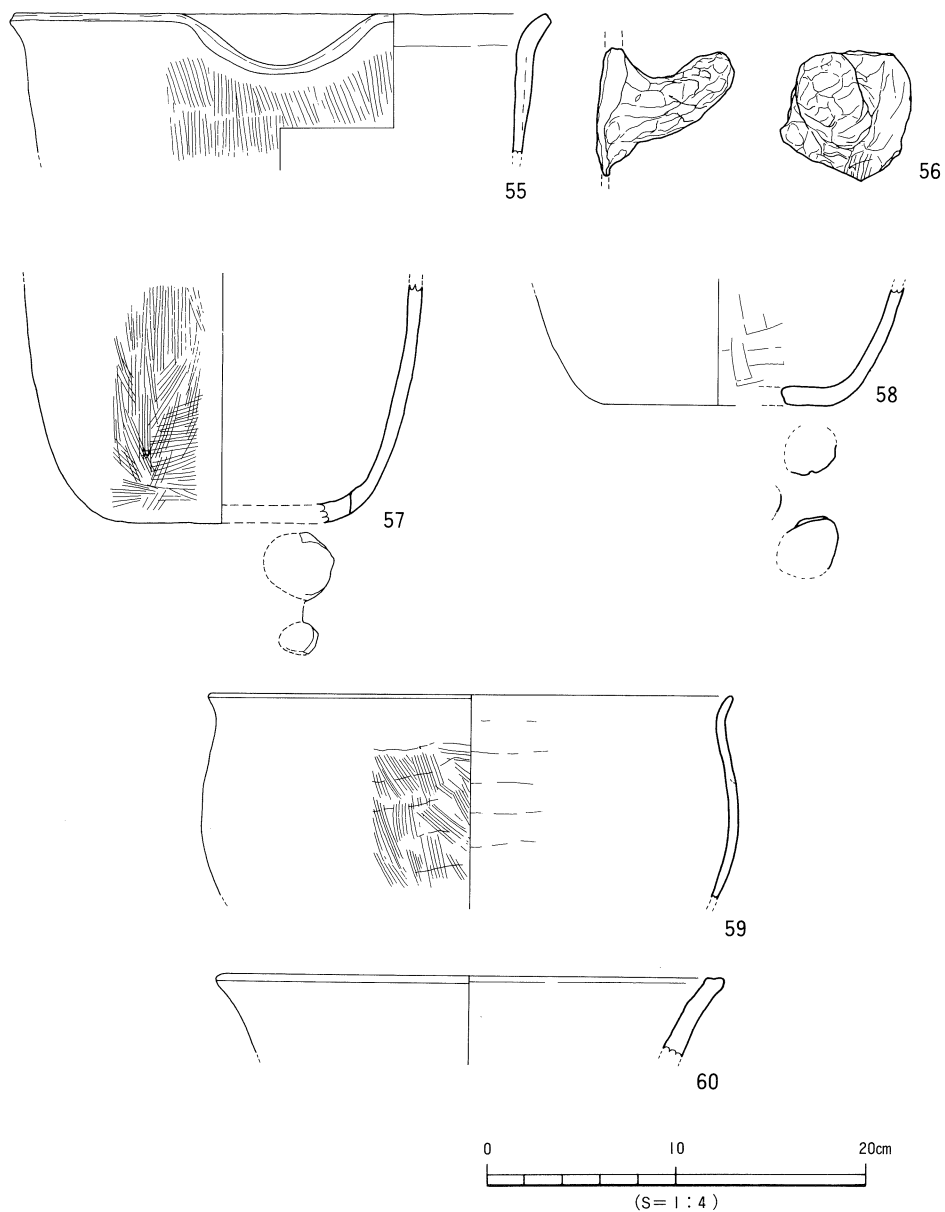
壺 (65~69) 65・66は中型品である。65は完形品で、肩部が張るやや長球形の胴部に、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。66は内面に接合痕を残す。67~69は小型品である。67は口縁部を一部欠損する。扁平球な胴部にゆるやかに内湾する口縁部をもつ。肩部に焼成前の円孔をもつ。68は胴下半部に膨らみをもち、内湾して立ち上がる口縁部をもつ。69は肩部が張るもので、頸部がしまるものである。

高坏 (70~78) 丸みをもつ坏部は、弱い段と外反する口縁部をもつ。脚部は、三角錐状を呈する柱部に水平に近く開く裾部となる。脚柱裾部内面には稜をもつ。柱内面はケズリ痕が看取される。坏底部は充填が看取され、指押しするもの (70・74・77) もみられる。

調査の概要

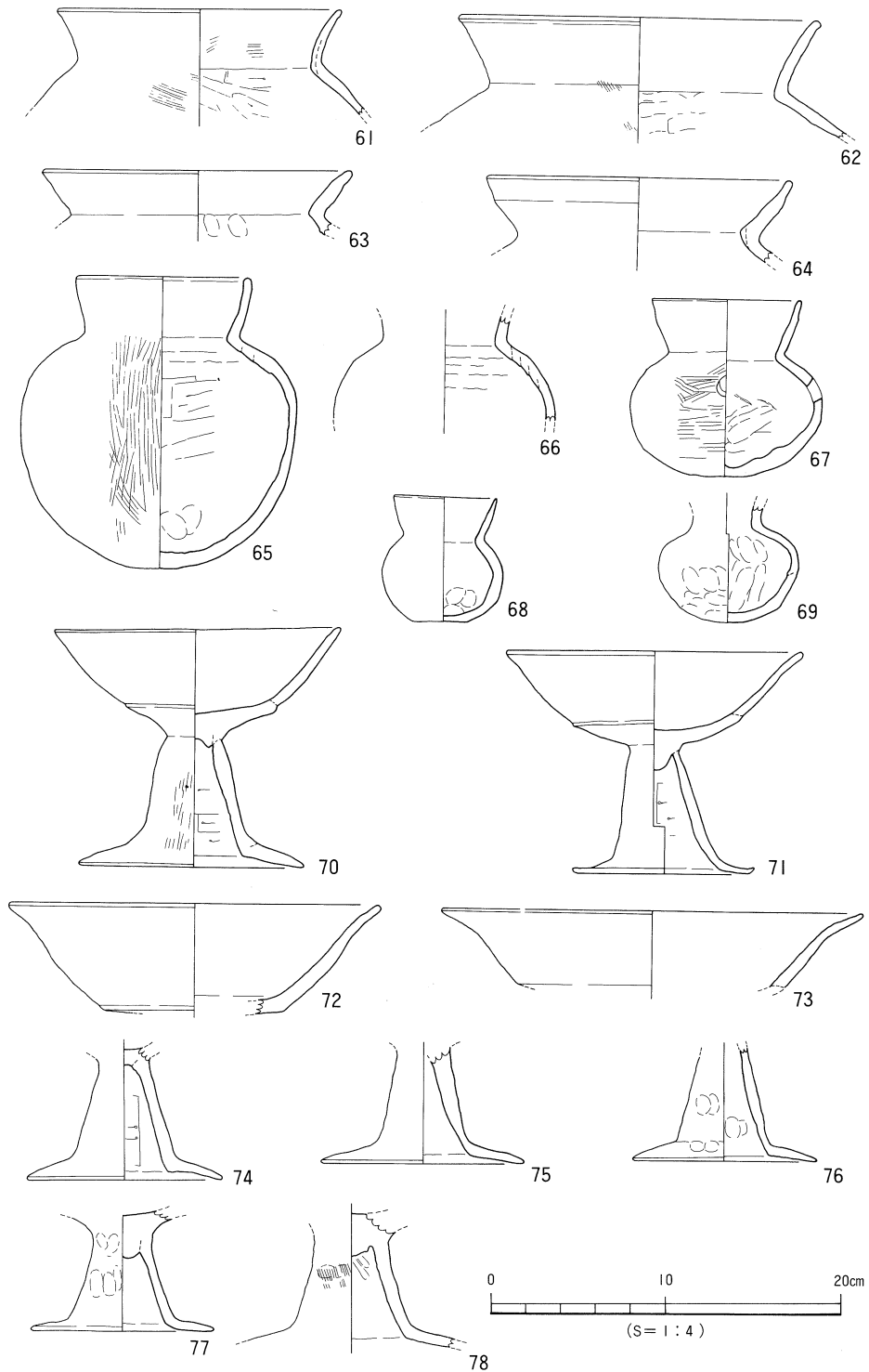


第113図 S D 7 下層出土遺物実測図 (2)



第114図 S D 7 下層出土遺物実測図 (3)

調査の概要



第115図 S D 7 上層出土遺物実測図

S D 7 出土の弥生土器 (第116・117図、79～107)

下層下部出土品 (79～83)

壺 (79～81) 79は大きく開く口縁部をもつものである。口縁端面は拡張し、ヘラによる刻目が施される。80は直口の長頸壺で、器壁が薄い。外面に接合痕をもつ。81は複合口縁壺の頸部片である。櫛描の多重沈線文と刻目凸帯文をもつ。

甕 (82) 82は甕の口縁部である。口縁端面に3条の沈線文と体部にヘラによる刺突文をもつ。

高坏 (83) 83は高坏の裾部である。器壁が薄く、円孔をもつ。

下層出土品 (84～101)

甕 (84・85) 84は如意状口縁を呈するもので、口縁端面に刻目、体部にヘラ描沈線文を3条以上もつ。85は「く」の字状の口縁部となるもので、内面に稜をもつ。

壺 (86～94) 86は中型品である。直立する頸部に、外反する口縁部をもつ。87～94は複合口縁壺である。87～89は中型品である。口縁部の接合部分は稜をもち、文様は施さないものである。90～94は大型品で、接合部分が大きく突出するものである。90・91は口縁端部が内外に拡張され、複合口縁部分に櫛描直線文と波状文をもつ。92はタテ方向の沈線が施される(部分的に)。93は竹管文が上下2段一組となり、複合口縁の上・中・下位に施される。94は櫛描波状文が施される。

鉢 (95～98) 95は外反する長い口縁部をもつものである。内面に稜をもつ。96はくびれの上げ底となるものである。器壁が厚い。97は厚く高台状に立ち上がる底部をもつものである。98は小型品の底部である。

高坏 (99・100) 99は坏部で、接合部に段をもつ。器体は丸みをもつものである。100は脚部である。上下2段(交互)に大きめの円孔を施す。

器台 (101) 101は器台の柱部である。円孔が交互(上下)に施される。

上層出土品 (102～107)

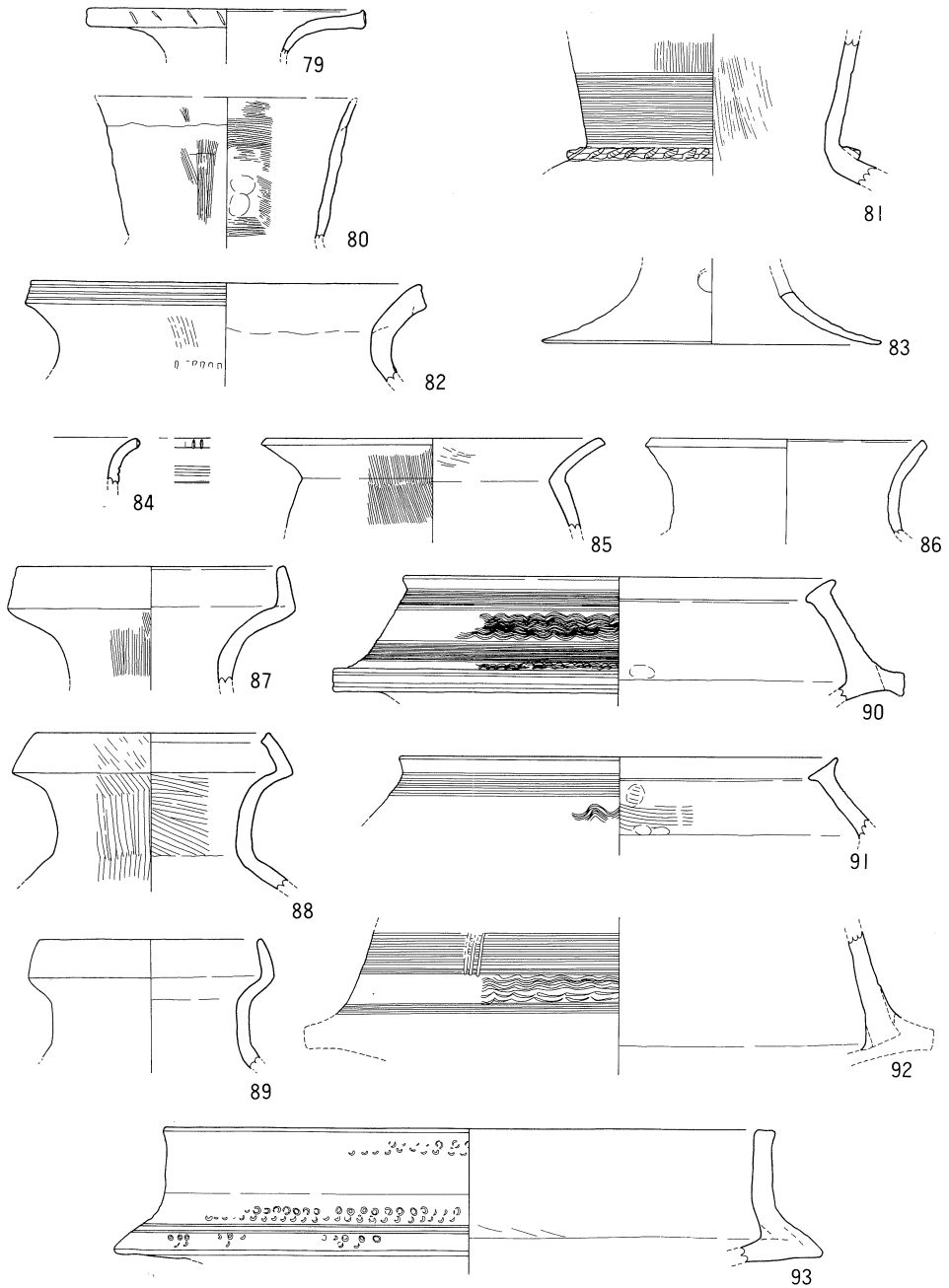
壺 (102・103) 102・103は複合口縁壺である。102は櫛描直線文、103はヘラないし櫛状の工具(太く深い沈線文)で波状文を施す。

鉢 (104) 104は台付鉢である。低く、大きい台をもつ。

高坏 (105) 105は脚部である。円孔をもつ。

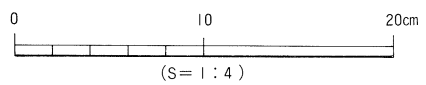
器台 (106・107) 106は受部端部が垂下し、端面に2条の沈線文と円形浮文をもつ。浮文上には中央(1ヶ)と外縁部(5ヶ)に刺突文を施す。107は受部端面に円形浮文をもつ。浮文は竹管状工具で刺突され、2ヶ1組となるものである。

調査の概要



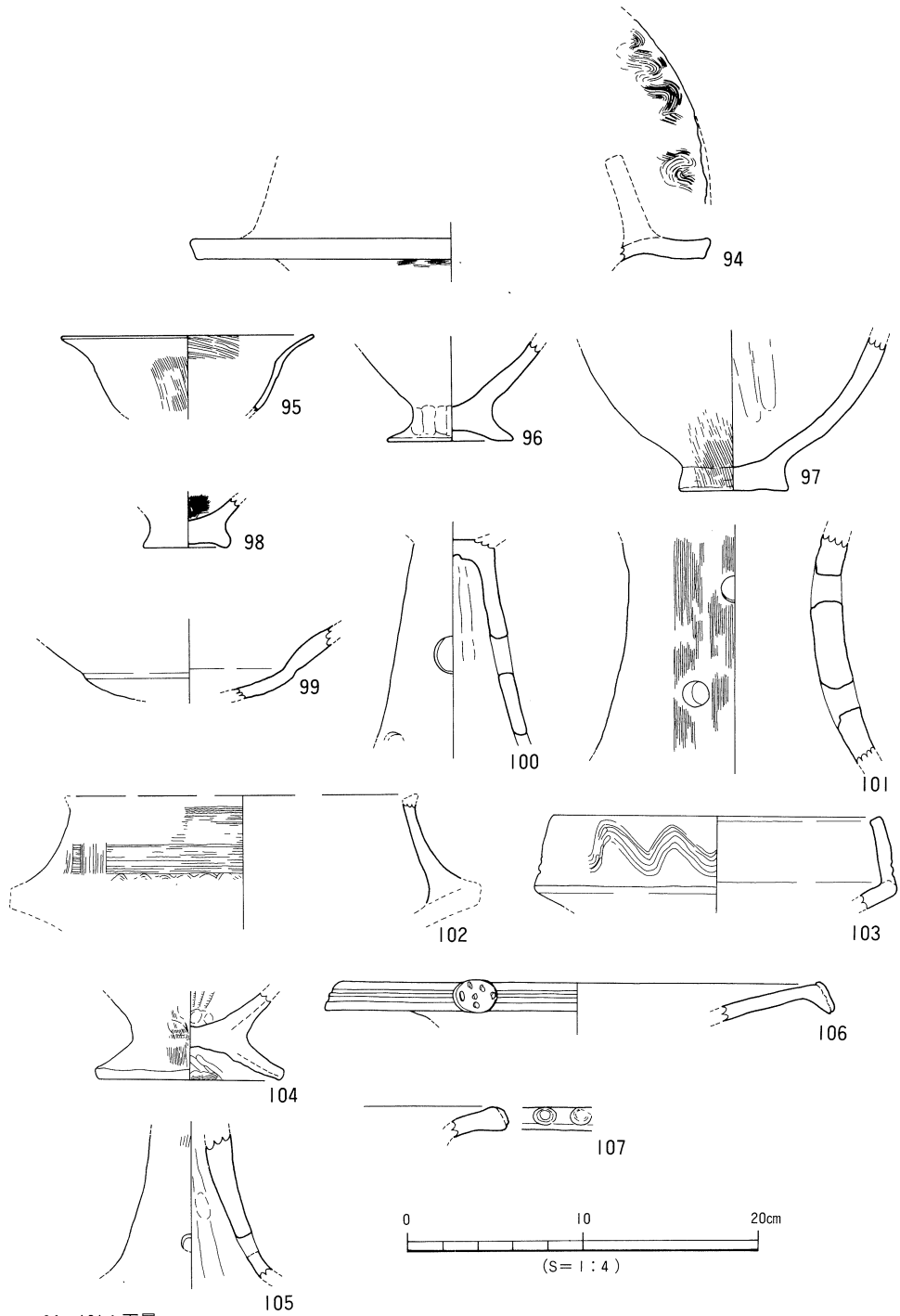
79~83：下層下部

84~93：下層



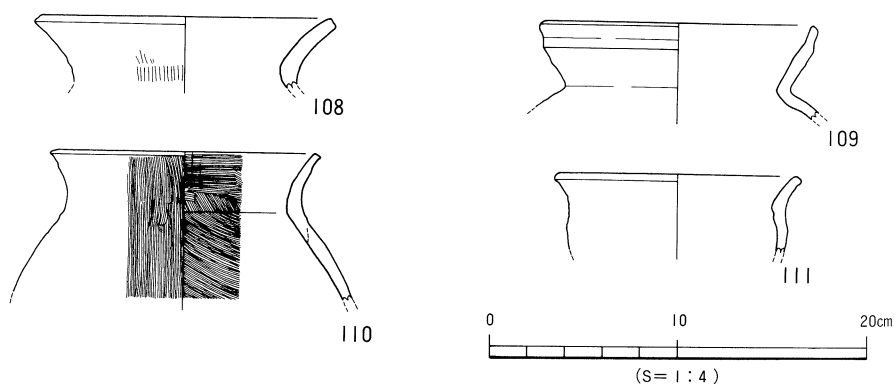
第116図 S D 7 (弥生) 出土遺物実測図 (I)





第117図 S D 7 (弥生) 出土遺物実測図 (2)

## 調査の概要



第118図 S D 5ないし S D 7 出土遺物実測図

### S D 5ないし S D 7 出土遺物 (第118図)

S D 5と S D 7が接する地点で出土したもので、どちらの遺物であるか断定できなかったものである。

甕 (108~110) 外反する口縁部をもつものである。109は内湾して立ち上がり、口縁端部が薄くなり有段となる。

鉢 (111) 111はゆるやかに外反する口縁部をもつものである。

### S D 8 (第106・120図)

調査区中央東寄りの C 2 ~ B 4 に位置し、S D 6・9を切り、B 4 区で深まりを見るものの消失している。断面形はレンズ状を呈し、上場最大幅1.9m、深さ14~19cm、検出長6.8mを測る。床面は西半部で凹凸がみられ東から西への傾斜がみられる。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は埋土中より弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土している。

出土遺物 (112) 112は大型の複合口縁壺で、多条の直線文を施す。弥生時代後期後半に比定されるものである。

### S D 9 (第106・120図)

調査区南東部 B・C 2 ~ A 5 に位置して S D 4・8に切られる。断面形はレンズ状を呈し上場最大幅2.5m、深さ28cm、検出長10.3mを測る。床面は比較的平坦で北東から南西へ傾斜している。埋土は暗茶褐色土である。遺物は弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物 (113) 113は中型壺で、頸部にヘラ描沈線文が4条施される。弥生時代前期に比定されるものである。

S K 出土品 (116) 116は調査区南壁の東端部で断面だけを検出した遺構 G (第101図) の出土品で須恵器の甕である。口縁端部は外方に丸く突出する。6世紀末~7世紀初頭。

(3) 弥生時代 (第119図)

S D 10

調査区南東部A・B2・3区に位置しSD4・9に切られる。断面形は皿状を呈し上幅3m、深さ25cm、検出長2.7mを測る。床面は北東から南西へわずかに傾斜している。遺物は埋土中より弥生土器、石器が出土した。

S D 11

調査区中央東寄りのE2～D3に位置し、SD7に切られる。断面形はレンズ状を呈し、上場最大幅1.2m、深さ10cm、検出長4.1mを測る。床面はほぼ平坦で東から南へ傾斜している。埋土は黒褐色土(黄色土混り)である。遺物は埋土中より弥生土器が少量出土した。

S K 11

調査区南部B5区に位置し切り合い関係はない。平面形は楕円形を呈し長さ91cm、幅83cm、深さ34cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、壁面の掘り方がしっかりしていることから人為的に掘られた土壌であろうと思われる。埋土は黒色土である。遺物は埋土中より弥生土器が出土したが破片である。

出土遺物 (第120図、14・15)

114は甕の口縁部片である。中型品で、口縁端部はやや厚く、端面には沈線文が3条施される。115は複合口縁壺の口縁部片である。無文である。

弥生時代の土壌にSK3・7・10があるが、遺構の性格について明確にできなかった。詳細は遺構一覧表に記す(表68)。

(4) その他の遺物 (第121図)

Ⅲ層出土品 (124) 124は口縁端部が上方に立ち上がるもので、東播系のこね鉢と思われる。13～14C。

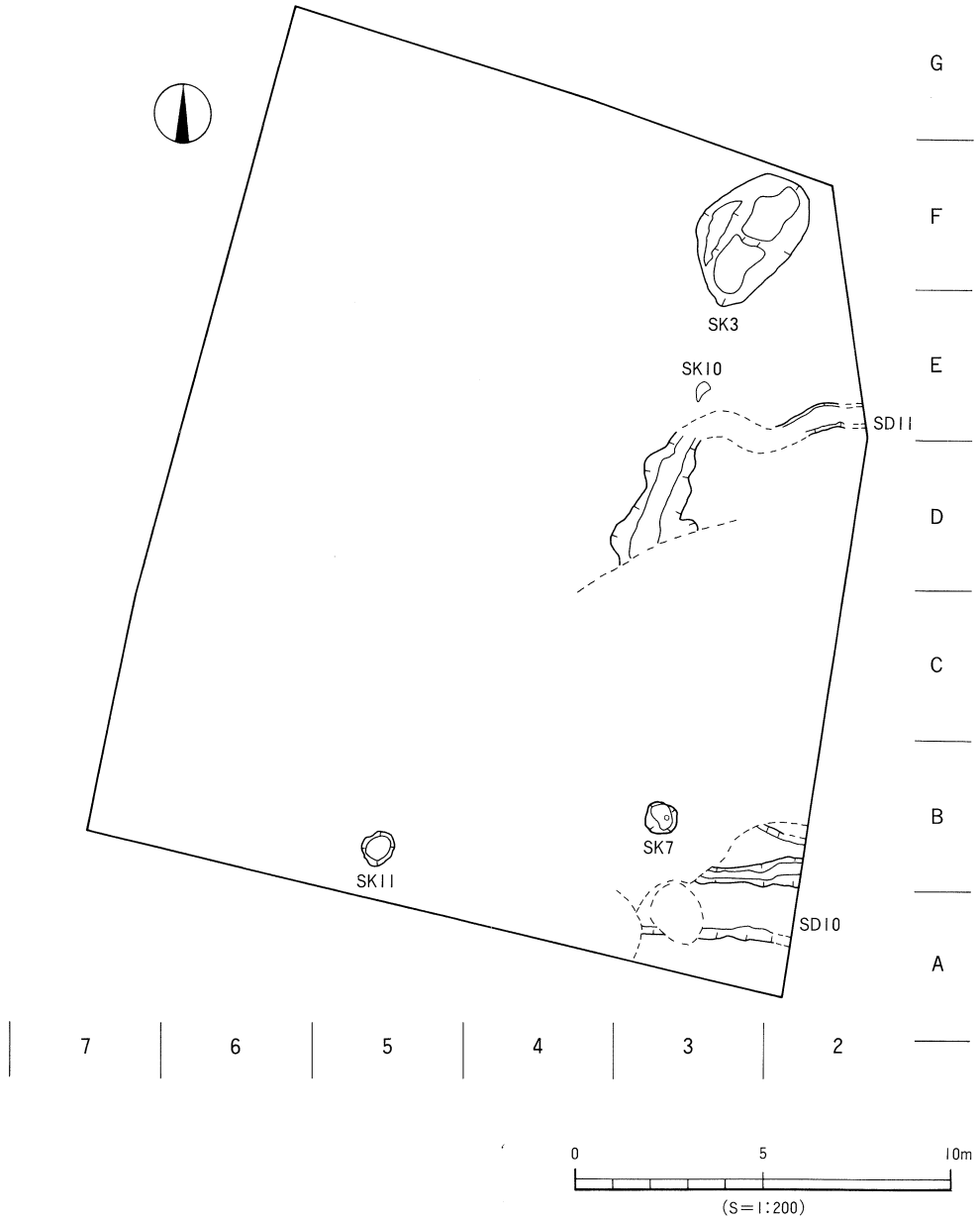
Ⅳ層出土品 (125) 125は高坏脚部で、柱部に櫛描文が二段に施される。弥生時代中期後半～後期初頭。

Ⅴ層出土品 (126) 126は壺の口縁部もしくは高坏脚端部になるものである。端面に2条の凹線文が施される。後期初頭。

トレンチ出土品 (127) 127は須恵器の跡である。胴部に波状文と凹線が施される。5C末～6C初。

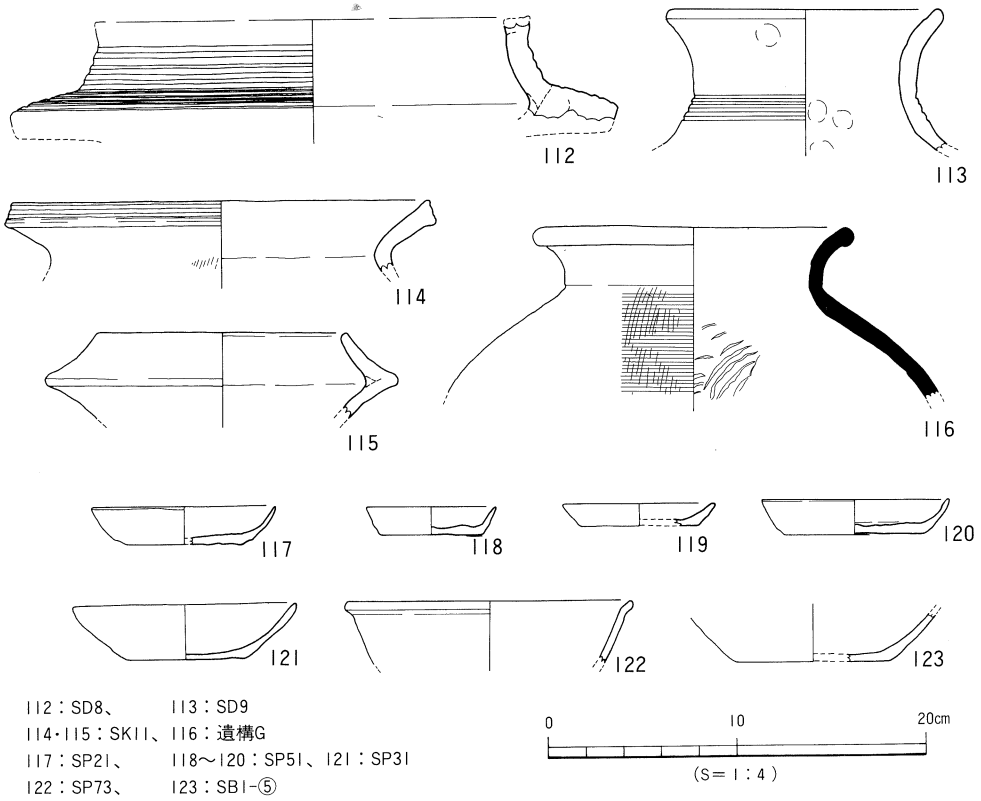
近現代遺構出土品 (128・129) 128は複合口縁壺である。接合部に稜をもち、文様は施さない。弥生時代後期後半。129は須恵器の坏蓋である。丸みのある段をもつ。6C前葉。

調査の概要

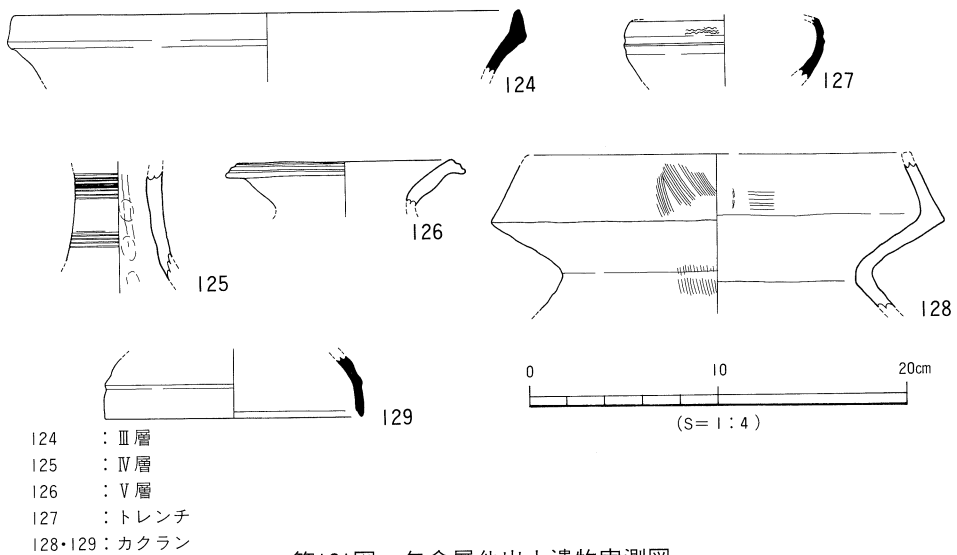


第119図 第VI層上面（弥生時代）遺構配置図

桑原田中遺跡 2次調査地



第120図 S D・S K・S P 出土遺物実測図



第121図 包含層他出土遺物実測図

## 調査の概要

### 石製品（第122・123図、図版80）

本調査では、石鏃・石槍状石器・石庖丁・砥石・磨石・石器素材等の石製品が出土した。これらは作業部門で、狩猟具・収穫具・研磨具・食料粉碎具他に分類でき、各作業の多種多様な石製品の存在が理解される。なお、石製品は1例を除き、後世もしくは、時期決定がしがたい資料にて、本項にて一括して解説を行うものである。

石鏃（130～135）6点出土した。すべて打製の凹基無茎式石鏃である。石材はサヌカイトと赤色頁岩が用いられている。先端部と両脚端部を繋いだ形態を基準に二分できる。すなわち、正三角形を呈するのを1類、二等辺三角形を呈するのを2類として記述を進める。

130はSD4出土。1類で先端部と両脚端部を欠く破損品である。側縁は基部に向かって内に屈曲する。細部調整は両面のほぼ全面に施されており素材面は認められない。基部に施された抉りは深く、逆V字形を呈し0.7cmを測る。法量は長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量0.9gである。サヌカイト製。

131はSD4下層出土。完形品の2類である。素材面がb面中央に残置する。抉りは浅く緩やかな逆U字型を呈し0.2cmを測る。法量は長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量0.7gである。サヌカイト製。

132はSD5出土。2類。先端部と両脚端部を欠く破損品である。両側縁が鋸歯状に仕上げられている。b面の中央にわずかに素材面が残置する。抉りは深い逆U字型を呈し1.0cmを測り、長さの35%を占める。法量は長さ2.8cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量1.9gである。サヌカイト製

133はSD9下層出土。2類。左脚部を欠く破損品である。両面のほぼ全面に細部調整が施されている。抉りは浅く、緩やかな弧状を呈し0.3cmを測る。法量は長さ3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm、重量1.4gである。赤色頁岩製。

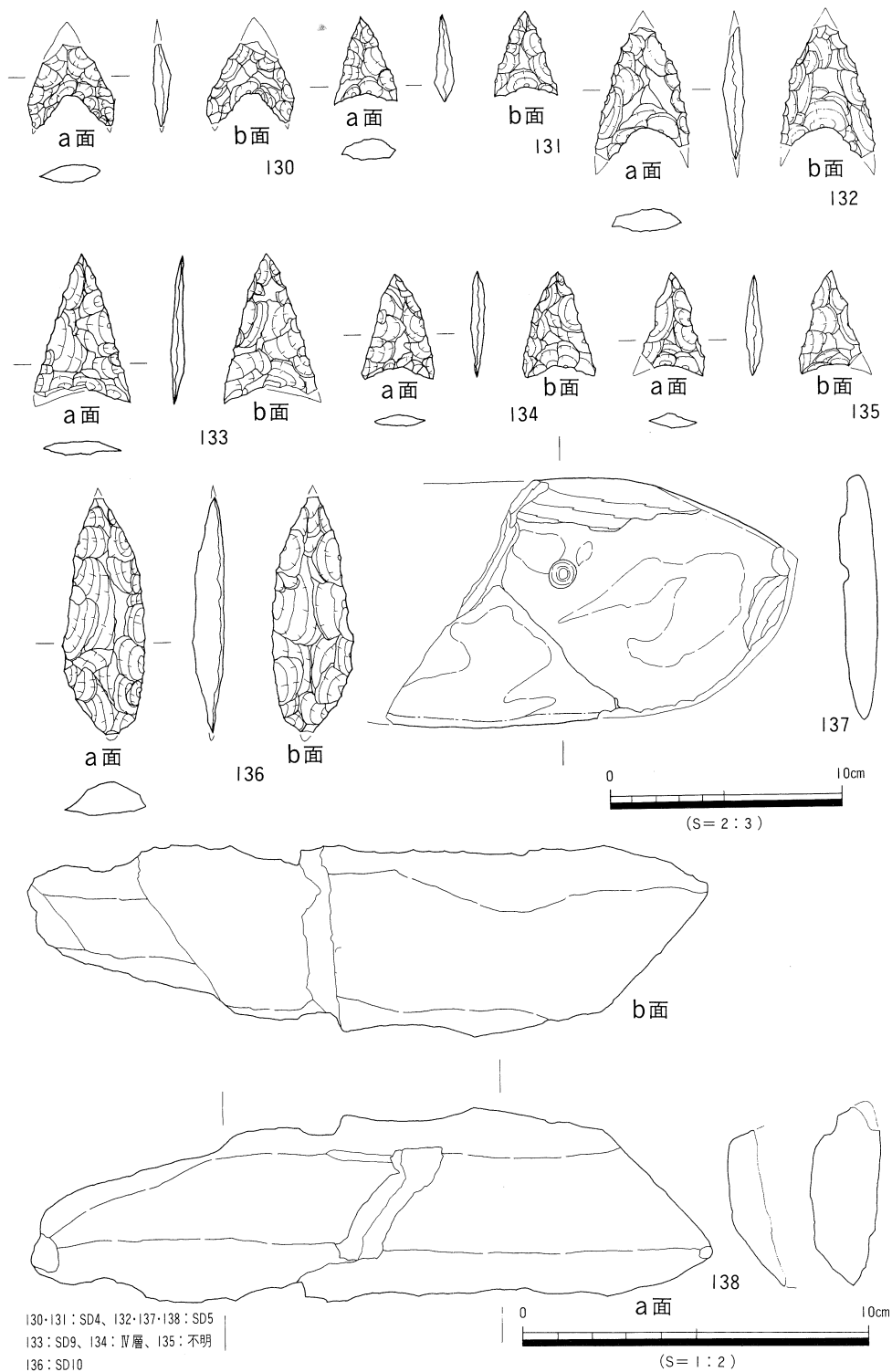
134は包含層であるIV層からの出土である。2類。側縁が先端部近くで内に屈曲する。抉りは浅く0.3cmを測る。赤色頁岩製。

135は出土層位不明。2類。片脚部を欠く破損品である。両側縁の中央が内湾する特異な形態である。両面にわずかに素材面が残置する。抉りは浅く0.2cmを測る。法量は長さ2.2cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重量0.7gである。サヌカイト製。

石槍状石器（136）136はSD10出土。先端部と基部を欠く破損品である。平面形態は木葉状を呈す。細部調整はb面からの階段状剥離が顕著に認められる。素材面がa面中央に細長く残置する。法量は長さ5.0cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm、重量5.6gである。

石庖丁（137）137はSD5上層出土。左半部と刃部の一部を欠く破損品である。未完通の孔が認められる。両面に自然面が残置していることから緑色片岩の自然礫を素材として用いていることが考えられる。研磨は両面に認められる。法量は長さ8.5cm、幅5.2cm、厚さ0.8cm、重量45.3gである。

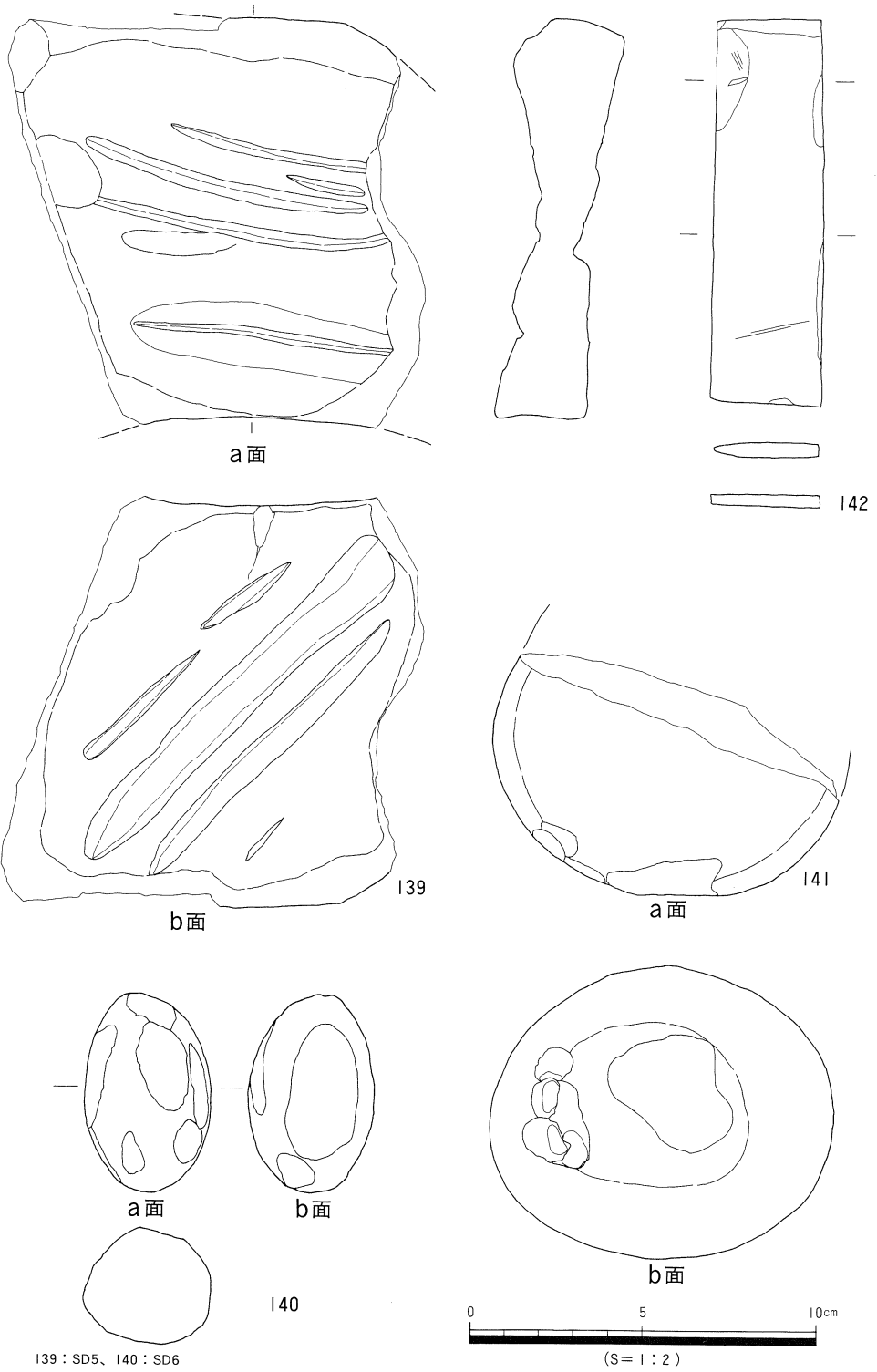
桑原田中遺跡 2 次調査地



130-131 : SD4、132-137-138 : SD5  
 133 : SD9、134 : IV層、135 : 不明  
 136 : SD10

第122図 出土遺物実測図(石製品)(I)

調査の概要



139 : SD5、140 : SD6  
141 : SD4、142 : SP103

第123図 出土遺物実測図（石製品）(2)



石器素材 (138) 138は S D 5 出土。緑色片岩製。b 面の左半部は表面が剥落している。調整等の製作の痕跡は認められないことから石器素材として搬入された可能性が高い。法量は 19.7cm、幅 5.6cm、厚さ 2.0cm、重量 282.1g である。

砥石 (139・140) 139は S D 5 出土。両端を欠く破損品である。使用痕は両面にあり、複数の溝状の研磨痕が看取される。これらの溝の横断面形態は V 字形を呈している。法量は長さ 12.1cm、幅 11.9cm、厚さ 3.1cm、重量 590.3g である。砂岩製。

140は S D 6 出土。上端部を一部欠く破損品である。使用痕は複数の面で看取されとりわけ b 面では広く認められる。法量は長さ 5.8cm、幅 3.6cm、厚さ 3.3cm、重量 84.4g である。法量から推察して手持ちの砥石である可能性を指摘しておきたい。砂岩製。

磨石 (141) 141は S D 4 出土。上半部を欠く破損品である。長軸方向の端面 (b 面) に研磨痕と敲打痕が認められることから、敲・磨石とも呼称すべき石製品である。法量は長さ 7.0cm、幅 10.0cm、厚さ 8.5cm、重量 609.2g である。花崗岩製。

用途不明石製品 (142) 142は S P 103 出土。長方形の平面形態を有し、わずかに研磨痕が看取される。身は薄く、器種を特定することは差し控えておく。法量は長さ 11.7cm、幅 3.2cm、厚さ 0.4cm、重量 32.2g である。

## 4. 小 結

本調査において、弥生時代、古墳時代、中世～近世の遺構と遺物を確認することができた。

遺構：第Ⅳ層上面では掘立柱建物址及び柱穴群の検出により、中世～近世の生活址が確認され、集落の一部を確認した。第Ⅵ層上面検出の遺構は、本文中では溝として扱ってきたが、人工的な掘り方が認められないことから自然流路もしくは、調査地西隣を南流して川附川と合流する小河川が現在流れており、この氾濫源と考える。どちらの場合にしても溝からの遺物の出土は、調査地周辺に当該期の集落遺構の存在を示した資料であり、重要なものといえる。また、古墳時代中期の集落の存在は確かなものであろう。

層位：第Ⅲ層及び第Ⅳ層は時期差 (土色・質の違い、遺物の時期差、柱穴埋土と似ている) がないものと思われる。さらに第Ⅲ層中及び第Ⅳ層中での遺構の検出がない事などから整地盛土的なものではないかと考える。

また、調査区北部は、第Ⅱ層直下に第Ⅵ層が検出されており、削平を受けていると思われ、旧地形は調査区以北では高くなっていたと考えられる。

なお、出土遺物中の中～近世資料については栗田正芳氏の助言を得た。巻末であるが記して感謝の意を表する。

遺構一覧

遺構・遺物一覧—凡例—

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

遺構一覧は山本が、遺物観察表は梅木、水口が作成した。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好。○→良、△→不良。

表66 掘立柱建物址一覧

掘立	規模 (間)	方位	桁 行		梁 行		床面積 (㎡)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	4×2	東西棟	800(26.6)	6.7・6.5・6.7・6.7	390(13)	6.5・6.5	31.2	近世?	III層上面検出

表67 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
1	E3~6	船底状	11.5×0.7×0.1	灰色土		近現	
2	E3~G5	皿状	7.5×2.2×0.1	灰色土(砂混り)	陶器	近現	
3	B4~C6	皿状	14.5×0.6×0.15	灰色土	近世瓦	近現	
4	A3~C7	船底状	16.0×2.0×0.6	暗灰茶褐色細砂質土	弥生・須恵・土師	中近世	SD-7・9を切る。
5	C4~F2	皿状	14.0×1.8×0.4	黒色土	弥生・土師	古墳	SD-7に切られる。
6	B4~D3	船底状	9.7×1.0~1.8×0.35~0.5	黒色土(やや粘性)	弥生・土師・須恵	古墳	SD-8に切られSD-7を切る。
7	B7~D2	船底状	20×1.6×3.0×0.5	黒色土	弥生・土師・須恵	古墳	SD-6に切られSD-5を切る。
8	B2~C4	レンズ状	6.8×1.1~1.9×0.14~0.19	暗灰褐色砂質土	弥生・土師・須恵	古墳	SD-6・9を切る。
9	A3~B5	レンズ状	10.3×1.3~2.5×0.28	暗茶褐色土	弥生・土師・須恵	古墳	SD-8に切られSD-10を切る。
10	A2~B3	皿状	2.7×3.0×0.25	暗褐色砂(小レキ混り)	弥生	弥生	SK-6・SD-9に切られる。
11	D3~E3	レンズ状	4.1×0.6~1.2×0.10	黒褐色土(黄色土まじり)	弥生	弥生	SD-7に切られる。

表68 土壌一覧

土壌 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	時 期	備 考
2	F5	不整形	皿状	5.0×0.92×0.1	灰色砂質土		近現	試掘トレンチに切られ 全容は不明
3	F2,3	不整形	レンズ状	3.76×2.56×0.5	暗灰褐色砂質土	弥生	弥生	SD-5に切られる。
6	A3	楕円形	船底状	1.61×1.42×0.66	灰茶色土	弥生・土師	古墳	SD-10を切る。
7	B3	円形	皿状	0.89×0.86×0.3	黒褐色土	弥生	弥生	SD-9に切られる。
10	E3	楕円形	皿状	0.4×0.27×0.15	黒色土	弥生	弥生	
11	B5	楕円形	逆台形状	0.91×0.83×0.34	黒色土	弥生	弥生	
14	A4	楕円形	逆台形状	0.85×0.83×0.29	暗灰色土	・角礫		

桑原田中遺跡2次調査地

表69 SD4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	鍋	残高 23.3	三足鍋脚部。脚端部を一部欠損。	ナデ		淡黄茶褐色	石長(1~2) ◎		
2	椀	口径(18.7) 残高 3.7	内黒椀。内面にミガキ痕。口縁わずかに外反。	ナデ	㊦ ヨコナデ ㊧ ミガキ	黄灰色 黒灰色	密 ◎		
3	坏	底径(9.4) 残高 1.3	高台付坏。高台はやや「ハ」の字状。高台底面はナデ凹む。	マメツ	マメツ	赤褐色 赤褐色	密 ◎	土師器	
4	坏	底径(8.8) 残高 1.2	高台付坏。高台は「ハ」の字状。高台外端はナデによる面あり。	ナデ	ナデ	灰色 白灰色	密 ◎	須恵器	
5	坏蓋	口径(12.5) 残高 3.1	口縁端部外面に刻目をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	密(石1) ◎		
6	甕	口径(14.5) 残高 10.3	直立し、外反する口頸部。肩部は強く張る。	㊦ ハケ→ヨコナデ ㊧ ハケ	㊦ ハケ ㊧ ケズリ	灰黄褐色 灰黄色	石長(1~9) ◎		

表70 SD5 上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
7	甕	口径 17.8 残高 10.2	長く外反する口縁部。口縁端部はわずかに外反する。	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ ㊨ ケズリ	黄茶色 黄茶色	石長(1~2) ◎		
8	甕	口径(20.4) 残高 4.6	段を有する口縁部。口縁端部は、内傾し面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色 灰黄茶色	石長(1~4) ◎		
9	高坏	底径(16.8) 残高 8.1	太く三角錐を呈する柱部。水平に近く開く裾部。柱裾部内面に稜。	ヨコナデ	㊨ 柱 ケズリ ㊩ 裾 ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	密(石・長1) ◎		
10	高坏	底径 10.5 残高 6.4	三角錐を呈する柱部。柱裾部内面に稜。	ヨコナデ(マメツ)	マメツ	暗褐色 暗褐色	石長(1~3) ◎		
11	高坏	残高 8.8	太く三角錐を呈する柱部。柱裾部内面に稜。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	長(1) ◎		

表71 SD5 下層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
12	甕	口径(16.0) 残高 5.9	外反する口縁部。口縁端部は丸い。内面に接合痕。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ(接合痕顕著)	黄灰色 黄灰色	密 ◎		
13	甕	口径(17.6) 残高 3.7	外反し、内湾する口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ(マメツ)	乳黄色 淡黄灰色	密(石4) ○		
14	壺	残高 5.3	胴部中位が張る。頸胴部内面は弱い稜。	ハケ(マメツ)	ナデ	褐色 暗褐色	石長(1~2) ○		
15	高坏	底径 11.5 残高 7.3	三角錐を呈する柱は、中位がやや膨らむ。柱裾部内面に稜。	ハケ(マメツ)	㊨ 柱 ケズリ(1部ナデ) ㊩ 裾 ヨコナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	密 ◎		
16	高坏	残高 7.4	三角錐を呈する柱部。水平に近く開く裾部は器壁がやや厚い。柱裾部内面に稜。	マメツ(工具痕あり)	㊨ 柱 シボリ痕 ㊩ 裾 ヨコナデ	淡黄灰色 淡黄灰色	石長(1~5) ◎		

遺物観察表

表72 SD6上層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	甗	口径(16.4) 残高 3.0	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄茶色 乳黄茶色	密 ◎		
18	甗	口径(13.2) 残高 2.9	外反する口縁部。口縁端部は丸い。やや器壁厚い。	ハケ(マメツ)	ヨコナデ(マメツ)	黄褐色 茶褐色	石・長(1) 金 ◎		
19	甗	口径(18.4) 残高 3.8	外反し、内湾する口縁部口縁端部は丸い。	ヨコナデ(マメツ)	ヨコナデ(マメツ)	灰黄褐色 灰黄色	石・長(1~2) ◎		
20	甗	口径(15.1) 残高 4.5	内湾して立ち上る口縁部。口縁端面は、内傾し突出する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~3) 金 ◎		
21	甗	口径(13.3) 残高 2.5	短く、内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は先細り。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 黄茶色	密 ◎		
22	甗	口径(13.3) 残高 2.8	短く、内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は先細りする。	ヨコナデ	㊦ ヨコナデ ㊧ ナデ	黄茶色 黄茶色	石・長(1) ◎		
23	高坏	底径(11.5) 残高 1.2	水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境に稜。	マメツ	㊨ ケズリ ㊩ ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1) ◎		

表73 SD6下層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
24	高坏	残高 3.9	丸みのある段を有する坏部。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	黄茶色 黄茶色	石・長(1~3) ◎		
25	高坏	底径 11.3 残高 3.2	短く、外反する裾部。内面の柱裾部境に稜。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	密 ◎		
26	甗	残高 4.1	丸みのある底部には、現存で2ヶの孔がある。	㊪ ハケ(マメツ) ㊫ ナデ(マメツ)	ケズリ	灰黄色 乳黄色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
27	甗	残高 2.8	胴上半部が張る。凹線には9条の波状文を施す。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青白色	密 ◎		
28	器台か	残高 2.5	器台と思われる。4条の凹線文をもつ。搬入品か。	マメツ	ハケ	黄茶色 暗茶色	密(開閃石) ◎		
29	甗	口径(12.2) 残高 4.4	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ(マメツ)	灰黄褐色 灰黄色	密(砂粒) ◎	グリット	

表74 SD7下層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	甗	口径(17.4) 残高 4.8	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	㊬ ハケ→ヨコナデ ㊭ ハケ	㊮ ハケ→ヨコナデ ㊯ ケズリ	灰褐色 灰褐色	密・金 ◎		
31	甗	口径(14.6) 残高 6.3	外傾し、外反する口縁部。口縁端部は丸い。	㊰ ヨコナデ ㊱ ハケ(マメツ)	マメツ	乳黄褐色 黄白色	石・長(1) ◎		
32	甗	口径(17.8) 残高 9.4	内湾して立ち上る口縁部。口縁部は丸い。	㊲ ヨコナデ ㊳ ハケ(マメツ)	㊴ ヨコナデ ㊵ ナデ ㊶ ケズリ	黄茶褐色 黄茶褐色	密 ◎		

桑原田中遺跡 2次調査地

S D 7 下層出土遺物観察表・土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
33	甕	口径(16.0) 残高 5.8	外反し、内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は丸い。	㊦ ヨコナテ ㊧ ハケ	㊦ ヨコナテ ㊧ マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
34	甕	口径(15.4) 残高 3.7	内湾して立ち上る口縁部。口縁端面は内傾し突出する。	ヨコナテ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		
35	壺	口径 6.5 器高 8.5	完形品。胴部中に最大径。内湾して立ち上る口縁部。	㊦ ヨコナテ ㊧ マメツ	㊦ ヨコナテ ㊧ ナデ	黄茶色 黄茶色	密 ◎		77
36	壺	口径( 3.2) 器高 6.0	ミニチュア品か。肩部に張りをもつ。内湾して立ち上る口縁部。	㊦ ヨコナテ ㊧ ハケ(マメツ)	㊦ ヨコナテ ㊧ ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長 ◎		77
37	壺	口径 6.6 残高 3.6	短い頸部に、有段の口縁部。須恵器態に似る。	ヨコナテ	ヨコナテ	黄茶色 黄茶色	密 金 ◎		77
38	壺	残高 6.6	胴部は扁平。頸部下端が強くしまる。	ハケ(1部ナテ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎		77
39	壺	残高 6.2	胴部は扁平。頸部下端が強くしまる。	ナデ(マメツ)	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	密(石・長1) ◎		
40	壺	残高 5.7	胴部はやや扁平。	㊦上 ヨコナテ ㊦下 マメツ	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1~5) ◎		
41	壺	残高 3.3	頸部下端が強くしまる。	マメツ	ナデ(1部マメツ)	灰黄茶色 灰黄茶色	密(砂粒) ◎		
42	高坏	口径 17.0 器高 11.8 底径 10.7	有段の坏部は、口縁部が外反する。三角錐の柱部に、水平近くに外反する裾部。	㊦ ヨコナテ ㊧ ナテ	㊦ ハケ ㊧ 柱 ケズリ ㊨ 裾 ヨコナテ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑	77
43	高坏	口径 16.0 器高 10.2 底径 9.6	有段の坏部は、口縁部が外反する。三角錐の柱部に、水平近くに外反する裾部。	㊦ ヨコナテ ㊧ 柱 マメツ ㊨ 裾 ヨコナテ	㊦ マメツ ㊧ ケズリ→ナデか?	茶褐色 茶褐色	密 ◎		77
44	高坏	口径 21.6 残高 6.2	有段の坏部は、口縁部が外反する。口縁端部は面をもつ。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ◎		
45	高坏	口径 19.5 残高 4.7	有段の坏部。坏底部に擬口縁。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	石・長(1) ◎		
46	高坏	口径(15.8) 残高 4.9	口縁端部は、内傾し面をもつ。	ヨコナテ	ナデ	黄茶色 黄茶色	密(石・長1~3) ◎		
47	高坏	底径 15.4 残高 10.0	短く太い柱部。長い裾部。内面の柱裾部境に稜。やや厚い器壁。	㊦ ヨコナテ ㊧ 柱 マメツ ㊨ 裾 ハケ→ナテ	㊦ ナデ ㊧ 柱 ナテ ㊨ 裾 ヨコナテ	淡褐色 淡褐色	密 ◎		77
48	高坏	底径(10.6) 残高 7.0	三角錐の柱部。水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境に稜。	マメツ	㊦ 柱 ケズリ ㊨ 裾 マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎		
49	高坏	底径(10.7) 残高 5.8	三角錐の柱部。水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境に稜。	㊦ 柱 ナテ ㊨ 裾 ハケ→ナテ	㊦ 柱 ケズリ ㊨ 裾 ナテ	淡褐色 淡褐色	密 金 ◎		

遺物観察表

S D 7 下層出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
50	高坏	残高 6.1	三角錐の呈する柱部。内面の柱裾部境に稜。	マメツ	マメツ	暗褐色 黒灰色	石・長(1~3) ◎		
51	高坏	底径(14.7) 残高 4.1	水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境に稜。	①(脚柱) ヨコナテ ①(脚裾) ハケ→ヨコナテ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1) ◎		
52	高坏	底径(10.1) 残高 8.5	三角錐の柱部。水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境に稜。	①(杯) ハケ→ナテ ①(脚柱) ナテ ①(脚裾) ヨコナテ	①(杯) ハケ ①(脚柱) ケズリ ①(脚裾) ヨコナテ	褐色 茶褐色	石・長(1) 金 ◎		
53	高坏	残高 7.2	三角錐の柱部に、ゆるやかに開く裾部。内面の柱裾部境の稜は弱い。	ナテ	①(脚柱) シホリ痕 ①(脚裾) マメツ	淡褐色 淡褐色	密 金 ◎		
54	高坏	底径(11.6) 残高 3.0	水平に近く開く裾部。内面の柱裾部境の稜は弱い。	ナテ	①(脚柱) ナテ ①(脚裾) ハケ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
55	鉢	口径(28.0) 残高 9.9	片口口縁。口縁端部は面をもつ。	①(口) ヨコナテ ①(脚) ハケ(4~5本/1cm)	①(口) ヨコナテ ①(脚) ケズリ→ナテ	淡黄茶色 黄茶色	密 ウンモ ◎		77
56	甌	残高 6.7	把手。上外方向へのびる。	ナテ		黄褐色	密 ◎		
57	甌	残高 12.3	丸みをもつ底部。現存で3ヶの孔。	ハケ	ナテ	黄褐色 黄褐色	密 ◎		
58	甌	残高 6.2	平底に近い底部。現存で2ヶの孔。	ナテ	ナテ(工具痕)	茶褐色 乳黄茶色	密 金 ◎		
59	鉢	口径(27.6) 残高 10.7	鉢と思われる。ゆるやかに外反する口縁部。	①(口) ヨコナテ ①(脚) ハケ(4~5本/1cm)	①(口) ヨコナテ ①(脚) ナテ(工具痕)	黄茶色 黄茶色	密 金 ◎		
60	不明	口径(26.9) 残高 4.2	器種不明。外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。著しく器壁厚い。	ヨコナテ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1) 金 ◎		

表75 S D 7 上層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
61	甕	口径(16.0) 残高 5.9	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	①(口) ヨコナテ ①(脚) ハケ(マメツ)	①(口) ハケ→ヨコナテ ①(脚) ケズリ	乳茶色 乳茶色	密 金 ◎		
62	甕	口径(20.6) 残高 6.6	外反し、わずかに内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は丸い。	マメツ(1部ハケ)	①(口) マメツ ①(脚) ケズリ	乳茶褐色 乳茶色	密 ◎		
63	甕	口径(17.0) 残高 3.7	外反し、わずかに内湾して立ち上る口縁部。口縁部は丸い。	ヨコナテ	①(口) ヨコナテ ①(脚) ナテ	灰褐色 灰褐色	密 金 ◎		
64	甕	口径(17.5) 残高 4.7	内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は丸い。	ヨコナテ	ヨコナテ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ◎		

桑原田中遺跡 2次調査地

SD7 上層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
65	壺	口径 10.0 器高 16.5	肩部が張る、長球形の胴部。 内湾して立ち上る口縁部。	① ヨコナテ ② ハケ(1部ナテ)	① ヨコナテ ② ケズリ ③ ナテ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ◎		78
66	壺	残高 5.8	肩部が張る胴部。	ナテ	ナテ(接合痕顕著)	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
67	壺	口径 8.5 器高 10.0	扁平な胴部。焼成前の円孔 1ヶ(φ1.3cm)。	① ヨコナテ ② ハケ(1部ナテ)	ナテ(工具痕)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~2) 金 ◎		78
68	壺	口径(5.9) 器高 7.0 底径 2.9	扁平な胴部。内湾して立ち 上る口縁部。	ナテ	① ヨコナテ ② ナテ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎		78
69	壺	残高 6.7	肩部が張る胴部。頸部下端 は強くしまる。	ナテ	ナテ	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2) ◎		78
70	高坏	口径 16.3 器高 13.6 底径 12.8	完形品。有段の坏部。三角錐 の柱部。水平に近く開く裾 部。	④ ナテ(マメツ) ⑤ ハケ→ナテ ⑥ ヨコナテ	④ ナテ(マメツ) ⑤ ケズリ ⑥ ヨコナテ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑	78
71	高坏	口径 17.0 器高 12.5 底径 10.3	有段の坏部。三角錐の柱部。 水平に近く開く裾部。	④ ヨコナテ ⑤ ヨコナテ	④ ヨコナテ ⑤ ケズリ ⑥ ヨコナテ	淡黄褐色 淡茶褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	78
72	高坏	口径(21.4) 残高 6.2	有段の坏部。	ヨコナテ(マメツ)	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2) ◎		
73	高坏	口径(24.1) 残高 4.3	有段の坏部の口縁部は外反 する。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄茶色	石・長(1~2) ◎		
74	高坏	底径(11.1) 残高 6.9	三角錐の柱部。水平に近く 開く裾部。内面柱裾部境 に稜。	⑥ ナテ ⑦ ヨコナテ	⑥ ケズリ ⑦ ヨコナテ	淡橙色 淡褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
75	高坏	底径(11.6) 残高 6.7	三角錐の柱部。水平に近く 開く裾部。内面の柱裾部境 に稜。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		
76	高坏	底径 10.5 残高 6.5	三角錐の柱部。水平に近く 開く裾部。内面の柱裾部境 に稜。	マメツ	ナテ	褐色 褐色	石・長(1~2) ◎		
77	高坏	底径(10.4) 残高 7.0	三角錐の柱部。水平に近く 開く裾部。内面の柱裾部境 に稜。	⑥ ナテ ⑦ ヨコナテ	⑥ ケズリ→ナテ ⑦ ヨコナテ	灰黄褐色 灰黄褐色	密 ◎		
78	高坏	残高 6.4	太く短い柱部。内面柱裾部 境に弱い稜。	ハケ→ナテ(マメツ)	マメツ(工具痕)				

表76 SD7(弥生)出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
79	壺	口径(15.0) 残高 2.4	わずかに拡張された口縁端 面には、「ノ」の字状文が施 される。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ◎	下層 下部	
80	壺	口径(14.2) 残高 7.3	壺と思われるが、判断しが たい。薄い器壁。	ハケ(9~10本/1cm)	ハケ(9~10本/1cm)	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1~2) 金 ◎	下層 下部	

遺物観察表

SD7 (弥生) 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
81	壺	残高 7.7	15cm以上の沈線文。櫛の単位不明。刻目凸帯。	ハケ	ハケ(マツメ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~3) ◎	下層 下部	79
82	甗	口径(21.0) 残高 5.2	口縁端面に沈線文3条。頸部に刺突文。	ハケ→ヨコナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	密 ◎	下層 下部	
83	高坏	底径(18.2) 残高 4.1	外反する裾部。1.4cm大の円孔。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	密(石・長1) ○	下層 下部	
84	甗	残高 2.5	如意状口縁。ヘラ描き沈線文3条。口縁端面に刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1~2) ◎	下層	
85	甗	口径(18.0) 残高 4.8	外反する長い口縁部。内面に稜をもつ。	ハケ(8~9本/1cm)	ハケ(マメツ)	赤橙色 赤橙色	石・長(1~4) 金 ◎	下層	
86	壺	口径(15.1) 残高 5.0	直立し、外反する口径部。口縁端部は面をもつ。	マメツ	ヨコナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	下層	
87	壺	口径(14.4) 残高 6.2	複合口縁壺。接合部は稜をもつ。	㊦ マメツ ㊧ ハケ(8~9本/1cm)	マメツ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) ○	下層	
88	壺	口径 12.5 残高 8.3	複合口縁壺。接合部は丸みをもつ稜。	㊦ ハケ→ヨコナデ ㊧ ハケ(3~4本/1cm)	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ(3~4本/1cm) ㊨ ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~4) 金 ◎	下層	
89	壺	口径(12.0) 残高 6.9	複合口縁壺。接合部は丸みをもつ稜。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~4) ◎	下層	
90	壺	口径(23.2) 残高 6.5	複合口縁壺。接合部は突出する。直線(8以上)→波状文(9)→直線→波状文。	ヨコナデ→施文	ヨコナデ	黄灰茶色 黄灰茶色	石・長(1~4) ◎	下層	79
91	壺	口径(23.4) 残高 4.4	直線文(8)→波状文(5)以上。口縁端部は内外に著しく拡張。	マメツ	ハケ→ヨコナデ	淡黄白色 乳白色	石・長(1~3) 金 ◎	下層	79
92	壺	残高 5.2	直線(13以上)→波状文(6)→直線(4以上)。	マメツ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~3) ○	下層	79
93	壺	口径(33.0) 残高 7.1	竹管文(2段)→直線?→竹管文(2段)→直線?→竹管文(2段)	マメツ	マメツ	黄茶色 黄褐色	石・長(1~3) ◎	下層	79
94	壺	残高 1.3	複合口縁壺。波状文(6)。	ヨコナデ		淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1~4) ○	下層	
95	鉢	口径(14.4) 残高 4.3	外反する長い口縁部。内面に稜をもつ。	㊦ ヨコナデ ㊧ ハケ(12本/1cm)	㊦ ハケ(6~7本/1cm) ㊨ ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~3) ◎	下層	
96	台付鉢	底径(6.3) 残高 5.6	台付鉢。大きくくびれる底部。やや上げ底。	マメツ	ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2) ◎	黒斑 下層	
97	台付鉢	底径 6.0 残高 8.6	台付鉢。大きく厚い平底。	ハケ(1部マメツ)	ナデ	茶褐色 茶褐色	密(石・長1~3) ◎	下層	



桑原田中遺跡 2次調査地

SD7 (弥生) 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	鉢	底径 4.6 残高 2.8	くびれるやや厚い底部。やや上げ底。	マメツ	ハケ	赤橙色 赤褐色	密 ○	下層	
99	高坏	残高 4.1	丸みのある有段の坏部。	マメツ	マメツ	茶褐色 乳黄茶色	石・長(1~3) ◎	下層	
100	高坏	残高 6.2	円孔(φ2.2cm)4ケ。円孔は2段となる。	マメツ	ナデ(マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~3) ◎	下層	
101	器台	残高 13.0	円孔(φ1.5cm)。円孔は2段となる。器壁厚い。	ハケ	ナデ	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~5) ◎	下層	
102	壺	残高 5.4	直線(20以上)→波状文(2)。タテ直線2組(9)以上。	マメツ	マメツ	乳黄灰色 乳黄茶色	石・長(1~2) ◎	上層	
103	壺	口径(18.6) 残高 6.2	波状文(3)。接合部は丸みのある稜。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 淡灰褐色	石・長(1~3) 金 ◎	上層	79
104	台付鉢	底径(10.2) 残高 4.9	上げ底の大きな底部。	ハケ→ナデ	ハケ	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長(1~3) ◎	上層	
105	高坏	残高 8.2	やや小さい円孔(φ7mm)。	マメツ	ナデ	淡茶褐色 黄茶色	石・長(1~3) 金 ◎	上層	
106	器台	口径(27.0) 残高 2.1	直線(2)→円形浮文(6ケの刺突文)。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	密 ◎	上層	
107	器台	残高 1.7	円形浮文(竹管文)。	マメツ	マメツ	黄茶色 黄茶色	密 ◎	上層	

表77 SD5ないしSD7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
108	甕	口径(16.0) 残高 3.6	外反する口縁部。口縁端部は丸い。	ハケ(マメツ)	ヨコナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1~2) ◎		
109	甕	口径(14.2) 残高 4.9	内湾して立ち上る口縁部。口縁端部は丸みのある面。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 金 ◎		
110	甕	口径(14.4) 残高 7.7	外反する口縁部。内面に弱い稜をもつ。	ハケ(12~13本/1cm)	ハケ(13~14本/1cm)	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1~3) 金 ◎		
111	鉢	口径(12.4) 残高 4.0	短く外反する口縁部。	マメツ	マメツ	黒褐色 乳黄茶色	石・長(1~2)		

表78 SD・SK・SP 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		(外面) 色調 (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
112	壺	残高 5.2	複合口縁壺。直線文は10条以上。	マメツ	ヨコナデ(マメツ)	黄灰色 黄灰色	石・長(1~5) ◎	SD8	
113	壺	口径(13.8) 残高 7.4	ゆるやかに外反する口縁部。ヘラ描き沈線文4条。	マメツ	マメツ	明褐色 乳茶色	石・長(1~3) 金 ◎	SD9	

遺物観察表

S D・S K・S P出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
114	甕	口径(22.0) 残高 3.7	口縁端面に3条の沈線文。	ハケ(マメツ)	ヨコナデ(マメツ)	淡黄色 淡赤褐色	石・長(1~3) ◎	S K 11	
115	壺	口径(13.2) 残高 4.5	複合口縁壺。無文。	マメツ	マメツ	淡赤褐色 淡茶褐色	石・長(1~4) ◎	S K 11	
116	甕	口径(17.0) 残高 9.0	短く外反する口縁部。口縁 端部は厚く、丸みをもつ。	㊶ 回転ナデ ㊷ 平行叩き	㊶ 回転ナデ ㊷ 叩き	淡灰色 黄灰色	密 ○	S K	
117	皿	口径(9.6) 器高 2.0 底径(6.0)	内湾して立ち上る口縁部。 口縁端は丸い。糸切り底。	回転ナデ	回転ナデ	乳黄色 乳白色	石・長(1~2) ◎	S P 21	
118	皿	口径(6.9) 器高 1.5 底径(5.6)	短い口縁部。口縁端部はわ ずかに外反する。糸切り底。	マメツ	マメツ	乳灰黄色 乳灰黄色	石・長(1~3) ◎	S P 51	79
119	皿	口径(8.1) 器高 1.2 底径(6.2)	短く、内湾して立ち上る口 縁部。糸切り底。	回転ナデ	回転ナデ	乳白色 乳白色	石・長(1~2) ◎	S P 51	
120	皿	口径 10.0 器高 1.8 底径 7.2	内湾して立ち上る口縁部。 口縁端部は丸い。糸切り底。	回転ナデ	回転ナデ	乳黄色 乳黄色	密 ◎	S P 51	79
121	坏	口径(11.8) 器高 2.9 底径(6.2)	内湾して立ち上がる口縁部 は端部付近がやや厚くなる。 糸切り底。	マメツ	マメツ	乳灰黄色 乳黄色	石・長(1~2) ○	S P 36	
122	椀	口径(15.8) 残高 3.3	貿易陶磁器。口縁端部は外 反する。龍泉窯か。			青緑色 青緑色	密 ◎	S P 73	
123	坏	底径(8.0) 残高 2.3	内湾して立ち上る口縁部。 糸切り底か。	マメツ	マメツ	乳赤黄色 乳赤黄色	密 ◎	S P 163	

表79 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
124	こね鉢	口径(26.6) 残高 3.4	内湾して立ち上る口縁部。 口縁外面は肥厚し、断面形 は丸みのある三角形。	ヨコナデ	マメツ	青灰色 灰色	密 金 ○	Ⅲ層	
125	高坏	残高 5.7	細沈線(9以上)→細沈線(5)。	マメツ	ナデ	黄灰色 黄灰色	密 金 ◎	Ⅳ層	
126	壺	口径(11.5) 残高 2.4	高坏脚端部になる可能性を もつ。端部は拡張し、2条の 凹線文。	ヨコナデ	マメツ	茶褐色 黄褐色	石・長(1~2) ◎	Ⅴ層	
127	甕	残高 3.2	2条の凹線文間に、細かい 波状文(櫛3条)。	回転ナデ	ナデ	灰茶色 灰色	密 ◎	西壁 トレンチ	
128	壺	残高 7.5	複合口縁壺。接合部に稜を もつ。	㊶ ハケ(マメツ) ㊷ ヨコナデ	㊶ ハケ→ヨコナデ ㊷ ヨコナデ	乳黄色 乳黄色	石・長(1~3) 金 ◎	黒斑 カクラン	
129	坏蓋	口径(13.6) 残高 3.2	有段の口縁部。口縁端面は、 内傾し、段状となる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 淡灰色	密 ◎	カクラン	

桑原田中遺跡 2次調査地

表80 出土遺物観察表 石製品 \* 法量の ( ) は現存値である。

番号	器種	遺存状態	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
130	石鏃	一部欠	サヌカイト	(1.9)	1.8	0.3	(0.9)	S D4	80
131	石鏃	完形品	サヌカイト	1.9	1.4	0.4	0.7	S D4	80
132	石鏃	一部欠	サヌカイト	(2.8)	2.0	0.4	(1.9)	S D5	80
133	石鏃	一部欠	赤色頁岩	3.2	2.1	0.3	(1.4)	S D9	80
134	石鏃	完形品	赤色頁岩	2.3	1.5	0.2	0.9	IV層	
135	石鏃	一部欠	サヌカイト	2.2	(1.3)	0.2	(0.7)	不用	80
136	石槍状石器	一部欠	サヌカイト	(5.0)	1.7	0.6	(5.6)	S D10	80
137	石庖丁	1/2欠	緑色片岩	8.5	5.2	(0.8)	(45.3)	S D5	80
138	石器素材	一部欠	緑色片岩	19.7	5.6	2.0	(282.1)	S D5	80
139	砥石	1/3欠	砂岩	(12.1)	11.9	3.1	(590.3)	S D5	80
140	砥石	完形品	砂岩	5.8	3.6	3.3	84.4	S D6	80
141	磨石	2/3欠	花崗岩	(7.0)	10.0	8.5	(609.2)	S D4	80
142	用途不明	完形品	(堆積岩)	11.7	3.2	0.4	32.2	S P 103	80

## 第6章 自然科学分析

(株) 古環境研究所

### 1. 樹種同定

#### 1. はじめに

樽味高木遺跡2次調査地では、A区検出の竪穴式住居址（SB1）の床面にて炭化材が出土した。この調査は、これらの炭化材について樹種同定を行うものである。

#### 2. 分析試料

調査地から出土した炭化材は、試料NO.1、NO.2、NO.3の3点である。炭化材試料は実体顕微鏡下で保存の良い部分を選定し、片刃カミソリを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柁目と同義）、の3断面について作る。これらは直径1cmの真鍮製の台に固定し、金蒸着を施した後、電子顕微鏡（日本電子製 J S M T-20型）で観察した。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に観察による特徴記載及び樹種同定の根拠を示し、これら炭化材の電子顕微鏡写真を示す（第124図）。

表81 樽味高木遺跡2次調査地出土炭化材とその樹種

遺跡名	試料	樹種
樽味高木遺跡2次	SB1 No.1	[針葉樹] 不明
	SB1 No.2	[広葉樹] シイノキ属(ブナ科)
	SB1 No.3	[広葉樹] クスノキ科

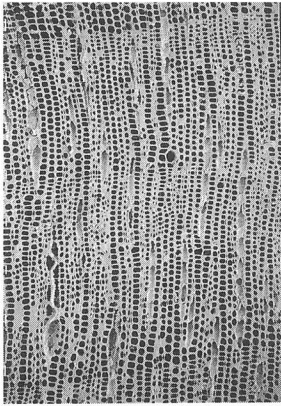
#### (1) 針葉樹 第124図1a～1c

仮道管、放射柔細胞からなる針葉樹である。春材から夏材への移行は穏やかである。（横断面）。分野壁孔は、炭化していて不明瞭である（放射断面）。放射組織は柔細胞からなり、1～2細胞幅、3～9細胞高である。

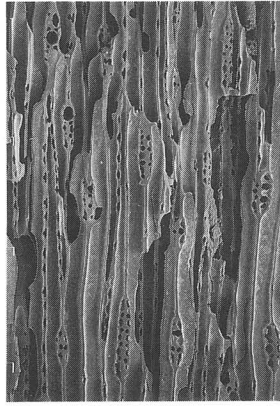
以上の形質が確認されるが、同定となるべき分野壁孔の形態や数などが不明瞭であるため種を同定するには至らない。

#### (2) シイノキ属 Castanopsis ブナ科 第124図2a～2c

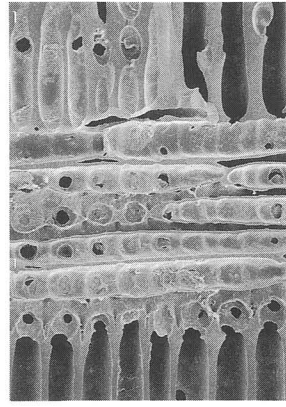
年輪のはじめに、やや大型の管孔が2～4個程度集合し、そこから薄壁で角張った小型の



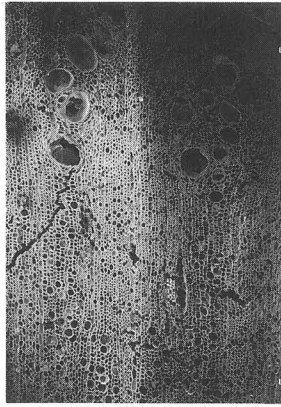
1a、針葉樹(横断面) C-2bar:0.1mm



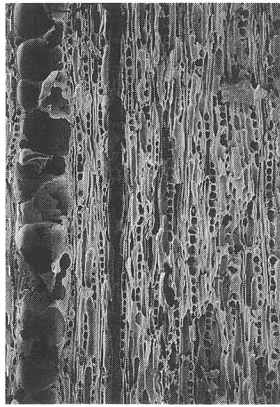
1b、同(接線断面) bar:0.05mm



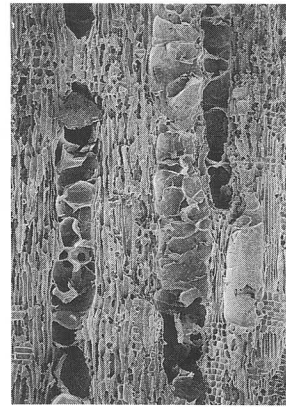
1c、同(放射断面) bar:0.02mm



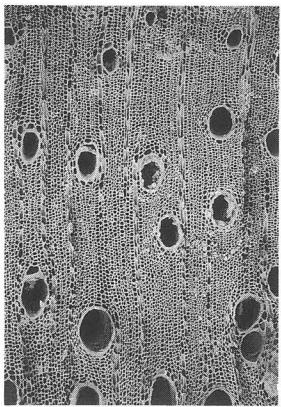
2a、シノキ属(横断面) C-1 bar:0.2mm



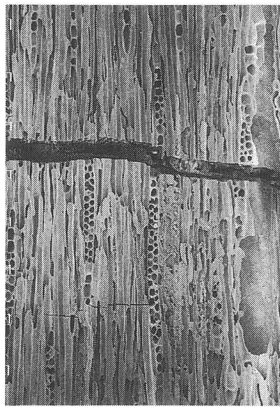
2b、同(接線断面) bar:0.1mm



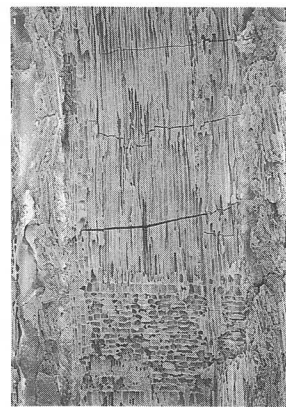
2c、同(放射断面) bar:0.2mm



3a、クスノキ科(横断面) C-3 bar:0.2mm



3b、同(接線断面) bar:0.1mm



3c、同(放射断面) bar:0.2mm

第124図 樽味高木遺跡2次調査A区SBI出土炭化材の電子顕微鏡写真

## 植物珪酸体分析

管孔が放射方向に火災状に配列する環孔材である。また、木部柔組織は、接線状である（横断面）。放射組織は、柔細胞で単列同性で、3～15細胞高である（接線断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。

以上の形質からブナ科シイノキ属の材と同定される。シイノキ属の樹種には、ツブラジイ (*Castanopsis*) と変種のスタジイ (*C. cuspidata* var. *sieboldii*) とがあるが両者を識別するには至っていない。樹木は、いずれも樹高20cm、幹径1 m程度で、スタジイは本州（福島・新潟県以南）・四国・九州などの沿岸地の丘陵あるいは山野、ツブラジイは本州（関東以南）・四国・九州などの内陸部に、いずれも暖帯に分布する常緑広葉樹である。材は、建築、器具、下駄などに用いられる。

### (3) クスノキ科 Lauraceae クスノキ科 第124図 3 a～3 c

年輪のはじめに大型の管孔が1～2列並び、以後径を減じた管孔が単独あるいはまれに2個複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性で1～2細胞幅、4～36細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クスノキ科の材と同定される。クスノキ (*Cinnamomum camphora*)、ヤブニッケイ (*C. japonicum*)、タブノキ (*Machilus thunbergii*) あるいはシロモジ (*Lindera triloba*) などがあり、いずれも常緑広葉樹である。

## 2. 植物珪酸体分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、及び古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山 1987）。

本調査は、樽味高木遺跡3次調査の試料について植物珪酸体分析を実施し、イネ科栽培植物の検討及び遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みたものである。

### 2. 分析試料

調査対象は、S B 2号住居址床面から検出された土壌（S K 2）である。試料は、土壌内の埋土および土壌の底面から計8点が採取された。試料採取箇所を第125図に示す。

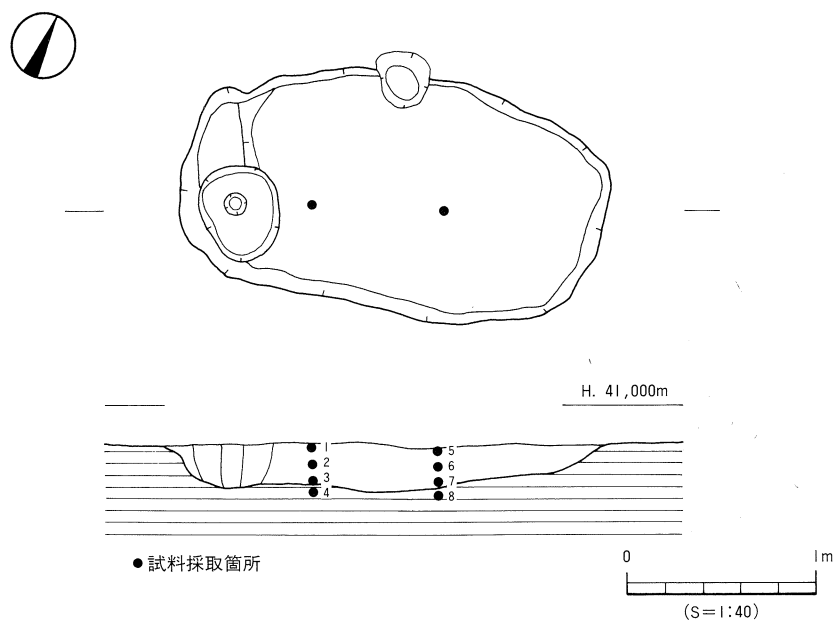
### 3. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原 1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105℃・24時間）
- (2) 試料約 1 g を秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 $\mu$ m、約0.02 g）
  - \* 電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間以上）
- (5) 沈底法による微粒子（20 $\mu$ m以上）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1 g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10<sup>-5</sup> g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値



第125図 樽味高木遺跡3次調査SK2における試料採取箇所

## 植物珪酸体分析

はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である（杉山・藤原 1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属は0.22、メダケ節は0.08である（杉山 1987）。

### 4. 結果および考察

#### (1) イネ科栽培植物の検討

弥生時代後期から古墳時代中期とされるSK2土壌内の埋土および土壌底面の土壌について植物珪酸体分析を行った。その結果、すべての試料からイネの植物珪酸体が検出された（表82～84）。

このうち、土壌西側の埋土中位（NO.2）では密度が7,500個/gと高い値であるが、同地点の他の試料（NO.1、NO.3）では1,300～2,800個/gと比較的低い値であり、土壌中央部（NO.5～NO.7）でも1,000個/g前後と低い値である。なお、比較試料として採取された土壌底面の土壌（NO.4、NO.8）でもイネの植物珪酸体が検出されたが、密度は2,400～2,700/gと大部分の埋土試料よりも高い値となっている。

以上のことから、調査地点もしくはその付近ではSK2土壌が作られる以前には稲作が行われていたものと考えられ、その後に掘削された土壌内に当時の植物珪酸体が混入したものと推定される。ただし、土壌西側の中位（NO.2）では明らかに密度が高いことから埋土中になんらかの形で稲藁などが混入されていた可能性も考えられる。

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオムギ族（ムギ類が含まれる）、キビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、オハシバ属（シコクビエが含まれる）、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがあるが、これらの分類群はまったく検出されなかった。

#### (2) 古植生および古環境の推定

イネ以外の分類群では、ネザサ節型（ネザサ節など）が全体的に多量に検出され、クマザサ属型（クマザサ属など）やメダケ節型（メダケ節など）、ウシクサ族（ススキ属など）なども見られた。植物体生産量の推定値では、ほとんどの試料でネザサ節型が卓越しており、これに次いでイネが多くなっている。なお、ネザサ節型は土壌底面の土壌よりも埋土の方が多くなっている。

以上のことから、当時の遺跡周辺はネザサ節を主体とし、クマザサ属やメダケ節、ススキ属なども見られるイネ科植生であったものと考えられる。ネザサ節やススキ属などは森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は、森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。



自然科学分析

表82 樽味高木遺跡3次調査SK2の植物珪酸体分析結果

(単位: ×100個/g)

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8
	上位	中位	下位	比較土	上位	中位	下位	比較土
イネ科								
イネ	13	75	28	27	7	7	14	24
ヨシ属								6
ウシクサ属(ススキ属など)		7	21	7	7	7	14	6
キビ属型						7		12
ウシクサ属型	72	82	105	34	68	48	41	37
ウシクサ属型(大型)	7				7			
タケ亜科								
ネザザ節型	489	434	449	313	478	735	588	317
クマザサ属型	46	60	35	41	55	76	20	24
メダケ節型	39	37	14	20	21	41	47	43
未分類等	352	434	232	320	403	378	419	189
その他のイネ科								
表皮毛起源	46	22	28	14	34	27	34	18
棒状珪酸体	280	292	197	116	321	220	216	97
茎部起源		7					7	
未分類等	320	449	330	313	349	364	412	280
(海綿骨針)							7	
植物珪酸体総数	1663	1901	1439	1211	1750	1909	1810	1054

表83 樽味高木遺跡3次調査SK2における主な分類群の推定量

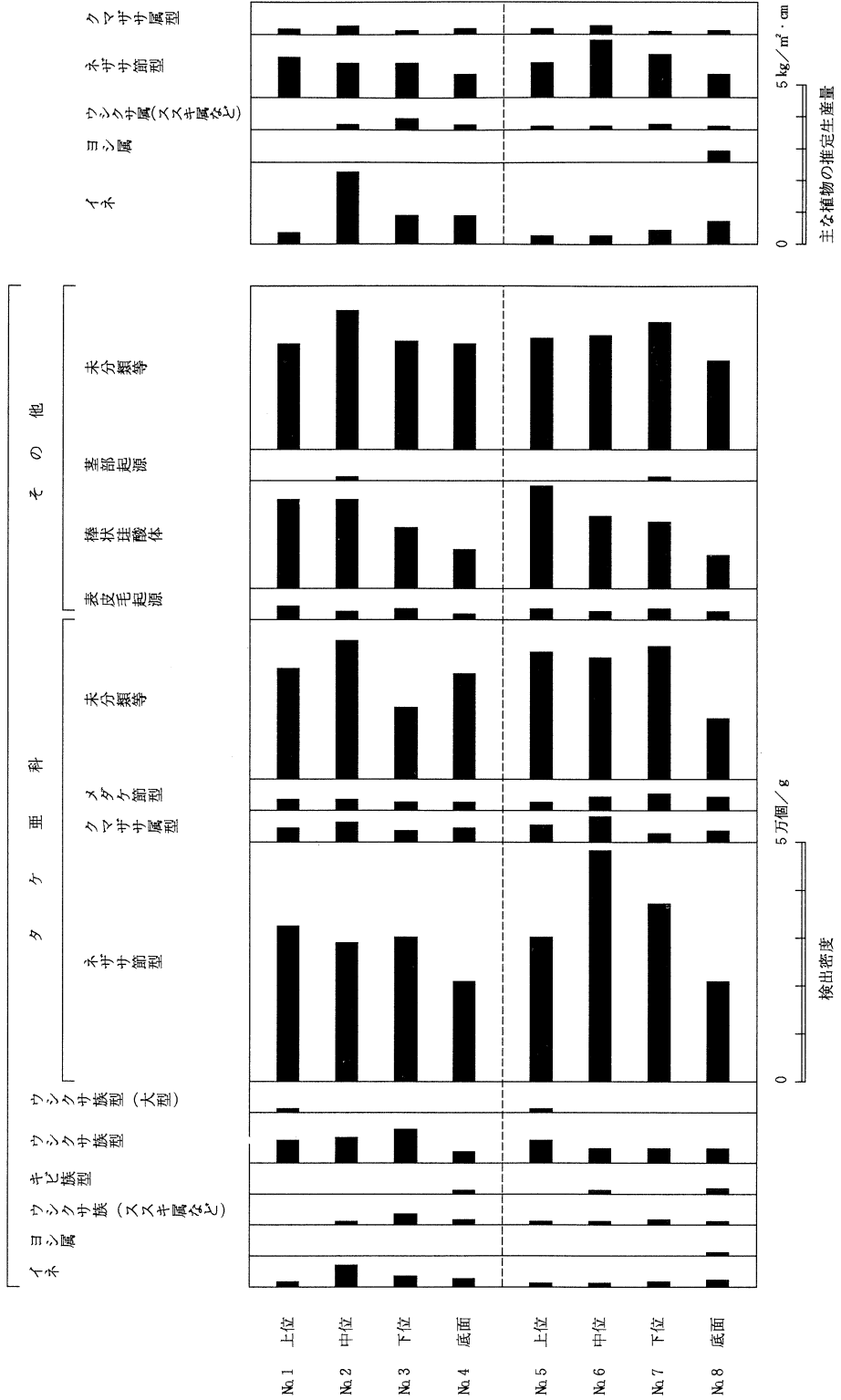
(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

分類群	1	2	3	4	5	6	7	8
	上位	中位	下位	比較土	上位	中位	下位	比較土
イネ科								
イネ	0.38	2.20	0.83	0.80	0.20	0.20	0.40	0.72
ヨシ属								0.38
ウシクサ属(ススキ属など)		0.09	0.26	0.08	0.08	0.09	0.17	0.08
タケ亜科								
ネザザ節	1.17	1.04	1.08	0.75	1.15	1.76	1.41	0.76
クマザサ属	0.10	0.13	0.08	0.09	0.12	0.17	0.04	0.05
メダケ節	0.03	0.03	0.01	0.02	0.02	0.03	0.04	0.03

※表81の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出。

植物珪酸体分析

表84 樟味高木遺跡3次調査SK2における植物珪酸体分析結果



## 自然科学分析

### 〔参考文献〕

- 杉山真二 1987 タケ亜科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号：P.70-83.
- 杉山真二 1987 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点 植生史研究第2号：P.27-37
- 杉山真二・藤原宏志 1987 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析 川口市遺跡調査会報告第10集 P.281-298
- 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) 一 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—考古学と自然科学、9：P.15-29.
- 藤原宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) 一 福岡・板付遺跡(夜白式) 水田および群馬・日高遺跡(弥生時代) 水田におけるイネ生産総量の推定—考古学と自然科学 12：P.29-41

表85 植物珪酸体の顕微鏡写真

No.	分類群	試料名	倍率
1	イネ	3	400
2	イネ	8	400
3	イネ	8	400
4	イネ	2	400
5	ヨシ属	8	400
6	ウシクサ族(ススキ属など)	3	400
7	ウシクサ族型	3	400
8	ネザサ節型	2	400
9	ネザサ節型	6	400
10	クマザサ属型	6	400
11	クマザサ属型	8	400
12	メダケ節型	6	400
13	メダケ節型	7	400
14	タケ亜科	6	400
15	表皮毛起源	1	400
16	表皮毛起源	2	400
17	イネ科の茎部起源	1	400
18	海綿骨針	7	400

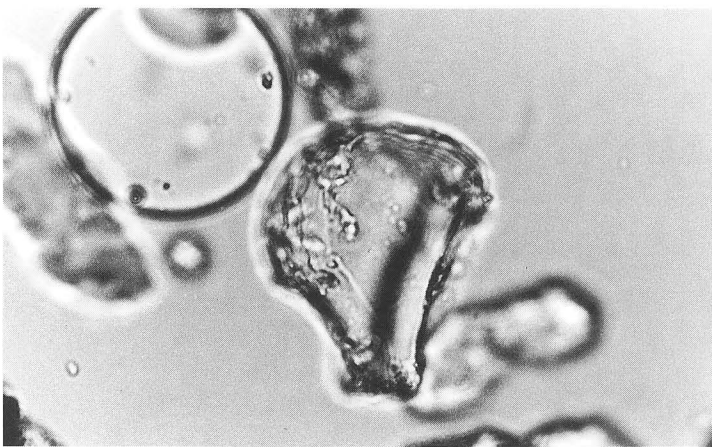
植物珪酸体分析



1 イネ

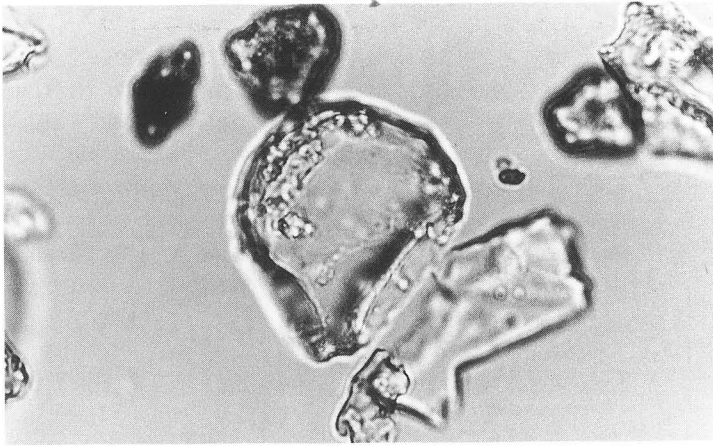


2 イネ

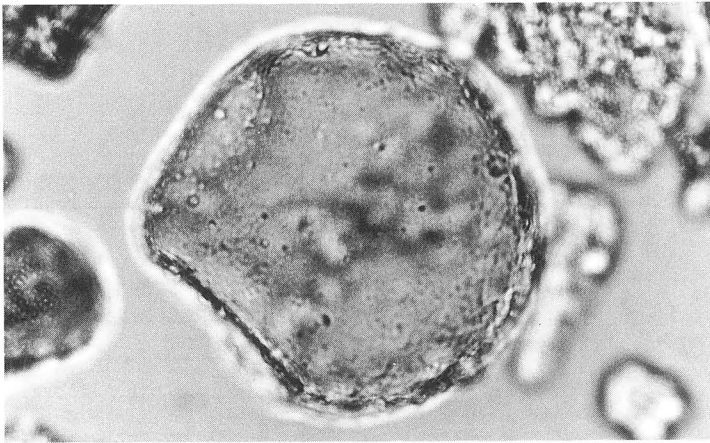


3 イネ

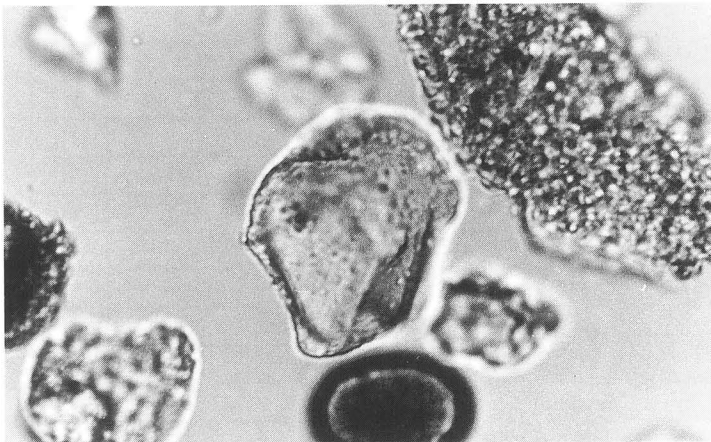
第126図 プラント・オパールの顕微鏡写真(1) (400倍)



4 イネ



5 ヨシ属



6 ウシクサ族

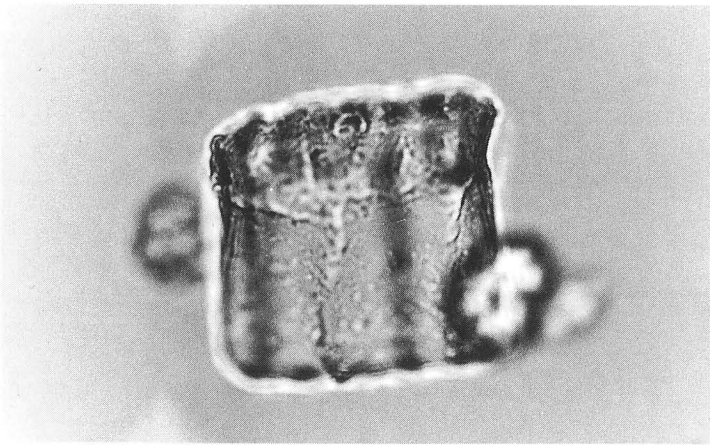
第127図 プラント・オバールの顕微鏡写真(2) (400倍)



7 ウシクサ族

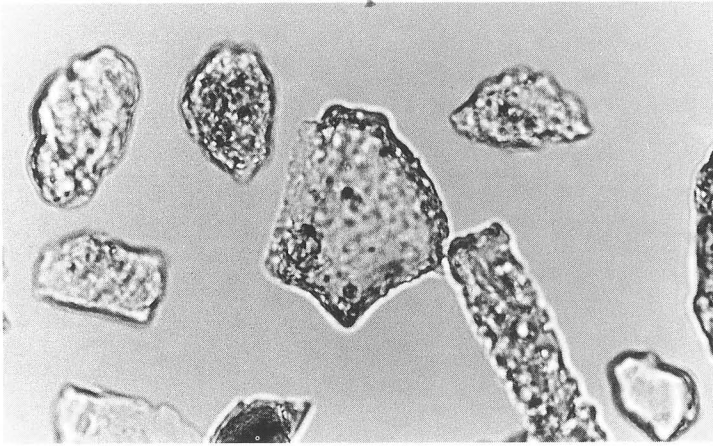


8 ネザサ節型

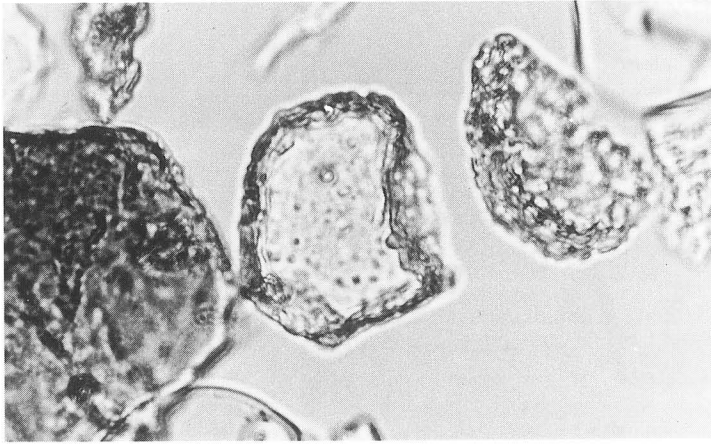


9 ネザサ節型

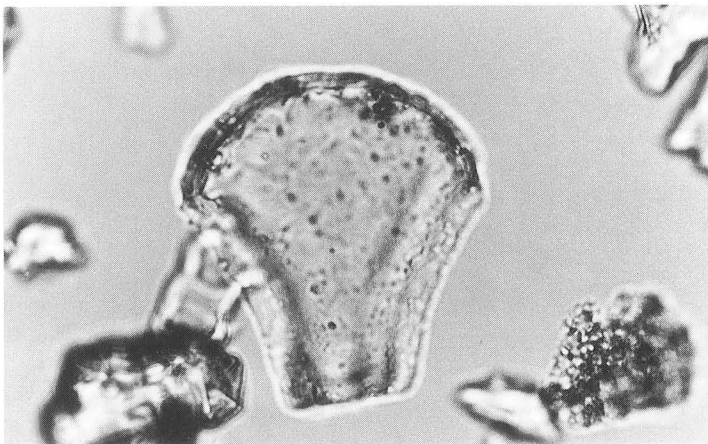
第128図 プラント・オパール顕微鏡写真(3) (400倍)



10 クマザサ属型



11 クマザサ属型



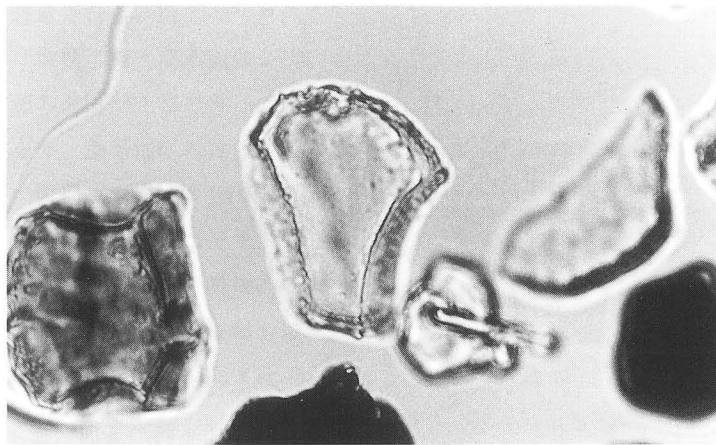
12 メダケ節型

第129 プラント・オパール顕微鏡写真(4)(400倍)

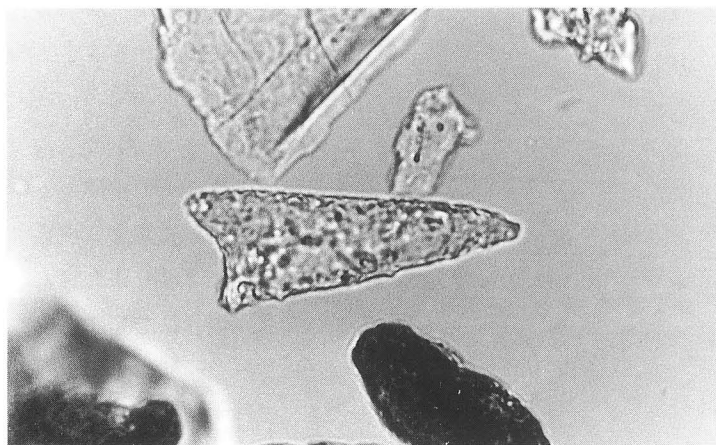




13 メダケ節型



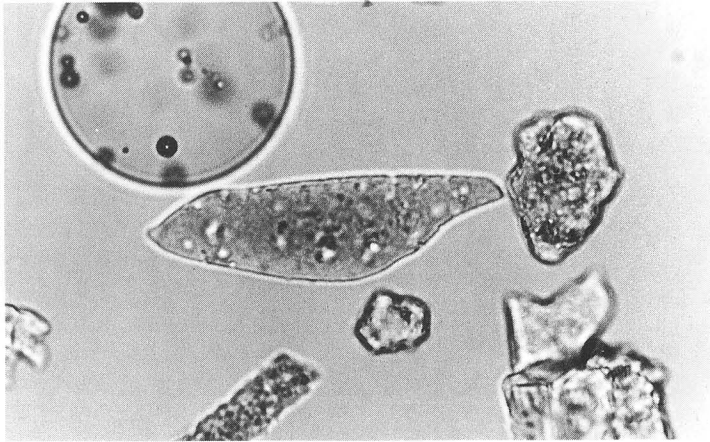
14 タケ亜科



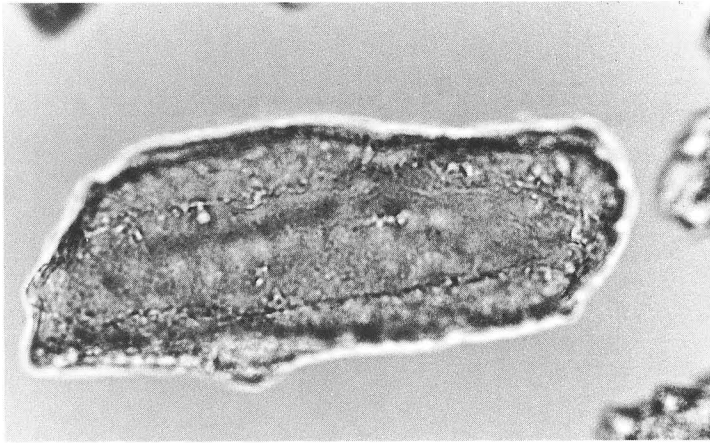
15 表皮毛起源

第130図 プラント・オパール顕微鏡写真(5) (400倍)

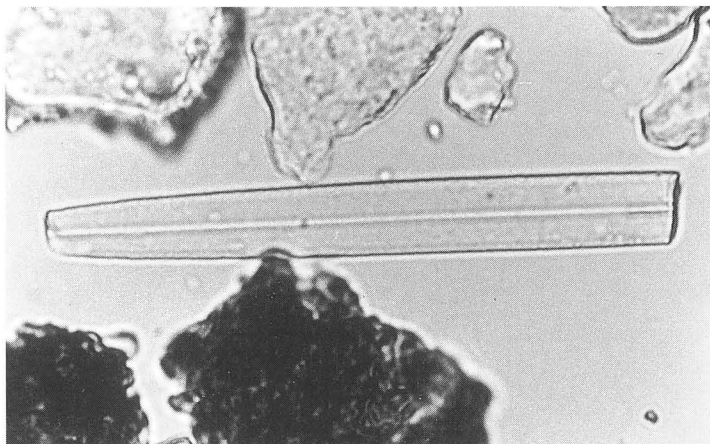




16 表皮毛起源



17 イネ科の茎部起源



18 海綿骨針

第131図 プラント・オパール顕微鏡写真(6) (400倍)

## 第7章 調査の成果と課題

本書では、平成2年～4年度の間に、松山市樽味4丁目・桑原6丁目内で実施した6遺跡の発掘調査について、その報告を行った。調査の結果、弥生時代～中・近世の集落関連遺構と遺物を確認するに至った。

### 弥生時代

前期 樽味高木遺跡2次調査地出土の磨製石鏃は伴出遺物はないが、包含層から木葉文を施した壺片が出土していることより、前期のものである可能性は高い。松山平野の磨製石鏃出土例は、山越遺跡2次調査地検出の溝SD2（前期）から1点、祝谷六丁場遺跡（中期中葉）から1点があり、時期が特定できる資料としてあげられる。本資料は、石材の上でも平野南部にある緑色片岩を用いており、当平野での製品とみてよいものである。なお前期資料は桑原田中遺跡2次調査地にも壺片が出土しており、桑原地区南部においても前期集落が想定される状況となった。

中期 樽味高木遺跡2次調査地A区SB1及び同3次調査地SX1からは中期末～後期初頭の遺構が土器を伴って検出された。当地区においては、弥生時代中期の遺構検出は初例であり、桑原地区の弥生時代の集落変遷を考えるには貴重な資料となった。

後期 全国的にも10数例という稀少な資料が樽味高木遺跡3次調査地からは得られた。「船」を描いた土器片の出土である。土器は、形態・胎土等より、当平野の弥生時代後期の壺の肩部片と思われる。具像的な表現であり、弥生時代の船舶研究の良好な資料になるものといえよう。また、後期資料では、終末から古墳時代初頭の竪穴式住居址として樽味四反地遺跡2次調査地SB6、同3次調査地SB8、同4次調査地SB1があげられる。近隣の樽味立添遺跡でも同時期の竪穴式住居址が検出されており（SB13）、一帯に集落が経営されていたことを示す資料となった。

この他、樽味四反地遺跡3次調査地からは分銅形土製品が出土している。桑原地区では初例となるものである。

### 古墳時代

5世紀中頃から6世紀前半に比定される竪穴式住居址と遺物が数多く確認された。樽味高木遺跡2次調査地A区SB2、同3次調査地SB1、樽味四反地遺跡2次調査地SB7、同4次調査地SB5、桑原田中遺跡2次調査地SB7などがあり、既存の調査事例を合わせると桑原地区で最も検出遺構が多いと言える時期である。ただし、集落構造解明のための基礎整理と分析にはいたっておらず、課題解決には今少しの時間が必要である。今後の継続的な調査・研究に期待する。

注目される遺物としては、樽味高木遺跡3次調査地出土の軟質土器があげられる。5世紀代に比定されるものと思われるもので、少なくとも8個体分の破片が出土している。桑原地

区南部には5世紀末から6世紀前半に比定される前方後円墳（経石山古墳、三島神社古墳）があり、東部の丘陵には同時期の円墳群（東野お茶屋台古墳群、畑寺竹ヶ谷古墳群）がある。さらに、東野お茶屋台古墳群からは非陶邑系の壺が出土している。樽味高木遺跡3次調査地の軟質土器出土は、5世紀後半から6世紀前半における桑原地区の集落経営の充実度を顕著に表している資料といえないだろうか。

### 古代

樽味四反地遺跡4次調査地からは、古代末～中世初頭に比定される土壙墓が検出された。SK1からは石枕と坏、玉、鉄器が出土し、古代の墓制の良好な資料が得られたといえる。

### 中世

桑原田中遺跡2次調査地出土の内黒碗や青磁、土師皿、坏は出土量は少ないが、14世紀から15世紀の土器研究（器形態の把握等）には一つの資料となり得るものである。また、16世紀代に下がるが、樽味四反地遺跡4次調査地SX2出土品も同時代の坏の器形態が知れる資料として稀少な資料であり注目されるものであろう。

### 近世

樽味高木遺跡2次調査地B区1・2号塚は調査が少ない当平野において貴重な資料である。加えて、調査の充実により、その構造が確認されたことは評価するところである。

以上、時代別に注目される資料を列記した。個々の資料は、いずれも当平野においては初例であったり、稀少な資料であるものが数多い。遺構では、調査の充実もあり、遺構の構造が明らかとされるようになってきた。また、多くの遺構検出は、今後の集落構造研究を可能にする資料数に近づきつつあり、周辺地域の調査と継続的な資料分析が期待されるところである。特に、古墳時代5世紀後半から6世紀前半の桑原地区の集落動態は、同時代の平野を対象とする研究において不可欠な資料であり、大いに注目されるところである。

### 【文献】

- |       |      |                                   |
|-------|------|-----------------------------------|
| 宮崎泰好  | 1991 | 『祝谷六丁場遺跡I』松山市教育委員会、松山市立埋蔵文化財センター  |
| 森 光晴  | 1986 | 「経石山古墳」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会    |
| 森 光晴他 | 1972 | 『三島神社古墳』松山市教育委員会                  |
| 阪本安光  | 1979 | 『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会          |
| 西尾幸則  | 1986 | 「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会 |
| 梅木謙一  | 1992 | 『桑原地区の遺跡』勸松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター    |

# 報告書抄録

ふりがな	くわばらちくのいせき
書名	桑原地区の遺跡II
副書名	
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	栗田正芳・梅木謙一・宮内慎一・山本健一・河野史知・武正良浩・加島次郎
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	〒791 松山市南斎院町乙67-6 Tel 0899-23-6363
発行年月日	西暦 1994年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たるみたかぎ 樽味高木 2次	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 たるみ 樽味	38201		33°50'08"	132°47'21"	19910601～ 19910720	1,900	宅地開発
たるみたかぎ 樽味高木 3次	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 たるみ 樽味	38201		33°50'10"	132°47'25"	19920310～ 19920522	479	宅地開発
たるみしたんじ 樽味四反地 2・3・4次	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 たるみ 樽味	38201		33°50'07"	132°47'23"	19920901～ 19921031 19930801～ 19930930	936,79	宅地開発
くわばらたなか 桑原田中 2次	えひめけんまつやまし 愛媛県松山市 くわばら 桑原	38201		33°49'41"	132°47'23"	19930304～ 19930531	421	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たるみたかぎ 樽味高木 2次	集落 塚	弥生 古墳 近世	堅穴式住居 塚、溝、土壇	弥生土器、土師器、 須恵器、陶器 石器	近世の塚の検出
たるみたかぎ 樽味高木 3次	集落	弥生 古墳	掘立柱建物 堅穴式住居 溝・土壇	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	線刻画土器出土
たるみしたんじ 樽味四反地 2・3・4次	集落 墓	弥生 古墳 古中世	掘立柱建物 堅穴式住居 墓・溝・土壇	弥生土器、土師器、 須恵器、石器	弥生時代後期～ 古墳時代の集落址
くわばらたなか 桑原田中 2次	集落	弥生 古墳 中～近世	掘立柱建物 溝・土壇	弥生土器、土師器、 須恵器、陶器 石器	中世～近世の 集落址

松山市文化財調査報告書 第46集

## 桑原地区の遺跡Ⅱ —本文編—

---

平成6年11月30日 発行

編集 松山市教育委員会  
〒790 松山市二番町4丁目7-2  
TEL (0899) 48-6605

発行 財団法人 松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター  
〒791 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (0899) 23-6363

印刷 明星印刷工業株式会社  
〒790 松山市土居田町500  
TEL (0899) 71-7111

---